



Title	當野能之先生論文集
Author(s)	當野, 能之
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98400
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

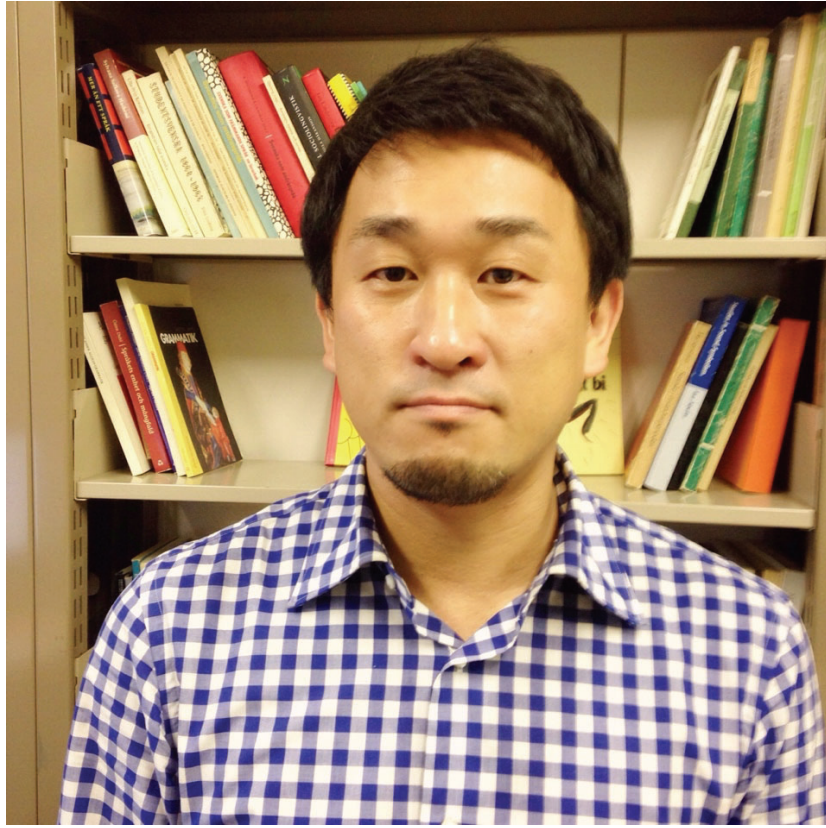
<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

當野能之先生 論文集

南澤佑樹 梅谷綾
江口清子 眞野美穂

2024年



當野能之先生（旧箕面キャンパスの研究室にて撮影）

當野能之先生 略歴と業績

略歴

1992 年 3 月 北海道立北見北斗高等学校卒業
1993 年 4 月—1997 年 3 月 大阪外国語大学外国語学部地域文化学科
中・北欧地域文化専攻スウェーデン語卒業
1997 年 4 月—1999 年 3 月 神戸大学大学院文学研究科英米文学専攻修了
1999 年 4 月—2007 年 3 月 神戸大学大学院文化学研究科文化構造専攻文化原理論修了
2003 年 4 月—2004 年 7 月 スウェーデン国立ユータボリ大学大学院言語学科留学
2009 年 4 月—2010 年 3 月 大阪大学世界言語研究センター特任研究員
2010 年 4 月—2015 年 3 月 関西看護医療大学看護学部専任講師
2015 年 4 月—2016 年 3 月 大阪大学言語文化研究科助教
2016 年 4 月—2021 年 3 月 大阪大学言語文化研究科講師
2021 年 4 月—2023 年 3 月 大阪大学言語文化研究科准教授

非常勤

2001 年 4 月—2002 年 3 月 大阪外国語大学外国語学部
2001 年 4 月—2003 年 3 月 神戸海星女子学院大学文学部
2007 年10 月—2008 年 3 月 順心会看護医療大学看護学部
2008 年 4 月—2010 年 3 月 摂南大学外国語学部
2008 年 4 月—2010 年 3 月 関西看護医療大学看護学部
2009 年 4 月—2015 年 3 月 大阪大学外国語学部

学会活動

1999 年 4 月—2023 年 3 月 日本言語学会会員
1999 年 4 月—2023 年 3 月 関西言語学会会員
2016 年 4 月—2023 年 3 月 大阪大学言語社会学会会員

著作

学術論文

1. 「現代スウェーデン語の再帰代名詞について」, 『神戸英米論叢』第14号, pp. 99–113. 2000年8月10日.
2. 「現代スウェーデン語の擬似再帰代名詞について」, 『IDUN —北欧研究—』第14号, pp. 151–168. 2001年3月29日.
3. 「スウェーデン語の獲得を表す表現に関する一考察」, 『IDUN —北欧研究—』第15号, pp. 51–66. 2003年2月28日.
4. 當野能之・呂仁梅「着脱動詞の対照研究 —日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語の比較—」, 『世界の日本語教育』第13号, pp. 127–141. 2003年9月1日.
5. 「現代スウェーデン語の不変化詞動詞と非語彙的抱合 —語彙機能文法による分析—」, 102p. 神戸大学大学院文化科学研究科博士論文. 2007年3月31日.
6. 「現代スウェーデン語不変化詞動詞の項の実現」, 岸本秀樹・由本陽子(編)『複雑述語研究の現在』, pp. 235–255. ひつじ書房. 2014年1月30日.
7. 「スウェーデン語の過去分詞による属性描写」, 『IDUN —北欧研究—』第21号, pp. 1–15. 2015年3月25日.
8. 「現代スウェーデン語における疑似主語構文の分析」, 『神戸言語学論叢』第11号, pp. 87–99. 2018年3月15日.
9. 「基体動詞の反義語となるスウェーデン語の不変化詞動詞について」, 『IDUN —北欧研究—』第23号, pp. 17–28. 2019年3月30日.
10. 當野能之・梅谷綾・南澤佑樹・芝田思郎「現代スウェーデン語基本不変化詞動詞リスト作成に向けて」, 『外国語教育のフロンティア』第3号, pp. 291–300. 2020年3月30日.

研究発表

1. 「現代スウェーデン語の再帰代名詞について」, 日本言語学会第120回大会. 於 千葉大学. 2000年6月17日.
2. 「現代スウェーデン語における再帰代名詞の出現 —身体部分を表す再帰代名詞と擬似再帰代名詞を中心に—」, 関西言語学会第25回大会. 於 神戸商科大学. 2000年10月21日.
3. 今里典子・當野能之「Conative Construction—英語とスウェーデン語の比較—」, 日本言語学会第121回大会. 於 名古屋学院大学. 2000年11月25日.
4. 「スウェーデン語の2重目的語構文の拡張」, 日本言語学会第123回大会. 於 九州大学. 2001年11月17日.
5. “Skjorta och väst i öst och väst. En kontrastivstudie av “Clothing Verb” i japanskan, svenskan och andra språk”, *Langue. doc conference*. 於 ユーテボリ大学. 2003年11月22日.
6. “Particle Verbs and Word Formation in Swedish”, *Grammar in Focus*. 於 ルンド大学. 2004年

2月6日.

7. “Partikelverb och ordbildning i svenskan”, *Svenskans beskrivning* 27. 於 ヴェクショー大学. 2004年5月15日.
8. 「スウェーデン語の移動表現」, ワークショップ『経路の多様性と移動表現のタイポロジー』, 関西言語学会第30回大会. 於 関西大学. 2005年6月4日.
9. “Different Ways to Put on Clothes: A Crosslinguistic Study of Clothing Verb”, Workshop on the Descriptions of Motion Events. 於 神戸大学. 2005年7月3日.
10. 「スウェーデン語の動詞・不変化詞構文における項の実現」, Morphology and Lexicon Forum 2006. 於 東京大学. 2006年5月14日.
11. “Swedish Particle Verbs and Semantic Incorporation”, Meeting of Kobe Area Circle of Linguistics. 於 神戸大学. 2007年3月5日.
12. 「スウェーデン語不変化詞動詞と意味構造における編入」, 日本言語学会第142回大会. 於 日本大学. 2011年6月19日.
13. “Expression of Path in Motion Events in Swedish –With special reference to *Upp* ‘up’”, International Workshop of Cognitive Grammar and Usage-Based Linguistics. 於 大阪大学. 2016年6月19日.
14. 「日本語スウェーデン語対照研究の可能性」, STINT workshop “Japanese Studies in Sweden, Swedish Studies in Japan: Collaborative research on limits and possibilities of Area Studies in the 21st Century”. 於 スtockホルム大学. 2018年8月19日.
15. Shibata Shiro & Takayuki Tohno. “The ‘Double Object’ Verb-Particle Constructions in Swedish”, Grammar in Focus. 於 ルンド大学. 2019年2月8日.

著書

1. 影山太郎 (編) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』, 385p. 「第9章 句動詞 —動詞と小辞の組み合わせ—」担当 (共著 谷脇康子・當野能之). pp. 293–324. 大修館書店. 2009年4月10日.
2. 影山太郎 (編) 『日英対照 名詞の意味と構文』, 323p. 「第1章 名詞の数え方と類別」担当 (共著 影山太郎・眞野美穂・米澤優・當野能之). pp. 10–35. 大修館書店. 2011年11月25日.
3. 清水育男・ウルフ・ラーション・當野能之 『世界の言語シリーズ 12 スウェーデン語』, 363p. 「2課～5課 発音」, 「6課～30課 新出単語・練習問題・スウェーデンの地理」, 「巻末付録 1～3」, 「索引」, 「別冊 各課本文の日本語訳・練習問題解答」担当. 大阪大学出版会. 2016年3月30日.
4. 當野能之 『スウェーデン語トレーニングブック』, 229p. 白水社. 2021年2月15日.
5. 當野能之・梅谷綾・南澤佑樹・芝田思郎・Márton András Tóth (編) 『スウェーデン語基本不変化詞動詞リスト —スウェーデン語を学ぶ教材 1—』, 118p. 「第1章 不変化詞動詞

概説」担当. pp. 1-19. 大阪大学言語文化研究科 言語社会専攻デンマーク語・スウェーデン語研究室. 2021 年 3 月 31 日.

Web 教材

1. 清水育男・當野能之・Johanna Karlsson・梅谷綾『高度外国語教育全国配信システム：スウェーデン語独習コンテンツ』. 大阪大学世界言語研究センター高度外国語教育全国配信プロジェクトスウェーデン語独習コンテンツ作成委員会. 2010 年 4 月 1 日.
(<http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/wl/sv/index.html>)
2. 當野能之・Márton András Tóth『2019 年度全日本合唱コンクールの課題曲スウェーデン語発音動画』. 大阪大学言語文化研究科スウェーデン語研究室. 2019 年 5 月 1 日.
(<https://www.youtube.com/watch?v=vyDpMQscgBY>)
(<https://www.youtube.com/watch?v=wqB-NQHJgwE>)

辞典項目

1. 中野弘三・服部義弘・小野隆啓・西原哲雄（監修）『最新英語学・言語学用語辞典』, 552p. 「形態論・レキシコン」担当（共著 秋田喜美他）. pp. 82-115. 開拓社. 2015 年 11 月 25 年.

その他

1. 當野能之・清水育男「『世界の言語シリーズ 12 スウェーデン語』語彙集」, 『IDUN-北欧研究-』第 22 号, pp. 127-154. 2017 年 3 月 31 日.
2. 「合唱団のためのスウェーデン語発音入門」, 『ハーモニー』第 188 号, p. 82-84. 2019 年 4 月 10 日
3. “Sweden Hills”, *Var i all världen*, pp. 16-17. 2019 年 9 月 1 日.
4. 「高度配信+阪大出版「スウェーデン語」語彙集第 1.2 版」, 44p. 2020 年 5 月 29 日.
5. 「高度配信+阪大出版「スウェーデン語」語彙集第 2.2 版」, 51p. 2020 年 11 月 2 日.
6. 「高度配信+阪大出版「スウェーデン語」語彙集第 3.1 版」, 72p. 2021 年 5 月 16 日.
7. 「高度配信+阪大出版「スウェーデン語」語彙集第 4.1 版」, 114p. 2022 年 2 月 12 日.
8. 田辺欧・當野能之「スウェーデン語講読授業との協業による北欧文学ゼミの実践」, 『外国語教育のフロンティア』第 5 号. pp. 193-202. 2022 年 3 月 31 日.

競争的資金等の研究課題

1. 「聞き取り調査を活用した北欧バルト海地域諸語の統語的ゆれに関する微視的類型論研究（挑戦的萌芽研究）」研究代表者：佐久間淳一，研究分担者：入江浩司，連携研究者：當野能之，研究協力者：櫻井映子. 2014 年～2017 年.
2. 「微視的類型論によるパラレル・コーパスを利用したバルト海周辺諸語の不定人称文の

研究（基盤研究（C））」研究代表者：佐久間淳一，研究分担者：入江浩司・當野能之．2017年～2023年．

3. 「現代スウェーデン語基本不変化詞動詞リスト作成に関する基礎的研究（基盤研究（C））」研究代表者：當野能之，研究分担者：南澤佑樹．2018年～2021年．
4. 「社会包摂に鑑みた北欧文学の異文化理解・言語教育への応用モデル研究（基盤研究（C））」研究代表者：田辺欧，研究分担者：肥後楽・當野能之．2020年～2024年．
5. 「日本人スウェーデン語学習のための CEFR レベル別基礎語彙リスト作成に関する研究（基盤研究（C））」研究代表者：當野能之．2021年～2025年．
6. 「微視的類型論・機能主義的観点によるバルト海周辺諸語の否定の地域言語学的研究（基盤研究（C））」研究代表者：佐久間淳一，研究分担者：入江浩司・當野能之・大辺理恵．2021年～2024年．

はしがき

本論集は、2023 年 3 月に 49 歳の若さで惜しくも他界された當野能之先生のご業績をまとめたものです。當野先生は、その豊かな学識と情熱をもって、研究者として、また教育者として、多くの後輩や学生のみならず、先達たちにも多大な影響を与えました。先生のご研究はそれぞれ、とことんこだわり抜く、ちょっぴり（とっても？）頑固とも言えるご性格を映し出す緻密なものですが、そこには博識で頼りになる先輩そして教育者としての當野先生の姿も感じられます。當野先生のご逝去からかなりの時間が経過したものの、私たちにとってその喪失感は今なお大きいものがあります。しばらくは心の整理がつかない日々が続きましたが、やはり、日本におけるスウェーデン語研究を語る上で、當野先生のご業績は後世に引き継がれるべき貴重なものであることを編者一同再認識し、この度このような形でまとめることにいたしました。

本論集の作成にあたり、多くの方々のご協力をいただきました。まず、このような形で當野先生のご業績をまとめることをお認めくださいましたご家族のみなさまに、心からお礼を申し上げます。そして、當野先生の博士論文の主指導教員でいらした松本曜先生（国立国語研究所教授）には、博士論文を神戸大学学術成果リポジトリ **Kernel** で公開するためにご尽力いただきました。『複雑述語研究の現在』に収録されている「現代スウェーデン語不変化詞動詞の項の実現」に関しては、ひつじ書房様のご厚意により、特別な掲載許可をいただくことができました。現在も販売されている書籍の一部であるにもかかわらず、このようなご配慮を賜り、感謝の念に堪えません。同書の編者である岸本秀樹先生（神戸大学教授）、由本陽子先生（大阪大学名誉教授）にも、著作権の問題を含め、多くのご助言をいただきました。『神戸英米論叢』に収録されている「現代スウェーデン語の再帰代名詞について」に関しては、山本秀行先生（神戸大学教授）を通じて、神戸英米学会から当該論文の本論集への掲載許諾をいただき、さらにスキャンデータまでご提供いただきました。『世界の日本語教育』（国際交流基金リポジトリにて公開）に収録されている「着脱動詞の対照研究—日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語の比較—」に関しては、共著者である呂仁梅先生に、論文掲載についてご快諾いただきました。国際交流基金日本語国際センターのみなさまにも、著作権の取り扱いなどについてご教示いただきました。また、ここにはお名前を挙げきれませんが、本論集の構想に際し、相談に乗ってくださった先生方、ご協力くださったすべてのみなさまに、この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

當野先生は、スウェーデン語における再帰表現、不変化詞動詞 (**particle verb**)、複合語などに関して、理論的な観点からスウェーデン語の言語構造を多角的に研究されてきました。特に、不変化詞動詞に関する一連の研究では、項構造と意味構造の関係を深く探究し、これまであまり注目されてこなかったスウェーデン語の動詞構造を詳述しています。さらに、着脱動詞に関する対照研究に代表されるように、スウェーデン語を他の言語と比較することに

より、異なる言語間における語彙化の多様性や共通性を明らかにする研究も精力的に行なっておられました。総じて、當野先生のご業績は、スウェーデン語の言語現象に対して新たな視点や分析方法を提供するのみならず、他の言語にも適用可能な理論的枠組みを提示した点で、極めて高く評価されるべきものです。

本論集には當野先生のご業績の中の学術論文 10 本を収録しております。各ご業績の要旨を以下にご紹介いたします。

論文 1「現代スウェーデン語の再帰代名詞について」

現代スウェーデン語における 2 種類の再帰表現、再帰代名詞 *sig* と再帰接辞-*s*、および「重い」再帰代名詞である *sig själv* を対象に、それらを類型的観点から考察した論文です。従来、再帰代名詞と考えられていた *sig* が再帰としての機能を失い、中相を表す形態素として機能していること、またそれに代わり *sig själv* が再帰代名詞としての役割を担っていることを明らかにしています。

論文 2「現代スウェーデン語の擬似再帰代名詞について」

現代スウェーデン語における動詞が選択しない再帰代名詞、いわゆる擬似再帰代名詞の分布を観察し、英語の同種の表現との比較を通して、その役割について考察した論文です。特に、結果構文に限らず、移動構文にも擬似再帰代名詞が用いられている点が指摘されています。

論文 3「スウェーデン語の獲得を表す表現に関する一考察」

現代スウェーデン語における不変化詞と再帰代名詞を含む特殊な獲得表現について、統語と意味の観点から詳細に分析した論文です。特に、意味構造と項構造のマッピングに焦点を当て、その関係について論じています。

論文 4「着脱動詞の対照研究—日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語の比較—」

呂仁梅先生との共著で、「着る」「脱ぐ」や *put on, take off* のような衣服の着脱に関する動詞が、スウェーデン語、英語、日本語、中国語、マラーティー語でどのように語彙化されているかを考察した論文です。結果として、①「動詞枠付け言語」か「衛星枠付け言語」か、②「一次的衣類」と「二次的な衣類」で異なる動詞を用いるかどうか、③衣類をつける場所(＝着点)により異なる動詞を用いるかどうか、という 3 つのパラメーターが関与していることを示しています。

論文 5「現代スウェーデン語の不変化詞動詞と非語彙的抱合—語彙機能文法による分析—」

英語・ドイツ語などのゲルマン系言語に見られる不変化詞動詞に焦点を当て、特に現代スウ

スウェーデン語の事例を、語彙機能文法（LFG）を用いて分析した論文です。不変化詞と動詞が語を構成するかどうかという語彙性に関して、音韻・統語（形態）・意味・文法関係の各レベルでの分析を行い、語を認定する必要性を論じています。

論文 6「現代スウェーデン語不変化詞動詞の項の実現」

現代スウェーデン語の不変化詞動詞における意味構造と項構造について詳細な考察を行った論文です。擬似主語構文、“Landmark Flexibility”、そして不変化詞を含む二重目的語構文などの不変化詞動詞に関わる特殊な現象を分析し、「不変化詞動詞の内項は常に不変化詞によって導入される」という既存の仮説を支持する証拠を提示しています。

論文 7「スウェーデン語の過去分詞による属性描写」

スウェーデン語における *lättläst* 〈読みやすい (easy-read)〉に代表されるような“*lätt*+過去分詞”および“*svår*+過去分詞 (*svår* 〈難しい〉)”という構成をなす複合語に焦点を当て、それらの分析を行った論文です。これらの複合語が、属性描写の表現であること、語彙部門で形成されること、さらに英語やドイツ語に見られる中間構文に相当する表現であることを明らかにしています。

論文 8「現代スウェーデン語における疑似主語構文の分析」

現代スウェーデン語における動詞が選択しない項が主語として現れる「疑似主語構文」を記述し、考察した論文です。同構文が不変化詞動詞構文であること、また動詞の意味構造と不変化詞の意味構造が合成し、そこから項構造が決定されとする分析が最も妥当であることを主張しています。

論文 9「基体動詞の反義語となるスウェーデン語の不変化詞動詞について」

基体動詞が表す結果状態と逆の結果状態を表す不変化詞動詞について考察した論文です。例えば、*låsa* 〈鍵を掛ける〉と *låsa upp* 〈鍵を開ける〉のような不変化詞が、どのような条件で基体動詞と逆の結果状態を表すことが可能かについて詳細に分析しています。

論文 10「現代スウェーデン語基本不変化詞動詞リスト作成に向けて」

本論集の編者である梅谷綾、南澤佑樹、および芝田思郎氏との共著で、スウェーデン語学習者にとって必要な不変化詞動詞のリストの作成に向けて、見出し語となる不変化詞動詞の選定について考察したもので、暫定的な不変化詞と不変化詞動詞のリストを掲載しています。

本論集をお一人でも多くの方に手に取っていただければ幸いです。もしかしたら、當野先生は天国から「も一、余計なことをするな！」と口を尖らせながら怒ってらっしゃるかもしれませんが、そこは遺された私たちの気持ちを優先させるわがままをお許しいただこうと

思います。

當野先生のご功績、また先生との思い出は、今後も私たちの研究や教育に生かされ続けることでしょう。本論集がスウェーデン語をはじめ、その他の言語研究のさらなる発展に寄与し、みなさまの学びの一助となることを願っております。

最後に、當野先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

2024 年 11 月

編者一同

論文 1

「現代スウェーデン語の再帰代名詞について」

現代スウェーデン語の再帰代名詞について*

當野 能之

1. はじめに

本論文では現代スウェーデン語で従来、再帰代名詞であると考えられてきた *sig*¹ [sej] が既に再帰としての機能を失い、中相を表す形態素として機能していることを主張する。類型論において多くの言語で再帰構文が「再帰→中相→受動」という変化をすることが解明されているが (Geniusiene (1987), Kemmer (1993), 柴谷 (1997) などを参照), 以下では現代スウェーデン語の *sig* が既に再帰としての機能を失い中相へと変化していることを, *sig* の共時的な分布と, 統語的な振舞いを観察し主張が正しいことをみていく。(以下のスウェーデン語の例文では, *sig* に対して *middle marker* という意味で MM というグロスをあてている。)

2. *Sig* の分布

まず最初に *sig* の分布に関して見ていく。以下では2.1で *sig* と *sig själv* という複合再帰代名詞との分布の違いを, 2.2では *sig* と再帰代名詞から発達した接辞 *-s* の分布の違いを考察する。

2.1. *Sig* と複合再帰代名詞 *sig själv*

もし *sig* が再帰代名詞として機能しているのであれば典型的な再帰構文に現われなければならないはずである。Kemmer (1993)では次の (1)の英語の文に対応する文が典型的な再帰構文であるとしている。

- (1) a. *I saw myself.*
b. *He adores himself.*

c. *Mary stabbed herself.* (Kemmer 1993:42)

(1)に対応するスウェーデン語の例(2)を見てみると、(2)a,bでは *sig* を使うことができず、英語の *self* に相当する *själv*² を伴った *sig själv* という複合再帰代名詞を使わなければならない。一方(2)cでは *sig* を使うこともできるが、この場合は「怪我をした」という(意図を伴わないできごとの)意味になり、英語の(1)cの「自分を刺した」という(意図を伴う行動の)意味に対応するのは、やはり *själv* を伴った場合である³。

(2) a. *Jag såg *mig / mig själv.*

I saw MM / MM self

b. *Han beundrar ?sig / sig själv.*

he adore MM / MM self

c. *Mary stötte sig/sig själv.*

Mary stabbed MM / MM self

それでは *sig* が単独で、どのような場合に使われるのかというと 典型的には(3)のような「ひげをそる」「体を洗う」「髪をとかす」など身だしなみの行為を表すような動詞に使われ、この場合(4)aを見ても分かるように *själv* を伴わなくても非文にはならない。

(3) 身だしなみの動詞⁴

raka sig ‘shave’, *tvätta sig* ‘wash’, *kamma sig* ‘comb’, *klippa sig* ‘cut hair’,

smycka sig ‘adorn’, *klä (på) sig* ‘dress’, *klä av sig* ‘undress’

sminka sig ‘put on make up’, *måla sig* ‘put on make up’

(4) a. *Hon kammade sig (själv).*

she combed MM (self)

'She combed her hair'

b. *Hon kammade flickan.*

she combed girl.DEF

'She combed the girl.'

先行研究では *själv* (self) は対比・強調する時に用いられると説明されることが多かったが(Anward (1973)など)⁵, また実際(4) a.の様な場合 *själv* を伴うと強調あるいは対比の意味が出るが, (2)で *själv* が義務的であることを考慮すると別の説明が必要となる。これには Haiman (1983, 1985)の「経済的な動機付け (economic motivation)」が関わっているものと思われる。(2)の例文のような場合, 動詞が表す行為は普通, 主語以外に対して向けられるものであり, 行為が主語に向けられることは予測不可能であるために重い形である複合再帰代名詞 *sig* *själv* が用いられる。一方, 身だしなみを表すような(3)に挙げられている動詞は(4)b.のように動作が主語以外に向けられることもあるが, 普通, 動作が主語に向けられることが予測可能なため軽い形である *sig* が用いられるものと考えられる。(この場合 *själv* をつけることも可能であるがその場合は強調・対比といった意味を帯びる。)

また, 同様の現象は受益構文と2重目的語構文でもみられる。

(5) a. *Hon köpte sin mor en kaka.*

she bought her mother a cake

'She bought her mother a cake.'

b. *Hon köpte Ø / sig / sig själv en kaka.*

she bought Ø / MM / MM self a cake

'She bought a cake.'

- (6) a. *Hon sände sin mor en bok.*
 she sent her mother a book
 ‘She sent her mother a book.’
 b. *Hon sände *Ø / ?sig / sig själv en bok.*
 she sent Ø / MM / MM self a book
 ‘She sent herself a book.’

受益構文⁶(=(5)a)と2重目的語構文(=(6)a)において動作主と受益者あるいは到着点が同じである場合、受益構文においては *sig* (=(5)b)を使い2重目的語構文では *sig själv* (=(6)b)を使わなければならない。これも受益構文を作り得る動詞は一般的に主語が主語自身のために行う動作を表すものであり、一方、2重目的語構文を作る動詞は普通、主語が主語以外に対象を移動させる行為であるということに根ざしてると考えられる。以上のような説明は次のような文における分布の違いからも妥当であることが分かる。つまり「見る(=(7)a)」ことは普通、主語以外に向けられる行為であり、*sig själv* が使われているのに対し、「鏡を見ること⁷(=(7)b)」は一般に主語に対して向けられる行為で、軽い形である *sig* が使われているものと考えられる⁸。

- (7) a. *Hon såg *sig / sig själv.*
 she saw MM / MM self
 ‘She saw herself.’
 b. *Hon såg sig / sig själv i spegeln.*
 she saw MM / MM self in mirror.DEF
 ‘She saw herself in the mirror.’

類型論的観点から中相を研究している Kemmer (1993) は身だしなみの動詞や受

益構文で主語に動作が向けられるような場合をそれぞれ Body action middle, Indirect middle と呼び、再帰構文と区別し、中相を表す範疇が典型的に現われるとしている。ところで Body action middle には身だしなみの動詞以外にも次のような動詞も含まれ、やはり *sig* が用いられる。ただしこれらの動詞は *själv* (self) をとることができないという点で、身だしなみの動詞などとは違っている。

(8) 姿勢の獲得

sätta sig ‘sit down’(lit. set MM), *lägga sig* ‘lie down’(lit. lay MM),
resa sig ‘stand up’(lit. raise MM), *ställa sig upp* ‘stand up’(lit. stand MM up),
böja sig ‘bend down’(lit. bend MM), *luta sig* ‘lean’(lean MM)

(8') *Han sätter sig i soffan.*

he seat MM in sofa.DEF

‘He sits down on the sofa’

(9) 移動を伴わない運動

sträcka (på) sig ‘stretch (oneself)’, *vrida sig* ‘turn’, *vända sig* ‘turn’
böja sig ‘bend down’, *luta sig* ‘lean’, *skaka på sig* ‘shake oneself’,
ruska på sig ‘shake oneself’

(9') *Han sträckte (på) sig.*

he stretched (on) RM

‘he stretched himself out’

(10) 移動動詞

flytta sig, *förflytta sig*, *röra sig* ‘move’ (lit.move MM),
avlägsna sig ‘leave’ (lit. remove MM), *höja sig* ‘rise’ (lit. raise MM),
skynda (sig) ‘hurry’, *störta (sig)* ‘rush’(lit.throw MM), *smyga (sig)* ‘creep’

(10') *Han avlägsnade sig från platsen.*

he remove MM from place.DEF
‘he left the place’

以上の2.1.では、典型的な再帰は *sig själv* が使われるのに対し、*sig* は中相範疇に現われることを見てきた

2.2. *Sig*と接辞 *-s*

次に *sig* と接辞-*s* の分布をみていく。現代スウェーデン語には歴史的に再帰代名詞から発達した接辞-*s* がある。この接辞-*s* は自発文(自動詞化)(=(11)b)や受動文(=(11)c)を形成したり、あるいは原因を主語に、経験者を目的語にとるような心理動詞において、経験者が主語になり、原因が斜格になる文(=(12)b)を形成する。

(11) a. *Råttorna spred smittan till Frankrike.*

rats.DET spread infection.DET to France
‘The Rats spread the infection to France.’

b. *Smittan spred sig / -s till Frankrike.*

infection.DET spread MM / -s to France
‘The infection spread to France’

c. *Smittan spred *sig / -s av råttorna.*
infection.DET spread MM / -s by rats.DET
‘The infection was spread by the rats’

- (12) a. *Er vänlighet gladde oss mycket.*
your kindness pleased us much
‘Your kindness pleased us very much’
b. *Vi gladde oss / -s mycket över er vänlighet.*
we pleased MM / -s much over your kindness
‘We are pleased with your kindness very much.’

以上から分かるように、*sig* は接辞-*s* と自発文(=(11)b)や心理動詞構文(=(12)b)などで分布が重なるのであるが、受動(=(11)c)の用法は持ち合わせていない。Kemmer(1993)は自発文と心理動詞構文をそれぞれ Spontaneous events, Emotion middle と呼び中相の周辺的な用法と位置付けている。*Sig* は2.1.で見たような中相の典型的な機能を持つ一方、このように周辺的な用法も持つことから文法化の中間段階にあるといえる。一方、接辞-*s* は古ノルド語期の語中音消失現象によって、再帰代名詞 *sik* (対格)あるいは *ser* (与格)から発達したものであり、歴史的に見るとまさに「再帰→中相→受動」と発達したものである(Wessén (1965), Öhlin (1918)を参照)。現在は2.1.で見たような中相の中心的な用法で使われないことを考えると、接辞-*s* はすでに中相範疇としては崩壊しかかっていると考えるのが妥当である。また一般的に再帰構文から発達した受身はそれよりも早い段階からある「be動詞+過去分詞」などの構文から発達した受動文に比べて、動作主を斜格で表すことができなかつたり、テンスなどの点で制限がある場合が多いが(柴谷(1997)を参照)、現代スウェーデン語の場合はそのような制約は見当たらず、この点からも接辞-*s* が受動としての機能を発達させ、既に中相の機能を果たさなくなっているといえることができる⁹。

2.3. *Sig själv, sig, 接辞-s* の分布

以上の 2.1., 2.2. の議論から, 次のような分布を確認することができる. 典型的な再帰は *sig själv* が, 中心的な中相は *sig* が, 周辺的な中相は接辞-*s* が, そして, 受動は接辞-*s* がそれぞれ担っているということができる.

表 1

再帰	中相	受動
<i>sig själv</i>	<i>sig, -s</i>	<i>-s</i>

3. 文法化と音韻的な縮約・接辞化

次に *sig* の統語的な振舞いに関して考察する. Bybee, Perkins & Paguilca (1993) によると文法化が進むと意味の希薄化とともに音韻的な縮約, そして接辞化などが起こるとしている. ここで問題としている「再帰→中相→受動」という文法化が意味の希薄化を伴っているとは言いがたい. しかし音韻的に見ると, 共時的な分布において再帰, 中相, 受動という役割を担っている *sig själv, sig, -s* がそれぞれ 2 音節, 1 音節, 単音というふうに文法化の過程と一致している. 以下ではさらに *sig själv* が項として *-s* が接辞として機能しているのに対し, *sig* が項と接辞の両方として振舞うことを確認し, これも文法化の過程が反映していることを確認する.

まずは倒置現象から *sig* の統語的な振舞いを見ていく. スウェーデン語は他のゲルマン系の言語と同じく動詞第二位の語順を示す. (13) は基本語順で主語, 動詞という語順で, 動詞の直後に来る要素がそれぞれ, a. *sitt barn* ‘his child’, b. *sig själv*, c. *sig*, d. 接辞-*s* というように異なっている.

(13) 基本語順

- a. *Kalle tvättade sitt barn i morse.*
Kalle washed his child this morning
'Kalle washed his child this morning.'
- b. *Kalle tvättade sig själv i morse.*
Kalle washed MM self this morning
'Kalle washed this morning.'
- c. *Kalle tvättade sig i morse.*
Kalle washed MM this morning
'Kalle washed this morning.'
- d. *Kalle tvättade -s av sin mor i morse.*
Kalle washed -s by his mother this morning
'Kalle was washed by his mother this morning.'

(14)は倒置語順である。先程も述べたようにスウェーデン語は動詞第二位の語順を持つ言語であるから、(14)のそれぞれ文頭に副詞句 (*i morse* 'this morning') がきた場合、動詞 (*tvättad* 'washed') が次に来る。ここで注意したいのは(13)の基本語順の時に動詞の直後にある要素が(14)の倒置語順でどうなっているかである。

(14) 倒置語順

- a. *I morse tvättade Kalle sitt barn.*
this morning washed Kalle his child
'This morning Kalle washed his child.'
- a'. **I morse [tvättade sitt barn] Kalle.*
this morning washed his child Kalle

- b. *I morse tvättade Kalle sig själv.*
 this morning washed Kalle MM self
 'This morning Kalle washed.'
- b'. **I morse [tvättade sig själv] Kalle.*
 this morning washed MM self Kalle
- c. *I morse tvättade Kalle sig.*
 this morning washed Kalle MM
 'This morning Kalle washed.'
- c'. *I morse [tvättade sig] Kalle.*
 this morning washed MM Kalle
- d. **I morse tvättade Kalle -s av sin mor.*
 this morning washed Kalle -s by his mother
 'This morning Kalle was washed by his mother.'
- d'. *I morse [tvättade -s] Kalle av sin mor.*
 this morning [washed -s] Kalle by his mother

以上から分かるのは、まず複合再帰代名詞 *sig själv* (= (14)b, b') が項である *sitt barn* (= (14)a, a') と同じ振舞いをしているということである。(14)a, bは共に動詞 *tvättad* 'washed'の直後に主語、その次にaでは目的語である *sitt barn* 'his child', が, b.では *sig själv* が来ている文で、この場合は正しい語順となる。一方 (14) a', b' は動詞の直後に, a'では目的語である *sitt barn* 'his child'が, b' では *sig själv* が来ている文であるがこの場合は非文になる。接辞-s は接辞であるから (14)d, d'からも分かるように、当然常に動詞の直後に位置しなければならない。以上を踏まえた上で(14)c, c'を見ると, *sig* は項・*sig själv*とも接辞-s とも同じように振舞っていることが分かる。この *sig* における項と接辞としての振舞いは次に見るように、疑問文形成などにおいても確認できるものである。

- (15) a. *Kalle tvättade sig i morse.*
 Kalle washed MM this morning
 ‘Kalle washed this morning.’
 b. *Tvättade Kalle sig i morse?*
 washed Kalle MM this morning
 ‘Did Kalle wash this morning?’
 c. *Tvättade sig Kalle i morse?*
 washed MM Kalle this morning

また次に見るように, *sig själv* が疑問文の答(=16))や分裂文の焦点(=17))になれるのに対し, *sig* はそのどちらにもなることができない。これも *sig själv* が項として機能しているのに対し, *sig* は項としては機能していないことを示している。

- (16) *Vem anmälde han till tävlingen?*
 whom entered he to competition.DEF
 ‘Whom did he enter for the competition?’
 a.- **Sig.*
 b.- *Sig själv.* (Sundman 1987: 307)

- (15) *Det var sig själv / * sig som han anmälde till tävlingen.*
 it was MM self / MM that he entered to competition.DEF
 ‘It was himself that he entered for the competition’(Sundman 1987: 307)

以上, *sig själv*, *sig*, *-s* の分布と音韻的な縮約, そして統語的振舞いをまとめると表2のようになり, 文法化の一般的な傾向ときれいに一致することが分かる。*Sig* が接辞としての振舞いを見せることはすでに Holmberg (1984)や Sundman

(1986)などで述べられているが、それがどのような意味を持つかについては表2のような文法化の過程の体系の中で初めて意味を持つてくるものであると考えられる。

表2

	再帰	中相	中相・受動
	<i>sig själv</i> >	<i>sig</i> >	-s
音節数	2音節	1音節	単音
統語的振舞	項	項 / 接辞	接辞

4. 結論

以上の議論から、従来、再帰代名詞であると言われて来た現代スウェーデン語の *sig* がすでに再帰としての機能を失い、中相としての機能を担っていることを確認した。

註

* 本稿は日本言語学会第120回大会での口頭発表(2000年6月18日)に基づき、その内容に加筆・修正を加えたものである。発表時に貴重なコメントをしてくださった皆様、発表の準備に際し貴重なアドバイスをいただいた方々に感謝いたします。データ収集の際は Astrid Wichmann 氏に御協力をいただいた。改めてお礼を申し上げます。無論本稿における議論の誤り及び理解不足の点はすべて筆者がその責任を負うものである。

¹ スウェーデン語の再帰代名詞は1・2人称については代名詞目的格と同一であり、3人称のみ *sig* という代名詞とは違った形をとる。1・2人称の代名詞・再帰代名詞については以下の通りである。

	単数	複数
1人称	<i>mig</i>	<i>oss</i>
2人称	<i>dig</i>	<i>er</i>

² *Själv* 'self' は次のように先行詞の性と数に一致する: *själv* (共性, 単数), *själv-t* (中性, 単数), *själv-a* (共性・中性, 複数)。

³ このような動詞には他に次のようなものがある

bränna sig 'burn (scald) oneself', *skära sig* 'cut oneself'
slå sig 'hurt oneself (lit. hit MM)', *skada sig* 'hurt oneself'

⁴ ただし次の2語に関しては自他同形で用いられる。つまり b. から分かるように行為が自分に向けられる際、他の身だしなみの動詞とは違い *sig* が現われない。

bada 'give...a bath / take a bath', *duscha* 'give...a shower / take a shower'

- a. *Hon badar barnet varje dag.*
 she bathe child.DEF every day
 'She bathes the child every day.'
 b. *Hon badar (*sig) varje dag.*
 she bathe (MM) every day
 'She bathes every day.'

⁵ 生成文法の枠組みでは、Riad (1988)のように *sig* と *sig själv* をそれぞれ長距離束縛・短距離束縛の再帰代名詞として捉える研究がある。

- a. *Lisa_i är rätt nöjd med sig själv_i / *sig_i.*
 Lisa is rather pleased with MM self / MM
 'Lisa_i is rather pleased with herself_i.'

- b. *Lisa_i bad Lena_j vara vänlig mot sig_i / sig själv_j.*
 Lisa asked Lena to-be kind to MM / MM self
 'Lisa_i asked Lena_j to be kind to self_j.'

(Riad 1988: 18)

a では先行詞と再帰代名詞が同一の節の中にあるので短距離束縛の再帰代名詞である *sig själv* を用いなければならず、長距離束縛の再帰代名詞 *sig* は非文になる。b では長距離束縛の再帰代名詞 *sig* は同じ節にない先行詞 *Lisa* と同一指示をもち、一方短距離束縛の再帰代名詞である *sig själv* は同一の節内にある先行詞 *Lena* と同一指示をもっている。Riad (1988)の研究では(3)にみられるような、短距離束縛の関係で長距離束縛の再帰代名詞を許してしまうような動詞を「再帰動詞」と呼び、分析しているが、このような分析は(5)bのような受益構文における *sig* の出現や、(7)a,bに見られる対比などから正しくないと考えられる。つまり受益構文に現われるような *sig* を語彙的にあらかじめ指定された「再帰動詞」とは考え難い。また、(7)a,bに見られる対比は、*sig* と *sig själv* の選択が動詞というよりは、動詞句の意味で決まることを示唆しているように思われる。

⁶ Holmberg & Platzack (1995: 201-202)によるとスウェーデン語では生産・創造・獲得を意味する動詞では受益構文を形成することができる。

⁷ 「銃を見る」という動作は一種の身だしなみの行為とも解釈できる。

⁸ 反例として次のような「自殺」を意味するものが考えられる。

hånga sig 'hang oneself', *skjuta sig* 'shoot oneself'

確かに「首をかける」ことや「銃を撃つ」ことは、確かに普通、主語が主語自身に向ける行為ではないが、これらの自殺を表す動詞は語彙化されたものと思われる。

⁹ 接辞-s にはその他に次の a.に見られるような相互用法や b'.に見られるような絶対用法などもあるが、詳しい考察は別の機会に取り上げることとする。

- a. *Vi träffa-s imorgon klockan elva.* [相互用法]
we meet-MM tomorrow o'clock.DEF eleven
'We meet tomorrow at eleven o'clock.'
a'. *Vi träffar varandra imorgon klockan elva.*
we meet each-other tomorrow o'clock.DEF eleven
- b. *Hunden bet barnet.*
dog.DEF bit child.DEF 'The dog bit the child'
b'. *Hunden bit-s.* [絶対用法]
dog.DEF bite-MM 'The dog is in the habit of biting'

参考文献

- Anward, J. (1974). Swedish reflexivization. Ö. Dahl (ed.). *Papers from the first Scandinavian conference of linguistics*. Göteborg: University of Göteborg.
Bybee, J., R. Perkins & W. Paguila. (1994). *The evolution of grammar*. Chicago, London: The university of Chicago Press.
Geniusiene, E. (1987). *The typology of reflexives*. Berlin, New York, Amsterdam: Mouton de Gruyter.
Haiman, J. (1983). Iconic and economic motivation. *Language* 59, 781-819.
Haiman, J. (1985). *Natural syntax*. Cambridge: Cambridge university press.
Holmberg, A. (1984). On certain clitic-like elements in Swedish. *Working papers in Scandinavian Syntax* 12. Lund: Department of Scandinavian languages, Lund university.
Holmberg, A. & C. Platzack. (1995). *The role of inflection in Scandinavian syntax*. New York, Oxford: Oxford University Press.
Kemmer, S. (1993). *The middle voice*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamin.
Riad, T. (1988). Reflexivity and predication. *Working papers in Scandinavian Syntax* 36. Lund: Department of Scandinavian languages, Lund university.

- 柴谷方良 (1997). 「言語の機能と構造と類型」『言語研究』, 112.
- Sundman, M. (1986). *Subjectval och diates i svenskan*. Åbo: Åbo Akademis förlag
- Wessén, E. (1965). *Svensk språkhistoria. III Grundlinjer till en historisk syntax*. Stockholm, Göteborg, Uppsala: Almqvist & Wiksell.
- Öhlin, P. (1918). *Studier över de passiva konstruktionerna i fornsvenskan*. Lund: Håkan Ohlssons Boktryckeri.

論文 2

「現代スウェーデン語の擬似再帰代名詞について」

現代スウェーデン語の擬似再帰代名詞について

當野 能之

1. 序

Lindberg (1994 : 218-19) は、次の (1a-5a) の再帰代名詞を含んだ動詞句の一群をまだ十分に研究されていない分野の一部として挙げている。¹⁾

- 1) a. längta sig sjuk 〈恋い焦がれて病気になる〉
long RM sick
b.*längta sig
- 2) a. växa sig stor 〈成長して大きくなる〉
grow RM big
b.*växa sig
- 3) a. skrika sig hes 〈叫んで声がかれる〉
shout RM hoarse
b.*skrika sig
- 4) a. supa sig fördärvad 〈酒を飲みすぎて体を壊す〉
drink RM ruined
b.*supa sig
- 5) a. köpa sig fri 〈自分の身を買って自由になる〉
buy RM free
b.*köpa sig

これらの動詞句は (1b-5b) から分かるように、sjuk 〈sick〉, stor 〈big〉のような補語を義務的に必要としている点で一般的な再帰代名詞の用法とは異なる。また (1-3) の例は、目的語を取ることのできない自動詞が再帰代名詞を要求しているという点でも特殊である。Lindberg (1994 : 219) は、以上のような再帰代名詞を含んだ動詞句は、例えば (3) の場合、次の (6) のように så att 〈so that〉の構文（以下、[så att 構文]と呼ぶ）で言い換えたものとほぼ同義であるとしている。

- 6) Han skrek så att han blev hes.
he shouted so that he became hoarse 〈彼は叫んで声がかれた。〉

Lindberg は例文を挙げていないので、まずは辞書等からの例文を見てみよう。²⁾

- 7) Pojken växte sig stor och stark. (SH: 864)
boy.DEF grew RM big and strong 〈その少年は成長して大きくなった。〉

- 8) 5000 rockfantaster skrek sig hesa. (SO: 463)
5000 rock-fans shouted RM hoarse
〈5000 人のロックファンは叫んで声がかれた.〉
- 9) Trälen kunde också köpa sig fri genom arbete. (SS: 69)
slave.DEF could also buy RM free through work
〈奴隷は労働を通して自分の身を買ひ、自由になることもできた.〉

以上のような構文は一般的に「結果構文」(resultative construction) と呼ばれ、また結果構文にのみ現れる再帰代名詞は「擬似再帰代名詞」(fake reflexive) と呼ばれ、英語を中心に研究が進んでいる。³⁾ しかし、スウェーデン語の結果構文および擬似再帰代名詞に関する論考はまだ無いものと思われる。⁴⁾ 本稿ではスウェーデン語の擬似再帰代名詞の分布に関して論じていく。以下では、まず2章でスウェーデン語の結果構文全般について概観し、3章で本稿の目的である、結果構文と再帰代名詞の関係に関して論じる。また、結果構文の一部としての移動を表す構文で、擬似再帰代名詞が出現することをみる。4章で結論を述べる。

2. 現代スウェーデン語の結果構文

2.1. 結果構文の定義

まず最初に結果構文を定義したい。ここでは (10a) にみられるように動詞と結果をあらわす句（以下ではこれを結果述語 (resultative phrase) と呼ぶ）を持つものを結果構文と定義する。ある構文が結果構文であるかどうかは Lindberg (1994: 219) に従い、次に見るように、結果を表す [så att 構文] で言い換えられるかどうかで判断することができる。

- 10) a. Hon kokade köttet mört.
she boiled meat.DEF tender 〈彼女は肉をゆでて柔らかくした.〉
b. Hon kokade köttet så att det blev mört.
she boiled meat.DEF so that it became tender

このように定義した場合、次の (11a), (12a) のように見かけ上は同じ構造を持つ文でも、[så att 構文] で言い換えができるかどうかで結果構文であるかどうかを判断することができる。

- 11) a. Hon klädde av sig naken.
she undressed RM naked 〈彼女は服を脱いで裸になった.〉
b. Hon klädde av sig så att hon blev naken.
she undressed RM so that she became naked
- 12) a. Kungen åt middagen naken.
king.DEF ate dinner.DEF naked 〈王様は裸で夕食をとった.〉

b.#Kungen åt middagen så att han blev naken.

king.DEF ate dinner.DEF so that he became naked

(11a) の *naken* <naked> は「服を脱いだ結果、彼が裸になる」という結果状態を表しているが、(12a) は「食事をした結果、王様が裸になる」ということではなく、「王様が裸で食事をした」という状態描写 (depictive) であり、区別しなければならない。上で見たように、このような表層的な差を [så att 構文] で明示することができる。ただし [så att 構文] による定義には問題点がある。統語的・意味的な観点から見た場合、結果述語の文法範疇としては、以下の例文の下線部に見られるように、形容詞 = (13a)、前置詞句 = (14a)、不変化詞 = (15a) が認められる。しかし、(14b)、(15b) を見てもわかるように、結果述語が前置詞句あるいは不変化詞の場合、så att 構文による言い換えができない。これはそもそも (14c)、(15c) からわかるように、前置詞句そして不変化詞が一般的に bli <become> を述語動詞として選択した文を作れないことに原因がある。

13) a. Han arbetade sig trött.

he worked RM tired <彼は働いて疲れた.>

b. Han arbetade så att han blev trött.

he worked so that he became tired

14) a. Han arbetade sig till döds.

he worked RM to death <彼は働き過ぎて死んだ.>

b.*Han arbetade så att han blev till döds.

he worked so that he became to death

c.*Han blev till döds.

he became to death

15) a. Han arbetade ihjäl sig.

he worked to-death RM <彼は働き過ぎて死んだ.>

b.*Han arbetade så att han blev ihjäl.

he worked so that he became to-death

c.*Han blev ihjäl.

he became to-death

ただし、結果述語が前置詞句あるいは不変化詞の場合でも、次のように別の動詞で言い換えが可能な場合もある。

16) a. Han cyklade sönder framhjulet. (TE: 47)

he cycled broken front-wheel.DEF

b. Han cyklade så att framhjulet gick sönder.

he cycled so that front-wheel.DEF went broken.

<彼は自転車に乗ってその前輪を壊してしまった.>

(16) では不変化詞 *sönder* (broken) は *gå* (go) という動詞を選択している。どのような結果述語がどのような動詞をとるのかは、それ自体興味のある問題ではあるが、本稿の範囲を超える問題であるので、ここでは問題としないことにする。

ここまで見てきたように、[*så att* 構文] は形容詞が結果述語の時は有効であるが、それ以外の時は結果構文かどうかのテストにはならない。本稿は、結果構文自体を問題にしているわけではないので、スウェーデン語の結果構文の厳密な定義はまた別の機会に取り上げることとする。ここでは最初にも述べたように、動詞と結果を表す句を持つものを結果構文と定義する。

2.2. 結果述語の文法範疇

2.1.でも少し触れたように、結果述語の文法範疇としては、形容詞のほかに、不変化詞と前置詞句が認められる。ただし次の例を見てもわかるように、目的語と結果述語の相対的な語順が、形容詞、前置詞句 (= (17a)) と不変化詞 (= (17b)) で異なる。

17) a. 動詞 + 目的語 + 形容詞 / 前置詞句

Han arbetade sig trött / till döds

he worked RM tired / to death (彼は働いて疲れた/働き過ぎて死んだ。)

b. 動詞 + 不変化詞 + 目的語

Han arbetade ihjäl sig

he worked to-death RM (彼は働き過ぎて死んだ。)

スウェーデン語の不変化詞は英語など他のゲルマン語と違い、目的語が代名詞か普通名詞かなどによって、相対的な語順の変化を引き起こさず(例外はあるにせよ)、一般的に動詞の直後に位置する。つまり、不変化詞移動 (particle movement) あるいは目的語移動 (object shift) を起こさない。このような語順の違いが結果構文にどのような影響を及ぼすのか、あるいは語順の違うものをそもそも同じ構文として扱うべきかなど様々な問題があるが、この点に関してはまた別の機会に取り上げることにはしたい。

以上をふまえた上で、結果述語に関して、*slå* (hit) という動詞を例にとって、それと結びつく代表的な結果述語をカテゴリー別に下に挙げておく。

18) 形容詞

slå någon gul och blå / blodig / fördärvad / medvetslös

hit someone yellow and blue / bloody / ruined / unconscious

〈人を殴ってあざだらけにする/血だらけにする/ふらふらにする/気絶させる〉

19) 不変化詞

a. slå sönder något

hit broken something 〈物を殴り壊す（あるいはただ単に「壊す」の意）〉

b. slå ihjäl någon

hit to-death someone 〈人を殴り殺す〉

20) 前置詞句

a. slå något i bitar / delar / kras / stycken

hit something to pieces 〈物をたたいて粉々にする〉

b. slå någon till döds

hit someone to death 〈人を殴り殺す〉

3. 結果構文と擬似再帰代名詞

結果構文の一般的特徴と擬似再帰代名詞の関係について見ていく。

3.1. 結果構文の一般的特徴

次の文を見てみよう。

21) a. Han målade stolen grön.

he painted chair.DEF green 〈彼はその椅子を緑色に塗った。〉

b. *Han målade stolen trött.

he painted chair.DEF tired 〈(意図した意味) 彼は椅子を塗って疲れた。〉

(21a) は「彼が椅子に色を塗り、その結果、椅子が緑色になった。」ということを表している。つまり結果述語 *grön* 〈green〉は直接目的語 *stolen* 〈chair.DEF〉の結果状態を叙述している。一方、(21b) は「彼が椅子に色を塗って、その結果、彼が疲れてしまった。」ということを意図した文であるが、この場合は非文になる。つまり結果述語 *trött* 〈tired〉は主語 *han* 〈he〉の結果状態を叙述することはできない。以上、(21) から分かることは「他動詞の結果構文において、結果述語は直接目的語の結果状態を叙述することはできるが、主語の結果状態を叙述することはできない。」ということである。他動詞の結果構文に見られるこのような制約は一般的に、英語などの研究で「直接目的語制約」(direct object restriction) と呼ばれている。

一方、描写述語はどうであろうか？

22) a. Kungen åt fisken naken.

king.DEF ate fish.DEF naked 〈王様は裸で魚を食べた。〉

b. Kungen åt fisken rå.

king.DEF ate fish.DEF row 〈王様は魚を生で食べた。〉

(22a) は「王様が裸の状態で魚を食べた」という意味で、描写述語 *naken* 〈naked〉

は主語 *kungen* 〈king.DEF〉の状態を叙述している。一方、(22b) は「王様が魚を生状態で食べた」という意味で、描写述語 *rå* 〈raw〉は目的語 *fisken* 〈fish.DEF〉の状態を叙述している。以上から、描写述語は、結果述語とは違い、主語も目的語も修飾することができる（つまり直接目的語制約は働いていない）ということがわかる。この点からも結果述語と描写述語は区別されなければならない。ところで (21a) に対応する受身文である (23) では、結果述語が主語の結果状態を叙述している。このことから受身文の主語は他動詞の直接目的語と同じ振舞いをしていることが分かる。

- 23) *Stolen* *målades* *grön*.
 chair.DEF painted.PASS green 〈その椅子は緑色に塗られた。〉

3.2. 他動詞の結果構文

結果構文と擬似再帰代名詞の議論に入る前に、他動詞による一般的な結果構文について大まかな動詞分類ごとに見ていくことにする。

3.2.1. 状態変化動詞（語彙的使役動詞）

状態変化動詞（語彙的使役動詞）は動詞自体に結果状態までの意味を含んでいるので、結果述語をつけた場合は結果状態をさらに詳しく述べることになる。

影山 (1996: 214 - 215) の分類に従い、いくつかの動詞の意味分類ごとに見ていく。

「壊す・つぶす・切る」など

- 24) *Hon skar brödet* *i skivor*.
 she cut bread.DEF in slices 〈彼女はそのパンをうす切りにした。〉

- 25) a. *bryta något* *i småbitar*
 break something in little-pieces 〈折ってこなごなにする〉

- b. *klippa itu* *något*
 cut in-two something 〈二つに切る〉

- c. *dela ett äpple i fyra delar*
 divide an apple in four pieces 〈りんごを4つに分ける〉

「曲げる・折る」など

- 26) *Han vek en näsduk* *i fyra delar*.
 he folded a handkerchief in four pieces 〈彼はハンカチを4つに折った。〉

- 27) *böja ett rör till U-form*
 bend a pipe to U-form 〈パイプをU字に曲げる〉

「染める・塗る」など

- 28) Hon färgade kjolen blå.
she dyed skirt.DEF blue 〈彼女はスカートを青く染めた.〉
- 29) måla väggen röd
paint wall.DEF red 〈壁を赤く塗る〉

「その他様々な状態変化」

- 30) Tjuvarna sprängde sönder kassaskåpet
thieves.DEF bursted broken safe.DEF
〈その泥棒たちは金庫を爆破して壊した.〉
- 31) a. smälta guld till tackor
melt gold to billets 〈金を溶かして延べ棒にする〉
- b. stänga igen dörren
close shut door.DEF 〈ドアを閉める〉
- c. öka något till det dubbla
increase something to the double 〈2倍にする〉

ただしすべての状態変化動詞が結果構文を形成できるわけではない。たとえば döda 〈kill〉のように、結果状態が語彙的に指定されているような語彙的使役動詞は結果述語をつけることはできない。

- 32) *Han dödade henne till döds.
he killed her to death. 〈彼は彼女を殺した.〉

3.2.2. 接触・打撃動詞など

接触・打撃動詞に代表されるような、対象に対して何らかの働きかけを行う動詞も結果構文を形成する。打撃動詞が状態変化動詞と違う点は、対象が変化することまでは含意しないということである。したがって、状態変化動詞においては結果述語は結果状態を詳しく述べる機能を持っていたが、打撃動詞では結果述語は対象の状態変化を付け加える働きをする。

打撃動詞に関しても例を見ていこう。(ただし, slå 〈hit〉に関しては, 例文(18)–(20)を参照.)

- 33) Pojken trampade ihjäl musen.
boy.DEF tramped to-death mouse.DEF 〈その少年はねずみを踏み殺した.〉
- 34) a. sparka upp / igen dörren
kick open / shut door.DEF 〈ドアを蹴って開ける/閉める〉
- b. bita / riva / skjuta / sparka/ krama / trampa ihjäl någon
bite / scratch / shoot / kick / squeeze/ tramp to-death a person
〈噛み / 裂き / 撃ち / 蹴り / 絞め / 踏み殺す〉

対象に対する働きかけがまったくない動詞は、次の (35) に見るように結果構文を作ることはいできない。

- 35) *Kungen liknade mannen berömd.

king.DEF resembled man.DEF famous

〈(意図した意味) 王様はその男に似ていたので、その男は有名になった。〉

また、たとえ自動詞でも働きかけが感じられる場合は、結果構文を形成することができる。

- 36) a. Hon dansade sönder sina nya skor. (TE: 46)

she danced broken her new shoes

〈彼女は踊って、新しい靴をだめにしてしまった。〉

- b. *Hon dansade sina nya skor.

she danced her new shoes

- 37) a. Han lyckades inte att prata omkull mig. (SH: 573)

he succeeded not to talk down me

〈彼は私を（議論で）打ち負かすことはできなかった。〉

- b. *Han lyckades inte att prata mig.

he succeeded not to talk me

- 38) a. Suggan hade legat ihjäl en av smågrisarna. (SH: 433)

sow.DEF had lain to-death one of little-pigs.DEF

〈雌豚は子豚の上に横になってその 1 匹を殺してしまった。〉

- b. *Suggan hade legat en av smågrisarna.

sow.DEF had lain one of little-pigs.DEF

3.3. 結果構文と擬似再帰代名詞

3.2. では主に他動詞の結果構文と、働きかけが感じられるような自動詞でも結果構文を形成できることを見てきた。ここでは、(主に) 自動詞の結果構文における擬似再帰代名詞との関係について見ていく。ここでの自動詞の結果構文とは (36) – (38) でみたような、主語の対象に対する働きかけとその結果起きる対象の変化でなく、主語自身の変化を表すようなものである。下の例を見てみよう。

- 39) a. *Han dansade trött.

he danced tired

- b. Han dansade sig trött.

he danced RM tired 〈彼は踊って疲れた。〉

- c. *Han dansade sig .

he danced RM

- 40) a. Stenen sprack i två nästan jämnstora delar.
 stone.DEF cracked in two almost even-big parts
 b. *Stenen sprack sig i två nästan jämnstora delar.
 stone.DEF cracked RM in two almost even-big parts
 〈その石は2つのほとんど同じ大きさに割れた。〉

(39b) では主語が踊った結果、疲れたという、主語の結果状態を表している。一方 (40a) も主語である石が割れた結果、2つになったという結果状態を表している。(39b) と (40a) の違いは、(39b) が再帰代名詞を必要としているの対し、(40a) では再帰代名詞が現れないという点である。第1章でも述べたように、このような再帰代名詞は擬似再帰代名詞 (fake reflexive) と呼ばれている。以下ではどのような場合に擬似再帰代名詞が現れるのか (あるいは、現れないのか) について見ていく。

3.3.1. 結果構文における擬似再帰代名詞

まずは、擬似再帰代名詞が必要な場合を見てみよう。

- 41) a. Han arbetade sig trött.
 he worked RM tired 〈彼は働いて疲れた。〉
 b. arbeta / dansa / gå / springa sig trött
 work / dance / walk / run RM tired
 〈働いて/踊って/歩いて/走って疲れる〉
- 42) a. Publiken skrek sig hes. (LO: 126)
 audience.DEF shout RM hoarse 〈聴衆は叫んで喉が枯れた〉
 b. skrika / sjunga / tala sig hes.
 shout / sing / talk RM hoarse 〈笑って/歌って/喋って声がかかる〉
- 43) a. Publiken skrattade nästan ihjäl sig.
 audience.DEF laughed almost to-death RM
 〈聴衆は笑い過ぎて死にそうになった〉
 b. arbeta / äta / supa / skratta ihjäl sig
 work / eat / drink / laugh to-death RM
 〈働き過ぎで/食べ過ぎで/飲み過ぎで/笑い過ぎで死ぬ〉
- 44) a. Hon grät sig till sömns.
 she cried RM to sleep 〈彼女は泣いているうちに寝てしまった。〉
 b. läsa / gråta sig till sömns
 read / cry RM to sleep
 〈本を読んでいるうちに/泣いているうちに眠ってしまう〉

- 45) a. arbeta / gråta / sörja / äta sig till döds
work / cry / grieve / eat RM to death
〈働き過ぎで/泣いて/悲しんで/食べ過ぎで死ぬ〉
- 46) a. Hon går och sörjer sig rent fördärvad.(SH: 781)
she go and grieve RM completely ruined.
〈彼女は悲しんで完全に完全に体調を崩している.〉
- b. arbeta / supa / sörja sig fördärvad
work / drink / grieve RM ruined
〈働き過ぎて/お酒を飲み過ぎて/悲しんで体を壊す〉
- 47) dansa sig varm
dance RM warm 〈踊って暑くなる.〉
- 48) sova / banta sig frisk
sleep / slim RM healthy 〈寝て/ダイエットをして健康になる〉

以上の例からわかるのは, 変化を含意しない動詞が結果構文に現れる場合は擬似再帰代名詞が必要であることがわかる。それに対し, 次の例からもわかるように, 変化を含意する動詞は擬似再帰代名詞を必要としない。

- 49) Huden har spruckit sönder.
skin.DEF has cracked broken 〈肌がひび割れた.〉
- 50) Männen frös ihjäl vid Sydpolen.
men.DEF freezed to-death at south-pole.DEF 〈その男達は南極で凍死した.〉
- 変化を含意する動詞で擬似再帰代名詞を取るものとしては(2), (7)で取り上げた växa 〈grow〉があるが, 現時点では, この1例しか見当たらず, 例外であると考えられる。
- 51) Pojken växte sig stor och stark. (SH: 864)
boy.DEF grew RM big and strong 〈その少年は成長して, 大きく強くなった.〉

3.3.2. 移動構文における擬似再帰代名詞

現代スウェーデン語では, 移動をあらわす場合にも, 次に見るように擬似再帰代名詞が現れることがある。

- 52) a. Han kände sig fram i den mörka källaren.
he feel RM forward in the dark cellar.DEF
〈彼は暗い地下室を手探りで進んだ.〉
- b. *Han kände fram i den mörka källaren.
he feel forward. in the dark cellar.DEF

ここでは, 移動をあらわす場合, どのような時に, 擬似再帰代名詞が現れるかを考

察する。一般に下の例からもわかるように komma <come>, falla <fall> のような移動の方向を表す動詞や, gå <walk>, springa <run> のような移動の様態を表すような動詞は擬似再帰代名詞をとらない⁵⁾。

- 53) a. En person föll ner från 4:e våningen. (SO: 284)
 a person fell down from 4th floor. DEF <人が4階から落ちた。>
 b. *En person föll sig ner från 4:e våningen.
 a person fell RM down from 4th floor. DEF
- 54) a. Han sprang till bussen.
 he ran to bus. DEF <彼はバスまで走っていった。>
 b. *Han sprang sig till bussen.
 he ran RM to bus. DEF

一方、移動の手段を表す動詞には擬似再帰代名詞が現れるようである。いくつかのグループごとに見ていこう。

まずは、次に見られるように身体的な運動を手段として移動を引き起こすようなものがある。

- 55) a. armbåga / tränga / knuffa sig fram
 elbow / push / push RM forward
 <肘で押し分けて進む/割り込んで進む/押し分けて進む>
 b. Han knuffade sig fram genom folkmassan.
 he pushed RM forward through crowd. DEF
 <彼は群集の中を押し分けて進んだ。>
- 56) a. kämpa / slå sig fram
 fight / hit RM forward <戦いながら進む/殴りながら進む>
 b. De kämpade sig fram till seger.
 they fought RM forward to victory
 <彼らは戦って勝利へとたどりついた。>
- 57) a. känna / treva sig fram
 feel / grope RM forward <手探りで進む>
 b. Hon trevade sig fram i mörkret. (LO: 303)
 she groped RM forward in dark. DEF <彼女は暗闇の中を手探りで進んだ。>
- 58) a. hugga sig igenom / gräva sig ned
 cut RM through / dig RM down
 <切り開きながら進む/掘り下げていく>
 b. Han grävde sig ned i sanden.
 he dug RM down in sand. DEF <彼は砂を掘り下げていった。>

また次のように、目標にたどり着くまでの手段が、移動表現として現れる動詞にも擬似再帰代名詞が現れる。

- 59) a. leta sig fram
find RM forward 〈探しながら進む〉
b. Vi lyckades att leta oss fram till huset. (SO: 685)
we succeeded to findRM forward to house.DEF
〈我々はその家に探しながらたどりついた。〉
- 60) a. nosa / lukta sig fram
nose / smell RM forward 〈においを嗅ぎながら進む〉
b. Hon nosade sig till nyheterna i förväg.
she nosed RM to news.DEF in advance
〈彼女は先んじてそのニュースを嗅ぎつけた。〉

また次に見るように、身体動作ではない手段によって（抽象的な）移動を表現する場合にも擬似再帰代名詞が現れる。

- 61) a. bluffa / tigga / låna sig fram
bluff / beg / borrow RM forward
〈賄賂を渡して/こびて/借りて切り抜ける〉
b. Han har bluffat sig fram under hela sin karriär. (SO: 124)
he has bluffd RM forward under whole his career
〈彼は自分の経歴を賄賂を渡してやりくりしてきた。〉
- 62) a. ljuga / skrika / skjuta sig fri
lie / shout / shoot RM free
〈嘘を言ってまぬがれる、叫んで/銃を撃って逃れる〉
b. Hon ljög sig till en förmån.
she lied RM to an advantage 〈彼女は嘘を言って恩恵にありついた。〉
- 63) a. arbeta sig upp
work RM up 〈出世する〉

これらの構文は下に見られるような、英語の one's way 構文⁶⁾に相当するものと思われるが、⁷⁾ 英語の one's way 構文と本稿で議論しているスウェーデン語の移動構文の違いは、(64b) のような移動の付帯状況を、(65a, b) に見るように、表せないことである。スウェーデン語では、付帯状況は (65c) のように現在分詞で付加的に表さなければならない。

- 64) a. He pushed his way through the crowd.
〈彼は群集の中を押し分けながら進んだ。〉

b. He seemed to be whistling his way along. (Goldberg 1995: 209)

〈彼は口笛を吹きながら歩いているようだった。〉

65) a. *Hon visslade / sjöng sig hem.

she whistled / sang RM home

b. *Hon visslade / sjöng hem.

she whistled / sang home

c. Hon gick hem visslande / sjungande.

she walked home whistling / singing

〈彼は口笛を吹きながら / 歌いながら家へ歩いて帰った〉

以上の考察からわかることは、移動動詞（移動の方向を表す動詞と移動の様態を表す動詞）は擬似再帰代名詞を必要としないが、移動の手段を表す動詞は擬似再帰代名詞を必要としてするということである。また、擬似再帰代名詞の現れる移動構文で、移動の付帯状況が表せないということは、この構文が因果関係を表す使役構文の一種であることを物語っているものと思われる。

3.3.3. 結果構文と移動構文における擬似再帰代名詞

以上、結果構文と移動構文における擬似再帰代名詞の出現について見てきたわけであるが、3.3.2. で見たように、擬似再帰代名詞の現れる移動構文が使役構文の一種であるとする、結果構文と移動構文を並行して扱うことが可能であると考えられる。状態変化という概念が、位置変化という、より具体的な空間概念を基にして理解されているということは、すでに認知言語学などで、広く理解されていることである。次の文も「眠る」という状態変化が falla 〈fall〉 という位置変化の概念で理解されている一例である。

66) Han föll i sömn.

he fell in sleep 〈彼は眠り込んだ。〉

また、構文レベルでも結果構文が使役移動構文に基づいているという分析がある (Goldberg 1995: 67-100)。本稿で見てきた結果構文と移動構文における擬似再帰代名詞の出現も結果構文と移動構文の並行性を示しているように思われる。

結果構文と移動構文における擬似再帰代名詞の出現は次のページの表 1 のようにまとめられる。

表 1

	結果構文	移動構文
S V XP	状態変化動詞	移動動詞 (移動の方向・移動の様態)
S V RM XP	変化の原因	移動の手段

(XP は結果述語を表す。但し結果述語が不変化詞のときは S V RM XP ではなく、S V XP RM になる。)

4. まとめ

以上、スウェーデン語の擬似再帰代名詞に関して見て来たわけであるが、最後に今後の課題を述べる。英語などにおける擬似再帰代名詞は、非対格性仮説との関連で議論されてきた。非対格性仮説とは、Perlmutter(1987) が唱えたもので、自動詞が均一のクラスではなく、非能格動詞 (unergative verb) と非対格動詞 (unaccusative verb) と呼ばれるものに大きく二分されるというものである。議論の詳細はここでは割愛するが、最も重要な点は、非能格動詞の単一の項が他動詞の主語と同じ振舞をするのに対し、非対格動詞の単一項が他動詞の目的語と同じような振舞を示すということである。非能格と非対格の動詞がその意味から予測できるかどうかは研究者によって分かれるところであるが、強い相関はあるようである。一般に非能格動詞は意志的、完了動詞であるのに対し、非対格動詞は無意志的、未完了動詞であるという傾向がある。

話を擬似再帰代名詞に戻すと、3.1. で見たように他動詞の結果構文では結果述語が主語ではなく目的語の結果状態を叙述するという「直接目的語制約」が働くことを見た。自動詞の結果構文を考えてみると、(67a) からわかるように、dansa <dance> では結果述語が主語を直接、叙述することができない。つまり他動詞の主語と同じ振舞をしており、非能格動詞であることがわかる。そこで (67b) のように、直接目的語の位置に擬似再帰代名詞を置くことで、主語の結果状態を示すことができる。

67) a. *Han dansade trött.

he danced tired

b. Han dansade sig trött.

he danced RM tired <彼は踊って疲れた.>

一方、(68) では、結果述語が主語の結果状態を（擬似再帰代名詞なしで）叙述している。つまり spricka <crack> の単一項は他動詞の目的語と同じ振舞を示し、非対格述語であるということができる。

68) a. Stenen sprack i två nästan jämnstora delar.

stone.DEF cracked in two almost even-big parts

b.*Stenen sprack sig i två nästan jämnstora delar.

stone.DEF cracked RM in two almost even-big parts

〈その石は2つのほとんど同じ大きさに割れた。〉

但し、スウェーデン語の場合、3.3.2.で見たように移動構文でも擬似再帰代名詞が現れることを考えると話しはそう単純ではない。次の例を見てみよう。

69) a. Han sprang till bussen.

he ran to bus.DEF 〈彼はバスまで走っていった。〉

b.* Han sprang sig till bussen.

he ran RM to bus.DEF

70) a.* Han sprang trött.

he ran tired

b. Han sprang sig trött.

he ran RM tired 〈彼は走って疲れた。〉

(69) は移動構文で springa 〈run〉が使われている例で、一方 (70) は結果構文で用いられる場合である。擬似再帰代名詞の現れ方をみると、springa 〈run〉は結果構文では非対格自動詞であるが、移動構文では非能格自動詞であるということになってしまう。Levin & Rappaport Hovav (1995: 179-213) では、英語において run のような移動の様態を示す動詞に関して、今示したような分析がなされている。果たして、擬似再帰代名詞の有無が動詞の非対格性を示すテストとなるのかどうか、さらに、現代スウェーデン語から検証してみたい。

注

- (1) 本稿では、他言語の研究者にも理解できるように、言語学の論文の慣習に従い、例文に（あくまで便宜的にはあるが）英語の逐語訳（グロス）を付す。また、例文に付されている * の記号はその表現（あるいは文）が非文法的である事を、# の記号は語用論的に不整合であることを意味する。また逐語訳に使用している略号の意味は次の通りである。RM（再帰代名詞）、PASS（受動形態素）、DEF（（後置）定冠詞）。
- (2) 参考文献からの直接引用の場合は、筆者名および項を示す。但し、辞書等からの引用は、辞書名等を次のように略語で示す：LO = Allén, Sture (1995); SH = Johannisson, Ture. & K.G. Ljunggren (1966); SO = Allén, Sture (1996); SS = Hellstam, Dagmar (1992); TE = Bodegård, Anders (1985)。なお出典明記のない文は、筆者の作例による文で、インフォーマントにチェックしてもらったものである。
- (3) 英語の結果構文および擬似再帰代名詞に関しては、Simpson (1983), Levin & Rappaport Hovav (1995) を参照。
- (4) 現代スウェーデン語の擬似再帰代名詞に関しては、他に Teleman, Hellberg & Andersson (1999) の次の項で簡単な解説がある。Verbfraser: Allmänt § 8 注 1 (262), Verbfraser: Objekt § 7 c) (295), Verbfraser: Predikativ §38 (369), Verbfraser: Predikativ §38 では、この構文が使用頻度の増加とともに生産的になってきているという興味深い記述がある。
- (5) 移動の様態を表す動詞の中でも、次のような比較的特殊な移動の様態を表すものは、随意的に再帰代名詞を取る。
 - i) skynda (sig) ‘hurry’, slingra (sig) ‘wriggle’, smyga (sig) ‘creep’,
störta (sig) ‘rush’ (lit.throw RM), åla (sig) ‘crawl’, släpa (sig) ‘crawl’
 - ii) Han skyndade (sig) till bussen.
he hurried (RM) to bus.DEF 〈彼はバスへと急いだ。〉
- (6) 英語の one’s way 構文に関しては、Goldberg (1995), 影山・由本 (1997) を参照。
- (7) スウェーデン語－英語辞書、英語－スウェーデン語辞書でも、スウェーデン語の移動構文で擬似再帰代名詞が現れるような場合、英語の one’s way 構文が対訳として当てられている。

Om 'fake reflexive' i nusvenskan

Takayuki Tohno

Sammanfattning

Nusvenskan har ett speciellt slags reflexivfraser. Se på följande meningar:

- 1) a. Han arbetade sig trött.
b. *Han arbetade sig

I (1a) konstrueras det intransitiva verbet 'arbeta' med det reflexiva objektet 'sig' samt objektspredikativet 'trött'. Det reflexiva pronomen vilket inte ingår i verbets valens kallas 'fake reflexive' pronomen. Syftet med denna artikel är att studera under vilka omständigheter det 'fake reflexive' pronomenet framträder samt är obligatoriskt.

Det 'fake reflexive' pronomenet uppträder i den resultativa konstruktionen (= (2)) samt i rörelsekonstruktionen (= (2)):

- 2) a. Publiken skrek sig hes.
b. *Publiken skrek hes.
- 3) a. Han kände sig fram i den mörka källaren.
b. *Han kände fram i den mörka källaren.

I de båda meningarna får subjekten tillstånds- och lägesförändring som predikats-fyllnaden 'hes' samt partikeln 'fram' anger. I den resultativa konstruktionen är 'fake reflexive' obligatoriskt om verbet självt inte anger tillståndsförändring som 'skrika' i (2). Likaså i rörelsekonstruktionen behövs reflexivpronomenet om verbet självt inte betecknar lägesförändring liksom 'känna' i (3). Det 'fake reflexive' pronomenet förekommer inte om de verb som betecknar förändring av tillstånd och plats används i den resultativa konstruktionen (= (4)) och rörelsekonstruktionen (= (5)) respektivt. Jämför (4) med (2) samt (5) med (3):

- 4) a. Stenen sprack i två nästan jämnstora delar.
b. *Stenen sprack sig i två nästan jämnstora delar.
- 5) a. Han sprang till bussen.
b. * Han sprang sig till bussen.

参 考 文 献

- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions : A Construction Grammar approach to argument structure*. Chicago, London: The University of Chicago Press.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論 —言語と認知の接点—』. 東京：くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子 1997. 『語形成と概念構造』. 東京：研究社出版.
- Levin, Beth. & Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantic interfaces*. Cambridge: MIT Press.
- Lindberg, Ebba. 1976. (1994.). *Beskrivande svensk grammatik*. 2: uppl. Edsbruk: Akademi tryck.
- Perlmutter, David. 1987. “Impersonal passives and the unaccusative hypothesis”, *Proceedings of the 4th Annual Meeting of the Berkley Linguistics Society*, 157-189. Berkeley: University of California, Berkeley.
- Simpson, Jane. 1983. “Resultatives”, Lori, Levin. *et al.* (eds.). *Papers in Lexical-Functional Grammar*, 145-57. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Teleman, Ulf, Staffan Hellberg. & Erik Andersson (red.). 1999. *Svenska Akademiens grammatik Band 3. Fraser*. Stockholm: Norstedts Ordbok.

辞 書 ・ 資 料

- Allén, Sture. 1995. *Lilla ordlista med bilduppslag*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Allén, Sture. 1996. *Stora svenska ordboken*. Stockholm: Norstedts.
- Bodegård, Anders. 1985. *Tänk Efter*. Stockholm: Skriptor Förlag.
- Hellstam, Dagmar. 1992 (1995). *Sverige på svenska*. 3: uppl. Lund: Kursverksamhetens förlag.
- Johannisson, Ture. & K.G. Ljunggren. 1966 (1984). *Svensk handordbok*. Stockholm: Esselte Studium.

論文 3

「スウェーデン語の獲得を表す表現に関する一考察」

スウェーデン語の獲得を表す表現に関する一考察

當野 能之

1. はじめに

スウェーデン語を読んでいると、時々非常に困惑してしまうような文に出会うことがある。例えば、次のような文である。¹

- (1) Peter Karlsson sprang till sig en bronsmedalj,... (P96)

Peter Karlsson ran to RM a bronze medal,...

〈P.K.は(陸上競技で走って)銅メダルを獲得した。〉

- (2) Bettina Oberesch red till sig guld... (P95)

Bettina Oberesch rode to RM gold.DEF

〈B.O.は馬術競技で金メダルを獲得した。〉

- (3) Roddarn spurtade till sig en bronsmedalj (P98)

oarsman.DEF spurted to RM a bronze medal

〈そのこぎ手はスパートをかけて銅メダルを獲得した。〉

(1) – (3) の例文はコーパスからの実例である。それぞれの文はスポーツ競技におけるメダルの獲得を述べているわけであるが、様々な問題点を含んでいる。例えば、(1) の例文は訳からも分かるように、「選手が走った」という出来事 (E₁) とその結果「その選手がメダルを獲得した」という出来事 (E₂) から成り立っている。つまり (1) の文には、2つの出来事が含まれていて、その間に原因 (E₁) と結果 (E₂) の因果関係があることを述べている。2つの出来事の因果関係を述べているのであるから、この文には「使役」(E₁ CAUSE E₂) の意味要素が含まれているはずであるが、両文を構成するどの単語を見ても、「使役」の概念を含む要素は見当たらない。さらに 結果事象 (E₂) における「獲得」を意味する要素も見当たらない。もちろん、動詞 ‘springa’ は単に走るという「行為」を表しているにすぎず、「使役」や「獲得」の意味を持ち合わせていないことは明らかである。つまり (1) の文の意味は、それを構成する要素の意味を足しても、文全体の意味が得られないわけで、いわゆる「構成性の原理」(principle of compositionality) に従っていない。また、(1) の文では自動詞であるはずの ‘springa (run)’ が、(‘till sig (to RM)’ と共に) ‘en bronsmedalj (a bronze medal)’ を目的語として取っている。つまり自動詞が通常取る項構造を逸脱している。このように、当該の構文は様々な問題点を含んでいるが、筆者の知る限り、この構文に関する研究はこれまでなされていない。そこで本稿では、便宜的に (1) の構文を“TILL-構文”と呼ぶことにする。

ところで、近年の文法理論では基本的に、文全体の意味はそれを構成する単語の意味の和から得ることができ、構成性の原理が保証されることが前提とされてきた。しかし、Goldberg (1995) は、英語の結果構文、使役移動構文、二重目的語構文、Way 構文などを取り上げ、これらの構文の意味がそれを構成する要素から予測できない性質があるとして、「構文」という単位を文法の基本単位として認めることを主張している。しかしながら、何を構文として扱い、どこまでを構文が構成する語彙の特質として扱うかに関しては、課題が残されていることがしばしば指摘されている（例えば、松本 (2002) などを参照）。

本稿では、スウェーデン語の“TILL-構文”を考察し、一見すると、その構成要素からは全く予測不可能のように思われる文も、構成する要素からある程度、予測可能な部分と不可能な部分があることを検証する。

2. 「獲得」という事象について

当該の構文を分析する前に、一般的な「獲得」に関する表現について考えたい。

(4), (5) はそれぞれ (1) の動詞の部分を「獲得」の動詞に置換えたものである。

(4) Peter Karlsson fick en bronsmedalj.

Peter Karlsson received a bronze medal

〈P.K.は銅メダルをもらった。〉

(5) Peter Karlsson vann en bronsmedalj.

Peter Karlsson won a bronze medal

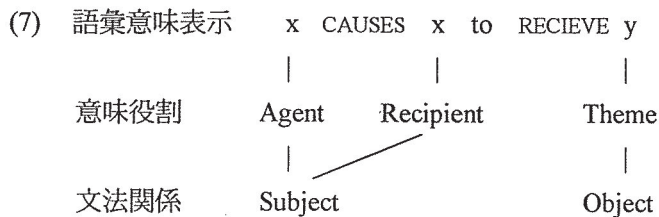
〈P.K.は銅メダルを獲得した。〉

まず「獲得」という出来事を構成する要素、またそれに付随する要素について考えてみる。獲得とは「対象物」(Theme) を「受取人」(recipient) が「所有するようになる」(receive) ことであると考えられる。従って、(4) の ‘få (receive)’ が持っている意味とその項が持つ意味役割、そして文法関係の概略は、次の (6) のような関係にあると仮定することができる。

(6) 語彙意味表示	x	RECEIVES	y
意味役割	Recipient		Theme
文法関係	Subject		Object

次に (5) の ‘vinna (win)’ について考えてみよう。一見すると、(4) の ‘få (receive)’ と同じ構造をもっているように見えるが、‘få’ では主語が「受取人」の意味役割しか持たないのに対し、‘vinna’ の主語は「受取人」かつ「動作主」という二重の意味役割も持っているものと考えられる。つまり、‘få’ においては、主語が受動

的に対象物を受け取るのに対し, 'vinna' では, 主語が意思を持って対象物を獲得する. これは, 'vinna' が命令文になるのに対し, 'fä' が命令文を形成できない(あるいは命令文が極めて稀である)ということから確認することができる(清水(2000)を参照). そこで, 'vinna' の意味には, 「動作主」が何かをした結果, 「受取人 = 動作主」が「獲得」するという「使役」の関係を仮定することができる. 項が持つ意味役割と文法関係は概略 (7) のようになる.



このように, 動作主を主語とする獲得の動詞に一種の「自己使役」の意味構造を仮定することはそれほど奇異なことではない. 例えば, Jackendoff (1990:192) では, 英語の 'obtain' という動詞に対して同様の意味構造が設定されている.

3. TILL-構文

獲得表現一般について簡単に分析したところで, 次に“TILL-構文”を考察していく.“TILL-構文”とは, (8) の範疇連鎖をもつ構文である. さらに, (1) でも見たように, この構文は主動詞が表す行為の結果として主語が何かを獲得するということを意味するので, 概略 (9) のような意味構造をもつものと思われる.

(8) [_S SUBJ [_{VP} VERB till RM OBJ]]

(9) X CAUSES X to RECEIVE Y

先ほども述べたように, 一見すると, (9) の意味構造のうち「使役」(CAUSE) と「獲得」(RECEIVE) の意味は, 文を構成する要素からは得られない. しかしながら, 以下では, これらの意味のうち「獲得」に関しては適切な意味構造を仮定することによって, 文の構成要素から得られるということを主張する.

以下では, 3.1 でどのような動詞がこの“TILL-構文”に参加するのかについて概観したのち, 3.2 以下で当該の問題を検討していく.

3.1. TILL-構文に現れる動詞

以下では“TILL-構文”に参加する動詞に関して, 意味的な観点から概観する. まず, 次のような対象物の獲得を目的とした動詞が挙げられる.

- (10) En man ... ryckte till sig axelväska. (P95)
 a man ... snatched to RM shoulder.bag.DEF
 <男がショルダーバッグをひったくった.>

- (11) I ett nafs hade han grabbat åt sig portmonnän (NEO)
in a jiffy had he grabbed to RM purse.DEF
〈一瞬のうちに、彼は財布を奪い取った。〉

- (12) "Du har redan roffat åt dig för mycket" (P98)
"you have already grabbed to RM so much"
〈あなたはもう既にたくさんぶん取りすぎている。〉

- (13) Han hade inte växlat åt sig någon utländsk valuta. (NEO)
he had not exchanged to RM any foreign exchange
〈彼はまだ外貨を両替して手にしていなかった。〉

ただし、獲得そのものを表わす動詞はこの構文に参加することができない。

- (14) * Han skaffade till sig ett nytt jobb.
he obtained to RM a new job
〈彼は新しい仕事を手に入れた。〉

また、獲得とは全く無関係の動詞もこの構文に現れる。ただし、その場合も獲得の「手段」として解釈が許される場合にのみ、この構文への参加が可能である。次の例を見てみよう。

- (15) Peter Karlsson sprang till sig en bronsmedalj,... (=1)
Peter Karlsson ran to RM a bronze.medal,...
〈P.K.は（陸上競技で走って）銅メダルを獲得した。〉

- (16) * Han sprang till sig axelväskan. (cf. 10, 14)
he ran to RM shoulder.bag.DEF
〈(意図した意味) 彼は走りながらショルダーバッグを盗った。〉

(15) に見るように、‘springa (run)’という動詞は、陸上競技でメダルを獲得するというフレームにおいては、その手段として解釈される。一方、(16) の「ショルダーバッグを盗む」という場合には、その直接の手段としてではなく、むしろ様態（「走りながら」）として解釈されるため非文になるものと考えられる。ただし、(16) において「ショルダーバッグ」が徒競走の景品であるような特殊な状況を設定した場合、「走る」という行為が、獲得のための手段として解釈できるために、「彼は（徒競走に参加して、景品として）ショルダーバッグを獲得した」という解釈が十分可能である（清水氏、新谷氏、私信）。

獲得の手段として解釈できる動詞は様々である。最もよく見られるものは次のような、「だます」という意味を持った動詞である。

- (17) Han lurade till sig arvet. (NEO)
he deceived to RM inheritance.DEF
〈彼は遺産をだましとった。〉

- (18) ...han anklagades för att ha fiffilat till sig en förmån... (P95)

...he accused.PASS for to have fiddled to RM a benefit...

〈彼は不正に利益を得たことで訴えられた。〉

- (19) Han lyckades mygla till sig en fin tjänst. (NEO)

He succeeded wangle to RM a good post

〈彼はうまくこと良いポストを手に入れることに成功した。〉

- (20) Han skojade till sig miljonbelopp. (SO)

he cheated to RM millions

〈彼は100万を口車にのせてだましとった。〉

- (21) Han svindlade åt sig gården från syskonen. (NEO)

he swindled to RM estate.DEF from brother.DEF (or sister.DEF)

〈彼は兄弟からその屋敷をだましとった。〉

上記の他にも、様々な動詞が獲得の手段としてこの構文に参加する。

- (22) ...han tjtade till sig en gitarr av föräldrarna... (P97)

...he nagged to RM a guitar from parents.DEF

〈彼はごねて両親からギターをもらった。〉

- (23) ...mannen ... försöker skrämman till sig pengar... (P97)

...man.DEF ...try frighten to RM money...

〈その男は金を脅し取ろうとしている。〉

- (24) ...och en kamrat till den som slår hotar till sig 500 kronor. (P98)

...and a friend to one who hit threaten to RM 500 kronas

〈そして殴る奴の仲間が500クローナを脅し取る。〉

- (25) Han har också förhandlat till sig ett efterlevnadsskydd... (P98)

he has also negotiated to RM a survivor'sprotection...

〈彼は遺族扶助も交渉で勝ち取った。〉

- (26) Staffan "Stakaren" kämpade till sig en femteplats i Vasaloppet. (P95)

Staffan "Stakaren" fought to RM a fifth.place in Vasa.ski.race.DEF

〈S.S.は頑張ってヴァーサスキー大会で5番になった。〉

- (27) Jens... körde till sig en sjätteplats ... i NM-serien ... (P97)

Jens...drove to RM a sixth.place ... in Nordic.Champion-series

〈J.は(カーレースの)北欧選手権で6位になった。〉

- (28) ...jag har en ...möjlighet att segla till mig en OS-plats, ... (DN87)

...I have a ... chance to sail to RM a Olympic.Games-place, ...

〈私は(ヨットレースで)オリンピックの出場権を獲得する可能性がある。〉

これまで見てきた動詞では、主語が動作主であった。しかし、次に見るような、主語が原因として解釈される動詞もこの構文に現れる。

- (29) Mäktiga män drar till sig kvinnor. (P98)

powerful men draw to RM women

〈権力のある男は女性を引きつける。〉

- (30) Demonstrationen lockade till sig studenter från hela Kina... (P96)

demonstration enticed to RM students from whole China...

〈そのデモで中国じゅうから学生がその気になって集まった。〉

3.2. TILL-構文の「獲得」の意味

さて、“TILL-構文”に現れる動詞について概観したところで、さっそく分析にはいりたい。ここで取り上げるのは、(9)の意味構造に示されている、「獲得」の意味についてである。そもそもこれが構文の意味なのかそれとも、構文を構成する要素から得られる意味なのかについて考えてみたい。まずは次の(31)と(32)の例を見てみよう。

- (31) Han tiggde pengar av passagerarna.

he begged money from passengers.DEF

〈彼は乗客達から金をせびった。〉

- (32) Han tiggde till sig pengar av passagerarna

he begged to RM money from passengers.DEF

〈彼は乗客達に金をせびってもらった。〉

(31)と(32)の統語的な違いは、動詞と目的語の間に‘till sig (to RM)’が有るか無いかである。意味的には、前者が「お金を手に入れたこと」を含意していないのに対して、後者はそれを含意しているという違いがある。それは(33)と(34)にみるように、「もらえなかった」という文を続けると明らかになる。

- (33) Han tiggde pengar av passagerarna men fick inte något. (cf. (31))

but received not any

〈彼は乗客達から金をせびったが、もらえなかった。〉

- (34) * He tiggde till sig pengar av passagerarna men fick inte något. (cf. (32))

but received not any

以上から、(31)と(32)の意味的な差異が明らかに‘till sig (to RM)’の有無によるものであることが明らかになった。それでは、この‘till sig’という構成要素はどのように分析されるべきであろうか。まずは次の節で再帰代名詞‘sig’の働きを考える。

3.2.1. 獲得の意味は何に由来するのか？－再帰代名詞の役割－

先ほど、一般的な獲得表現を考察した際、「動作主」、「受取人」(＝動作主)、「対象物」が出来事を構成する要素としてあることを述べたが、再帰代名詞 ‘sig’ は「受取人」(＝動作主)が統語的に具現化したものであると考えられる。したがって次のように分析することができる。

(35) 文の意味構造	x	CAUSES	x	to RECIEVE	y
意味役割	Agent		Recipient		Theme
文法関係	Subject		RM		Object

(6) の ‘vinna’ を含む文では、動作主と受取人がどちらも主語として具現化しているが、“TILL-構文”では動作主と受取人が別々に具現化されていると考えられる。動作主と受取人を別の項として実現するという現象は、この構文に限られたことではない。次の例を見てみよう。

(36) Han skaffade (sig) ett annat arbete.

he got (RM) a another job

〈彼は別の仕事を手に入れた。〉

(37) Han har byggt (sig) ett hus.

he has built (RM) a house.

〈彼は家を建てた。〉

(36) は ‘skaffa (get, obtain)’ という一般的な「獲得」の動詞が使われているが、受取人の意味役割を間接目的語に再帰代名詞として具現化させていると考えられる。また、(37) の ‘bygga (build)’ のような作成動詞類にも、しばしば間接目的語として再帰代名詞が現れる。何かを作った場合、(一時的にはあるかもしれないが)出来上がったものは主語のもとに存在し、主語の所有物であると考えられる。つまり、作成動詞類にも一種の獲得の意味構造が設定できるわけで、再帰代名詞が受取人として表層に現れるものと考えられる。

以上のように、スウェーデン語では、「獲得」の出来事における「動作主」と「受取人」をそれぞれ、主語と間接目的語として実現させることができる。つまり、“TILL-構文”に見られる再帰代名詞は、このようなスウェーデン語の一般的な傾向に合致するものであると考えられる。

しかし、次の点をさらに考察しなければならない。(36), (37) においては、受取人としての再帰代名詞の具現化は随意的である。一方、“TILL-構文”ではそれが義務的であり、(38) から分かるように、再帰代名詞を伴わない場合は非文である。

(38) * Peter Karlsson sprang till en bronsmedalj,... (cf. (1))

Peter Karlsson ran to a bronsmedalj,...

これは、動詞の意味構造の違いに還元できるものと思われる。つまり、‘skaffa (get, obtain)’のような獲得の動詞はその意味構造の中に、「受取人」の項が含まれるので、その項の実現は随意的であると考えられる。一方、(38)の動詞である‘springa (run)’の意味構造の中に「受取人」の項が含まれていないのは明らかである。つまり、獲得の意味を表わすためには、動詞の意味構造の中に含まれていない「受取人」の項を必ず表出させなければならないのである。

3.2.2. 獲得の意味は何に由来するのか？—小辞 till の役割—

次に、‘till (to)’の役割を考えたい。この構文に現れる‘till’は前置詞ではなく小辞 (particle) であると考えられる。一般的に小辞には強勢が置かれるのに対し前置詞には置かれない。この構文では‘till’に強勢が置かれない場合には非文である。

(39) Peter Karlsson sprang { *till / TILL } sig en bronsmedalj. (cf. (1))

Peter Karlsson ran { to / TO } RM a bronsmedalj.

(大文字は強勢を示す。)

さて、この前置詞あるいは小辞の‘till’は語源的にはドイツ語の‘Ziel (aim)’と同じであり、もともと目標という意味の名詞が到着点を意味する前置詞へと文法化したものである。

ところで、空間的な位置の変化が所有権の変化へと拡張されることがあると主張されている (例えば Gruber 1976, Jackendoff 1972, Goldberg 1995などを参照)。例えば、Goldberg (1995: 89-97)によると、(41)のような所有の移動の表現は (40)のような物理的な移動をもとにしていると述べている。そして、その拡張の動機付けとなっているものが、「所有権の移動は物理的移動」(Transfer of Ownership as Physical Transfer) というメタファーである。

(40) John brought a book to Mary.

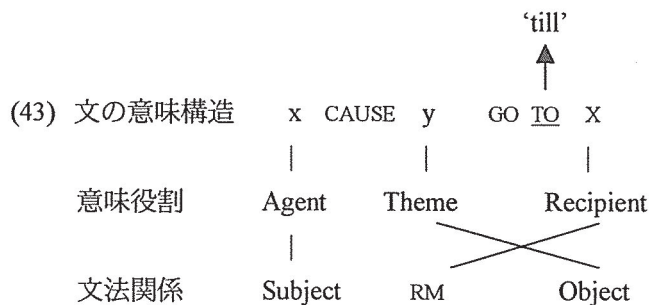
(41) John gave a book to Mary.

さて、このように物理的な移動を所有権の移動に読み替えるプロセスにおいては、位置変化における「到着点」は所有の変化における「受取人」に対応することになる。

(42) 移動	動作主	対象物	到着点
	↓	↓	↓
	所有変化	動作主	対象物
			受取人

もちろん「獲得」という出来事も「所有権の移動」であり、同様に「物理的な移

動」がもとになっていると理解することができる。そう考えると、‘till sig’ は「移動」における「到着点」を表わしているということになり、所有の変化においては、到着点としての受取人までの抽象的な経路が具現化したものとして理解することができる。(17) を分析した “TILL-構文” の意味構造は以下にみるように、所有権の移動とその到着点 ‘till sig’ が実現したものとして分析しなおすることができる。



3.2.3. ‘till sig’ の機能に関する関連構文からの傍証

‘till sig (to RM)’ が所有権の移動における到着点 (=受取人) を表わしているという分析は、次のような構文の存在からも支持されるものと考えられる。

(44) 1995 kunde Wilson springa hem guld i VM... (P97)

1995 could Wilson ran home gold i world.championship...

〈1995 年 W.は世界選手権 (の陸上競技) で金を獲得できた。〉

(45) Damlaget sopade hem EM-guld. (P97)

ladies'team swept home European.championship-gold

〈(カーリングの) 女子チームがヨーロッパ選手権で金を獲得した。〉

(46) Joakim Andersson,19, simmade hem tre silvermedaljer... (P98)

Joakim Andersson,19, swam home three silver.medals...

〈J.K.19歳が水泳で3個の銀メダルを獲得した。〉

(47) Kanotdamerna paddlade hem tre medaljer på söndagen. (P95)

canoe.women paddled home three medals on Sunday DEF

〈日曜に女子のカヌー選手たちが3個のメダルを獲得した。〉

(44)–(47) の文はそれぞれ、メダルの獲得を表現した文である。この構文においても、獲得とは無関係の動詞が使われながら、文全体としては獲得の出来事を表現しているので、“TILL-構文” とほぼ同じ意味構造をもっているものと考えられる。この構文は次の (48) に示すような統語構造をもっている。この構文を仮に、“HEM-構文” と呼ぶことにする。比較のために “TILL-構文” の統語構造も再掲

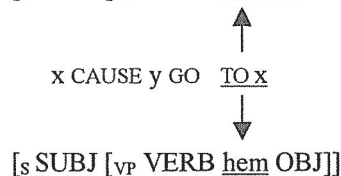
する。

(48) [s SUBJ [vp VERB hem OBJ]]

(49) [s SUBJ [vp VERB till RM OBJ]]

上記からも分かるように，“TILL-構文”と“HEM-構文”の違いは動詞と目的語の間に‘hem (home)’があるか‘till sig (to RM)’があるかである。さて，‘hem (home)’は，‘till sitt hem eller sin hemort (to his home or his place of residence)’という意味であるから‘till sig’と非常に近い意味構造をもっていることが分かる。但し，“TILL-構文”において「受取人」は「動作主」とイコールであるが，この“HEM-構文”においては，「受取人」は「動作主」を含んだ「祖国，故郷，自分の家族」となる。こう考えると，次の(48)に見るように‘till sig’は下線部の意味構造が分析的に具現化したものであるのに対し，‘hem’は下線部の意味構造が合成的に実現したものであると捉えることができる。

(50) [s SUBJ [vp VERB till RM OBJ]]



3.2.4 類型論からみた‘till sig’の位置付け

最後にこの‘till sig’という要素が類型論的観点から見た場合にどのように位置付けられるかに関してみたい。

Talmy (1991, 2000) では，自然言語が空間における移動を表す場合，「経路」²の概念を何によって具現化するかによって，大きく二つのパターンに分けられることを指摘している。ひとつは「動詞枠付け言語」(verb-framed language) であり，もう一方は「衛星枠付け言語」(satellite-framed language) である。前者には，ロマンス諸語，日本語等が含まれ，後者にはゲルマン諸語，中国語等が含まれる。もちろんスウェーデン語は後者に含まれる。³

「動詞枠付け言語」における移動表現では，移動の「経路」が動詞として実現する傾向がある。一方，「衛星枠付け言語」では「経路」が前置詞，小辞等の付随要素（これらを Talmy はまとめて satellite (衛星) と呼んでいる）によって具現化される傾向がある。次の英語 (=51)，ドイツ語 (=52)，フランス語 (=53)，スペイン語 (=54) の例を比較してみよう。（以下の例では，太字になっている単語が移動の「経路」の概念を担っている。）

(51) The boy went **out** of the yard. (Ungere & Schmid. 1996:234)

(52) Der Junge ging aus dem Hof **hinaus**.
‘The boy went from the yard **out**.’ (Ungere & Schmid. 1996:234)

(53) Le garçon **sortit** de la cour.
‘The boy **exited** from the yard.’ (Ungere & Schmid. 1996:235)

(54) El chico **salió** del patio
‘The boy **exited** from the yard.’ (Ungere & Schmid. 1996:235)

上記に対応するスウェーデン語は以下のようになり、経路概念が小辞 ‘ut’ で現されているのがわかる。

(55) Pojken gick **ut** ur gården.
boy.DEF walked out of yard.DEF

Talmy (2000) では、さらにこの「動詞枠付け」と「衛星枠付け」という概念が単に移動というイベントだけに当てはまるのではなく、「状態変化」,「時間的枠付け(アスペクト)」等のイベントも平行して扱えることを示している。われわれの議論の中で注目すべき点は、Talmy が取り上げているドイツ語の非分離接頭辞 ‘er-’ についてである。(Talmy 2000: 242). このドイツ語の非分離接頭辞 ‘er-’ は「V することで NP を手に入れる」という獲得の意味をもっている。

(56) Die Armee hat (sich) die Halbinsel erkämpft.
“The army gained the peninsula by battling”
As if “The army battled the peninsula into their possession.”
(Talmy 2000: 242)

Talmy によると、英語は移動表現においては衛星枠付け言語としての特徴を示すが、‘get’, ‘obtain’, ‘win’ 等の獲得の動詞は、獲得における対象物の移動の経路が動詞として実現してしまっているため、動詞枠付け言語における典型的な特徴を示していると述べている。一方、ドイツ語の接頭辞 ‘er-’ はおおむね ‘into [subject’s] possession’ というような意味に対応し、経路概念が(非分離)接頭辞として現れているため、衛星枠付け言語における典型的なパターンを示している。これまで見てきたスウェーデン語の “TILL-構文” と “HEM-構文” に関してしていえば、まさに ‘till sig (to RM)’, ‘hem (home)’ は獲得のイベントにおける対象物の移動の「経路」が具現化したものであり、典型的な衛星枠付け言語の特徴を示しているといえる。

4. 残された問題 —使役の意味は何に由来するのか?—

これまでの議論で、“TILL-構文” において、文を構成する要素からは予測できないと思われていた2つの意味要素—「使役」と「獲得」—のうち、「獲得」に関

しては、適切な意味構造を設定することによって、‘till sig’ がその意味を担っていることがわかった。それでは次に、「使役」に関して考えていきたい。結論から述べると、「使役」という意味要素に対応する構成要素は“TILL-構文”には存在しない。この「使役」という意味がどのように得られるかという問題に対しては、英語などを中心に様々な分析がなされているが、本稿では残念ながら扱う余裕がない。ただし、この問題が単に“TILL-構文”だけに見られる問題ではないということを確認して、本稿を締めくくりたい。次の例を見てみよう。

(57) De sparkade sönder dörren... (P98)

they kicked broken door.DEF

〈彼らはドアを蹴り壊した。〉

(58) Berger sparkade upp dörren... (BR1)

Berger kicked up door.DEF

〈B.はドアを蹴り開けた。〉

(59) Doktorn sparkade igen en av dörrarna... (BR1)

doctor.DEF kicked closed one of doors.DEF

〈その医者はドアのうちのひとつを蹴って閉めた。〉

(57)–(59) においては、主語が「ドアを蹴る」という出来事が原因となる事象 (E₁) になっている。結果事象 (E₂) はそれぞれ、(57) においては「ドアが壊れる」という出来事、(58) では「ドアが開く」という出来事、(59) では「ドアが閉まる」という出来事である。結果事象における意味要素はそれぞれ、‘sönder (broken)’, ‘upp (up)’, ‘igen (closed)’ という小辞 (particle) が担っている。⁴ さて、以上の (57) – (59) の文は、ある出来事が原因となって、別の出来事が起こるという因果関係 (E₁ CAUSE E₂) を述べている。しかし、これらの文においても「使役」(CAUSE) の意味に対応する構成要素は見当たらない。ここまで見てきたように、「使役」という意味要素がどこから来るのかという問題に対しては、(57) – (59) に挙げたような因果関係を表わす構文全体を検討することが必要であると考えられるが、これは今後の課題としたい。

注

- (1) 本稿では、他言語の研究者にも理解できるように、言語学の論文の慣習に従い、例文に（あくまで便宜的にはあるが）英語の逐語訳（グロス）を付す。例文に付されている * の記号はその表現（あるいは文）が非文法的であることを意味する。また逐語訳に使用している略号の意味は次の通りである。

RM 再帰代名詞

PASS 受動形態素

DEF （後置）定冠詞

例文の末尾に付されている略号はその出典を表わしている。例文は辞書とインターネット上のコーパスから採集した。辞書の略号は以下の通りである。

NEO (=Nationalencyklopedins ordbok)

SO (=Svenska Ord)

インターネット上のコーパスは Språkbanken (<http://spraakbanken.gu.se/>) の新聞・小説等のコンコーダンス (<http://spraakbanken.gu.se/lb/konk/>) を使用した。以下はそのコンコーダンスの略号である。

DN87 (=DN 1987)

P95 (=PRESS 95)

P96 (=PRESS 96)

P97 (=PRESS 97)

P98 (=PRESS 98)

BR1 (=BONNIERSROMANER I)

- (2) 「経路」に関する定義は田中・松本 (1997) などを参照のこと。
- (3) ‘verb-framed language’, ‘satellite-framed language’ に対する日本語の定訳はないように思われるが、ここでは坂原編 (2000) に従った。
- (4) 但し、2 重目的語構文の場合は、原因となる事象 (E₁) と結果事象 (E₂) からなるが、結果事象 (E₂) を担う意味要素は存在しない。例えば、次の文は「彼がボールを蹴る」という事象 (E₁) と「彼女がそのボールを受け取る」という事象 (E₂) から成るが、結果事象の「受け取る」という意味に対応する小辞などはない。

Han sparkade henne bollen

he kicked her ball.DEF

〈彼は彼女にボールを蹴って上げた〉

A Study on Expressions of *Obtaining* in Swedish

Takayuki Tohno

Summary

The purpose of this paper is to analyze the semantic nature of the expressions of *obtaining* in Swedish as exemplified in (1) and (2).

- (1) Peter Karlsson sprang till sig en bronsmedalj,... (P96)

Peter Karlsson ran to RM a bronzemedal,...

‘Peter Karlsson won a bronze medal in sprints.’

- (2) Bettina Oberesch red till sig guld... (P95)

Bettina Oberesch rode to RM gold.DEF

‘Bettina Oberesch won the gold in equestrian.’

The syntactic structure of this construction can be represented as follows:

- (3) [_S SUBJ [_{VP} VERB till RM OBJ]]

The verbs in this construction must be interpreted as a ‘means’ of obtaining. For example, the manner interpretation of (1) ‘Peter Karlsson got a bronze medal while running’ is impossible. The verbs of *getting* which have inherently the meaning of obtaining do not match this construction.

The basic semantics of this construction is that the agent argument causes the agent argument itself to receive the theme argument; that is:

- (4) ‘X CAUSES X to RECEIVE Y’.

Agent	Recipient	Theme

The semantics of (1) is paraphrased as ‘Peter Karlsson CAUSED himself to RECEIVE a bronze medal by running’ or ‘Peter Karlsson’s running CAUSED himself to RECEIVE a bronze medal’. The semantic elements of CAUSE and RECEIVE, however, cannot be attributed to the main verb nor to other parts of the sentence; that is, the overall interpretation of the construction in question cannot be compositionally determined.

In this paper it is argued that the particle *till* ‘to’ and the reflexive pronoun *sig* correspond to the semantic element RECEIVE. Consider the following contrast:

- (5) Han tiggde till sig pengar av passagerarna (*men fick inte något)
 he begged to RM money from passengers.DEF but received not any
 'He got money by begging of passengers, (* but he received nothing).'
- (6) Han tiggde pengar av passagerarna. (men fick inte något)
 he begged money from passengers.DEF but received not any
 'He begged money from the passengers, (but he received nothing).'

When the verb *tigga* 'beg' is used with *till sig*, the sense of receiving is implied, as illustrated in (5). On the other hand, when the same verb appears without *till sig*, the semantic element of RECEIVE is not necessarily coded, as shown in (6).

The role of *till sig* in this construction becomes clear if the construction is understood as coding a metaphorical change of transfer. The well-known metaphor "Transfer of Ownership as Physical Transfer" motivates the mapping from Physical Transfer 'Y GOES TO X' to Transfer of Ownership 'X RECEIVES Y'. *Till sig* can be understood as a syntactic realization of 'TO X' in the semantic structure of 'Y GOES TO X'. And the revised semantic structure of the expressions of *obtaining* in Swedish can be represented as follows:

- (7) X CAUSES Y to GO TO X
- | | | |
|-------|-------|-----------|
| | | |
| Agent | Theme | Recipient |

The semantic component of CAUSE, which cannot be predicted from the constituent parts of this construction, is left unsolved in this paper.

参 考 文 献

- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions : A Construction Grammar approach to argument structure*. Chicago, London: The University of Chicago Press.
- Gruber, Jeffery S. 1976. *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. New York: North-Holland.
- Jackendoff, Ray S. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray S. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 松本曜. 1997. 「空間移動の表現とその拡張」. 田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』. 東京：研究社出版
- 松本曜. 2002. 「使役移動構文における意味制約」. 西村義樹編『シリーズ言語科学一2, 認知言語学 I : 事象構造』, 187-211. 東京：東京大学出版会
- 坂原茂. 2000. 『認知言語学の発展』. 東京：ひつじ書房
- 清水育男. 2000. 「スウェーデン語助動詞 *få* の成立について－義務的用法を中心に」. *IDUN* Vol.14, 123-149.
- Talmy, Leonard. 1991. "Path to realization: A typology of event conflation", *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 480-519., Berkeley: Berkeley Linguistic Society.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Ungere, Friedrich. & Hans-Jörg Schmid. 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman.

辞 書

- Bokförlaget Bra Böcker AB och Språkdata (utg). 1997. *Nationalencyklopedins ordbok*. Höganäs: Bokförlaget Bra Böcker AB. (CD-ROM)
- Skolverket (utg). 1992 (Andra upplagan). *Svenska ord – med uttal och förklaringar*. Stockholm: Norstedts.

論文 4

「着脱動詞の対照研究

—日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語の比較—」

着脱動詞の対照研究

日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語の比較

當 野 能 之*・呂 仁 梅**

キーワード: 着脱動詞, 一次的衣類・二次的衣類, 動詞枠付け言語, 衛星枠付け言語

要 旨

本稿は日本語教育においても問題となる, 着脱の動詞に関する類型論的対照研究である。本稿では日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語を対象とし, 以下の2つの問題を取り上げる。

- (1) 日本語・中国語では衣類により異なった動詞が用いられるのに対し, マラーティー語・英語・スウェーデン語ではすべての衣類に関して同じ動詞が用いられる。
- (2) 日本語・マラーティー語では動詞のみが用いられるのに対し, 中国語・英語・スウェーデン語では, 動詞以外の要素(小辞 (particle) あるいはそれに相当するもの)が付随する。

以上のような, 言語間にみられる相違点と共通点は, 単なる偶然の一致ではなく, 次の表に纏められているように, 体系的なものであるということがわかった。

	動詞枠付け言語	衛星枠付け言語
一次的・二次的 衣類の区別あり	日本語 (着点による語彙化)	中国語
一次的・二次的 衣類の区別なし	マラーティー語	英語 スウェーデン語

- (A) 日本語と中国語では, 衣類を我々の生活にとって必要な「一次的衣類」と, 「二次的衣類」とに分け, それぞれにおいて動詞の使い分けをする。日本語ではこのような区別に加えて, 一次的な衣類に使われる動詞において, 衣服をどの「身体部分」に着けるかで更なる区別を行っている。一方, 英語・スウェーデン語・マラーティー語ではそのような区別に関心である。
- (B) 移動の表現において提案されている「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」という言語類型別の区別が, 着脱の表現においても反映し, 動詞枠付け言語である日本語とマラー

* TOHNO Takayuki: 神戸大学大学院文化学研究科。

** LU Renmei: 神戸大学大学院文化学研究科。

ティー語は動詞のみを使用する(例えば「着る」)。一方、衛星枠付け言語である英語・スウェーデン語・中国語では動詞以外の要素が必要となる(例えば put on)。

1. はじめに

「着る」、「かぶる」、「履く」、「着ける」、「脱ぐ」、「はずす」等、日本語には衣服の着脱に関する動詞が豊富に存在する。一方英語に目を向けると、‘wear’, ‘put on’, ‘take off’ 等、着脱に関する動詞はそれほど多くはない。このことに関して、金田一(1988: 214)は、「これは日本人が衣類に異様な関心をもっているのを表しているかもしれない」と述べている。英語の一単語が日本語で多数の単語に対応することはよくあることである。例えば英語の ‘rice’ という単語が日本語で「いね」、「こめ」、「めし」、「ご飯」等、訳し分ける必要があることはよく知られている。このような例は、文化的な差が語彙化に反映した例であり、日本では米が主食で、英語圏ではそうではないことが、大きくかかわっていることは明らかであろう¹。しかし、着脱の動詞が日本語に多いことが、金田一の言うように、文化的なものの反映によるのかどうかは、‘rice’ の例のように簡単に決着がつくものではないと思われるので、本稿ではそのような問題には立ち入らない。それが文化的なものであるにせよ、そうでないにせよ、二言語間の単語の対応に大きなずれがある場合、学習に際して困難が生じる。実際、日本語における着脱の動詞は誤用の多い語彙であるという報告がある(彭飛(1990)等を参照)。着脱の動詞に関しては、すでに影山(1980)、McCawley(1978)等の優れた研究があるが、主に日本語と英語の比較にとどまっている。本稿では言語類型論の立場から、日本語、中国語、英語、スウェーデン語、マラーティー語²を取り上げ、比較・対照することで、言語間の類似点と相違点を明らかにし、表層上の類似点や相違点がどこからくるのか明らかにしたい。

2. 問題の所在

次の表1・2では、「シャツ」、「ズボン」、「帽子」、そして「時計」の4つの着衣を取り上げ、それぞれの言語がそれぞれの衣類を「着脱」する際にどのような動詞を用いるかを示してある。表より読み取ることでできる違いは主に以下の二点である。

¹ rice の例とちょうど逆のパターン、つまり日本語の一単語が英語で多くの単語に対応する例ももちろんある。日本語では「大麦、小麦、烏麦、裸麦」等、前部要素を変えることで麦の種類を表すのに対して、英語では ‘barley’, ‘wheat’, ‘oats’, ‘rye’ とそれぞれ独立した語が存在する。これも文化的なものの反映であると考えられる。

² マラーティー語はインド・ヨーロッパ語族、インド・アーリア系言語に属し、インド西部のマハーラシュトラ州の公用語である。基本語順は SOV。いわゆる能格言語であるが、能格型格表示と対格型格表示が並存する分裂格表示(split case marking)という現象を示す言語である。

表 1 着衣の動詞

	シャツ	ズボン	帽子	時計
日本語	着る	履く	かぶる	する・つける
中国語	穿上	穿上	戴上	戴上
マラーティー語	ghaalNe 'put.in'	ghaalNe	ghaalNe	ghaalNe
英語	put on	put on	put on	put on
スウェーデン語	sätta på 'put on'	sätta på	sätta på	sätta på

表 2 脱衣の動詞

	シャツ	ズボン	帽子	時計
日本語	脱ぐ	脱ぐ	脱ぐ・とる	とる・はずす
中国語	脱下	脱下	摘下	摘下
マラーティー語	kaaDhNe 'take.out'	kaaDhNe	kaaDhNe	kaaDhNe
英語	take off	take off	take off	take off
スウェーデン語	ta av 'take off'	ta av	ta av	ta av

(1) 日本語・中国語では衣類により異なった動詞が用いられるのに対し、マラーティー語・英語・スウェーデン語ではすべての衣類に関して同じ動詞が用いられている。

(2) 日本語・マラーティー語では動詞のみが用いられるのに対し、中国語・英語・スウェーデン語では、動詞以外の要素(小辞 (particle) あるいはそれに相当するもの——中国語(上 / 下), 英語 (on / off), スウェーデン語 (på / av)——)が付随する。

本稿では主に、以上の2点に論点を絞り、議論を進めていくことにする³。(1), (2)に見られ

³ 本稿では「着る」と「着ている」というようなアスペクトの対立の問題は取り上げず、もっぱら前者のみを対象とする。これはアスペクト論全体の中で論じられるべきものであり、本稿の範囲を超えているからである。また、「自分が着る場合」と「他人に着せる場合」の違いに関しても、今回の考察では前者のみを対象とする。これは、他者に服を着せる場合には、いわゆる「直接使役」と「間接使役」の問題が関わることとなり、やはりこれも使役一般に関する議論の中で論じられるべき問題であると考えからである。但し、参考までにそれぞれの言語のデータを以下に載せておく。それぞれの言語の例文は①の日本語の例文に対応している。また、それぞれbが「直接使役」の例であり、cが「間接使役」の例である。使役一般に関しては Shibatani (1976), Shibatani & Pardeshi (2002) を参照のこと。

① a. 息子がシャツを着た。[日本語]
b. 母親が息子にシャツを着せた。
c. 母親が息子にシャツを着させた。
② a. 儿子 穿 上 了 衬衫。[中国語]
son put up PF shirt
b. 母親 給 儿子 穿 上 了 衬衫。
mother to son put up PF shirt

る言語間の類似点と相違点は一見すると偶然のもののように見える。例えば、(1)では古典的類型論で言うところの膠着語である日本語と孤立語の中国語が同じ特徴を示している。一方、(2)に目を向けると、日本語はマラーティー語と類似していて、中国語は英語・スウェーデン語と同じ特徴を示している。もちろん、語族による系統的分類がこれらに適用できないことも明らかである。本稿では、(1)、(2)にみられるような言語間の差が偶然の一致ではなく、体系的なものであるということを解き明かしていく。

3. 動詞のヴァリエーション

まずは(1)で提起した動詞のヴァリエーションに関する問題から考えていきたい。以下では、始めに、着脱の動詞に関する意味構造を簡単に考えた上で、議論を進めていく。

3-1. 着脱動詞の意味構造

ごく簡単に考えると、着脱動詞の意味構造は次のように仮定することができる。

(3) $x \text{ causes } y \text{ to move to } z$, where $x = \text{agent}$, $y = \text{clothes}$, $z = \text{body (part)}$

上の意味構造は「動作主(=x)が衣服(=y)を体(あるいは体の一部分)(=z)に移動させる」ということを概ね意味している。主語が主語自身に衣服を移動した場合(つまり主語が主語以外の誰かに服を着せるのではなく、自分で服を着る場合)は $x = z$ ということになる。また、以上は「着る」「着せる」に対応する意味構造であったが、「脱ぐ」「脱がせる」に対応する意味構造は以下のように仮定できる。(3)との違いは体(=z)が着点ではなく、起点である点にある。

(4) $x \text{ causes } y \text{ to move from } z$, where $x = \text{agent}$, $y = \text{clothes}$, $z = \text{body (part)}$

(着脱動詞の意味構造に関しては、さらに詳細な検討が加えられるべきであるが、それは本稿の

-
- c. 母親 让 儿子 穿 上 了 衬衫.
mother made son put up PF shirt
- ③ a. mulaa-ne sharTa ghaat-l-aa [マラーティー語]
boy-ERG shirt.M put-PF-M
b. aai-ne mulaa-laa sharTa ghaat-l-aa
mother-ERG boy-ACC shirt.M put-PF-M
c. aai-ne mulaa-laa sharTa ghaal-aaylaa laaw-l-aa
mother-ERG boy-ACC shirt-M put-PTCPL make-PF-M
- ④ a. The son put on his shirt. [英語]
b. ??Mother put the shirt on her son.
c. Mother made her son to put on his shirt.
- ⑤ a. Henes son satte på sig skjortan [スウェーデン語]
Her son put on REFL shirt.DEF
b. Modern satte på sin son skjortan
mother.DEF put on her son shirt.DEF
c. Modern fick sin son att sätta på sig skjortan.
mother.DEF made her son to put on REFL shirt.DEF

趣旨を超えるものであるので、上記のごく素朴なものにとどめておく。着脱動詞の詳細な意味構造に関しては、影山(1980)、Jackendoff(1990)、松本(2000)等を参照されたい。)

以下では、(3)、(4)の概念構造内の変項(x, y, z)がどのように指定されているかという点から、語彙化の問題を考えていきたい。ただし、xにあたるものは普通、動作主である人間以外には考えられないので、事実上、移動物である衣服(=y)とその着点である身体の部位(=z)が問題になる。議論の関係上、まず先に着点(=z)から見ていく。

3-2. 着点(=z)の指定 —日本語—

まずは、日本語の「着る」、「履く」そして「かぶる」から見ていこう。これらの動詞は先行研究でも述べられているように、①衣類を目的語として取り、②その着点として特定の身体部位が指定されている動詞である。

(4) a. 「着る」…《(「頭部」を除く)上半身》

例) 服, セーター, シャツ, コート, ワンピース, 制服, スーツ, 水着

b. 「履く」…《下半身》

例) 靴, 靴下, 下駄, サンダル, ズボン, スカート, パンツ, 足袋, サンダル

c. 「かぶる」…《頭部》

例) 帽子, スカーフ, ヘルメット, 覆面, 兜

日本語の着衣動詞が他の言語に比べて際立っているのは、衣服を体のどの部分に移動させるかという点で区別するところにある。「着る」は頭部を除く上半身⁴、「履く」は下半身、「かぶる」は頭部をそれぞれ着点として含んでいる⁵。一方、脱衣の動詞では体のどの部分から衣服を取るかということによる違いはなくなり、動詞「脱ぐ」1語で済まされる。

(5) 「脱ぐ」…《身体部位の指定無し》

例) 服, セーター, シャツ, 制服, スーツ, 靴, 靴下, 下駄, サンダル, ズボン, スカート, パンツ, 帽子, スカーフ, ヘルメット

脱衣の動詞では、着衣の動詞に見られる身体部位の指定による区別が中和されてしまう。これには次のようなことが関係しているものと思われる。衣服は着用している時は服としての機能を果たしているのであるが、それを脱いでしまった時にはその機能は果たしていない。つまり、脱

⁴ 「着る」という動詞が頭部を除く上半身を着点として含んでいるという記述は日本語教育では有効であると考えられるが、言語学的には考察の余地がある。影山(1980)は、スーツのような上半身にも下半身にも関わる衣類を取り上げてこの問題を考えている。例えば、スーツのズボンをはいている時に、「*スーツをはく」とはいえないことから、「着る」は必ずしも胴体に限定されているものではないとしている。詳しくは、影山(1980)を参照。

⁵ ただし、「かぶる」という動詞に関しては、「水をかぶる」、「波をかぶる」、「埃をかぶる」等の表現が存在することを考えると、必ずしも着衣を目的語に取るわけではなく、着衣専用の動詞であるかどうかに関しては再考の余地がある。

衣の動詞において、身体部位の指定が中和してしまうのは、このような着用している時と脱いだ時の服の機能の違いを反映している可能性があると考えられる。

3-3. 移動物 (= y) の指定 —日本語・中国語—

ここまでで見てきたように、日本語の着衣動詞は体のどの部分に衣服を移動させるかという点で語彙化されているということがわかった。しかし、表 1・2 にもあるように、「時計」は上半身に身につけるとしても「着る」という動詞を使うことができないし、「脱ぐ」という動詞も使うことができない。ここで次に考えたいのは、衣類を一律に見るのかそれとも分けて考えるのかという観点である。影山 (1980) は「一次的衣類」と「二次的衣類」という区別を提案している⁶。例えばシャツやズボン、スカート、そして靴等はわれわれの生活に欠かせない「一次的な」衣類であると考えられるが、例えばネクタイ、時計、ベルト等は「二次的な」衣類であると考えられる。何が一次的で何が二次的な衣類かということに関する定義は難しい問題であり、まさに文化によって異ってくるものであると思われるので、ここでは厳密な定義はしない。日本語は一次的衣類に関しては 3-1. で見たように、体のどの部分に移動するかによって区別される着脱専用の語彙があるが、二次的な衣類に関しては、着脱の動詞以外のものが用いられる。多くは、(6a)–(6e) に見られるように、「つける」・「かける」・「はずす」・「とる」等の対象物の物理的な移動を引き起こすことを意味する動詞、いわゆる「使役移動動詞」かそれに類するものが使われる。さらに、二次的な衣類一般に使うことができる動詞として (6f) の「する」がある。

(6) 二次的衣類に使われる動詞

- a. つける / はずす・とる 腕時計、ブローチ、イヤリング、ペンダント、ブレッジャー、マスク、イヤホン
- b. かける / はずす・とる 眼鏡、たすき、エプロン
- c. しめる / はずす・とる ネクタイ、帯、ベルト、はちまき
- d. はめる / はずす・とる 手袋、指輪、ブレスレット
- e. 巻く / はずす・とる マフラー、スカーフ
- f. する 腕時計、ブローチ、眼鏡、ネクタイ、手袋、マフラー...

これらの「使役移動動詞」や動詞「する」は一次的な衣類に使われる「着る」、「履く」、「かぶる」、「脱ぐ」とは次のような点で異なる(影山 (1980: 92))。まず、「着る・履く・かぶる・脱ぐ」の目的語が衣類に限られるのに対して、二次的衣類に使われる動詞は目的語が衣類には限られない(「釣針にえさをつける」)。また、「着る・履く・かぶる・脱ぐ」においては着点あるいは起点が身体に限定されるが、二次的衣類に使われる動詞は着点及び起点は身体には限定されない

⁶ 影山 (1980) では、「主要衣類」と「二次的衣類」という用語を使っているが、本稿では便宜的に「一次的衣類」と「二次的衣類」という用語を用いる。

(「壁に額をかける」, 「壁から額をはずす」). つまり, 一次的な衣類に使われる「着る」, 「履く」, 「かぶる」, 「脱ぐ」という動詞が着脱専用の動詞であるのに対して, 二次的な衣類に用いられる動詞は, 使役移動動詞や動詞「する」を転用して使っているということなる. さて, 衣類が一次的であるか二次的であるかという区別は日本語だけに必要な概念ではない. 次から見る中国語の場合は, まさに一次的な衣類かあるいは二次的な衣類かで, 動詞の選択が決まる.

(7) 「穿」/「脱」...《一次的衣類》

例) 外套(コート), 衬衫(シャツ), 西服(スーツ), 连衣裙(ワンピース), 裤子(ズボン), 裙子(スカート), 鞋(靴), # 子(靴下), 短裤(短パン), 比基尼(ビキニ)

(8) 「戴」/「摘」...《二次的衣類》

例) 帽子(帽子), 口罩(マスク), 防毒面具(防毒マスク), 眼鏡(メガネ), 手表(腕時計), 耳机(イヤホン), 围裙(エプロン), 耳环(イヤリング), 胸针(ブローチ), 手镯(ブレスレット), 项链(ネックレス)

一次的衣類と二次的衣類の分類はおおむね両言語で重なるものと思われるが, 例えば「帽子」は日本語では一次的衣類として扱われ, 「かぶる」が用いられるのに対し, 中国語では二次的なものとしてとらえられ, 「戴」が使われる. しかし, 日本語と中国語の最も大きな違いは, 次の点である. 日本語は一次的な衣類に対して着脱専用の動詞を使い, 二次的な着衣に関しては主に「つける」, 「かける」, 「はずす」, 「とる」等の使役移動動詞や「する」などの動詞を「転用」して用いる. 一方, 中国語ではもう少し, 複雑である. まず着衣の動詞においては, 一次的着衣に使われる「穿」という動詞は, 「穴をあける, (穴に)通す」という意味が原義であり, 着衣専用の動詞ではない. 一方, 二次的な着衣に使われる「戴」は着衣専用の動詞であると考えられる. 次に脱衣の動詞に目を向けると, どちらも脱衣専用の動詞ではない. 「脱」は「(髪の毛など)が抜ける, 逃れる」という意味を持ち, 「摘」は「(果物, お茶の芽等)を摘み取る」という意味が原義である. ところで, 衣類を一次的なものと二次的なものというように区別する言語において, 日本語のように一次的な着衣に専用の動詞を, 二次的な着衣に転用した動詞を使うという語彙化のパターン(表3・B)は非常に自然であると考えられる. また, 中国語の脱衣の動詞のようにどちらにも転用した動詞を用いる言語(表3・C)も自然な語彙化のパターンであると考えられる. 他にも表3・Aのように一次的・二次的どちらの衣類に対しても, 専用の動詞を使うという言語があったとしても不自然ではない. しかし, 中国語の着衣動詞のように, 二次的な着衣に対して専用の動詞が使われ, 一次的な着衣に転用した動詞が使われるというパターンは不自然であると考えられる. なぜこのような語彙化のパターンを示すのかは今のところ不明であり, 今後の課題としたい.

表3 一次的・二次的衣類と着衣専用動詞の分布

	A (?)	B (日本語)	C (中国語・脱衣動詞)	D (中国語・着衣動詞)
一次的衣類	着脱専用動詞	着脱専用動詞	転用	転用
二次的衣類	着脱専用動詞	転用	転用	着脱専用動詞

3-4. 英語・スウェーデン語・マラーティー語

英語・スウェーデン語・マラーティー語では、今まで見てきたような、特定の身体部位に関する指定だとか、あるいは、一次的な衣類かそれとも二次的な衣類かといった区別は関係なく、どのような衣類に対しても同じ動詞が使われる。以下に例を示す。(以下、(9)–(12)においては a が英語、b がスウェーデン語、c がマラーティー語である。スウェーデン語とマラーティー語の衣類の例は英語の例に対応している。)

(9) 一次的衣類・上半身

- | | |
|------------------------|--|
| a. put on / take off | a shirt / a dress / a coat / a sweater |
| b. sätta på / ta av | en skjorta / kläder / en rock / en tröja |
| c. ghaal-Ne / kaaDh-Ne | sadraa / Dres / koT / sweTar |

(10) 一次的衣類・下半身

- | | |
|------------------------|------------------------------------|
| a. put on / take off | trousers / socks / a skirt / shoes |
| b. sätta på / ta av | byxor / strumpor / en kjol / skor |
| c. ghaal-Ne / kaaDh-Ne | pænT / modze / skarTa / buT |

(11) 一次的衣類・頭部

- | | |
|------------------------|--------------------|
| a. put on / take off | a hat / a helmet |
| b. sätta på / ta av | en hatt / en hjälm |
| c. ghaal-Ne / kaaDh-Ne | Topi / helmeT |

(12) 二次的衣類

- | | |
|------------------------|--|
| a. put on / take off | a wristwatch / glasses / a necklace |
| b. sätta på / ta av | en armbandsur / glasögon / en halsband |
| c. ghaal-Ne / kaaDh-Ne | ghaDyaaL / cashmaa / nekles |

ただし、英語では(13)にみられるように、着衣から他の物への拡張が見られる。拡張(extension)とは、あるカテゴリーを構成するものと類似性は持っているものの、相違点も存在するようなものに対して、その相違点を捨象し同じカテゴリーとして認識すること、つまりカテゴリーを広げていくことである。例えば以下の例では、(13a)のように化粧関係、また(13b)に見られる表情に関するもの、さらには(13c)のように体重のような着衣とは異なるカテゴリーのものが

着衣の動詞と同じ構文に現われている。この拡張を可能にしているのは、衣類・化粧・表情・体重の間にある「身体に付着しているもの」という共通性であると考えられる。

- (13) a. put on a makeup / a lipstick / eyeliner
 b. put on a fake smile / a serious look
 c. put on fat / weight

ここで、3. のまとめをしよう。(1)に見られた言語間の相違は次のように説明することができる。まず、日本語と中国語は移動物(=y)としての衣服が一次的か二次的かという点で動詞の使い分けをする。日本語ではそのような区別に加えて、更に一次的な衣類に使われる動詞において、衣服が体のどの部分に移動するかという着点(=z)が語彙化されている。一方、英語、スウェーデン語、そしてマラーティー語は日本語や中国語がしているような区別を行っていないと考えられる。

4. 動詞以外の付属要素の有無

次に(2)で取り上げた、動詞以外の付属要素の有無について考察を加えていく。付属要素の有無に関する違いは、単に着脱の動詞に固有の問題というよりはむしろ、言語の類型に関する違いに由来するということをみていく。

4-1. 「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」

以下では、Talmy (1985, 1991, 2000) で提案されている「動詞枠付け言語」(verb-framed language)と「衛星枠付け言語」(satellite-framed language)という類型論的分類を概観し、それが着脱動詞における動詞以外の付属要素の有無に関して説明力をもつことを示す。Talmy は、自然言語が空間における移動を表す場合、「経路」の概念を何によって具現化するかによって、大きく2つのパターンに分けられることを指摘している。1つは「動詞枠付け言語」であり、もう一方は「衛星枠付け言語」である。前者には、ロマンス諸語、日本語等が含まれ、後者にはゲルマン諸語、中国語等が含まれる。「動詞枠付け言語」における移動表現では、「経路」が(主)動詞として実現する。一方、「衛星枠付け言語」では「経路」が前置詞、小辞等の付随要素(Talmy はこれらをまとめて satellite (衛星)と呼んでいる)によって具現化される⁷。今回対象としている言語では、英語・スウェーデン語そして中国語が衛星枠付け言語としての特徴を有し、日本語・マラーティー語が動詞枠付け言語であると考えられる。それぞれの言語の移動表現を見てみよう。

⁷ 「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」という区別はもともと移動表現の分析に用いられたものであったが、最近の Talmy の論文 (Talmy 1991, 2000) ではそれが、移動以外の event においても有効であることが述べられている。

(14) 衛星枠付け言語

- a. The boy ran into the room. [英語]⁸
 b. Pojken sprang in i rummet. [スウェーデン語]
 boy.DEF ran in to rum.DEF
 c. 少年 跑 进 了 房間. [中国語]
 boy run into PF room

(15) 動詞枠付け言語

- a. その少年は走って部屋に入った. [日本語]
 b. to mulgaa kholit-t dhaaw-at ge-l-aa. [マラーティー語]
 that boy.M room.F-LOC run-PTCPL go-PF-M

上の例を見てもわかるように、英語、スウェーデン語、中国語では「経路」がそれぞれ、‘into’, ‘in (in)’, ‘序 (into)’ のように主動詞以外の衛星として具現化する。よって、これらの言語は「衛星枠付け言語」であるということになる。一方、日本語とマラーティー語では、「経路」はそれぞれ「入る」と ‘ge-Ne (go)’ というように主動詞として実現する。つまり、「動詞枠付け言語」であるということになる⁹。

4-2. 着脱動詞と「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」

さて、3-1.の着脱動詞の意味構造のところでも見たように、着脱という行為は「衣服」を対象物とし、それを着点である「体(の一部)」に移動する使役移動の表現であると分析することができる。つまり、これは4-1.で見た移動表現の一部であると仮定することができる。その証拠として、日本語では、二次的な衣服に関して「つける」、「かける」、「とる」、「はずす」等の使役移動の動詞を着脱の表現に使うことができる。そこで着脱の表現に関しても、Talmy の「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」という提案が有効であることは容易に想像がつく。まずは、移動の表現に関して衛星枠付け言語であった英語・スウェーデン語・中国語の例を見てみよう。

- (16) a. The boy put on his shirt. [英語]¹⁰

⁸ 英語は基本的に「衛星枠付け言語」であるが、‘enter’, ‘exit’, ‘ascend’, ‘descend’, ‘pass’, ‘cross’ などのように、経路が包入された動詞も多数存在する。(ただし、ほとんどがフランス語からの借用。)つまり、英語は基本的に「衛星枠付け言語」ではあるが、「動詞枠付け言語」としての特徴も持つ。

⁹ 今回取り上げた言語の中で、ゲルマン系言語(英語・スウェーデン語)と中国語が「衛星枠付け言語」であり、日本語が「動詞枠付け言語」であるとする分析に関しては、Talmy (1991, 2000) を参照のこと。

¹⁰ ただし、動詞 ‘dress’ では衛星としての小辞は具現化しない。(ちなみに ‘dress’ は動詞枠付け言語であるフランス語からの借用語。)また、着ている状態を表すとき、wear においては小辞は現われないが、have が着衣動詞として使われる際は、現われる。

a. She was wearing a beautiful kimono.

b. She had a beautiful kimono *on*.

⁶ において、英語の移動表現が基本的に「衛星枠付け言語」的特徴を有しつつも、「動詞枠付け言語」的なものも許容することを見たが、同じことが着脱の表現に関しても当てはまる。

- b. The boy took off his shirt.
- (17) a. Pojken satte på sig skjortan. [スウェーデン語]
 boy.DEF put on REFL shirt.DEF
- b. Pojken tog av sig skjortan.
 boy.DEF took off REFL shirt.DEF
- (18) a. 少年 穿 上 了 衬衫 [中国語]¹¹
 boy put up PF shirt
- b. 少年 脱 下 了 衬衫
 boy take down PF shirt

移動表現で衛星枠付け言語の特徴を示す英語・スウェーデン語・中国語は、着脱の表現においても衛星が現れ、それぞれ ‘on / off’, ‘på / av’, ‘上 / 下’¹² といったように、着衣と脱衣でそれぞれ違った衛星が用いられている。次に移動表現で動詞枠付け言語の特徴を示した日本語・マラーティー語の例を見てみよう。

- (19) a. 少年はシャツを 着た [日本語]
 b. 少年はシャツを 脱いだ
- (20) a. tyaa mulaa-ne sharTa ghaat-l-aa [マラーティー語]
 that boy-ERG shirt.M put-PF-M
- b. tyaa mulaa-ne sharTa kaaDh-l-aa
 that boy-ERG shirt.M take-PF-M

移動表現で動詞枠付け言語とみとめられた日本語とマラーティー語は、着脱の表現においても「履く / 脱ぐ」, ‘ghaal-Ne / kaaDh-Ne’ のように経路が動詞として実現している。さらに、「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」の例を追加しよう。スペイン語は典型的な動詞枠付け言語として度々取り上げられているが、着脱の動詞に関しても衛星は現われずに動詞枠付け言語的特徴を示しているようである。

- (21) a. Me pongo el abrigo. [スペイン語]
 REFL.1.SG. put the overcoat

¹¹ ただし、動作が進行中である場合(aの「在」を用いた文)や、結果状態を表す場合(bの「着」を用いた文)は、以下に見るように、衛星(結果補語)は現れない。

a. 少年 在 穿 衬衫. [進行]
 boy PROG put shirt
 「少年はシャツを着ている」

b. 少年 穿 着 衬衫. [結果状態]
 boy put RES shirt
 「少年はシャツを着ている」

¹² ‘进 (in)’, ‘上 / 下’ などの衛星は中国語文法では、結果補語あるいは方向補語と呼ばれている。(詳しくは中川 1996: 122–131 参照.)

「私はオーバーを着る」 (興津 1981:162 逐語訳は本稿筆者による)

- b. Me quito los zapatos.
REFL.1.SG. take the shoes

「私は靴を脱ぐ」 (興津 1981:162 逐語訳は本稿筆者による)

また、典型的な衛星枠付け言語であるといわれるドイツ語に関しても、着脱表現を見てみると、予測どおり衛星 ‘an / aus’ が現われる。

- (22) a. Die Mutter zieht sich die Schuhe an. [ドイツ語]
the mother draw REFL the shoes on
「母親は靴を履く」

(Engel & Schumacher 1978: 127 逐語訳と訳は本稿筆者による)

- b. Die Mutter zieht dem Kind den Pullover aus.
the mother draw the child the pullover out
「母親は子供のプルオーバーを脱がしてやる」

(Engel & Schumacher 1978: 135 逐語訳と訳は本稿筆者による)

さて、ここまで例を見てきたように、移動表現と着脱の表現には明らかな平行性が見られた。つまり、移動表現において「経路」が「衛星」として実現する「衛星枠付け言語」においては、着脱の表現においても「衛星」が現れる。また、「経路」が「動詞」として具現化する「動詞枠付け言語」では、着脱の表現においても「動詞以外」の「衛星」的要素が現れることはない。したがって、(2) で取り上げた、動詞以外の要素の有無に関する問題は、「衛星枠付け言語」か「動詞枠付け言語」かという類型論的な言語間の違いが着脱の表現に反映した結果であると言える。

さて、「衛星枠付け」か「動詞枠付け」かといった違いは、「経路」の具現化以外にも重要な違いを引き起こしていると考えられる。以下では典型的な「動詞枠付け言語」である日本語と典型的な「衛星枠付け言語」であるスウェーデン語を比較することで、この点に関してみていくことにする。一般に、衛星枠付け言語では、主動詞以外の部分、つまり「衛星」が文の「枠付け」となるので、主動詞の部分に着脱とは関係のない動詞を用いることができる。例えば、(23) では動詞に靴を脱ぐための「手段」を表すものがきている。一方、動詞枠付け言語では、そのような手段は主動詞部分ではなく、付加的に表現される。

- (23) Han {snörde / sparkade / trampade} av sig skorna.
he {laced / kicked / stepped} off REFL shoes.DEF

- (24) 彼は {ひもといて / 蹴って / 踏んで} 靴をぬいだ。

このように、スウェーデン語においては着脱の「手段」を主動詞として具現化することは、かなり生産的である。次のような一見すると特殊な表現も、動詞部分が手段を表わしているものと

考えられる。

- (25) Han sprang av sig överflödiga kilon.
 he ran off REFL surplus kilos
 「彼は走って余計な体重を落とした」

不可分離所有の関係が体の部分から衣服へと拡張することはよく報告されている。(25)では「衣服⇒体重」,「脱ぐこと⇒減らすこと」という対応関係が成立し,主動詞として体重を減らす「手段」である‘springa’「走る」という動詞が来ることで,(25)の文が解釈可能になっていると考えられる。

また,主動詞がほとんど元の意味を失っているようなものもある。例えば次の例では‘kasta」という動詞はすでに「投げる」というもとの意味をほとんど失っている。これも文の「粋付け」が「衛星」にあり,衛星を中心として構文が形成されているため,動詞部分にほとんど意味を持たないものを用いることができるものと考えられる。

- (26) Han kastade {på / av} sig skjortan.
 he threw {on / off} REFL shirt.DEF
 「彼は急いでシャツを着た / 脱いだ」

さらに,次に見るように命令文では動詞を用いずに衛星だけで文を形成することもできる。これも衛星が中心となっていることを示しているものと思われる。

- (27) Av med skorna!
 off with shoes.DEF
 「靴を脱ぎなさい」
 (28) På med kläderna kvickt!
 on with clothes.DEF quickly
 「急いで服を着なさい」

以上ここまで見てきたように,衛星粋付け言語においては,「経路」が衛星として具現化し,衛星が文の「粋付け」として働く。したがって,(23),(25)で見たように「着脱」をもともと意味しない動詞が主動詞として現われる。また,衛星を中心として構文を形成し,それ自体が意味を持つので(26)のように,ほとんど意味的な要素が削ぎ落とされた動詞が主動詞の位置を埋めることができたり,(27),(28)のようにそもそも動詞さえ用いられないような構文も可能になるものと考えられる。

5. ま と め

着脱の動詞に関する言語間にみられる相違点と共通点は,単なる偶然の一致ではなく,以下に

表 4 着脱動詞に関するまとめ

	動詞枠付け言語	衛星枠付け言語
一次的・二次的 衣類の区別あり	日本語 (着点による語彙化)	中国語
一次的・二次的 衣類の区別なし	マラーティー語	英語 スウェーデン語

纏められているように、体系的なものであるということがわかった。

- (29) 日本語と中国語では、衣類を我々の生活にとって必要な「一次的衣類」と、「二次的衣類」とに分け、それぞれにおいて動詞の使い分けをする。日本語ではこのような区別に加えて、一次的な衣類に使われる動詞において、衣服をどの「身体部分」に着けるかで更なる区別を行っている。一方、英語・スウェーデン語・マラーティー語ではそのような区別に無関心である。
- (30) 移動の表現において提案されている「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」という言語類型的区別が、着脱の表現においても反映し、動詞枠付け言語である日本語とマラーティー語は動詞のみを使用する(例えば「着る」)。一方、衛星枠付け言語である英語・スウェーデン語・中国語では動詞以外の要素が必要となる(例えば put on)。

略号一覧

DEF: DEFINITE, ERG: ERGATIVE CASE, F: FEMININ, M: MASCULIN, PF: PERFECT, PROG: PROGRESSIVE, REFL: REFLEXIVE PRONOUN, RES: RESULTATIVE, SG: SINGULAR.

謝 辞

本研究は、執筆者のうち當野が受けた「2002 年度スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団助成金」による研究成果が含まれている。また、英語とスウェーデン語のデータは當野、中国語のデータは呂が検討したが、マラーティー語のデータに関しては Prashant Pardeshi さんにご協力いただいた。Prashant さんにはマラーティー語のインフォーマントとしてだけでなく、議論の過程において常に様々な助言を戴いた。また、神戸大学大学院の真野美穂さんと澤田浩子さんには、草稿を読んでいただき、貴重なコメントを頂いた。この場を借りて感謝の意を表したい。もちろん、本稿における誤り等は筆者がすべて負うものである。

参 考 文 献

- Engel, Ulrich, and Helmut Schumacher. 1978. *Kleines Valenzlexikon deutscher Verben*. Tübingen: TBL Verlag Gunter Narr.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- McCawley, James D. 1978. "Notes on Japanese clothing verbs." In Hinds, John, and Irwin Howard ed., *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, 68–78. Tokyo: Kaitakusha.
- Shibatani, Masayoshi. 1976. The Grammar of Causative Construction: A conspectus. In Masayoshi

- Shibatani, ed., *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions*. New York: Academic Press.
- Shibatani, Masayoshi, and Prashant Pardeshi. 2002. "Causative continuum." In Shibatani ed., *The Grammar of Causation and Interpersonal Manipulation*, — Amsterdam: John Benjamins.
- Talmy, Leonard. 1985. "Lexicalization Patterns: Semantic in Lexical Forms." In Tim Shopen, ed., *Language Typology and Syntactic Description III: Grammatical Categories and the Lexicon*, 57–149. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1991. "Path to Realization: A Typology of Event Conflation", *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 480–519. Berkeley: Linguistic Society, University of California, Berkeley.
- . 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』, 松柏社.
- 金田一春彦 (1988) 『日本語 新版(上)』, 岩波書店.
- 松本 曜 (2000) 「日本語における他動詞 / 二重他動詞ペアと日英語の使役交替」丸田忠雄・須賀一好(編)『日英語の自他の交替』167–207, ひつじ書房.
- 中川正之 (1996) 『はじめての人の中国語』, くろしお出版.
- 興津憲作 (1981) 『英語活用 スペイン語入門』, 白水社.
- 彭 飛 (1990) 『外国人を悩ませる日本人の言語習慣に関する研究』, 和泉書院.

論文 5

「現代スウェーデン語の不変化詞動詞と非語彙的抱合 —語彙機能文法による分析—」

現代スウェーデン語の不変化詞動詞と非語彙的抱合
語彙機能文法による分析

當野 能之

論文の要旨

この博士論文では、現代スウェーデン語の不変化詞動詞 (**particle verb**) の分析を行った。不変化詞動詞とはゲルマン系の言語に見られ、動詞と（前置詞や副詞としての機能も持つ）不変化詞からなる一種の複雑述語である。また、句動詞 (**phrasal verb**)・分離動詞 (**trennenbares Verb, separable verb**) などと呼ばれることもある。以下は、スウェーデン語・英語・ドイツ語の不変化詞動詞を含んだ例文である。

(1) a. John **ringde upp** tjejen.

J. rang up girl.the

‘John called up the girl.’

(スウェーデン語)

b. John **called up** the girl. / John **called** the girl **up**.

(英語)

c. John **rief** das Mädchen **an**.

J. rang the girl on

‘John called up the girl.’

c’. ... dass John das Mädchen **an-rief**.

that J. the girl on-rang

‘that John called up the girl.’

(ドイツ語)

不変化詞動詞は統語的に特殊な振舞いを見せることから、これまで理論言語学の分野において長年、考察の対象となってきた。しかし、ゲルマン系の言語の中でも英語・ドイツ語・オランダ語の不変化詞動詞に関する研究は数多くあるが、北欧語の不変化詞動詞の研究はあまり多くない。本研究の目標はスウェーデン語の不変化詞動詞の研究を通して、複雑述語の一般の問題を再考した。

以下では本論文の内容を各章毎に要約する。

第1章では本論文が扱う問題の設定とその一般言語学的意味を述べ、さらに、援用する理論的枠組みの解説を行った。現代スウェーデン語の不変化詞動詞の研究は「語とは何か」という一般言語学における基本的な問題と関わってくる。というのも、不変化詞は統語的には二語であるが、意味的には一語あり、統語的なレベルと意味的なレベルにおける語の間にミスマッチが起こっている。このような表示のレベルの間のミスマッチを扱うため、本稿では語彙機能文法 (Lexical-Functional

Grammar) を援用した。語彙機能文法の特徴は、言語構造の複数の表示のレベルが同時に存在し、それぞれのレベルが派生によって結び付けられるのではないという点にある。不変化詞動詞において動詞と不変化詞がどのレベルで一語を成し、どのレベルで二語なのかという問題を扱う上で、最適の理論であるということができる。

第2章では現代スウェーデン語の不変化詞動詞の基本的特徴を概観した。現代スウェーデン語の不変化詞動詞は主に次のような特徴を持っている。

- (2) a. 不変化詞は動詞句内で動詞の直後、目的語名詞句の直前に位置する。
- b. 不変化詞は指定部も補部も取らない投射のない語 (non-projecting word) である。
- c. 動詞のアクセントが落ち、不変化詞にアクセントが置かれ、動詞と不変化詞でアクセントのユニットを成す。
- d. 動詞が過去分詞形の時に、不変化詞が動詞に前接する。

第3章では先行研究の問題点を概観した。先行研究はスウェーデン語の不変化詞動詞の統一性をどのレベルで捉えるかという点で異なっている。具体的には次のような説がある。

- (3) a. 不変化詞が独立した品詞 (syntactic category) を成すという説
- b. 不変化詞が特定の文法関係 (grammatical relation) を担うとする説
- c. 不変化詞を意味の観点から規定しようとする説
- d. 不変化詞を統語的な観点から規定しようとする説

第3章では以上のそれぞれの先行研究に問題があることを指摘した。

第4章以降がこの博士論文の分析の中心となる部分である。

第4章では、不変化詞動詞の意味構造を検討し、不変化詞が動詞に対して、非語彙的抱合 (Non-Lexical Incorporation) を起こし、意味的に一語を成していることを主張した。非語彙的抱合とは、意味抱合 (Semantic Incorporation) あるいは擬似抱合 (Pseudo Incorporation) と呼ばれているものと同じである。アメリカ先住民言語などに見られる通常の抱合においては、統語構造・意味構造の両方において抱合が起こるが、一方、非語彙的抱合とは、統語構造における抱合は起きないが、意味構造において抱合が起こるというものである。複合動詞と不変化詞動詞の関係

を綿密に調査することにより、スウェーデン語の不変化詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしているということを明らかにした。一般的に、語彙的・非語彙的を問わず、抱合する要素は X^0 レベルの語であることから、(2b) でみた不変化詞の特徴は、この非語彙的抱合の副産物であると考えられる。

第5章では不変化詞動詞の項構造を考察した。不変化詞動詞においては、外項は動詞の項が、内項は不変化詞の項が、常に不変化詞動詞全体の項として実現するということを主張した。不変化詞の項が常に内項として実現しているかどうか大きな問題となるが、スウェーデン語の不変化詞動詞には、動詞の項が実現せず不変化詞動詞の項のみが文全体の項として実現する「擬似主語構文」が存在すること。また、不変化詞動詞を述語とする二重目的語構文では、二つの目的語が共に動詞の選択した項ではなく、不変化詞の意味的な項であると考えられることなどから、上記の一般化が正しいという結論に達した。

第6章では不変化詞動詞を含む文の文法関係と統語構造を考察した。まずは文法関係に関して分析した。従来、結果構文に意味的に類似した動詞不変化詞構文の文法関係のレベルにおいては複文 (bi-clausal) であると分析されているが、本稿では不変化詞動詞を含んだ文の文法関係は単文 (mono-clausal) であり、文法関係のレベルにおいては一語であるという主張を展開した。次に不変化詞動詞を含んだ文の統語構造、特に、その動詞句の構造を分析した。これまでの動詞・不変化詞・目的語名詞句を含む動詞句の統語構造に関してはこれまで、動詞と不変化詞が構成素を成す (1a) のような階層構造が仮定されてきたが、階層構造を仮定するような言語事実はなく、(1b) のような平らな動詞句であると主張する。

(4) a. [[動詞 + 不変化詞] 目的語名詞句]

b. [動詞 + 不変化詞 + 目的語名詞句]

第7章では本研究のまとめを示した上で、今後解決されるべきいくつかの問題点を示した。

目次

第 1 章	はじめに	5
1.1	本稿の目標	5
1.2	語の多面性	7
1.3	理論的背景	8
1.4	スウェーデン語の句構造	13
1.5	構成	16
第 2 章	不変化詞動詞の特徴	19
2.1	はじめに	19
2.2	統語的特徴	20
2.3	音韻的特徴	26
2.4	形態論的特徴	26
2.5	不変化詞のカテゴリー	27
第 3 章	先行研究とその問題点	35
3.1	はじめに	35
3.2	不変化詞の統語範疇	35
3.3	不変化詞の文法機能	36
3.4	不変化詞の意味機能	38
3.5	不変化詞の統語的特徴	40
第 4 章	意味構造における非語彙的抱合	45
4.1	はじめに	45

4.2	抱合	45
4.3	非語彙的抱合	47
4.4	不変化詞動詞における非語彙的抱合	49
4.5	非語彙的抱合の説明の検討	61
第 5 章	項構造	65
5.1	はじめに	65
5.2	不変化詞の意味構造	65
5.3	不変化詞動詞と項構造	67
第 6 章	文法関係と句構造	85
6.1	文法関係	85
6.2	句構造	89
第 7 章	まとめ	93
References		97

第1章 はじめに

1.1 本稿の目標

この博士論文では、現代スウェーデン語の不変化詞動詞 (particle verb) を分析する。不変化詞動詞とはゲルマン系の言語に見られる一種の複雑述語であり、句動詞 (phrasal verb)、分離動詞 (trennenbares Verb, separable verb) などと呼ばれることもあるが、句動詞という用語は主に英語の文献で用いられることが多く、また、分離動詞という術語はもっぱらドイツ語の文法で使われているので、本稿では、より中立的な不変化詞動詞という用語を使うことにする^{*1}。

典型的な不変化詞動詞は動詞と不変化詞（多くの場合は前置詞や副詞としての用法も持つ）から成る。(1)–(3) は、スウェーデン語、英語そしてドイツ語の不変化詞動詞を含んだ例である^{*2}。

- (1) John **ringde** **upp** tjejen.
 J. ring.PAST up girl.DEF
 ‘John called up the girl.’ (スウェーデン語)

- (2) a. John **called up** the girl.
 b. John **called** the girl **up**. (英語)

- (3) a. John **rief** das Mädchen **an**.
 J. ring.PAST the girl on
 ‘John called up the girl.’

^{*1} 不変化詞という用語は、前置詞や接続詞などの屈折変化を起こさない品詞全般を指すのに用いられる場合もある。

^{*2} 本稿では、例文中の動詞と不変化詞は常にボールド体で示すこととする。

b. ... dass John das Mädchen **an-rief**.
 that J. the girl on-ring.PAST

‘that John called up the girl.’

(ドイツ語)

不変変化動詞あるいは不変変化詞の研究には長い歴史があり，文献の数も膨大であるが，その研究は大まかに言って二つの系統に分類することができるものと思われる．

一つは，不変変化詞の多義性の問題を扱った研究である．不変変化詞は空間関係を表す前置詞や副詞としての機能を持つものがほとんどで，一つの不変変化詞が複数の意味を持つ場合が多い．近年は認知言語学 (Cognitive linguistics) の発展に伴い，プロトタイプ (Prototype) やイメージスキーマ (Image schema) など，認知言語学におけるキーとなる概念により，不変変化詞の多義の体系が明らかになってきている．英語の不変変化詞の多義性を扱った初期の研究としては Lindner (1981) が，スウェーデン語の不変変化詞の多義性を扱った研究としては，Norén (1996)，Strzelecka (2003) などがある．

もう一方の研究の流れに，不変変化動詞の「語」としての資格，つまり動詞と不変変化詞が語を成すのか否かという問題を扱ったものがある．まず，不変変化動詞が形態的に一つの単語であるか否かという問題がある．ドイツ語で分離動詞と呼ばれていることから分かるように，ドイツ語の不変変化動詞は (3a) のように動詞と不変変化詞が離れて現れることもあれば，(3b) のように動詞と不変変化詞が一語となって現れることもある．したがって，もともと形態的に一語であるのかどうか．また，一語であるとする，どのような派生を経て，(3a) のような表層の統語構造に至るのかといったことが問題となる．また，不変変化動詞は「意味的に一語である」と言われることがある．(1) – (3) の不変変化動詞はそれぞれ「電話をかける」あるいは「電話に呼び出す」という意味であるが，動詞と不変変化詞全体でそれらの概念を表している．つまり，(3b) 以外には，形態的に語を成していないが，意味的には一つの概念を成しているということができる．このように，不変変化動詞は意味的に一語として認められても，形態的には二語であることがあり，それぞれのレベルにおける語としての資格に関して不一致 (mismatch) が見らる．不変変化動詞は，この不一致をどのように扱うかをめぐって，主に生成文法を中心とする理論言語学の研究の対象と成ってきた．このような問題意識の基に近年書かれたモノグラフだけでも Dehé (2002)，

Dikken (1995), Zeller (2001b), Lüdeling (2001), Toivonen (2003), Stiebels (1996) などがある。また, Dehé, Silke, McIntyre, and Jackendoff (2002) の論文集も不変化詞の語としての資格を扱った論文が多く収められている^{*3}。

本稿では後者の問題, つまり不変化詞動詞の「語」としての資格に関する問題 — 不変化詞動詞がどのような点で一語であり, どのような点でそうではないのか — を, 現代スウェーデン語の不変化詞動詞を対象として, 分析していく。

1.2 語の多面性

これまで, 「語」としての資格と言ってきたが, 一つの単語であることを Matsumoto (1996), 松本 (1996) に習い, 語彙性 (wordhood) と呼ぶことにする。語彙性をめぐってはこれまで様々な形で議論が行われてきた。最もよく知られているのは形態的語彙性 (Morphological Wordhood) であろう。これは形態的緊密性 (lexical integrity) (Bresnan & Mchombo 1995) などとして知られているものである。形態的語彙性を持った語とは, 統語構造における最小の単位としての語であり, 形態論的に緊密なまとまりを持ったものである。したがって, その一部に統語規則を適用し, 分断したり, 一部を省略したり, 等位接続したりすることはできないなどの制約が存在する。

Matsumoto (1996), 松本 (1996) によると, 語彙性は形態的語彙性の他にも, 別の二つの側面から定義することができるという。一つは文法的語彙性 (Grammatical Wordhood) である。例えば, 動詞に関して言えば, 「主語, 目的語, 斜格語など, 一組の文法機能を支配する単位」(松本 1996: 39) を一語の動詞であると定義することが可能であるという^{*4}。語彙性に関するもう一つの側面は意味的語彙性 (Semantic Wordhood) であり, 意味的に一語をなす語は「一つ概念」を表すというものである。

これ以外にも, 窪園 (1995) に見られるように, 語を音韻的観点から定義することも可能であるが (音韻的語彙性 (Phonological Wordhood)), 本稿では不変化詞動詞の形態的・

^{*3} これ以外にも, 英語の不変化詞動詞をめぐっては, (2a)(2b) に見られる不変化詞移動 (particle shift, particle movement) と呼ばれる構文交替が問題となってきたが, 本稿ではこの問題を取り上げない。

^{*4} ここで言う文法機能とは Bresnan (1982b) で定義されているものである。

文法的・意味的語彙性を中心に考察していく。

1.3 理論的背景

形態的・文法的そして意味的語彙性を捉えるため、本稿では語彙機能文法 (Lexical-Functional Grammar, 以後 LFG) (Bresnan 1982a, 2001, Dalrymple 2001, Dalrymple, Kaplan, Maxwell, & Zaenen 1995, Kaplan & Bresnan 1982) を理論的装置として採用する。LFG は生成文法の一つであるが、統率・束縛理論 (GB 理論) などと異なり、様々な表示のレベルが変形や移動などにより派生されることはない。GB 理論では、D 構造 (D-structure)、S 構造 (S-structure)、音声形式 (PF)、論理形式 (LF) といった表示レベルが仮定され、D 構造から始まり、移動操作を経て S 構造に達し、そこから PF と LF へと分かれていくというモデルが取られている。一方、LFG では複数の言語表示レベルが同時並行して存在し、それらの言語表示レベル間は、関数により対応付けられる。

LFG で仮定されている言語表示は研究者により異なるが、構成素構造 (constituent structure, c-structure)、機能構造 (functional-structure, f-structure) そして項構造 (argument structure) の三つを仮定するケースが多い。さらに、(語彙) 意味構造 ((lexical-) semantic structure) や情報構造 (information structure) を設定する場合もある。本稿では、構成素構造、機能構造、項構造そして意味構造の 4 つの構造を仮定することにする。以下では、それぞれの構造を簡単に解説する。

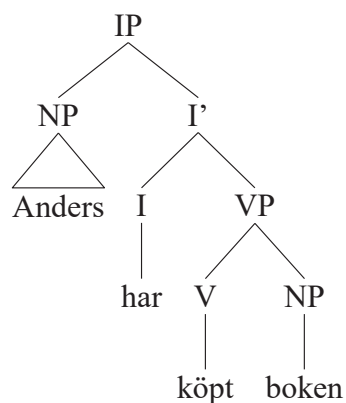
1.3.1 構成素構造と機能構造

LFG では主語や目的語といった文法関係は構造によって規定されるものではなく、無定義要素 (primitive) であるとしている。したがって、句構造つまり構成素構造を表すレベルとは別に、文法関係などを表示する機能構造が仮定されている。異なった言語の間で同じ意味の文の構成素構造、つまり表層の語順などは大きく異なりうる。一方、機能構造は非常に類似していると考えられている。次の簡単な文を例に、具体的な構成素構造と機能構造を見てみよう。

- (4) Anders har köpt boken.
 A. have.PRES buy.PERFP book.DEF
 ‘Anders has bought the book.’

(4) の構成素構造は下の (5) である．構成素構造は構成素同士の支配関係や先行関係を表す．

(5) 構成素構造



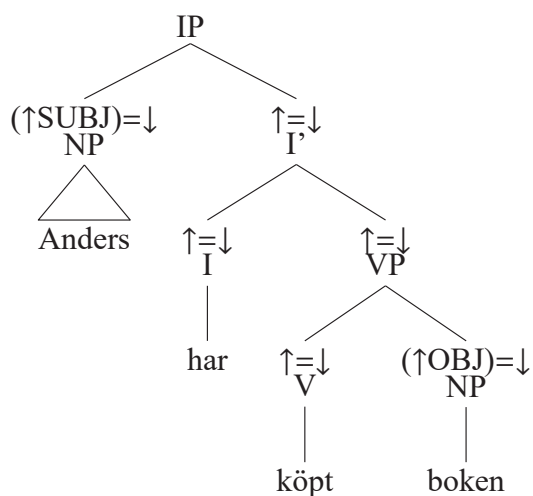
一方，(4) の機能構造は (6) の通りである．機能構造は素性とその値のマトリックスで，(6) では，左側にあるものが素性の名前で，その右側にあるものは素性の値である．素性の値は SUBJ や OBJ の値のように機能構造が埋め込まれていてもよい．機能構造には，主語・目的語と言った文法関係以外に，性・数・定性といった屈折に関する情報，テンス・アスペクトに関する情報などが含まれる．

(6) 機能構造

PRED	'BUY <(SUBJ) (OBJ)>'	
TENS	PAST	
PERF	+	
SUBJ	[PRED 'ANDERS']	
	[PRED 'BOOK']	
	DEF	+
	NUM	SG
	GEN	Non-Neuter
OBJ		

構成素構造と機能構造の対応関係は構成素構造と機能構造との間の関数として与えられる。構成素構造の各節点 (node) には、次の (7) にあるように機能的注釈 (functional annotation) と呼ばれるものが付される。上向きの矢印は母親節点 (mother node) の機能構造を表し、下向きの矢印はその節点自身の機能構造を指している。例えば、NP である Anders に付されている $(\uparrow \text{SUBJ})=\downarrow$ は、文 (IP) の機能構造の主語の素性の値が NP 自身の機能構造に等しいことを表している。また、 $\uparrow=\downarrow$ は自身の機能構造がその母親節点の機能構造と等しいことを示している。

(7) 機能的注釈付き構成素構造



1.3.2 項構造と意味構造

次に本稿で仮定する項構造と意味構造を見てみよう．構成素構造と機能構造に関しては，(5)-(7) で見た構造が一般に認められているが，項構造と意味構造に関しては，LFG の研究者の間で一致した見解がない．本稿では，(動詞の) 項構造に関しては，主題役割 (thematic role) の情報を含んだ以下のような構造を仮定する (Bresnan & Moshi 1990) ．

(8) köpa ‘buy’ <Agent Theme>

項構造と機能構造の関係は，LFG において集中的に研究されてきたテーマの一つである．特に，項の主題役割と文法関係がいかに結び付けられるのかという点が問題となってきた．主題役割と文法関係の対応関係に関して，LFG で発展したものに Lexical Mapping Theory (LMT) がある．詳しくは，Bresnan and Kanerva (1989), Bresnan and Moshi (1990) 等を参照のこと．

次に意味構造であるが，本稿では Jackendoff (1983, 1990), Pinker (1989) などが提案する概念構造 (Conceptual Structure) を採用する．これは，いわゆる語彙分解 (lexical decomposition) あるいは述語分解 (predicate decomposition) の結果で，動詞の中核的な意味を Event, State といった概念範疇と GO や TO といった基本関数で表そうとするものである．概念構造を用いた意味の記述にも様々な立場があるが，本稿で採用する意味記述に関して注意すべき点を二つ挙げる．

まずは，どのような情報を意味構造の中に書き込むかという問題である．一つは，Levin and Rappaport Hovav (1996) や 影山 (1996) に代表されるように，文の中核的な意味，特に動詞のアスペクトの情報に基づいた情報のみを意味の表記に持ち込もうという立場がある．一方で，Jackendoff (1990) や Matsumoto (1996) のように文の意味に関連する情報をできるだけ意味構造に書き込もうとする立場もある．本稿は後者の立場に立ち，文の中核的な意味以外の情報もできるだけ意味構造に書き込むことにする．ただし，文の意味に関するありとあらゆる情報を意味構造に記すというのは現実には困難であり，ここでは，Jackendoff (1983, 1990), Pinker (1989), Matsumoto (1996) を参考に意味構造を記述するこ

とにする．

もう一つ概念構造の記述に関して注意すべき点としては，因果関係あるいは使役関係をどのように表すかという問題がある．因果関係あるいは使役関係には，原因となる事象と結果となる事象の二つの事象が関与する*⁵．この二つの事象の関係を表すため，原因事象と結果事象を項として取る意味述語である CAUSE あるいはそれに類する関数が伝統的に用いられてきた．原因事象を E1，結果事象を E2 とすると次のように記述することができる．

$$(9) \text{ [CAUSE (E1, E2)]}$$

この立場では，原因事象と結果事象は両方とも CAUSE の項であるという点で対等である．

一方で，結果事象を原因事象に従属したものとして扱う Pinker (1989), Matsumoto (1996) のような立場もある．ここでは結果事象を導く従属する関数として RESULT という関数を仮定すると次のように表すことができる．

$$(10) \left[\begin{array}{l} \text{E1} \\ \text{[RESULT (E2)]} \end{array} \right]$$

どちらの立場が正しいかを議論するのは本稿の範囲を超えているので行うことができないが，本稿では，結果事象が原因事象に従属するという後者の立場を取り，意味記述を行うことにする．

さて，以上をふまえた上で，(4) の意味をどのように記述することができるか考える．(4) の動詞の概念構造を表した (11) を見てみよう．

$$(11) \left[\begin{array}{l} \text{ACT (x, y)} \\ \text{[RESULT [EVENT GO (y, [PATH FROM (z), TO (x)])]]} \\ \text{[EXCH [EVENT GO (MONEY, [PATH FROM (x), TO (z)])]]} \end{array} \right]$$

*⁵ これ以外にも，個体が出来事を引き起こすという Jackendoff (1983) のような考え方もあるが，本稿ではその点は問題としない

「買う」という出来事には、動作主 (x) が商品 (y) になんらかの働きかけをするという主事象があり、上記の意味構造の一行目に記されている。さらに、その商品 (y) が売り手 (y) から買い手である動作主 (x) に移動するという結果事象がある。これは従属する事象として2行目に記されている通りである。また、商品の移動と共に、代金が買い手 (z) から売り手 (y) に移動する。この部分が意味構造の最後に記されている部分で、EXCH という従属事象を導く関数で表されている。

また、(時制などの情報を除いた) 文の意味構造は (12) のように表示することができる。

$$(12) \left[\begin{array}{l} \text{ACT (ANDERS, BOOK)} \\ [\text{RESULT [EVENT GO (BOOK, [PATHFROM (z), TO (ANDERS)])}]] \\ [\text{EXCH [EVENT GO (MONEY, [PATHFROM (ANDERS), TO (z)])}]] \end{array} \right]$$

本稿で仮定する意味構造の詳細については第4章と第5章で述べる。

1.4 スウェーデン語の句構造

スウェーデン語の不変化詞動詞を見るには、どうしてもスウェーデン語の句構造に関する理解が必要となる。そこで、この節ではスウェーデン語の句構造を動詞の位置を中心に簡単に解説することにする。

スウェーデン語は SVO 言語である。また、ドイツ語などと同様に、動詞第二位 (V2) の現象を示す。V2 とは平叙文の主節で定形動詞 (finite verb) が二番目の要素として現れることを言う^{*6}。例えば、次の文では、定形動詞 *sparkade* ‘kicked’ は第二番目の位置に現れ、一番目の位置には主語名詞句 ((13a) の *Peter*)、目的語名詞句 ((13b) の *bollen* ‘the boll’) や副詞句・前置詞句 ((13c) の *i rummet* ‘in the room’) が現れている。

^{*6} 定形動詞 (finite verb) とは、数・人称・時制などの定まった動詞の形態を指し、現在形・過去形などがそれに当たる。一方、非定形動詞 (non-finite verb) とは、それらが限定されていない動詞の形態で、不定形・分詞形などが相当する。

- (13) a. Peter **sparkade** bollen i rummet.
 P. kick.PAST ball.DEF in room.DEF
 ‘Peter kicked the ball in the room.’
- b. Bollen **sparkade** Peter i rummet.
 ball.DEF kick.PAST P. in room.DEF
- c. I rummet **sparkade** Peter bollen.
 in room.DEF kick.PAST P. ball.DEF

一方、非定形動詞 (non-finite verb) は句構造上、定形動詞よりも低い位置に現れる。これは否定辞 *inte* ‘not’ との相対的な位置関係から確認することができる。下記の例からも分かるように、定形動詞である (14a) の *sparkade* は否定辞より左に、非定形動詞である (14b) の *sparkat* は右に現れる。

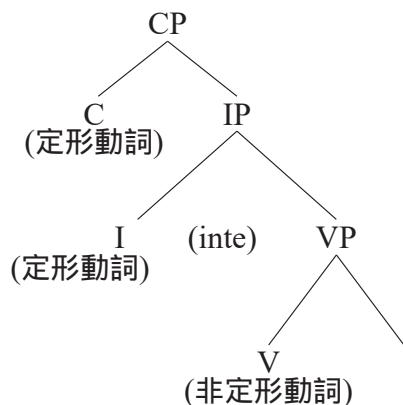
- (14) a. Peter **sparkade** inte bollen.
 P. kick.PAST not ball.DEF
 ‘Peter did not kick the ball.’
- b. Peter har inte **sparkat** bollen.
 P. have.PRES not kick.PERFP ball.DEF
 ‘Peter has not kicked the ball.’

否定辞 *inte* は動詞句 (VP) と時制句 (IP) の間に位置するものと考えられているので^{*7}、非定形動詞は動詞句内に、定形動詞は動詞句より高い位置に現れるということになる。「補文句 (CP) – 時制句 (IP) – 動詞句 (VP)」という標準的な句構造を仮定した場合、定形動詞は補文句の主要部 C か、時制句の主要部 I に現れることになるが、定形動詞の句構造上の位置に関しては二つの説がある。一つは、主節において定形動詞が全て C に現れるとする説である。例えば、Holmberg and Platzack (1995) などがそのような立場に立っている。もう一つは、定形動詞でも C に現れる場合と I に現れる場合があるとする説である。具体的には、(13a) のような正置語順の場合、定形の動詞は I に位置し、一方、(13b) や (13c) のような倒置語順の場合には C にあるとする説である (Sells 2001)。本稿では、主に動詞句内の構造を見ていくことになるので、どちらの説を採ったとしても問題はない

^{*7} 否定辞の位置に関しては、Holmberg and Platzack (1995), Sells (2000) などを参照のこと。

が、便宜上後者の説を採用することとする。以上をまとめると動詞の現れる位置は次のようにまとめることができる。

(15) 主節における動詞の位置

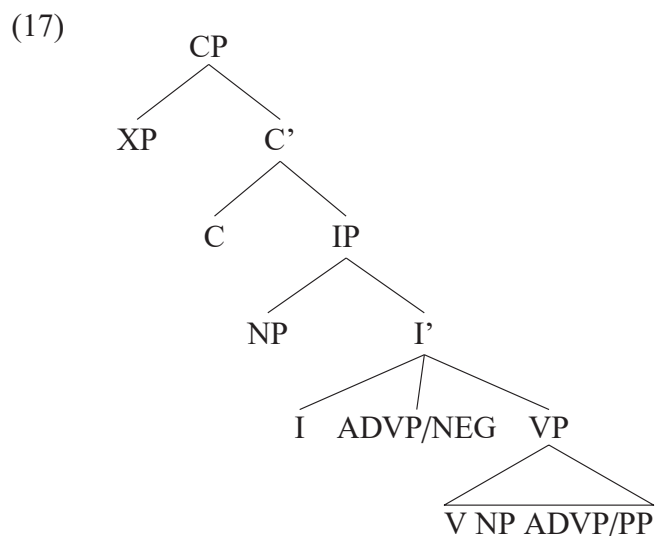


一方従属節では、動詞は定形動詞か非定形動詞かに関わらず、否定辞より右に現れる。したがって、動詞は常に動詞句の主要部に位置していることになる。

- (16) ... att Peter (inte) **sparkade** (*inte) bollen.
 that P. not kick.PAST not ball.DEF
 '... that Peter did not kick the ball.'

動詞の位置以外の文の構造も少し考察しよう。(13b) や (13c) から分かるように、トピックとなる要素は文頭に現れる。これらは一般に CP の指定部にあるとされている。また、(13a)–(13c) それぞれの主語名詞句は、IP の指定部にあると考えられる^{*8}。副詞(句)や前置詞句の現れる位置に関しては様々な議論があるが、文副詞類は否定辞と同じく VP と IP の間に現れ、動詞句に関わる副詞句・前置詞句は動詞句内に現れるものと考えられている。したがって、スウェーデン語の文の構造はおおむね以下のような構造をしているものと考えられる。

^{*8} ただし、定形動詞が全て C にあるとする立場では、(13a) の主語名詞句は CP の指定部にあるということになる。



1.5 構成

本稿の第 2 章以降の構成は次の通りである。

第 2 章では現代スウェーデン語の不変変化動詞の基本的特徴を概観する。特に、不変変化動詞と前置詞・副詞との違いを明らかにし、この論文で扱う対象を定める。第 3 章では先行研究を概観する。先行研究はスウェーデン語の不変変化動詞の統一性をどのレベル（文法範疇・文法関係・意味構造・統語構造）で捉えるかという点で異なっている。第 3 章ではどの説にも問題点があることを指摘する。

第 4 章と第 5 章がこの博士論文の分析の中心となる部分である。

第 4 章では、不変変化動詞の意味構造を検討し、不変変化動詞が動詞に対して、非語彙的抱合 (Non-Lexical Incorporation) を起こし、意味的に一語を成していることを主張する。特に、複合動詞と不変変化動詞の関係を綿密に調査することにより、スウェーデン語の不変変化動詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしているということを明らかにする。また、不変変化動詞に見られる統語的特徴の一部が、この非語彙的抱合の産物であるということも主張する。

第 5 章では不変変化動詞の項構造を考察する。不変変化動詞では常に、外項は動詞の項が、内項は不変変化動詞の意味的な項が、不変変化動詞全体の項として実現するということを論証する。最後に項構造がレキシコンで決定するとする伝統的な語彙主義に基づき、不変

化詞動詞が項構造においても 1 語であることを主張する。

第 6 章では不変化詞動詞を含む文の文法関係と統語構造を考察する。本稿では、不変化詞動詞を含んだ文は機能的に単文 (mono-clausal) であり、文法関係のレベルにおいては一語であるという主張を展開する。また、不変化詞動詞を含んだ文の統語構造、特に、その動詞句の構造を分析する。動詞・不変化詞・目的語名詞句を含む動詞句の統語構造はこれまで主張されてきたような階層構造ではなく、平らな構造であると主張する。

第 7 章では本研究のまとめを示した上で、今後解決されるべきいくつかの問題点を示す。

第2章 不変化詞動詞の特徴

2.1 はじめに

この章ではスウェーデン語の不変化詞動詞の特徴を見ていく。多くの不変化詞は副詞や前置詞としての働きを持つが、不変化詞動詞が動詞と前置詞句、あるいは動詞と副詞の組み合わせとどのように違うのかに注意しながら特徴を観察していく^{*1}。

不変化詞動詞という用語が指し示す範囲は、研究対象とする言語によって、あるいは研究者によって異なることが多い。Lüdeling (2001) によるとこれには大きく分けて三つの立場があると言う。一つ目は不変化詞が自動的前置詞 (intransitive preposition) つまり、目的語を取らない前置詞であるとする説である^{*2}。これは英語の不変化詞動詞の研究で多くみらる立場である (Jespersen 1924, Emonds 1972, Jackendoff 1973)。スウェーデン語の研究では、Platzack (1998) などがこの立場を取っている。2つ目の立場はこれとは対照的なもので、前置詞だけでなく、全ての語彙範疇が不変化詞として振舞うと主張するものである。スウェーデン語を例に見てみよう。

- (18) a. Peter **körde** **bil**. (名詞)
 P. drive.PAST car
 ‘Peter drove a car.’
- b. Peter **lät** **bygga** ett hus. (動詞)
 P. let.PAST build.INF a house
 ‘Peter had a house built.’
- c. Peter **sopade** **rent** golvet. (形容詞)
 P. sweep.PAST clean floor.DEF
 ‘Peter swept the floor clean.’

^{*1} 不変化詞と副詞や前置詞が同じ文法範疇に属するのかどうかという問題があるが、この章ではその点には触れず、4章で考察することにする。

^{*2} この立場では副詞も自動的前置詞ということになる。

(18a) の冠詞の付いていない裸名詞 *bil* ‘car’, (18b) の不定詞 *bygga* ‘build’ そして (18c) の形容詞 *rent* ‘clean’ が不変化詞として機能し、それぞれの直前にある動詞と共に不変化詞動詞を形成するというものである。ドイツ語の不変化詞動詞の研究では、Stiebels and Wunderlich (1994) がこの立場を取っている。また、Lüdeling (2001) によれば、伝統的なドイツ語の文法書や辞書もこの立場に立って書かれているという。Anward and Linell (1976), Toivonen (2002, 2003) などのスウェーデン語の研究でも、あらゆる語彙範疇が不変化詞としての資格を持つことが主張されている。最後の立場は語彙範疇の中でも前置詞と形容詞のみが不変化詞として振舞うというもので、Lüdeling (2001) 自身はこの立場に立っている。この立場の背景には、不変化詞動詞は一種の原因と結果の関係を表しており、不変化詞はその結果の部分を担当していて、それを表すことができる文法範疇が前置詞と形容詞であるという考えがある。Teleman, Hellberg, and Andersson (1999b) などの多くのスウェーデン語の研究は、暗黙のうちにこの立場で不変化詞に関する記述を行っている。

この章では、まず前置詞あるいは副詞としての機能を持つ不変化詞の特徴を見た上で、それ以外の語彙範疇で同じ特徴を示すものがあるか検証する。結論として、名詞・動詞・形容詞のうち、名詞と形容詞は不変化詞として認めるが、動詞は不変化詞としては認められないということが明らかになる。

2.2 統語的特徴

まず、不変化詞動詞の統語的特徴から見ていこう。特に不変化詞は、その句構造上の位置と不変化詞自体の投射という点で、前置詞や副詞と異なった振舞いを見せる。

2.2.1 不変化詞の句構造上の位置

まずは不変化詞動詞の現れる句構造上の位置から見てみよう。前章の (15) でも見たように、主節において非定形動詞は動詞句の主要部に、定形動詞は CP あるいは IP の主要部に現れる。一方、不変化詞は常に動詞句内に現れる。これは前章でも見た否定辞 *inte* との相対的な位置関係から確認することができる。

- (19) a. Peter **sparkade** inte **upp** bollen.
 P. kick.PAST not up ball.DEF
 ‘Peter did not kicked up the ball.’
- b. *Peter **sparkade** **upp** inte bollen.
 P. kick.PAST up not ball.DEF
- c. *Peter **sparkade** **upp** bollen. inte
 P. kick.PAST up ball.DEF not

前章でも述べたように，否定辞 *inte* は IP と VP の間に位置するものと仮定されている．上記の例からも分かるように，不変化詞は常に否定辞よりも右側に位置しているので，動詞句内にあることになる．

動詞が動詞句内にある場合には不変化詞は動詞の直後に現れる．また，目的語名詞句がある場合，不変化詞はそれよりも左側に現れ (= (20a))，右側に現れることはない (= (20b))．

- (20) a. Peter har [_{VP} **sparkat** **upp** bollen]
 P. have.PRES kick.PERFP up ball.DEF
 ‘Peter has kicked up the ball.’
- b. *Peter har [_{VP} **sparkat** bollen **upp**]
 P. have.PRES kick.PERFP ball.DEF up

また，(21a)，(21b) から分かるように，目的語名詞句がアクセントのない弱い代名詞であったとしても，語順は変わらず，英語の不変化詞移動のような現象はスウェーデン語では見られない．

- (21) a. Peter har [_{VP} **sparkat** **upp** den]
 P. have.PRES kick.PERFP up it
 ‘Peter has kicked it up.’
- b. *Peter har [_{VP} **sparkat** den **upp**]
 P. have.PRES kick.PERFP it up

また，ドイツ語のように主節と従属節で動詞と不変化詞の相対的な位置関係が変わることもない (= (22))．

- (22) att Peter har **sparkat upp** {bollen / den}.
 that P. have.PRES kick.PERFP up ball.DEF / it
 ‘that Peter has kicked {the ball/it} away.’

以上からも分かるように，スウェーデン語の不変化詞は常に目的語名詞句よりも前に現れるという特徴を持つ．この特徴は一見すると，不変化詞動詞が他動詞の場合にのみ有効であり，自動詞の場合には当該の語が不変化詞か否かを見分けることができないように思われるかもしれない．しかし，実は不変化詞動詞が自動詞の場合でもこの特徴は有効なのである．この点を簡単に見てみよう．

スウェーデン語には提示文 (presentational sentence) と呼ばれる一種の存在文がある (Platzack 1983, Vikner 1995, Börjars & Vincent 2004)．次の文を見てみよう．

- (23) a. En räva **sprang** i trädgården.
 a fox run.PAST in garden.DEF
 ‘A fox sprang in the garden.’
 b. Det **sprang** en räva i trädgården.
 it run.PAST a fox in garden.DEF

(23a) は通常の自動詞文で，(23b) が提示文である．提示文においては文頭に虚辞 *det* ‘it’ が置かれ，論理的主語である *en räva* ‘a fox’ は動詞の直後，つまり通常目的語名詞句が現れる位置に置かれる．提示文に現れる動詞は主に自動詞（非対格自動詞・非能格自動詞を問わない）や他動詞の受動形である．動詞の直後に現れる論理的主語の文法関係をめぐっては，目的語であるとする説 (Platzack 1983, Vikner 1995) と主語であるとする説 (Börjars & Vincent 2004) があるが，この点は本稿の議論には直接影響しないので問題としない．重要なのは，論理的主語が通常目的語名詞句が現れる位置に立つという点である．

さて，不変化詞を含む自動詞も提示文に現れうる．注目したいのは不変化詞が現れる位置である．

- (24) a. En **råtta** sprang **in**.
 a rat ran in
 ‘A rat ran in.’

b. Det **sprang in** en råtta.

it ran in a rat

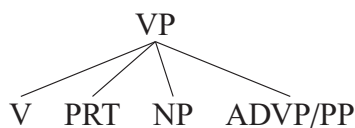
c.*Det **sprang** en råtta **in**.

it ran a rat in

(24a) は不変化詞を含んだ通常の自動詞文である．一方，(24b) はその同じ不変化詞動詞を含んだ提示文である．注目したいのは，不変化詞 *in* ‘in’ が動詞の直後，そして目的語位置にある論理的主語より前にあるという点である．(24c) から分かるように，論理的主語の後ろに不変化詞を置くことはできない．つまり，不変化詞動詞を含んだ自動詞文においても，不変化詞は動詞の直後，目的語位置の直前にあるということがわかる．

以上，他動詞文でも自動詞文でも，不変化詞は句構造上の同じ位置にあることが分かった．平らな動詞句を仮定した場合，不変化詞を含む動詞句の構造は以下ようになる．

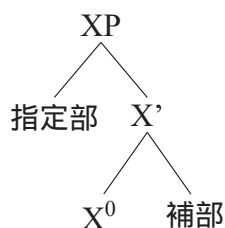
(25)



2.2.2 不変化詞の投射

不変化詞の二つ目の特徴はその投射 (projection) である．Toivonen (2002, 2003) はスウェーデン語の不変化詞が投射のない語 (non-projecting word) であると主張している．一般に，語は投射する．つまり，(26a) にあるように指定部 (specifier) と補部 (complement) を持つ．したがって，投射のない語とは (26b) にあるような補部や指定部を取らない語ということになる．

(26) a. 投射のある語



b. 投射のない語

$$\begin{array}{c} | \\ X^0 \end{array}$$

不変化詞が投射のない語，つまり指定部も補部も取らない語であるという証拠を見ていこう．

まずは，補部の有無から．すでに，英語の不変化詞の研究で言われていることだが，不変化詞を自動的前置詞 (intransitive preposition) であるとする見方がある (Jespersen 1924, Emonds 1972, Jackendoff 1973)．これは，動詞に目的語を取る他動詞と取らない自動詞があるように，前置詞にも目的語を取る他動的前置詞 (transitive preposition) と自動的前置詞 (intransitive preposition) があるという考え方である．スウェーデン語には *i* ‘in’ という他動的前置詞と *in* ‘in’ という自動的前置詞つまり不変化詞のペアがある．以下はそれぞれを含んだ例である．

- (27) a. Peter **sparkade** bollen **i** lådan. (他動的前置詞)
 P. kick.PAST ball.DEF in box.DEF
 ‘Peter kicked the ball into the box.’
 b. Peter **sparkade in** bollen. (自動的前置詞)
 P. kick.PAST in ball.DEF
 ‘Peter kicked in the ball.’

次の (28a) から分かるように，他動的前置詞である *i* は直後の名詞句と構成素を成し，前置することができる．一方，自動的前置詞である *in* は直後の名詞句と共に前置できないことから，構成素を成していないということが分かる (= (28b))．

- (28) a. **I** lådan **sparkade** Peter bollen. (他動的前置詞)
 in box.DEF kick.PAST P. ball.DEF
 ‘Peter kicked the ball into the box.’
 b. ***In** bollen Peter **sparkade**. (自動的前置詞)
 in ball.DEF P. kick.PAST
 ‘Peter kicked in the ball.’

以上から，不変化詞は自動的前置詞つまり補部を取らないといことが分かる^{*3}．しかし，自動詞は補部を取らないが投射はするものと一般に仮定されている．不変化詞に関しても，補部を取らないということが，投射しないという証拠にはならない．ところが，Toivonen (2002, 2003) によると，スウェーデン語の不変化詞は補部だけでなく，指定部も取らないと言う．次に指定部の有無に関する Toivonen (2002, 2003) のこの考察を見てみよう．

前置詞や副詞はその指定部に程度表現 (degree expression) を取ることができる．ところが，(29b) から分かるように，不変化詞 *bort* は修飾語句 *längre* を取ることができない．通常の副詞としての *bort* は修飾語句を取ることができることに注意されたい (= (29c))

- (29) a. Peter **sparkade upp** bollen.
 Peter kick.PAST up ball.DEF
 ‘Peter kicked up the ball’
- b. *Peter **sparkade** längre **upp** bollen.
 Peter kick.PAST further up ball.DEF
- c. Peter **sparkade** bollen längre **upp**.
 Peter kick.PAST ball.DEF further up

以上見てきたように，スウェーデン語の不変化詞は補部だけでなく，指定部も取らない．つまり，投射があるとする積極的な根拠はなく，スウェーデン語の不変化詞には投射がないという Toivonen の主張は妥当であると思われる．

以上，不変化詞動詞の統語的特徴をまとめると以下ようになる．

- (30) a. 不変化詞は動詞句内で動詞の直後，目的語名詞句の直前に現れる．
 b. 不変化詞は指定部と補部を取らない語である．

^{*3} Toivonen (2002, 2003) は意味的な観点から，補部の有無を論じているが，意味構造と統語構造を別のものであるとする立場を取るかぎり，統語的な証拠から補部の有無を論じるべきである．

2.3 音韻的特徴

次に、不変化詞動詞の音韻的な特徴を見てみよう。「動詞・前置詞・名詞句」といった連鎖があった場合、通常、動詞と名詞句にはアクセントが置かれるが、前置詞にはアクセントが置かれない。一方、不変化詞動詞においては、通常アクセントを有する動詞のアクセントが消え、不変化詞がアクセントを担い、動詞と不変化詞で一つのアクセントユニットを成すと言われている (Anward & Linell 1976)。例えば、動詞 *hälsa* ‘greet’ と前置詞・不変化詞 *på* ‘on’ から成る次の例を見てみよう。アクセントが置かれる音節を大文字で表している。

- (31) a. PEter **HÄLsade** **på** henne.
 P. greet.PAST on her
 ‘Peter greeted her.’
- b. PEter **hälsade** **PÅ** henne.
 P. greet.PAST on her
 ‘Peter visited her.’

(31a) では動詞がアクセントを持ち *på* ‘on’ はアクセントを有しないことから、動詞・前置詞の連鎖であることが分かる。全体としての意味も、動詞と前置詞の意味から合成的に得られる。一方、(31b) は動詞にアクセントが置かれず、*på* ‘on’ がアクセントを担っていることから不変化詞動詞であることがわかる。不変化詞動詞の意味はしばしばイディオム的であることが多いが、(31b) も動詞と *på* ‘on’ の意味を足して得られるものではなく、不変化詞動詞であると考えられる。

2.4 形態論的特徴

最後に不変化詞動詞の形態論的特徴を見てみよう。これまで見てきたようにスウェーデン語の不変化詞動詞は基本的に形態的に一語を成すことはない。しかし、動詞が過去分

詞*4であるときに、動詞に前接し、動詞と不変化詞が一語を成す。

- (32) a. Peter **sparkade upp** bollen.
 P. kick.PAST up ball.DEF
 ‘Peter kicked away the ball.’
- b. Bollen. blev { **upp-sparkad** /***sparkad upp** } av Peter
 ball.DEF become.PAST up-kick.PASTP kick.PASTP up by P.
 ‘The ball was kicked away by Peter.’

2.5 不変化詞のカテゴリー

以上、スウェーデン語の不変化詞動詞の統語的・音韻的・形態的特徴を見てきた。このような特徴をもつスウェーデン語の不変化詞には次のようなものがある。まずは、(33), (34) のような前置詞・副詞としての用法を持つものである。

(33) 前置詞としての用法を持つ不変化詞

av ‘off’, *efter* ‘after’, (*i*)*från* ‘from’, (*i*)*genom* ‘through’, *i* ‘in’, *med* ‘with’, *om* ‘around’, *på* ‘on’, *till* ‘to’, *under* ‘under’, *ur* ‘from, out of’, *åt* ‘to, toward’, *över* ‘over’ etc.

(34) 副詞としての用法を持つ不変化詞

bort ‘away’, *dit* ‘thither’, *fram* ‘forward’, *hem* ‘home’, *hit* ‘hither’, *in* ‘in’, *ner* ‘down’, *ned* ‘down’, *samman* ‘together’, *upp* ‘up’, *undan* ‘out of the way, away’, *ut* ‘out’ etc.

さらに、スウェーデン語には (35) のように前置詞句に由来する不変化詞も存在する。これらは、前置詞とその目的語名詞句が一語化したものである。

(35) 前置詞句に由来する不変化詞

i-gen (in-straight) ‘again, closed, covered’, *i-hjäl* (in-hell) ‘to death’, *i-hop* (in-heap)

*4 一般に、ゲルマン系の言語では過去分詞は受動と完了の2つの機能を持つが、スウェーデン語では主に受動の機能を持つ。完了は *supinum* と呼ばれる別の活用形が用いられる。

‘together’, *i-sär* (in-separation) ‘apart’, *i-tu* (in-two) ‘into two’, *i-väg* (in-way) ‘away, off’, *till-baka* (to-back) ‘back’ etc.

ihjäl ‘to death’ を例に見てみよう。この不変化詞は元々 *i* ‘in(to)’ と *hjäll* ‘hell’ からなる前置詞句だったものが一語化したものである (Wessen 1960)。これまでに見た統語的・音韻的・形態的特性から不変化詞であるということが分かる。以下では統語的特性と形態的特性を見てみよう。

- (36) a. Peter **sköt** (**ihjäl**) Sven (***ihjäl**).
 P. shoot.PAST to.death S. to.death
 ‘Peter shot Sven to death.’
- b. Sven blev { **ihjäl-skjuten** / ***skjuten ihjäl** }
 S. become.PAST to.death-shoot.PASTP shoot.PASTP to.death
 ‘Sven was shot to death.’

(36a) から分かるように、*ihjäl* は目的語名詞句よりも前に現れなければならない。また、動詞が過去分詞となる (36b) の受動文では、*ihjäl* が動詞に前接し形態的な語を成している。以上から、*ihjäl* は不変化詞と同じ振舞いをするということが出来る。一方、意味的に類似はしているが前置詞句である *till döds* ‘to death’ は不変化詞としての振舞いは見せない。(37a) から分かるように、*till döds* が目的語名詞句より前に現れることはなく、また動詞が過去分詞でも動詞に前接することはない (= (37b))。

- (37) a. Peter **sköt** (***till döds**) Sven (**till döds**).
 P. shoot.PAST to death S. to.death
 “Peter shot Sven to death.”
- b. Sven blev { ***tilldöds-skjuten** / **skjuten till döds** }
 S. become.PAST to.death-shoot.PASTP shoot.PASTP to death
 “Sven was shot to death.”

さて、前置詞や副詞はどのゲルマン系言語の不変化詞動詞研究でも、不変化詞として認められているが、2.1 でも述べたように、それ以外の語彙範疇の語も不変化詞として認める立場がある。ここでは前置詞や副詞としての用法を持つ不変化詞と同じ特徴を示すそれ

以外の語彙範疇があれば，それも不変化詞であると認めることにする．以下では，形容詞・名詞・動詞の順に，スウェーデン語において不変化詞として認めることができるかどうか考察する．

2.5.1 形容詞

以下の形容詞が不変化詞としての振舞いを示す (Teleman et al. 1999b) ．

(38) 形容詞としての用法を持つ不変化詞

fast ‘firm, fixed’, *färdig* ‘finished’, *loss* ‘loose, off’, *lös* ‘loose’, *rent* ‘clean’, *sönder* ‘broken’ etc.

sönder ‘broken’ を例に見てみよう．(39a) にあるように，*sönder* は目的語名詞句に先行する．また (39b) から分かるように，動詞が過去分詞であるときに，動詞に前接し，形態的な語を成す．

- (39) a. Peter **sparkade** (**sönder**) dörren (***sönder**).
 P. kicked.PST broken door.DEF broken
 ‘Peter kicked the door broken.’
- b. Dörren blev { **sönder-sparkad** / * **sparkad sönder** }
 door.DEF become.PAST broken-kick.PASTP kick.PASTP broken
 ‘The door was kicked broken.’

以上から，一部の形容詞は，前置詞や副詞としての用法を持つ不変化詞と同じ振舞いを示すため，不変化詞と認めることができる．

2.5.2 名詞

次に，名詞が不変化詞として認められるか考察しよう．スウェーデン語には動詞と冠詞を伴わない裸名詞からなるイディオム的な組み合わせが多数存在する．以下はその一例である．

- (40) *köra bil* (drive car) ‘drive a car’, *skriva brev* (write letter) ‘write a letter’, *röka pipa* (smoke pipe) ‘smoke a pipe’, *ha feber* (have feber) ‘have a feber’, *ta plats* (take place) ‘take a seat’, *äga rum* (own room) ‘take place’,

これらの動詞と裸名詞の組み合わせは、しばしば不変化詞動詞としてみなされることがある。一つには、これらの組み合わせにおいては、動詞のアクセントが落ち、名詞がアクセントを担うため、一般的な不変化詞動詞と同じアクセントパターンを示すためである (Anward & Linell 1976). また別の理由としては、裸名詞が冠詞や修飾語句を取らないために、投射しない語であると考えられるためである (Toivonen 2002, 2003) .

更に Toivonen (2003) は提示文に現れる裸名詞の振舞いから、それが不変化詞であることを明らかにしている。次の例文を見てみよう。

- (41) a. Ett repertoarmöte skall **äga rum**.
 a repertoire.metting will own room
 ‘A repertoire meeting will take place’
 b. Det skall **äga rum** ett repertoarmöte.
 it will own room a repertoire.metting
 ‘A repertoire meeting will take place’ (Toivonen 2003 87)
 c.*Det skall **äga** ett repertoarmöte **rum**.
 it will own a repertoire.metting room

(41a) は動詞と裸名詞 (*äga rum* (own room) ‘take place’) を含んだ通常の文である。一方、(41b) は 2.2.1 で見た提示文 (presentational sentence) と呼ばれるものである。注目したいのは裸名詞の *rum* ‘room’ の現れる位置である。(41b) から分かるように、裸名詞 *rum* ‘room’ は論理的主語である *ett repertoarmöte* ‘repertoire metting’ の直前に置かれ、それより後に置かれることはない (= (41c))。仮に裸名詞が不変化詞だとすると、動詞 + 裸名詞 (= 不変化詞) + (論理的主語) 名詞句という語順になり、通常の不変化詞動詞と同じ語順である。以上の理由から、動詞と裸名詞の組み合わせにおける裸名詞は不変化詞であるとみなすことができる。

以上，音韻的・統語的特徴から，動詞と裸名詞の組み合わせは不変化詞動詞の一種とみなすことができる．

2.5.3 動詞

最後に動詞について見てみよう．Toivonen (2003) は次のような使役構文に現れる使役動詞と動詞の組み合わせも，不変化詞動詞の一種とみなしている．

- (42) Peter **lät** **bygga** ett hus.
 P. let.PAST build.INF a house
 ‘Peter had a house built.’

Toivonen は Taraldsen (1991) の説を受け，上記の使役動詞 *lät* ‘let’ に続く不定形動詞 *bygga* ‘build’ が不変化詞であると主張している．Taraldsen (1991) によると，スウェーデン語・デンマーク語・ノルウェー語における不変化詞と目的語名詞句の語順と使役動詞に続く不定詞と目的語名詞句の語順が完全な並行性を示すという．次のスウェーデン語とデンマーク語の不変化詞動詞の例を見てみよう．((43), (44) は (Sells 2001: 44) から引用．)

- (43) a. Peter **kastade** (**bort**) tappan (***bort**) (Swedish)
 Peter throw.PAST away carpet.DEF away
 ‘Peter threw away the carpet.’
 b. Peter **smed** (***ud**) tæppet (**ud**) (Danish)
 Peter throw.PAST away carpet.DEF away

上の例からも分かるように，スウェーデン語では不変化詞が目的語に先行しなければならないのに対し，デンマーク語では目的語のあとに来なければならない．次に，使役構文の例を見てみよう．

- (44) a. Peter **lät** (**dammsuga**) tappan (***dammsuga**) (Swedish)
 Peter let.PAST vacuume.clean carpet.DEF vacuume.clean
 ‘Peter had the carpet vacuumed.’
 b. Peter **lod** (***støvsuge**) tæppet (**støvsuge**) (Danish)
 Peter let.PAST vacuume.clean carpet.DEF vacuume.clean

興味深いことに不変化詞動詞の場合と同じ分布を示していることがわかる。つまり、スウェーデン語では不定形の動詞が目的語名詞句より前に現れるのに対し、デンマーク語では目的語名詞句の直後に現れるのである。Taraldsen は以上のような分布の並行性から、使役構文に現れる不定形の動詞が、句構造上、不変化詞と同じ位置に現れるものとしている。Toivonen は以上を踏まえた上で、動詞も不変化詞になりうると仮定している。Toivonen は指摘していないが音韻的特徴も不変化詞のそれと同じである。使役動詞にアクセントはなく、それに続く不定形動詞がアクセントを担い、不変化詞動詞の場合と同じアクセントのパターンを示す。

しかし、Toivonen 自身も気づいていることだが、この使役構文に現れる動詞を不変化詞とすることには、いくつかの問題点が存在する。一つは動詞の目的語である。(42) でも(44a) でも不定形動詞の目的語に当たる *ett hus* ‘a house’ と *tappan* ‘the carpet’ が現れている。これは、動詞が補部を取っていると考えることができ、そうすると、これらの不定形動詞は投射していることになる。Toivonen はこれらの目的語は不定形の動詞の目的語ではなく、使役動詞と不定形動詞の複雑述語全体が取る目的語だとしている。しかし、その根拠は挙げていない。

問題となるのは、目的語名詞句が動詞の補部の位置にあるかどうかである。次の例を(42)と比較して見てみよう。

- (45) *Bygga ett hus lät Peter göra*
 build.INF a house let.PAST P. do.

上の例からも分かるように、不定形の動詞 *bygga* ‘build’ と目的語名詞句 *ett hus* ‘a house’ は文頭に置き、話題化することができる。両者は構成素を成しており、不定形の動詞は補部を取っていることになる。したがって、不定形の動詞は投射しているわけで、不変化詞であると認めることはできない。

また、もし使役動詞の補文に現れる動詞が不変化詞だとすると、すべての動詞が不変化詞になりうるということになる。一般に不変化詞は、前置詞や副詞のように閉じた類であるか、名詞や形容詞のように開いた類でも、そのなかの限られたもののみが不変化詞とし

ての資格を持つ。

以上のような問題点を持つことから、本稿では動詞を不変化詞とは認めないものとする。

第3章 先行研究とその問題点

3.1 はじめに

この章ではスウェーデン語の不変変化動詞に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘する。2章でみたように、不変変化詞は前置詞や副詞などとは異なった振舞いを見せ、一つのクラスを成すと考えられる。しかし、この不変変化詞における一様な振舞いをどのレベルで一般化できるかという点に関して、先行研究は大きく異なっている。具体的には、次のような先行研究がある。

- 不変変化詞が独立した品詞 (syntactic category) を成すとする先行研究
- 不変変化詞が独立した文法関係 (grammatical relation) を成すとする先行研究
- 不変変化詞を意味の観点から規定しようとする先行研究
- 不変変化詞を統語的な観点から規定しようとする先行研究

以下では先行研究を順を追って見ていく^{*1}。

3.2 不変変化詞の統語範疇

Thorell (1977), Holms and Hinchliff (1993), Teleman, Hellberg, and Andersson (1999a) などの一般的なスウェーデン語の記述文法書において、不変変化詞は副詞に下位分類されることが多い。また、ゲルマン系言語の不変変化詞一般に関しては、その統語範疇は前置詞であるという説が広く受け入れられてきた (Jespersen 1924, Emonds 1972, Riemsdijk 1978)。これらの研究では、副詞・前置詞のどちらに分類されるにしても^{*2}、不変変化詞が独立した品詞ではないという点では一致している。本稿でも、不変変化詞は独立した品詞はなさない

^{*1} 1章でも述べたように、不変変化動詞の先行研究のうち、不変変化詞の多義性の問題を扱った研究は含まない。

^{*2} 本研究では副詞と前置詞が別々の品詞かどうかという点には立ち入らない。

という立場を取る。

しかし、先行研究の中には不変化詞が独立した品詞であるという主張も見られる (Andersson 1977, Jørgensen & Svensson 1986, Norén 1996)。これらの研究では、品詞を決定する基準を示していない為に、どのような根拠からスウェーデン語の不変化詞を独立した統語範疇として認定しているかが明確ではない。名詞や動詞のように屈折変化のある語の場合、品詞の認定は容易であるが、前置詞や不変化詞のように屈折変化のない語の場合は、それ以外に品詞判定の根拠を求めなければならない。

現在のところ、不変化詞が独立した品詞を成さないという証拠は見つけれないが^{*3}、しかし一方で、不変化詞が独立した統語範疇を成すという積極的な証拠がみられないのも事実である。したがって、本稿では不変化詞は独立した品詞を成さないという立場を取ることにする。

3.3 不変化詞の文法機能

次に不変化詞が特定の文法機能 (grammatical function) を持っているとする Ejerhed (1979) の主張を見てみよう。Ejerhed によると、不変化詞は主語や目的語など同様に partikelfunktion (particle function) という文法機能を担っていると主張している。Ejerhed (1979) によると、主語や目的語が句構造の特定の位置を占めるように、不変化詞も特定の位置に生起すると主張している。

彼の主張は、主語・目的語といった文法関係が句構造上の位置から決定されるとする初

^{*3} Toivonen (2002: 192–194) は 2 つの根拠を基に不変化詞を独立した統語範疇として扱うことを否定している。前章でも見たように、前置詞や副詞以外に名詞・形容詞・動詞の中にも不変化詞と同じ振舞いをするものがある。それらすべてを一つの品詞としてみなす事には無理があると、彼女は主張する。しかし、ある語が二つ以上の品詞として機能することはしばしばある。また、動詞や名詞などが文法化して、側置詞として機能するようになることはよく知られた現象であり、様々な品詞が不変化詞へと文法化したと考えることもできる。したがって、彼女の一つの主張は、不変化詞の品詞としての独立性を否定するものとは言えない。

彼女のもう一つの主張は、品詞と統語的な位置の関係についてである。スウェーデン語の不変化詞が動詞句内で動詞の直後に位置することはすでに見たが、このような統語的な位置を根拠に品詞を決定することはできないと彼女は主張する。彼女のこの主張自体は正しいと思われるが、前章でも見たように、スウェーデン語の不変化詞の特徴は統語的な分布だけではない。不変化詞にみられるその他の特徴も品詞の判定に関わらないものかどうかは検討されるなければならない。

期の生成文法以来踏襲されていた立場に立っている。一方で、関係文法や LFG では文法関係は、句構造上の位置から決定されず、定義不可能な要素であるとされる。ここでは、どちらの立場が正しいかという議論はせず、彼の主張の問題点を考えて行きたい。

一つの問題点は、そもそも *partikelfuktion* (particle function) という文法関係を認めることができるかどうかである。一般に認められている文法関係には、主語 (subject)・目的語 (object)・斜格語 (oblique)・付加語 (adjunct) がある。さらに、LFG では埋め込み文に相当する COMP という文法関係が認められている。しかし、*partikelfunction* という文法機能を設定している文法理論はなく、それが一体どのような文法関係であるのかが追及されなくてはならない。

もう一つの問題点は、不変化詞が本当に唯一の文法関係を担うのかどうかという点である。次の文を見てみよう。

- (46) Peter **kastade** (**ut**) bollen. (付加語)
 P. throw.PAST out ball.DEF
 ‘Peter threw out the ball.’

- (47) Peter **lade** ***(ner)** brevet (på bordet). (斜格語)
 P. lay.PAST down letter.DEF on table.DEF
 ‘Peter laid down the letter (on the table).’

- (48) Peter **körde** **bil** igår. (目的語)
 P. drive.PAST car yesterday
 ‘Peter drove a car yesterday.’

- (49) Peter har **slagit** **ihjäl** henne. (XCOMP)
 P. has beat.PERFP to.death her
 ‘Eric has beaten her to death.’

- (50) Peter **tycker** **om** choklad. (述語の一部)
 P. think.PRES about chocolate
 ‘Peter loves chocolate.’ *4

*4 この例は一見すると不変化詞ではなく前置詞を含んだイディオムを含む文のようにも見えるが、不変化詞動詞を述語とする文である。というのも、主動詞が過去分詞の場合には、*om* ‘about’ が動詞に前接する。

以上の例における不変化詞は様々な文法機能を担っているように見える。(46)では、不変化詞 *ut* ‘out’ は省略可能であることから、付加語であると考えることができる。一方、(47)では、不変化詞 *ner* ‘down’ は三項の動詞 *lägga* ‘lay’ の項つまり斜格語として機能していると考えられる。また、(48)からもわかるように、裸名詞 *bil* ‘car’ は動詞の目的語として機能している。(49)において、不変化詞 *ihjäl* ‘to death’ は一種の結果述語のように振舞っていることから、一種の補文 (LFG における XCOMP) であるようにも見える。最後に、(50)を見てみよう。(50)では *tycka* ‘think’ という動詞と *om* ‘about’ という不変化詞がイディオムを成していることから、不変化詞 *om* は述語の一部であると言えよう。

以上、見てきたように不変化詞は様々な文法機能を担っているとも考えられ、不変化詞を文法機能の観点から一般化することはできない。

3.4 不変化詞の意味機能

不変化詞を意味機能の観点から一般化しようとする試みも存在する。そのような試みの多くは、不変化詞を含む文をアスペクトの観点から分析している。

Teleman et al. (1999b) などの多くのスウェーデン語の研究で、不変化詞には文のアスペクトを非限界的 (atelic) から限界的 (telic) へと変える機能があると述べている。これはスウェーデン語ばかりではなく、英語やドイツ語の不変化詞研究でも繰り返し述べられてきたことである。

ところが、Norén (2000) はこのような見方が間違いであることを示している。

- (51) a. Hon **skrev** **upp** bilnumret.
 she write.PAST up car.number.DEF
 ‘She wrote down the car number.’
 b. Hon skrev bilnumret.
 she write.PAST car.number.DEF
 ‘She wrote the car number.’

Choklad är om-tyckt av alla.
 chocolate be.PRES about-think.PASTP by all
 ‘Chocolate is loved by all.’

- (52) a. Hon **skrev** **upp** bilnummer.
 she write.PAST up car.number.PL
 ‘She wrote down car numbers.’

- b. Hon skrev bilnummer.
 she write.PAST car.number.PL
 ‘She wrote car numbers.’

(Norén 2000:391)

(51a) の文のアスペクトは確かに限界的であるが、それは不変化詞によるものではない。というのも、不変化詞のない (51b) がすでに限界的であるわけで、(51a) が不変化詞により限界的になったわけではない。また、(52a) の文は不変化詞を含むにも関わらず、非限界的である、これは不変化詞を含まない (52b) のアスペクトと同様である。これらの文で、アスペクトの決定に関わっているのは不変化詞ではなく、目的語名詞句の定性と数である。

以上の例は、不変化詞を含まない文と含む文のアスペクトが同じ例であったが、次のような例の存在も指摘している。

- (53) a. Hon sprang { i/på } två minuter.
 she run.PAST for/in two minutes
 ‘She ran for two minutes / She ran to somewhere in two minutes.’ *⁵
- b. Hon sprang ut { *i/på } två minuter.
 she run.PAST out for/in two minutes
 ‘* She ran out for two minutes. /She ran out in two minutes.’

(53a) の文はアスペクト的に中立で限界的にも非限界的にも解釈することができる。一方、不変化詞を含んだ 53b は限界的解釈しか許さない。

以上の観察から、Norén (2000) は次のような仮説を立てている。

- (54) 不変化詞は文にすでに存在するアスペクトに焦点を当てるか、あるいはアスペクトの点で中立的な文のアスペクトを決定する。

*⁵ 英語で ‘She ran in two minutes.’ と言った場合、走り出すまでの時間が 2 分かかったという意味になるが、それに対応するスウェーデン語文では、「(どこかまでを) 2 分で走った」という意味になる。

Norén (2000) の仮説は、「文にすでに存在するアスペクトに焦点を当てる」という機能が具体的にはどのような事なのかが明らかではない点に問題があるものの、非常に示唆に富んだものであると思われる。

ここでは、上記の仮説で提示された意味機能から不変化詞を規定することができるかどうか考えてみよう。アスペクトの点で中立的な文のアスペクトを決定する要素は不変化詞以外にも存在するだろうか？例えば、次の文は前置詞句を含み、文のアスペクトは限界的である。

(55) Hon sprang till stationen { *i/på } två minuter.

she ran to station.DEF for/in two minutes

*She ran to the station for two minutes/ She ran to the station in two minutes.'

したがって、同様の機能を持つものが不変化詞以外にも存在するので、アスペクトという意味機能の観点からのみ、不変化詞を決定することは無理であるように思われる。

3.5 不変化詞の統語的特徴

スウェーデン語の不変化詞の統語的ステイタスをめぐっては、これまで「接語のような要素 (clitic-like element)」であるという分析 (Holmberg 1984, Josefsson 1998) と「投射のない語 (non-projecting word)」であるという分析 (Toivonen 2002, 2003) が提案されてきた。本節では、より詳細な分析をしている後者を概観し、その問題点を述べる。

Toivonen (2002, 2003) は 2.2.4 でも見たように、スウェーデン語の不変化詞は「投射のない語」(non-projecting word) つまり、指定部や補部を取らない要素であり、スウェーデン語の不変化詞は、意味構造や文法関係のレベルではなく、句構造のレベルで一般化できると主張している。関連する彼女の主張を以下にまとめる。

(56) a. スウェーデン語の不変化詞は投射のない語である。

b. 投射の有無は語ごとに指定されている。

c. 投射のない語は 次の句構造規則に従い、 V^0 に主要部付加する。

$V^0 \quad V^0 X$ (X は語彙範疇)

d. 投射がないという点以外は、他の語と同じである。

彼女によれば、語の投射は語ごとに指定されていて、投射のない語は (56c) にある特別な句構造規則に従う。2 章で見た不変化詞の統語的な特徴はこの句構造規則によるものである。また、不変化詞は投射がないという点以外は、他の語となんら変わらないと主張している。

本稿では、彼女の主張のうち (56b) (56d) に問題があると考え、まず、(56b) についてであるが、Toivonen は語の投射の有無は意味構造や文法機能といったものの影響によるものではなく、最初から指定されているものであると主張している。この点に関しては、次節で詳細に反論することとなるが、本稿では投射の有無は意味構造の反映であると主張する。

次に、(56d) を考えてみよう。Toivonen によると、次の (57a) と (57b) の違いは二次述語である *ihjäl* ‘to.death’ と *blodig* ‘bloody’ の投射の有無のみで、どちらも結果構文であると主張。つまり、両者は句構造が違うだけで、文法関係や意味構造は変わらないという主張を展開している。

- (57) a. Eric har slagit **ihjäl** ormen.
 E. has beaten to.death snake.the
 ‘Eric has beaten the snake to death.’ Toivonen (2003: 2)
- b. Eric har slagit ormen **blodig**.
 E. has beaten snake.the bloody
 ‘Eric has beaten the snake bloody.’ (ibid.)

しかし、両者の文法関係が同一であるとする Toivonen の主張は疑わしい。以下、問題点を見ていこう。2 章でも見たように、スウェーデン語の不変化詞の中には形容詞としての用法を持つもの存在する。一般に、スウェーデン語の形容詞は主語名詞句の性と数に一致する。

	Singular	Plural
Non-neuter	färdig- ø	färdig- a
Neuter	färdig- t (default)	färdig- a

表 3.1 形容詞 *färdig* ‘finished, ready’ の一致のパラダイム

これらの形容詞が結果構文の結果述語として用いられたときには，目的語名詞句との間で性と数に関して一致を示す．これは，目的語名詞句が形容詞の論理的な主語であることを示している．

- (58) a. Han skrev uppsatsen färdig-**ø**. (結果構文)
 he wrote paper.DEF.**Non-Neuter.Sg** finished-**Non-Neuter.Sg**
 ‘He finished writing the paper.’
- b. *Han skrev uppsatsen färdig-**t**.
 he wrote paper.DEF.**Non-Neuter.Sg** finished-**Neuter.Sg**
- c. *Han skrev uppsatsen färdig-**a**.
 he wrote paper.DEF.**Non-Neuter.Sg** finished-**Pl**

興味深い点は，形容詞が不変化詞として用いられたときには論理的な主語との一致を見せず，デフォルトの一致を取るということである．

- (59) a. *Han skrev färdig-**ø**. uppsatsen (不変化詞構文)
 he wrote finished-**Non-Neuter.Sg** paper.DEF.**Non-Neuter.Sg**
 ‘He finished writing the paper.’
- b. Han skrev färdig-**t**. uppsatsen
 he wrote finished-**Neuter.Sg** paper.DEF.**Non-Neuter.Sg**
- c. *Han skrev färdig-**a**. uppsatsen
 he wrote finished-**Pl** paper.DEF.**Non-Neuter.Sg**

詳しくは5章で見るが，以上の現象は結果構文と不変化詞動詞構文における文法関係が異なることを示している．従って，結果構文と不変化詞構文における違いが，結果述語の投射の有無のみであるとする Toivonen の主張には問題がある。

以上ここまでの順に見てきたように，スウェーデン語の不変化詞を，統語範疇・文法関係・意味関係・統語構造の観点から一般化しようとしたこれまでの試みにはそれぞれ問題

があることを見た．次節では意味構造における一般化を提案する．

第4章 意味構造における非語彙的抱合

4.1 はじめに

本章では、スウェーデン語の不変化詞動詞が形態的には語を成していないが、意味のレベルにおいて一つの語を成しているということを主張する。つまり、形態的な語と意味的な語の間にミスマッチがあるということを指摘する。このようなミスマッチを示す現象で、近年研究が盛んになっているものに意味的抱合 (semantic incorporation) と呼ばれる現象がある (Farkas (2003), Dayal (2003), Asudeh and Mikkelsen (2000) など)。形態的には抱合を起こしてはいないが、通常の抱合で見られるのと同じ意味的な振舞いを示すために、意味的抱合と呼ばれる。本稿では後に説明する理由により意味的抱合という用語ではなく非語彙的抱合 (non-lexical incorporation) という用語を用いる。以下ではまず、通常の抱合と非語彙的抱合について概観したあと、スウェーデン語の不変化詞が非語彙的抱合、つまり意味構造において抱合を起こしているということを明らかにする。

4.2 抱合

抱合に関する研究は膨大であるが、この節では本稿に関わる部分を中心に、簡単に概観することにする (より詳しくは、Mithun (1984, 1986), Baker (1988, 1996) など参照のこと)。次の (60) モホーク語の例文を見てみよう。

- (60) a. Yao-wir-aʔa ye-nuhweʔ-s ne ka-nuhs-aʔ
 PRE-baby-SUF 3fS/3N-like-ASP the PRE-house-SUF
 ‘The baby likes the house.’

- b. Yao-wir-aʔa ye-nuhs=nuhweʔ-s
 PRE-baby-SUF 3fS/3N-house=like-ASP

(Baker 1988: 81-82)

(60a) では *ka-nuhs-a?* ‘the house’ という目的語名詞句は一つの語として独立している．一方，(60b) では，*nuhs* という名詞語幹は動詞と共に一つの語を成している．このようにある語幹が主に動詞と複合し一種の複雑述語を形成する現象はアメリカ先住民族の言語などで多く見られ，抱合 (incorporation) と呼ばれている．

さて，(60b) では目的語名詞句に相当する名詞語幹つまり，項が抱合されている^{*1}．しかし，項ばかりでなく付加詞を抱合する言語もあると言われている (Spencer (1995), Rivero (1992))．次のチュクチ語の例を見てみよう．

- (61) a. *n-ure-w tajalqetg?ek*
 ADV-long-ADV 1.slept
 ‘I slept for a long time.’
 b. *t-ure=jalqet-g?ek*
 1SG.S-long=sleep-1SG.S
(Spencer (1995: 456))

(61b) を見ると，*ure* ‘long’ という形容詞語幹が動詞と共に一つの語を成しているのが分かる．この形容詞語幹は (61a) の *n-ure-w* ‘a long time’ と比較すると分かるように，付加詞が抱合されたものである．このように，抱合には項の抱合だけでなく付加詞の抱合も存在する．

抱合を起こした文には，次の (62) に列挙するような特徴が見られる Mithun (1984, 1986), Baker (1988, 1996) など参照のこと)．

- (62) a. 抱合された名詞は数に関してニュートラルである．
 b. 抱合された名詞は非特定の (non-specific) である．
 c. 抱合を起こしたできた述語は慣習化した行為 (institutionalized activity) を表す．
 d. 抱合された名詞は決定詞 (determiner) を取らない．

以上，抱合に関する特徴を概観してきた．次に本章で問題となる別のタイプの抱合を見ていこう．

^{*1} 項の中でも抱合されるのは目的語名詞句に相当する名詞語幹，さらに非対格動詞の主語名詞句に相当する名詞語幹である．項であっても非能格動詞の主語名詞句は抱合されない．

4.3 非語彙的抱合

語彙的な抱合を起こしていなくても，動詞と目的語名詞の組み合わせが (62) に見られるような特徴を示す言語があることが報告されている．次の (63) デンマーク語の例を見てみよう．

- (63) a. Min nabo købte et hus sidste år.
 my neighbour bought a house last year
 ‘My neighbour bought a house last year.’ (Asudeh and Mikkelsen (2000: 2))
- b. Min nabo **købte hus** sidste år.
 my neighbour bought house last year
 ‘My neighbour did house-buying last year.’
 ~ ‘My neighbour bought a house last year.’ (Asudeh and Mikkelsen (2000: 2))

(63a) は抱合を起こしていない通常の文である．(63a) の目的語名詞句 *et hus* ‘a house’ は不定冠詞 *et* を取り，ある特定の家を指す．一方，(63b) は動詞と冠詞を取らない裸名詞からなる例である．この例も語彙的な抱合を起こしていないことは 次の (64a) (64a) を見れば明らかであろう．

- (64) a. **Købte** min nabo **hus** sidste år?
 bought my neighbour house last year
 ‘Did my neighbour do house-buying last year?’
 ~ ‘Did my neighbour buy a house last year?’
- b. ***Købte hus** min nabo sidste år?
 bought house my neighbour last year

デンマーク語では疑問文を形成する際，定形動詞が主語名詞句の前に置かれるが，その際 (64b) のように動詞だけがその位置に置かれ，(64b) のように動詞と裸名詞が共に文頭に位置することはない．従って，動詞と裸名詞が語を成していないのは明らかである．一方で，動詞と裸名詞は語彙的な抱合と同じ特徴をいくつか示す．目的語名詞 *hus* ‘house’ は冠詞を取らず，特定の家を指さない．また，‘*did house-buying*’ という訳からも分かる

ように慣習化された活動を表している。つまり、(63b)の文は名詞語幹が動詞に語彙的な抱合を起こしてはいないにも関わらず、(62)に挙げられた抱合に見られる特徴を示しているわけである^{*2}。

このような現象はヒンディー語、ハンガリー語、ニウエ語など広範に観察され、意味的抱合 (semantic incorporation) (van Geenhoven (1998), Farkas (2003))、擬似抱合 (pseudo incorporation) (Dayal (2003), Massam (2001)) などと呼ばれ、近年多くの研究が発表されている。これらの研究で一致しているのは、動詞と名詞が統語構造では抱合を起こしていないが、意味構造では抱合を起こしているという点である。その点で意味的抱合という用語は的を射ているように思われる。しかし、通常の抱合でも統語構造だけでなく意味構造においても抱合は起こっている。つまり、どちらのタイプの抱合でも意味的抱合は起こっているので、本稿では意味的抱合という用語は用いないことにする。一方、擬似抱合という用語は、統語構造では抱合が起こっていないということを示しているものと思われるが、以下ではもう少し具体的に、非語彙的抱合 (non-lexical incorporation) という用語を使うことにする。また、4.2 で見た通常の抱合は語彙的抱合 (lexical incorporation) と呼ぶことにする。

ところで、4.2 の語彙的抱合には、項の抱合と付加詞の抱合があることを見た。これまで報告されている非語彙的抱合は項の抱合のみであり、付加詞の抱合についての報告はない。抱合を語彙的抱合か非語彙的抱合か、また項の抱合か付加詞の抱合かという点からまとめると次の表のようになる。

^{*2} ただし、(62a)の特徴に関する記述は Asudeh and Mikkelsen (2000) には見られなかった。

	語彙的抱合	非語彙的抱合
項のみ	アメリカ先住民諸語など (Baker 1988) (Mithun 1984) などの名詞抱合	ハンガリー語 (Farkas and de Swart 2003) ヒンディー語 (Dayal 2003) デンマーク語 (Asudeh and Mikkelsen 2000) などの名詞抱合
付加詞	ギリシア語 (Rivero 1992) チュクチ語 (Spencer 1997) などの副詞抱合	

表 4.1 抱合のタイプ

上記の表では付加詞の非語彙的抱合の部分が空白であるが、本稿ではスウェーデン語の不変化詞動詞がその空白を埋める現象であるという主張を展開する。

4.4 不変化詞動詞における非語彙的抱合

4.4.1 問題点

(62) に見られる抱合の特徴は (62c) を除いて、名詞の抱合にのみ見られる特徴である。文法数 (62a) は名詞に見られるカテゴリーであり、特定性 (62b) も名詞に関わるものである。また、決定詞 (62d) も名詞を修飾するものである。スウェーデン語の不変化詞の多くは前置詞や副詞であるから、これらの特徴で当該の現象が非語彙的抱合であると同定することはできない^{*3}。

そこでこの節では、別の観点からこの問題を探っていくことにする。スウェーデン語に見られる別の抱合の現象と不変化詞動詞の共通点あるいは相関を観察することにより、不変化詞動詞が非語彙的抱合を起こした結果であるということを明らかにする。まず、4.4.1 では 4.3 で見たデンマーク語の非語彙的抱合と同じ現象がスウェーデン語にもあることを示し、それと不変化詞動詞との共通点を見る。次に、4.4.2 では一種の語彙的抱合と見なすことのできる複合動詞と不変化詞動詞の関係を探ることにより、スウェーデン語の不変

^{*3} ただし、(62d) については、決定詞が指定部の位置に現れるものであるとすると、スウェーデン語の不変化詞は指定部を持たないという特徴を一致することになる。

化詞動詞が非語彙的抱合の結果であることを明らかにする。

4.4.2 非語彙的抱合と不変化詞動詞

4.3 で見たデンマーク語の動詞と名詞の組み合わせは、2.5.2 で見たスウェーデン語の現象と同様である。2.5.2 では、動詞と裸名詞の組み合わせが不変化詞動詞の一種であるとした。これは音韻的な特徴と語順において、他の不変化詞動詞と同じ振舞いを示すためである。したがって、スウェーデン語の動詞と裸名詞の組み合わせが非語彙的抱合であることを示せば、間接的にはあるが、他の不変化詞動詞も非語彙的抱合の一種であると言えることができるはずである。次の (65) を見てみよう。

- (65) a. Peter **köpte** ett **hus**.
 P. buy.PAST a house
 ‘Peter bought a house.’
- b. Peter **köpte** **hus**.
 P. buy.PAST house
 ‘Peter did house-buying./Peter bought a house.’

(65a) は通常の動詞と名詞句の組み合わせである。一方、(65b) は動詞と冠詞のついていない裸名詞の組み合わせである。これが語彙的な抱合を起こして形態的な一語になっていないことは次の (66a) と (66b) から明らかであろう。

- (66) a. **Köpte** Peter **hus**?
 buy.PAST P. house
 ‘Did Peter do house-buying?/Did Peter buy a house?’
- b. ***Köpte** **hus** Peter?
 buy.PAST house P.

スウェーデン語でも疑問文を形成する際、定形動詞が主語名詞句の前に置かれるが、その際動詞だけがその位置に置かれ、(66b) のように動詞と裸名詞が共に文頭に位置することはない。従って、動詞と裸名詞が語を成していないのは明らかである。一方で、*did house-buying* という訳からも分かるように、(65b) は慣習化された活動を表し、また裸名詞は非特定のである。また、文法数に関してもニュートラルである。次の文を見てみよう。

- (67) a. Peter **köpte** ett **hus**. Ett i Stockholm och ett i Göteborg.
 P. buy.PAST a house one in Stockholm and one in Göteborg
 ‘Peter bought a house. One in Stockholm and one in Göteborg.’
- b. Peter **köpte** **hus**. Ett i Stockholm och ett i Göteborg.
 P. buy.PAST house one in Stockholm and one in Göteborg

(67a) から分かるように，通常の動詞と名詞句の組み合わせを含む文では，*Ett i Stockholm och ett i Göteborg* ‘one in Stockholm and one in Göteborg.’ という句を続けることができないが，(67b) では同じ句を続けることができる．これは裸名詞が文法数的にニュートラルであることために可能になっているものと思われる．

以上，スウェーデン語の動詞と裸名詞の組み合わせは，(62) の特徴を備えていて，かつ語彙的な抱合は起こしていないことから，非語彙的抱合の一種であるということが出来る．2.5.2 で見たように動詞と裸名詞の組み合わせも不変化詞動詞と認められるとすると，スウェーデン語の不変化詞動詞は非語彙的抱合を起こしているということができる．

4.4.3 語彙的抱合と不変化詞動詞

スウェーデン語の不変化詞動詞が非語彙的抱合を起こしている証拠として，別の現象を見てみよう．この節では，語彙的抱合を起こしたと見なすことができる複合動詞と不変化詞動詞の関係を観察し，不変化詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしているということを明らかにしたい．

まずは語彙的抱合と見なすことができる複合動詞の例を見てみよう．

- (68) a. Peter **hogg** Anna med kniv
 P. cut.PAST A. with knife
 ‘Peter cut Anna with a knife.’
- b. Peter **kniv-hogg** Anna.
 P. knife-cut.PAST A.
 ‘Peter cut Anna with a knife.’

(68a) は動詞と前置詞句 *med kniv* ‘with knife’ を含む通常の文である．一方，(68b) では名詞 *kniv* ‘knife’ が動詞と複合し複合動詞を成している．次の (69a) から分かるように，

疑問文形成の際に，名詞と動詞が共に主語名詞句の前に位置し，(69b)のように動詞部分だけが主語名詞句の前に位置することはできないことから，一語を成していると言うことができる．

- (69) a. **Kniv-högg** Peter Anna?
 knife-cut.PAST P. A.
 ‘Did Peter cut Anna with a knife?’
 b.* **Högg** Peter **kniv** Anna?
 cut.PAST P. knife A.

以上のように，このような複合動詞は語彙的抱合の一種と見なすことができる．この節では主に名詞と動詞からなる複合動詞と不変化詞動詞の関係を探求することで，不変化詞動詞が非語彙的抱合の産物であることを明らかにする．

さて，名詞と動詞からなる複合動詞は英語やドイツ語などのゲルマン系言語では，生産的な語形成のパターンではない．同じ系統に属するスウェーデン語も名詞と動詞からなる複合動詞は非常に限られた数しかなかったが，1900年代に入ってこのような語形成がかなり自由に作られるようになってきたと言われている（Åkermalm (1957)）．

このような名詞と動詞からなる複合動詞では，付加詞である名詞が動詞に対して抱合したものが大半である．Josefsson (1998: 79) によるとそのような複合動詞は次のように分類できるという．

- (70) a. Vi jul+handlar alltid på Tempo. (Time)
 we Christmas+shop always on Tempo
 b. Vi fjäll+vandrade i somras. (Location)
 we mountain+hiked this summer
 c. Studenterna foto+kopierade avhandlingen. (Instrument)
 students-the photo+copied thesis-the
 d. Familien fot+vandrade i Sarek. (Means)
 family-the foot+walked in Sarek
 e. Stenström panik+sålde sitt hus. (Circumstance)
 Stenström panic-sold his house
 f. Olsson rekord+sprang sträckan på tre minuter. (Degree)
 Olsson record+ran distance-the on three minutes

これらの付加詞が抱合した複合動詞は不変変化動詞との分布に関して、面白い現象が見られる。次の例を見てみよう。

- (71) a. *Peter **kniv-högg** **ihjäl** Anna
 P. knife-cut.PAST to.death Anna
 ‘Peter cut Anna to death.’
- b. *Stenström **panik-sålde** **bort** sitt hus.
 Stenström panic-sell.PAST away his house
 ‘Stenström sold his house in a panic.’
- c. *Han **snabb-städade** **rent** sitt rum.
 he quick-clean.PAST clean his room
 ‘He tidied up his room’

上の例からも分かるように、付加詞を抱合した複合動詞は不変変化動詞と共起しない。例えば、(71a) では、複合動詞 *kniv-högg* ‘knife-cut’ と 不変変化動詞 *ihjäl* ‘to death’ が用いられているが、非文となっている。これらの文法性は、何らかの意味的な理由によるものではない。次の例を見てみよう。

- (72) Peter **kniv-högg** Anna **till döds**.
 P. knife-cut A. to death

上記の例では、複合動詞 *kniv-högg* が不変変化動詞 *ihjäl* と同義の前置詞句 *till döds* ‘to death’ と共に用いられているが、文法的な文となっている。したがって、(71a) は複合動詞がなんらかの意味的な理由により結果述語と共起できず非文になっているわけではないと考えられる^{*4}。以上見てきたように、項を抱合した複合動詞は不変変化動詞とは共起しない。

スウェーデン語の複合動詞の多くは付加詞に相当する名詞が抱合されたものであるが、項に相当するものが抱合されたものも、若干存在する。興味深いのは、項が抱合された複合動詞は不変変化動詞と共起するという点である。次の例を見てみよう。

^{*4} 付加詞を抱合した複合動詞と不変変化動詞が共起しないというのは、コーパスからも明らかになった。Tohno (2004) では、不変変化動詞 *ihjäl* と前置詞句 *till döds* に関してコーパスによる調査を行った。不変変化動詞 *ihjäl* と共起した複合動詞は一件も見つからなかった。一方、前置詞句 *till döds* は、*kniv-hugga* ‘knife-cut’, *kniv-skära* ‘knife-cut’, *miss-handla* ‘ill-treat’, *el-chocka* ‘electro-shock’, *van-vårda* ‘ill-take.care.of’ などの複合動詞と共起した例が見つかった。

- (73) a. Peter **damm-sög** **bort** brödsmulor.
 P. dust-vacuumed away bread.crumbs
 ‘Peter vacuumed out breadcrumbs.’
- b. De **lag-stiftade** **fram** en förkortning av arbetstiden.
 they law-made forward a reduction in working hours
 ‘They promote a reduction of working hours by law.’

(73a) では *damm-suga* ‘dust-vacuum’ という複合動詞が，(73b) では *lag-stifta* ‘law-make’ という複合動詞が用いられている．どちらも，抱合している名詞は動詞に対して項の関係にあり，不変化詞と共起することができている．

以上，この節では付加詞が抱合された複合動詞が不変化詞と共起でできるのに対して，項を抱合した複合動詞は不変化詞と共に用いることができないということを見た．

次の節では，不変化詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしていると考えと，このような複合動詞と不変化詞の共起関係をうまく説明できることを明らかにしたい．

4.4.4 語彙的・非語彙的抱合の意味構造

この節では，前節で見た不変化詞動詞と複合動詞の関係を意味構造で説明することを試みる．ところで LFG で仮定されている各構造のうち，構成素構造と意味構造の二つ構造から，語彙的抱合，非語彙的抱合を捉えるとどうなるだろうか？ここでは次のように捉えることができるものと仮定する．語彙的抱合とは構成素構造においても，意味構造においても，抱合される要素と動詞は一つの語である．一方，非語彙的抱合は構成素構造においては，抱合される要素と動詞は別々の語であるが，意味構造においては一つの語であると定義する．以上をまとめると次の表のようになる．

	語彙的抱合	非語彙的抱合
構成素構造	1 語	2 語
意味構造	1 語	1 語

表 4.2 語彙的・非語彙的抱合と構成素構造・意味構造における語彙性

上の表にあるように，抱合される要素と動詞は，語彙的抱合でも非語彙的抱合でも，意

味構造においては1語であると仮定する。

さて、前節では項が抱合される場合と付加詞が抱合される場合があると述べたが、これも語彙的抱合と非語彙的抱合との観点から整理しておこう。

	語彙的抱合	非語彙的抱合
項の抱合	<i>damm-suga</i> (dust-vacuum)	<i>köra bil</i> (drive car)
付加詞の抱合	<i>kniv-hugga</i> (knife-cut)	<i>sparka bort</i> (kick away)

表 4.3 語彙的・非語彙的抱合と項・付加詞の抱合

語彙的抱合に関しては前節で述べたように、*kniv-hugga* ‘knife-cut’ のような付加詞を抱合したものがほとんどであるが、*damm-suga* ‘dust-vacuum’ のような項を抱合したものも存在する。一方、*köra bil* ‘drive car’ のような動詞と裸名詞の抱合は、動詞の項が抱合したものと考えられる。さてこの節では、*sparka bort* ‘kick away’ のような不変化詞動詞が付加詞の非語彙的抱合であると仮定すると、前節の問題を解決することができるということを明らかにする。

第1章でも述べたように、本稿では概念構造 (Conceptual Structure) を採用する。ここでは抱合をいかに概念構造で捉えるかことができるかに注意しながら見ていこう。

項の抱合

項の抱合は動詞語幹の概念構造の変項部分を、項の概念構造で埋め、意味構造における一つの述語を作ることと考える。

例えば、*köra bil* ‘drive car’ において、*köra* ‘drive’ の意味は (74a) のように記述することができるだろう。ACT-ON の第2項は乗り物でなければならないという選択制限がある。*köra bil* の意味はその部分を *köra* の概念構造の第2項の部分を *bil* ‘car’ の概念構造で埋めたものとなる (= (74b))。

(74) a. *köra* ‘drive’ :

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [\text{VEHICLE}]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE} ([x], [\text{VEHICLE}])]) \end{array} \right]$$

b. *köra bil* ‘drive car’ :

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [\text{CAR}]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE} ([x], [\text{CAR}])]) \end{array} \right]$$

さて、語彙的抱合の場合も同様である。*damm-suga* ‘dust-vacuum’ において、動詞語幹 *suga* ‘vacuum’ の意味は (75a) のように記述することができるだろう。一方、*damm-suga* の意味は ACT-ON の第2項を *damm* ‘dust’ の概念構造で埋めた (75b) になる。

(75) a. *suga* ‘vacuum’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [y]) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}([y], [\text{TO} ([\text{IN}([x])])]) \end{array} \right]$$

b. *damm-suga* ‘dust-vacuum’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [\text{DUST}]) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}([\text{DUST}], [\text{TO} ([\text{IN}([x])])]) \end{array} \right]$$

付加詞の抱合

次に付加詞の抱合の意味構造を考えよう。付加詞の抱合とは、意味構造において付加詞を付け加えるか、動詞語幹が持つ付加詞部分の変更を埋めることであると仮定しよう。

まずは、語彙的抱合である *kniv-hugga* ‘knife-cut’ から考えてみよう。*hugga* ‘cut’ は (76a) にあるように結果と手段の二つの意味的付加詞を持つと考えられる。*kniv-hugga* ‘knife-cut’ の意味はその意味的付加詞のうち手段の中の項を埋めることであると考えられる。

(76) a. *hugga* ‘cut’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [y]) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}([y], [\text{TO}([\text{INJURED}])])]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE}([x], [\text{CUTLERY}])]) \end{array} \right]$$

b. *kniv-hugga* ‘knife-cut’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [y]) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}([y], [\text{TO}([\text{INJURED}])])]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE}([x], [\text{KNIFE}])]) \end{array} \right]$$

次に *sparka bort* ‘kick away’ を非語彙的抱合の結果であると仮定して意味構造を考えよう。 *sparka* ‘kick’ の意味構造は (77a) のように記述することができるだろう。ここでは仮に、働きかけの主事象と手段を表す意味的付加詞からなるものとする^{*5}。それに対して、 *sparka bort* ‘kick away’ の意味は (77b) にあるように、 *bort* ‘away’ が結果を表す意味的付加詞を加えたと考えることができる。

(77) a. *sparka* ‘kick’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [y]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE}([x], [\text{FOOT}])]) \end{array} \right]$$

b. *sparka bort* ‘kick away’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [y]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE}([x], [\text{FOOT}])]) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}([y], [\text{TO}([\text{FAR AWAY}])])]) \end{array} \right]$$

^{*5} ここでは「壁を蹴る」のように物体の移動を伴わない意味の *sparka* ‘kick’ の意味を仮定している。

項・付加詞の抱合の回数

このような意味構造における抱合が無制限に起こるとは考えにくい．ここでは仮に，項の抱合も付加詞の抱合もそれぞれ一回ずつしか起こらないと考えよう．ただし，項の抱合と付加詞の抱合は別物であるからそれらが同時に起こる可能性はあると考える．次の節では以上を踏まえた上で，複合動詞と不変化詞の共起関係の問題を考えてみよう．

4.4.5 複合動詞と不変化詞の共起関係

まずは，付加詞を抱合した複合動詞と不変化詞が共起できない理由を考えよう．(78a)からもわかるように，付加詞を抱合した複合動詞と不変化詞は共起しない．もちろん，(78b)のように複合動詞のみ，あるいは(78c)のように不変化詞動詞のみの場合は全く問題はない．

- (78) a. *Peter **kniv-högg** **ihjäl** Anna
 P. knife-cut.PAST to.death Anna
 ‘Peter cut Anna to death with a knife.’
- b. Peter **kniv-högg** Anna
 P. knife-cut.PAST Anna
 ‘Peter cut Anna with a knife.’
- c. Peter **högg** **ihjäl** Anna
 P. cut.PAST to.death Anna
 ‘Peter cut Anna.’

そこで，*hugga* ‘cut’ に *kniv* ‘knife’ と *ihjäl* ‘to death’ の両方を付加した意味構造を考えてみよう．

- (79) *kniv-hugga ihjäl* ‘knife-cut to.death’

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [y]) \\ \text{[RESULT ([GO([y], [TO([INJURED])])])]} \\ \text{[MEANS ([USE([x], [KNIFE])])]} \\ \text{[RESULT ([GO([y], [TO([DEAD])])])]} \end{array} \right]$$

上記の下線部にあるように, *kniv* ‘knife’ は *hugga* ‘cut’ の手段を表す付加詞内の項を埋めている。一方, *ihjäl* ‘to death’ は動詞 *hugga* に結果の付加詞を加えていることになる。付加詞の抱合が一回のみ有効であると考えれば, ここでは付加詞の抱合が2度起きているので非文になると説明することができる。

次に, 項を抱合した付加詞と不変化詞がなぜ共起可能なのかを, 次の例文で考えてみたい。

- (80) Peter **damm-sög** **bort** brödsmulor.
 P. dust-vacuum.PAST away bread.crumbs
 ‘Peter vacuumed out breadcrumbs.’

suga ‘vacuum’ に *damm* ‘dust’ と *bort* ‘away’ の両方を加えた意味構造を考えてみよう。

- (81) *damm-suga bort* ‘dust-vacuum away’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [\underline{\text{DUST}}]) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}([\text{DUST}], [\text{TO}([\text{IN}([x])])]) \\ [\underline{\text{RESULT} ([\text{GO}([\text{DUST}], [\text{TO}(\text{EXTINCT})])} \end{array} \right]$$

すでに見たように, *damm-suga* ‘dust-vacuum’ において, *damm* は動詞に対して項の抱合を起こしていて, 動詞の意味構造の主事象の第2項を埋めている。一方, 不変化詞が付加詞の抱合であると考えれば, 意味構造中の最終行の意味を付加していることになる。これは項の抱合と付加詞の抱合という異なる種類の抱合が起きているために, 可能であると考えることができる。

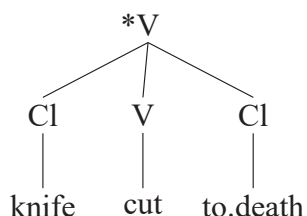
ここまで見てきたように, 複合動詞と不変化詞の共起関係は, 意味構造レベルでの抱合という考え方でうまく説明することができる。しかし, この現象に対する説明は他のレベルではできないだろうか? 次節では統語レベルでの一般化が可能かどうか考える。

4.4.6 Abstract Clitic Hypothesis による説明

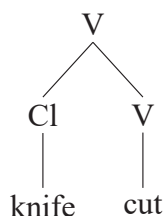
複合動詞と不変化詞の共起関係に対する、意味構造以外のレベルで説明の最も有力な代案は Keyser and Roeper (1992) による ‘Abstract Clitic Hypothesis’ であろう。この仮説は、全ての英語の動詞には invisible な接語 (clitic) の位置が動詞の前後にあり、接辞 *re-* や 不変化詞 *out* はその接語の位置に生起するというものである。ただし、接語の位置は一つの動詞に付き一つであるため、例えば、**regive up* は非文法的となると彼らは説明する。

これをスウェーデン語の複合動詞と不変化詞の共起関係にも応用できるか考えたい。スウェーデン語にも接語の位置が動詞の前後にあり、抱合される要素がその位置を占めると考えると、付加詞を抱合した複合動詞と付加詞の抱合である不変化詞が共起しない理由は、(82a) にあるように接語の位置を二つ用いているためだと説明することができる。一方、(82b) や (82c) は接語の位置をひとつしか用いていないために問題ないと言うことができる。

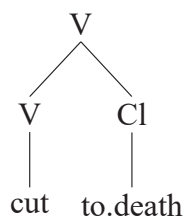
(82) a. *kniv-hugga ihjäl* ‘knife-cut to.death’



b. *kniv-hugga* ‘knife-cut’

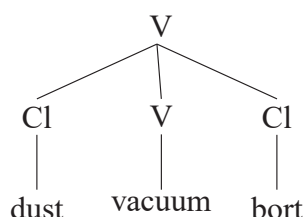


c. *hugga ihjäl* ‘cut to.death’



しかし、この仮説ではなぜ項を抱合した複合動詞と不変化詞が共起できるのかは説明することができない。

(83) *damm-suga bort* ‘dust-vacuum away’



これを説明するためには、項と付加詞で別々の接語の位置が存在するという仮定が必要となり、あまり説明力のある仮説とはいえなくなる。

したがって、統語構造による説明よりは、前節で試みた意味構造による説明のほうが妥当であると思われる。

4.5 非語彙的抱合の説明の検討

ここまでで、不変化詞が動詞に対して、非語彙的抱合を起こしているということを明らかにしてきた。非語彙的抱合を起こしていると見ることにより、不変化詞動詞に見られる特徴のひとつを説明することができる。すでに見てきたように、スウェーデン語の不変化詞は投射しない、つまり指定部や補部を取らない。Toivonen は語が投射するか否かは語毎に指定されていると主張する。一方、不変化詞が動詞に対して意味構造で抱合を起こしているとする、不変化詞に投射がないというのは、抱合の産物であると説明することが

できる．というのも，一般に，抱合されるのは語以下の単位で，語より大きな句は基本的に抱合されないからである (Baker (1988) など参照．) *6．

しかし，不変化詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしていると考えると，一見説明できないような現象も存在する．不変化詞の等位接続の現象である．次の例文を見てみよう．

- (84) a. Han **klädde** **på och av** sig.
 he dress.PAST on and off himself
 ‘He put on and take off clothes.’
 b. Han **bär** **in och ut** alla grejer.
 he carry.PPES in and out all thing.Pl
 ‘He carries in and out all the stuff.’

上記の例からも分かるように，スウェーデン語の不変化詞は等位接続することができる．これは，不変化詞が句を成していることになり，不変化詞が動詞に対して抱合を起こしているという主張に反するように見える．

しかし，どのような不変化詞でも等位接続されるというわけではない．まず，*på och av* ‘on and off’, *in och ut* ‘in and out’ のように反義となる不変化詞動詞の組み合わせでなくてはならない．したがって，*in och upp* ‘in and up’ のような反義を成さない不変化詞が等位接続された場合は非文となる．

- (85)*Han **bär** **in och upp** alla grejer.
 he carry.PPES in and upp all thing.Pl

また，反義関係にある不変化詞が等位接続された場合，それを含む文の行為が反復されたという解釈が得られる．したがって，たとえ反義関係をなすような不変化詞が等位接続されたとしても，反復の解釈が得られないような場合，不変化詞が現れる位置には現れない．次の例を見てみよう．

*6 ただし，ニウエ語のように抱合された名詞を形容詞や関係節が修飾する言語も存在する (Massam 2001) ．

- (86) Han slog (* sönder och samman) honom (sönder och samman)
 he beat.PAST to.pieces and together him to.pieces and together
 ‘He beat him to a pulp.’

等位接続されている *sönder* ‘to.pieces’ と *samman* ‘together’ は共に不変化詞であり，ほぼ反義関係にある．しかし，不変化詞が現れる位置（目的語名詞句より前の位置）には現れない．これはこの等位接続された不変化詞が殴られた結果状態を表し，反復の解釈ができないために，不変化詞の位置に現れないものと考えられる．以上見てきたように，等位接続される不変化詞は，どのようなものでも良いわけではなく，反義関係にあり，かつ，反復の解釈を許容するものでなければならない．

一般に複合語の中に句が包摂されることはない (Roeper and Siegel (1978)) と言われるが，次の例のように，複合語の中に反義関係にある語が等位接続された形で現れることがある．

- (87) a. **in- och utvandrare**
 in- and out.rambler
 ‘immigrant and emigrant’
 b. solens **upp- och nedgång**
 sun.DEF.GEN up- and down.time
 ‘surise and sunset’

これらの現象と不変化詞動詞で見た現象は，どちらも反義関係にある語が等位接続された場合であるという平行性が見られる．反義関係にある等位接続された語が複合語に包摂され一語をなすということは，非語彙的な抱合においてもそのような現象が起きうることを示している．したがって，この節で見てきた現象は，不変化詞が非語彙的抱合を起こしているという主張の反例とはならない．

第5章 項構造

5.1 はじめに

前章では意味構造において不変化詞が動詞に対して抱合を起こしている、つまり非語彙的抱合を起こしているという主張を展開した。この章では、意味構造と密接に関連する項構造について考察し、スウェーデン語の不変化詞動詞において、項がどのように決定しているか考察する。特にドイツ語の不変化詞動詞に関して、「不変化詞動詞においては、内項は常に不変化詞によって導入され、動詞の内項は統語的に実現しない」という McIntyre (2001, 2003), Zeller (2001a) の仮説を同じゲルマン系言語に属するスウェーデン語で検証する。それを受けて、項構造がレキシコンで決定するとする伝統的な語彙主義に基づき、不変化詞動詞が項構造においても 1 語であることを主張する。

5.2 不変化詞の意味構造

意味構造から項構造へのマッピングを考えるには、意味構造がどのようなになっているかを見る必要がある。前章で不変化詞動詞の意味構造を見たが、本章では不変化詞自体の意味を詳しく考察し、意味構造と項構造のマッピングを考える。以下では、不変化詞の意味を考える上で注意すべき 2 点に焦点を当てる。

5.2.1 イベント性としての不変化詞の意味構造

不変化詞の概念構造に対しては二つのタイプの概念構造を設定することが可能である。不変化詞 *upp* ‘up’ を例に見てみよう。

- (88) a. [_{PATH} TOWARD ([ABOVE])]
 b. [_{EVENT} GO ([*x*], [_{PATH} TOWARD ([ABOVE])])]

一つは (88a) のように不変化詞の意味に経路概念のみを認めるというもので Jackendoff (1983) が英語の不変化詞に関して設定しているものである。一方、(88b) のように不変化詞をイベントと捉える立場もあり、ドイツ語の不変化詞に関して Zeller (2001a) が採用している分析である。本稿では、後者の立場を取る。不変化詞にイベント性が認められるかどうかは本稿の範囲を超える問題であり、ここでは論じる余裕がない。ただ、意味構造と項構造のマッピングという観点から考えると、後者を採用せざるを得ない。というのも、後ほど詳しく見るが、動詞が下位範疇化しない項が不変化詞動詞の項として現れる場合があり、それらは意味的に不変化詞の項と考えることができる。前者を採用した場合、不変化詞の概念構造の中に変項がなく、不変化詞の意味的な項が不変化詞動詞の項として現れることはない。一方、後者の意味構造だと、変項 x が意味構造が概念構造内にあり、これが不変化詞動詞の項として実現すると捉えることができる。

5.2.2 品詞による意味構造の違い

次の問題点は品詞による意味構造の違いである。次の節で詳しく見ていくが、前置詞としての用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞は項の実現に対して、かなり複雑な様相を呈する。一方、副詞あるいは形容詞として用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞の項構造は単純である。これは、両者の意味構造の違いに起因すると考えられる。前置詞としての用法を持つ不変化詞が意味構造において図 (Figure) と地 (Ground) に相当する二つの変項を持っているのに対して、副詞や形容詞として用法を持つ不変化詞は図 (Figure) に相当する変項しか持たないと仮定すると無理なく説明できると考えられる。本稿で仮定する前置詞としての用法を持つ不変化詞と副詞としての用法を持つ不変化詞の概念構造は以下の通りである。

(89) 前置詞としての用法を持つ不変化詞の意味構造

av ‘off’: [GO ([x (Figure)], [FROM ([ON ([y (Ground)])]))]]

(90) 副詞としての用法を持つ不変化詞の意味構造

upp ‘up’: [GO ([x (Figure)], [TOWARD ([ABOVE])])]

上記の意味構造に関しては次の点を注意したい。両者の意味構造は GO 関数の第 1 項 x (Figure) が空であるという点で共通しているが、前置詞としての用法を持つ不変化詞がもう 1 つ open argument である y (Ground) を持っているのに対して、副詞や形容詞としての用法を持つ不変化詞にはないという点で異なる。また、前置詞句に由来する不変化詞と形容詞の用法を持つ不変化詞は、1 つしか open argument (Figure) を持たないという点で副詞としての用法を持つ不変化詞と共通すると考えられる。

以上を踏まえた上で、スウェーデン語の不変化詞動詞の項構造を見ていこう。

5.3 不変化詞動詞と項構造

これまで不変化詞動詞における項構造は一般的に次の二つの場合があると考えられてきた。(Stiebels and Wunderlich (1994) など参照.)

- 不変化詞動詞が動詞の項を継承する場合.
- 不変化詞動詞に動詞が下位範疇化しない項が現れる場合.

次の例文を見てみよう。

- (91) a. Peter **satte** *(**ner**) den tunga väskan.
 P. put.PAST down the heavy bag.DEF
 ‘ Peter put down the heavy bag ’
- b. Peter **kastade** (**ner**) bollen från balkongen.
 P. throw.PAST down ball.DEF from balcony.DEF
 ‘ Peter threw the ball down from the balcony. ’

(91) は動詞の項を継承していると考えられる例である。(91a) では不変化詞は斜格語であり、一方、(91b) では不変化詞が付加詞として機能している。どちらにおいても、動詞の項構造は変更されていない。一方、次の (92) は動詞が選択しない項が目的語として現れている。

(92) Peter **tryckte** *(**ner**) hissen.

P. press.PAST down elevator.DEF

‘ Peter pressed the button in order for the elevator to go down. ’

以上のように，不変化詞動詞では動詞の項を継承する場合としない場合の二つがあると考えられてきたが，McIntyre (2001, 2003), Zeller (2001a) は不変化詞動詞の内項は常に不変化詞によって導入されるとする仮説を出している。

(93) Internal arguments of a particle verb are always introduced by the particle. [...] The base verb no longer links any of its internal arguments to syntax. [Zeller (2001a: 459)]

以下ではまず 5.3.1 で，内項が不変化詞によって導入されると考えると説明することができる現象，つまり，動詞によって下位範疇化されていない項が現れる現象を見ることで，上記の仮説の有効性を確認する。またその中で，不変化詞の意味構造をイベントと捉えること，そして，品詞により意味構造が異なるとする仮定の正しさも明らかになる。さらに 5.3.1 では，上記の仮説に取って問題となる (91) のような例，特に不変化詞が斜格語であると言われている (91a) のような例に関して，スウェーデン語から上記の仮説を支持する現象を提示する。

5.3.1 動詞によって下位範疇化されていない項

以下では，まず動詞によって下位範疇化されていない項が現れる場合を，自動詞文・他動詞文，二重目的語文の順に見ていくことにする。

5.3.1.1 「擬似主語」構文

英語の結果構文 (resultative construction) において，動詞が下位範疇化しない項が目的語（いわゆる，擬似目的語 (fake object)）として現れることはよく知られており，これまで様々な分析が行われてきた (Simpson (1983), Carrier and Randall (1992), Goldberg (1995), Levin and Rappaport Hovav (1996), 影山 (1996), Washio (1997), Goldberg and Jackendoff (2004) など)。また，擬似目的語を含む結果構文がゲルマン諸語に広く見られ

る現象であることも先行研究から明らかになっている (Kaufmann and Wunderlich (1998), Lødrup (2000) など)。北ゲルマン語に属するスウェーデン語も例外ではなく、結果構文において擬似目的語が現れる。下記の例ではそれぞれ再帰代名詞 *sig* と *sin son* ‘her son’ が動詞によって選択されていない項である。

- (94) a. Han skrek sig *(hes).
 he shout.PAST himself hoarse
 ‘He shouted himself hoarse.’
 b. Hon sjöng sin son*(till sömns).
 she sing.PAST her son to sleep
 ‘She sang her son to sleep.’

ところが、スウェーデン語には擬似目的語が現れる構文以外に、動詞が選択しない項が主語として現れる構文が存在する。次の例を見てみよう。

- (95) a. Snön regnade*(bort).
 snow.DEF rain.PAST away
 ‘The snow dissapeared because of the rain.’
 b. Marken växte *(igen) med buskar
 ground.DEF grow.PAST covered with bush.PL
 ‘The ground was coverd with bush since it grew up.’
 c. Badkaret rann *(över).
 bathtub.DEF flow.PAST over
 ‘The bathtab overflowed.’

上記の (95) の主語名詞句は、動詞の直後にある *bort* ‘away’, *igen* ‘covered’, *över* ‘over’ がない場合に非文になることから、動詞によって下位範疇化された項ではないことが分かる。これらの主語名詞句は不変化詞の表す状態や位置の変化の主体であると見なすことができるので、不変化詞のなんらかの意味的な項であると考えられる。本稿では、このような、動詞が下位範疇化しない主語を擬似主語 (fake subject)、また擬似主語を含む文を擬似主語構文 (fake subject construction) と呼ぶことにする。^{*1}

^{*1} McIntyre (2004:544) によると、同様の構文はドイツ語にも存在する。

擬似主語が現れるのは非動作主的な自動詞の一部を主動詞とする自動詞構文に限られ、動作主的な自動詞や他動詞の主語位置に動詞が選択しない項が現れることはない。動詞ごとにその特徴を見て行こう。

天候動詞

まず例文 (95a) でも見た *regna* ‘rain’ や *snöa*, ‘snow’, *blåsa* ‘blow’ などの天候動詞 (weather verb) が挙げられる。これらの動詞は、通常、英語などの天候動詞と同様に虚辞 *det* ‘it’ を主語として取る。

- (96) Det { *snöade* / *regnade* / *blåste* } igår.
 it { snow.PAST / rain.PAST / blow.PAST } yesterday
 ‘It{ snowed/rained/blew } yesterday.’

上の例からも分かるように天候動詞はもともと項を取らない。したがって、次の (97) に挙げられた文で主語として現れている項は、不変化詞の意味的な項にあたるものと考えられる。

- (97) a. *Vägarna snöade igen under natten.*
 road.PL.DEF snow.PAST closed under night.DEF
 ‘The roads were closed during the night because of the snow.’

-
- a. Das Fenster wächst zu. [* das Fenster wächst zu]
 the window grows to/obscured

‘The window is becoming overgrown.’

(McIntyre 2004:544)

- b. Die Wanne fließt schlecht ab. [* die Wanne fließt]
 the bathtub flows badly away

‘The bathtub empties badly.’

(*ibid.*)

英語にも次の (c) のような文が存在するが、これは擬似主語構文ではない。というのも、これには対応する他動詞文 (= (d)) が存在し、(c) の自動詞文の主語 *the candle* が (d) の他動詞文の目的語に対応することから、(c) は (d) が反使役化を起こしたものだと考えられる。先に挙げたスウェーデン語の文は、対応する他動詞文は存在しないことから、反使役化によってできたものではない。

- c. The candle blew *(out).
 d. The wind blew out the candle.

- b. Tävlingen **regnade bort.**
 competition.DEF rain.PAST away
 ‘The competition was rained out.’
- c. Tegelpannor hade **blåst ner** från taket.
 roofing.tile.PL have.PAST blow.PERF.P down from roof.DEF
 ‘The roofing tiles blew down from the roof.’

主語として現れる項の意味役割には, (97a) や (97b) のように状態変化の主体が現れる場合と, (97c) のように位置変化の主体が現れる場合がある。どちらの場合も文の意味は, 動詞によって表された出来事が原因となり, 別の出来事が起こったという因果関係を表している。例えば, (97a) を例に取ると, 「雪が降った」という出来事が原因となり, 「道路が通行不能になった」という出来事が起こったということが一つの節で表現されている。

‘Grow’ verb

天候動詞のように項を一つも持たない動詞ばかりでなく, (95b) の *växa* ‘grow’ や *gro* ‘grow’ のように項を取る動詞 (‘grow’ verb) も擬似主語構文に現れる。これらの動詞は通常, 成長する主体を主語として取るが, 次の (98) のように不変化詞の意味的な項を擬似主語として取ることもできる。

- (98) a. Marken **växte igen** med buskar.
 ground.DEF grow.PAST covered with bush.PL
 ‘The ground was covered with bush since it grew up.’
- b. ...allergier kan **växa bort** med åldern.
 ...allergy.PL can grow.INF away with year.PL.DEF
 ‘Allergies can disappear as they grow up.’

この場合, (98a) の *marken* ‘the ground’ のように植物などが育つ場所を主語として取る場合や, (98b) の *allergier* ‘allergies’ のように主体に付随するものを主語として取ることができる。どちらも主語の状態変化を表す。もともとの動詞の項は (98a) の *med buskar* ‘with bushes’ のように付加詞として現れうる。文の意味はこの場合も, 二つの出来事の因

果関係が表されている。例えば (98a) では、「低木が茂った」結果、「地面が覆われた」という因果関係を持つ二つの出来事が一つの節にコード化されている。

‘Flow’ verb

更に, (95c) の *rinna* ‘flow’ や *flöda* ‘flow’, *svämma* ‘spill’, *droppa* ‘drip’ のような液体の移動を表す動詞 (‘flow’ verb) も 不変化詞の意味的な項を擬似主語として取る。これらの動詞は通常, 移動する液体を表す名詞句を主語として取る。しかし (99) の例からも分かるように, 液体が流れる場所を意味する名詞句を主語として取る。文全体の意味は二つの出来事の因果関係を表し, 動詞によって表される「流れる」という出来事が原因となって, 液体が容器から溢れるという出来事を描出する。もとの動詞の項は (99a) の *av tårarna* ‘of the tears’ のように斜格語として現れたり, (99b) のように現れなかったりする。

- (99) a. Hennes ögon **svämmar över** av tårarna.
 her eye.PL spill.PRES over of tear.PL.DEF
 ‘Her eyes were brimming with tears.’
- b. Badkaret **rann över**.
 bathtub.DEF flow.PAST over
 ‘The bathtub overflowed.’

ただし, 上記の例文の主語名詞句が本当に不変化詞の意味的な項であるかどうかは注意が必要である。一般的に液体とそれが流れる場所の関係は, 内容物とその容器の関係であり, 隣接性に基づくメトニミーの関係が成り立つ。したがって, メトニミーの効果により容器で内容物を指すことが可能になっているという説明もできるかもしれない。しかし, 次の (100a) にもあるように, *över* ‘over’ を伴う場合には, 主語名詞句として容器も液体も取ることができるが, (100b) にあるように *över* がない場合には, 容器である *badkaret* ‘the bathtub’ を主語として取れない。したがって, *över* が容器を表す主語名詞句を導入していると考えられる。

- (100) a. {Badkaret / Badvattnet} rann över.
 bathtub.DEF / bath.water.DEF flow.PAST over
 「{ 浴槽/浴槽の水 } が溢れた .」
- b. {*Badkaret / Badvattnet} rann.
 bathtub.DEF / bath.water.DEF flow.PAST

それでは、容器を表す主語名詞句はどういった意味で、*över* の項であると言えるだろうか？ 一般的に、空間を表す前置詞や不変化詞の意味は 図 (figure) と 地 (ground) の関係として捉えられる。(100a) の不変化詞 *över* ‘over’ について考えると、図 である「浴槽の水」が地である「浴槽」から溢れるということを表している。したがって、容器を表す主語名詞句は *över* の 地 ということになる。ただし、単なる地というよりは、浴槽の水が溢れることにより、何らかの影響を受けていると見なすことができる。

以上、ここまで擬似主語構文の特徴を見てきたが、まとめると以下のようなになる。

① 非動作主的な自動詞が主動詞として現れる。② 擬似主語として現れる項は不変化詞の意味的な項である。③ 動詞の項は付加詞として現れうる。④ 動詞の表す出来事が原因となり、不変化詞の表す出来事が結果として起こるという「因果関係」を表す。

項がどのように実現するか、(95b) を例に見てみよう。

- (101) Marken växte igen med buskar. (= (95b))
 ground.DEF grow.PAST covered with bush.PL

主動詞である *växa* ‘grow’ の概念構造は (102) のように記述することができる。一項動詞であることから変項を一つ持つ構造である。

- (102) [GO_{IDENT} ([*x*], [TOWARD_{IDENT} ([BIG])])]] (*växa* ‘grow’ の概念構造)

不変化詞 *igen* ‘covered’ は、次のような変項を一つもつ概念構造を設定することができる。

- (103) [GO_{IDENT} ([*y*], [TO_{IDENT} ([COVERED])])]] (*igen* ‘covered’ の概念構造)

(104) *växa igen* ‘grow covered’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{GO}_{\text{IDENT}} ([x], [\text{TOWARD}_{\text{IDENT}} ([\text{BIG}])) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}_{\text{IDENT}} ([y], [\text{TO}_{\text{IDENT}} ([\text{COVERED}])])])]) \end{array} \right]$$

上記の意味構造では、動詞の変項 x と不変化詞の変項 y があるが、不変化詞の変項が項として実現することとなる。

以上、擬似主語構文を見てきたが、ここから明らかになるのは、不変化詞の項が不変化詞動詞の項として優先して実現するという点である。

5.3.1.2 他動詞文

次に他動詞文に現れる、動詞によって下位範疇化されていない項を見ていく。特に McIntyre (2003) が ‘landmark flexibility’ と呼ぶ現象がスウェーデン語にも見られる事を確認する。(これらの現象に関するスウェーデン語の記述としては Norén (1996) が詳しい。)

次の *tvätta* ‘wash’ という動詞を含む他動詞文を見てみよう。

(105) a. Peter *tvättade* *händerna*.

P. wash.PAST hands.DEF

‘ Peter washed his hands. ’

b.*Peter *tvättade* *smutsen*.

P. wash.PAST dirt.DEF

Lit. ‘ Peter washed the dirt. ’

上記の文では、洗う対象である *händerna* ‘the hands’ を目的語としてとることはできるが、移動物である *smutsen* ‘the dirt’ を目的語として取ることはできない。

次に前置詞としての用法を持つ不変化詞 *av* ‘off’ を含む他動詞文を見てみよう。

(106) a. Peter **tvättade** **av** *händerna*.

P. wash.PAST off hands.DEF

Lit. ‘ Peter washed off his hands. ’

b. Peter **tvättade** **av** *smutsen*.

P. wash.PAST off dirt.DEF

‘ Peter washed off the dirt. ’

この場合, (106b) から分かるように, 洗う対象である *händerna* ‘the hands’ 以外に, 移動物としての *smutsen* ‘the dirt’ が目的語として現れる。これは, 不変化詞によって導入されたものであると考えられる。このように, 不変化詞動詞の目的語として, 不変化詞の 図 (figure) にあたるものと 地 (ground) にあたるものが出現する現象は ‘landmark flexibility’ と呼ばれる (McIntyre 2003)。

一方, 副詞としての用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞ではこの ‘landmark flexibility’ が見られない。次の文を見てみよう。

- (107) a. *Peter tvättade **bort** händerna.
 P. wash.PAST away hands.DEF
 Lit. ‘ Peter washed away his hands. ’
- b. Peter tvättade **bort** smutsen.
 P. wash.PAST away dirt.DEF
 ‘ Peter washed away the dirt. ’

副詞としての用法を持つ不変化詞 *bort* ‘away’ を含む他動詞文でも, 移動物としての *smutsen* ‘the dirt’ が現れる。ところが, 動詞によって下位範疇化されているはずの *händerna* ‘the hands’ は現れることはできない。

これは, 不変化詞動詞の内項が不変化詞によって導入され, かつ, 副詞としての用法をもつ不変化詞が変項として 図 (figure) にあたる一項しか持たないと考えると, 説明することができる。

以上の現象をまとめよう。前置詞としての用法を持つ不変化詞は, (108a) にあるように意味構造に 2 つの変項を持つので, 図 (figure) あるいは 地 (ground) にあたるものが, 目的語として実現する。(106a) では (108b) にあるように 地 (ground) にあたる項が, (106b) では (108c) にあるように 図 (figure) にあたる項が実現してるものと説明することができる。(下記の意味構造で [Ø] は項としては実現しないが, コンテキストから明らかな項を意味する。)

- (108) a. *av* ‘off’ の意味構造

[GO ([(Figure)], [FROM ([ON ([(Ground)])]))]]

b. (106a) の意味構造の不変変化詞の部分

[GO ([Ø], [FROM ([ON ([HANDS])]))]]

c. (106b) の意味構造の不変変化詞の部分

[GO ([DIRT], [FROM ([ON ([Ø])])])]

一方，副詞としての用法を持つ不変変化詞は，(109a) にあるように意味構造に 1 つしか open argument を持たないので，図 (figure) にあたるものだけが目的語として実現する．

(109) a. *bort* ‘away’ の意味構造

[GO ([(Figure)], [TOWARD ([FAR AWAY])])]

b. (107a) の意味構造の不変変化詞の部分

[GO ([Ø], [TOWARD ([FAR AWAY])])]

c. (107b) の意味構造の不変変化詞の部分

[GO ([DIRT], [TOWARD ([FAR AWAY])])]

以上から分かるのは，まず，内項が不変変化詞によって導入されているという点．また，‘landmark flexibility’ という現象が見られるか否かは，不変変化詞が品詞により意味構造が異なると考えるとうまく捉えることができるという点である．

5.3.1.3 二重目的語構文

不変変化詞動詞が自動詞文・他動詞文に現れるケースを見てきたが，不変変化詞動詞は (110) のような動詞句の構造を持った二重目的語構文にも現れうる

(110) [_{VP} V PRT NP NP]

次の例文を見てみよう．

(111) a. Peter **slängde** [_{PRT} **på**] sig en jacka.

P. throw.PAST on himself a jacket

‘ Peter slipped on a jacket. ’

- b. Peter **skickade** [_{PRT} **på**] mig en bok.
 P. send.PAST on me a book
 ‘Peter sent me a book (against my will).’

以上の構文に関しては、不変化詞とそれに続く目的語が前置詞句を成すとみなし、(112)にあるように前置詞句が動詞と目的語名詞句の間に移動したという分析もある (Svenonius 2003)。

(112) [_{VP} V [_{PP} P NP]_t NP t]

しかし、通常、前置詞句が動詞句内で直接目的語より前に現れることはなく、この場合にのみそのような移動を認めることができるかどうか疑問がある。また、通常の二重目的構文と同様に間接目的語の有生性制約が見られる。次の例文を見てみよう。

- (113) a. Hon hängde den nya medaljen [_{PP} **på** { ministern / ministerns bröst /
 she hung.PAST the new medal.DEF on minister.DEF / minister.DEF.POSS breast /
 väggen }].
 wall.DEF
 ‘She hang the new medal on [the minister / the minister’s breast / the wall]’
 b. Hon hängde [_{PRT} **på**] { ministern / * ministerns bröst / *väggen }
 she hung.PAST on minister.DEF / minister.DEF.POSS breast / wall.DEF
 den nya medaljen.
 the new medal.DEF

(113a) は前置詞句を含む文であるが、前置詞の目的語には有生性の制約は見られない。一方、(113a) は不変化詞動詞が目的語を二つ取っている文である。この文の間接目的語は *ministern* ‘the minister’ のように有生でなければならない、*ministerns bröst* ‘the minister’s breast’ のような体の一部や *väggen* ‘the wall’ のような無生物では非文になる。以上を考慮すると当該の構文は二重目的語構文の一種とみなすことが妥当であると思われる。

på ‘on’ 以外にも、前置詞としての用法を持つ様々な不変化詞がこの構文に参加する。次の例文を見てみよう。

- (114) a. Peter **slängde** [_{PRT} **till**] henne en livväst.
 P. throw.PAST to her a life.jacket
 ‘ Peter threw her a life jacket. ’
- b. Peter **slängde** [_{PRT} **i**] sig maten.
 P. throw.PAST in himself food.DEF
 ‘ Peter gobbled down his food. ’
- c. Peter **slängde** [_{PRT} **av**] sig en jacka.
 P. throw.PAST off himself a jacket
 ‘ Peter threw o his jacket. ’
- d. Peter **slängde** [_{PRT} **ur**] sig en massa dumheter.
 P. throw.PAST from himself a lot.of swear.words
 ‘ Peter blurted out a lot of swear words. ’

一方，副詞としての用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞は二重目的語構文には現れない．次の例を見てみよう．

- (115) a.*Peter **slängde** [_{PRT} **upp**] hunden ett ben.
 P. throw.PAST up dog.DEF a bone
 ‘ Peter threw up a bone to the dog. ’
- b.*Peter **skickade** [_{PRT} **tillbaka**] mig en bok.
 P. send.PAST back me a book
 ‘ Peter sent back a book to me. ’

(115a) と (115b) にあるように，副詞としての用法を持つ *upp* ‘up’ や *tillbaka* ‘back’ のような不変化詞は二重目的語構文には現れない．(Teleman et al. (1999b: 421-424) など参照.)

以上のような振舞いは，品詞による意味構造の違いと内項が不変化詞によって導入されるという仮定により説明することができる．前置詞としての用法を持つ不変化詞は 2 つの open argument がある為，その両方をそれぞれ直接内項・間接内項として実現することができる．そこで，二重目的語構文が可能であると説明することができる．具体的に見てみよう．

不変化詞 *på* ‘on’ は (116a) のように、図と地を取る二項述語であると分析することができる。(111b) の意味構造の不変化詞部分は (116b) のようになり、BOOK と ME がそれぞれ直接内項・間接内項として実現することになる。

(116) a. 不変化詞 *på* ‘on’ の意味構造

[GO_{Poss} ([(Figure)], [TO ([ON ([(Ground)]))]])]]

b. (111b) の意味構造の不変化詞部分

[GO_{Poss} ([BOOK], [TO ([ON ([ME]))]])]]

一方、副詞としての用法を持つ不変化詞は 図のみを項として取る一項述語であると考えられる。例えば、*tillbaka* ‘back’ の意味構造は次のように図を項として取る述語として表記することができる。

(117) *tillbaka* ‘back’ の意味構造

[GO ([(Figure)], [TOWARD ([ORIGINAL PLACE])])]]

内項が不変化詞によってのみ決定されたとすると、副詞としての用法を持つ不変化詞は内項を一つしか実現させることができず、二重目的語構文を形成できないと説明することができる。

上記の分析が正しいとすると、直接目的語と間接目的語の両方が動詞によって下位範疇化されていない二重目的語構文が可能であることが予想される。実際、そのような例がコーパスなどに見られる。

(118) a. Bettina Oberesch **red** [PRT **till**] sig guldet ... (Parole corpus)

B.O. ride.PAST to herself gold.DEF

‘ Bettina Oberesch won a goldmedal in horse-riding competition. ’

b. ... han **tjatade** [PRT **till**] sig en gitarr av föräldrarna. (Parole corpus)

he nag.PAST to himself a guitar from parent.Pl.DEF

‘ He nagged his parents for a guitar and got it. ’

以上から，不変化詞動詞を含む二重目的語構文においては，直接内項・間接内項の両方が不変化詞によって導入されていると分析することができる。

以上，ここまでは不変化詞が内項を導入していると考えられる例を，自動詞文・他動詞文・二重目的語文の順に見てきた。

5.3.2 動詞の項を継承しているように見える例

不変化詞が常に内項を導入するとする仮説にとって問題なのは，動詞の項を継承しているように見える不変化詞動詞である。まずは，不変化詞が付加詞であるように見える例を見てみよう。

- (119) Peter **kastade** (**ner**) bollen från balkongen.
 P. throw.PAST down ball.DEF from balcony.DEF
 ‘Peter threw the ball down from the balcony.’

上記の例では，不変化詞 *ner* ‘down’ を取っても項が変わらないので，目的語名詞句は動詞の項であると言える。しかし，動詞と不変化詞の意味構造を考えると，これらの例も不変化詞が内項を導入しているとも考えることもできる。不変化詞 *ner* ‘down’ は次のような概念構造を設定できる。

- (120) *ner* ‘down’: [GO ([*x* (Figure)], [TOWARD ([BELOW])])]

不変化詞 *ner* の変項 *x* が，動詞の内項と同定され，それが不変化詞動詞全体の項として実現されていると考えることも可能である。したがって，これらの例は必ずしも，仮説に対する反例とはならない。

次に，不変化詞が授受動詞や設置動詞など 3 項動詞の斜格語として現れているように見える例について考えてみよう。

- (121) Ge **hit** boken!
 give hither book.DEF
 ‘Give me the book.’

- (122) a. Peter **satte** *(**ner**) väskan.
 P. put.PAST down bag.DEF
 ‘ Peter put down the bag ’
- b. Peter **lade** *(**dit**) boken
 P. lay.PAST thither book.DEF
 ‘ Peter laid the book there. ’

上記の例では，不変化詞は斜格語として、つまり項としての役割を果たしていると言われることがある．そうだとすると，これも仮説に対する反例となる．果たして，そうであろうか？ 詳しく見て行こう．次の例からも分かるように，一般に設置動詞は着点ではなく場所の前置詞を用いる．

- (123) a. Peter satte väskan [på / * till] golvet.
 P. put.PAST bag.DEF [on / to] floor.DEF
 ‘ Peter put the bag on the floor. ’
- b. Peter lade boken [på / * till] bordet.
 P. lay.PAST book.the [on / to] table.DEF
 ‘ Peter laid the book on the table. ’

ところで，スウェーデン語には次の表にあるように，場所を表す副詞と方向を表す副詞のペアが存在する．

Location	Direction	Location	Direction
<i>här</i> ‘here’	<i>hit</i> ‘hither’	<i>uppe</i> ‘up’	<i>upp</i> ‘up’
<i>där</i> ‘there’	<i>dit</i> ‘thither’	<i>nere</i> ‘down’	<i>ner/ned</i> ‘down’
<i>inne</i> ‘in’	<i>in</i> ‘into’	<i>borta</i> ‘away’	<i>bort</i> ‘away’
<i>ute</i> ‘out’	<i>ut</i> ‘out’	<i>hemma</i> ‘at home’	<i>hem</i> ‘to home’

表 5.1 場所と方向の副詞のペア

上記の表のペアのうち，設置動詞で場所を表す副詞と方向を表す副詞のどちらが用いられるか見てみよう．

次の例からもわかるように，前置詞句が現れる位置では，*nere* ‘down’，*där* ‘there’ のように場所の副詞が用いられる．

- (124) a. Peter satte väskan **nere**.
 P. put bag.the down
 ‘ Peter put the bag down. ’
- b. Peter lade boken **där**.
 P. laid book.the there
 ‘ Peter laid the book there. ’

一方，不変化詞が現れる位置では，場所の副詞ではなく，*ner* ‘down’ や *dit* ‘thither’ のような方向の副詞が用いられる．

- (125) a. Peter satte **ner** väskan.
 P. put down bag.DEF
 ‘ Peter put the bag down. ’
- b. Peter lade **dit** boken.
 P. laid to.there book.DEF
 ‘ Peter laid the book there. ’

以上から，設置動詞に現れる不変化詞は単に斜格語として機能し，項構造を充足しているのではないとすることができる．先ほどの例と同じように，不変化詞の変項が，動詞の内項と同定され，それが不変化詞動詞全体の項として実現されていると考えることもできる．

5.3.1 で不変化詞が内項を導入していると考えたと説明がつくを最初見た．また，5.3.2 では，一見すると動詞の項が継承されているように見える例でも，不変化詞によって項が導入されていると考えられることを確認した．したがって，スウェーデン語の不変化詞動詞においても内項は常に不変化詞によって導入されると考えることができ，「不変化詞動詞においては，内項は常に不変化詞によって導入され，動詞の内項は統語的に実現しない」という McIntyre (2001, 2003), Zeller (2001a) の仮説が有効であると言える．

これまでの議論で見てきたように，不変化詞動詞の内項は常に不変化詞によって導入される．また，暗黙の了解として特に見ては来なかったが，外項は動詞によって導入される．つまり，不変化詞動詞の項構造の決定においては，動詞と不変化詞の双方から項が導入される．項構造がレキシコンで決定するとする従来の語彙主義の立場に立った場合，不変化詞動詞は項構造においても一つの語であると言える．

第6章 文法関係と句構造

この章ではスウェーデン語の不変変化動詞の文法関係と統語構造を概観する。まず、不変変化動詞を含んだ文は機能的に単文 (mono-clausal) であり、文法関係のレベルにおいては一語であるという主張を展開する。続けて、不変変化動詞を含んだ文の動詞句の構造を分析する。動詞・不変変化詞・目的語名詞句を含む動詞句の構造はこれまで主張されてきたような階層構造ではなく、平らな構造であると主張する。

6.1 文法関係

3.3 でも見たように、スウェーデン語の不変変化詞は、一見すると様々な文法関係を担っているように見える。以下に 3.3 で見た例を再録する。

- (126) Peter **kastade** (**ut**) bollen. (付加語)
 P. throw.PAST out ball.DEF
 ‘Peter threw out the ball.’
- (127) Peter **lade** ***(ner)** brevet (på bordet). (斜格語)
 P. lay.PAST down letter.DEF on table.DEF
 ‘Peter laid down the letter (on the table).’
- (128) Peter **körde** **bil** igår. (目的語)
 P. drive.PAST car yesterday
 ‘Peter drove a car yesterday.’
- (129) Peter har **slagit** **ihjäl** henne. (XCOMP)
 P. has beat.PERFP to.death her
 ‘Eric has beaten her to death.’

- (130) Peter **tycker om** choklad. (述語の一部)
 P. think.PRES about chocolate
 ‘Peter loves chocolate.’

以上のように，スウェーデン語の不変化詞は一見すると様々な文法機能を担っているように見えるが，本稿では，動詞と不変化詞が機能構造において一語を成しているという主張を展開する．

ここで，3.5 で見た形容詞としての用法をもつ不変化詞の一致に関する議論をもう一度，繰り返そう．

スウェーデン語の形容詞は主語名詞句の性と数に一致する．これらの形容詞が結果構文の結果述語として用いられると，目的語との間で性と数に関して一致を示す．次の例を見てみよう．

- (131) a. Han skrev uppsatsen färdig-**ø**. (結果構文)
 he wrote paper.DEF.**Non-Neuter.Sg** finished-**Non-Neuter.Sg**
 ‘He finished writing the paper.’
 b.*Han skrev uppsatsen färdig-**t**.
 he wrote paper.DEF.**Non-Neuter.Sg** finished-**Neuter.Sg**
 c.*Han skrev uppsatsen färdig-**a**.
 he wrote paper.DEF.**Non-Neuter.Sg** finished-**Pl**

上記の例では目的語名詞句が中性単数であるため，結果述語である形容詞もそれにあわせて一致を起こさなければならないということを示している．つまり，目的語名詞句は形容詞の論理的な主語であるということになる．形容詞を含むスウェーデン語の結果構文の機能構造（文法関係）は，次のような XCOMP を含む bi-clausal な構造であると考えられる．

(132)	PRED	'write <(\uparrow SUBJ)(\uparrow OBJ)(\uparrow XCOMP)>'	
	TENS	PAST	
	SUBJ	[PRED 'Peter']	
		[PRED 'paper']	
	OBJ	DEF	+
		NUM	SG
		GEN	Non-Neuter
	XCOMP	[PRED 'finished < \uparrow SUBJ >']	
		NUM	SG
		GEN	Non-Neuter
		SUBJ	

一方，形容詞が不変化詞として用いられた場合を見てみよう．

- (133) a. *Han skrev färdig- \emptyset . uppsatsen (不変化詞構文)
 he wrote finished-Non-Neuter.Sg paper.DEF.Non-Neuter.Sg
 ‘He finished writing the paper.’
- b. Han skrev färdig-t. uppsatsen
 he wrote finished-Neuter.Sg paper.DEF.Non-Neuter.Sg
- c. *Han skrev färdig-a. uppsatsen
 he wrote finished-Pl paper.DEF.Non-Neuter.Sg

この場合，不変化詞は目的語名詞句との間に一致を見せず，デフォルトの一致（中性単数）を示す．これは目的語名詞句が不変化詞の論理的な主語ではないことを意味している．したがって，不変化詞動詞を含む文の機能構造は，XCOMP を含まない単一な構造であるということができる．

不変化詞が XCOMP ではない証拠として，不変化詞と結果述語の共起が挙げられる．

- (134) a. Hon **klädde** **av** sig **naken**.
 she dress.PAST off herself naked
 ‘She stripped herself naked.’
- b. Han **slog** **sönder** ett glas i bitar.
 he hit.PAST broken a glass to piece.Pl
 ‘He broke a glass to pieces.’

上記の例文においては，不変化詞 *av* ‘off’, *sönder* ‘broken’ と結果述語 *naken* ‘naked’, *i bitar* ‘to pieces’ が共起しているのが分かる．この場合，不変化詞と結果述語が同じ文法機能を担っているとする，両方ともが XCOMP であるということになる．しかし，PRED の値として現れる文法機能（斜格語以外の文法機能）が複数現れるということはないので（機能構造における一貫性），不変化詞と結果述語は異なる文法機能を有していると考えられる．

しかし，不変化詞が XCOMP ではないとすると，どんな文法関係を担っているのであろうか？ 一つの可能性は付加語 (adjunct) であるというものだろう．しかし，4 章でも見たように，不変化詞が常に内項を導入していると考ええると，付加語であるという可能性はないものと思われる．意味構造で一語である不変化詞動詞が，機能構造においても一語であると考えるのが妥当であると思われる．つまり，不変化詞は機能構造において PRED の一部であるということである．そうすると以下のような機能構造をしていることになる．

- (135)
$$\left[\begin{array}{ll} \text{PRED} & \text{'write-finished } <(\uparrow\text{SUBJ})(\uparrow\text{OBJ})>' \\ \text{TENS} & \text{PAST} \\ \text{SUBJ} & \left[\begin{array}{ll} \text{PRED} & \text{'Peter'} \end{array} \right] \\ & \left[\begin{array}{ll} \text{PRED} & \text{'paper'} \\ \text{DEF} & + \\ \text{NUM} & \text{SG} \\ \text{GEN} & \text{Non-Neuter} \end{array} \right] \\ \text{OBJ} & \end{array} \right]$$

ここまでの議論で、因果関係を表す結果構文と同義の不変化詞動詞の文法関係が単一であり、動詞と不変化詞が機能構造において一つの述語をなすということを明らかにした。

それでは、それぞれ 付加語 (126), 斜格語 (127), 目的語 (128) の文法関係を担っているように見える場合はどうだろうか？

まず、付加語 (126) と 斜格語 (127) の例であるが、これらはそれぞれの文法関係を特定するのは困難であると思われる。しかし、これらの場合も機能構造において不変化詞と動詞が一語を成していると考えべきだと思われる。というのも、これらの例も結果構文タイプの不変化詞動詞と同じく、一種の因果関係と捉えることができるため、先ほどと同じ分析が妥当であると考えられる。

目的語のように見える (128) であるが、これも動詞と不変化詞が一語を成していると考えることができる。一般に、名詞抱合のばあい、目的語に相当する名詞を抱合すると、自動詞化するといわれている。(128) でも目的語に相当する名詞が動詞に対して、意味構造で抱合を起こした結果、主語のみを取る一項述語を形成したと考えるのが妥当であると思われる。

6.2 句構造

統語構造において、動詞と不変化詞が別々の語であることはすでに見たが、この節では、不変化詞を含んだ動詞句の句構造を考えたい。動詞、不変化詞、名詞句 (目的語) を含んだ動詞句の構造を考えた場合、次の 3 つの可能性が存在する。

- (136) a. [_{VP} V PRT NP]
 b. [_{VP} [V PRT] NP]
 c. [_{VP} V [PRT NP]]

(136a) は階層がない平らな動詞句 (flat VP) である。Jackendoff (2002) が英語の不変化詞動詞に関して提案しているものである。一方、(136b) は不変化詞と動詞が構成素を成しているという分析で、スウェーデン語の研究では、Josefsson (1998) や Toivonen (2003) などほとんどの研究がこの句構造を支持している。136c は不変化詞と目的語名詞句が構成

多くの研究が (136b) の句構造を用い、不変化詞動詞を分析しているが、本稿では、動詞と不変化詞が構成素を成す証拠がないことを示し、消極的ではあるが、(136a) の平らな動詞句を採用する。

Toivonen は動詞と不変化詞が構成素を成す証拠として、話題化 (topicalization) と等位接続 (coordination) を挙げている。

(137) a. Hon sköt ner alla fienderna.
 she shoot.PAST down all enemies.DEF
 ‘ She shot down all the enemies. ’ (Toivonen 2003:96)

b. %Sköt ner gjorde hon [_{VP} alla fienderna].
 shoot.PAST down did she all enemies.DEF
 ‘Shoot down she did all the enemies.’ (ibid.)

c.*Sköt gjorde hon [_{VP} ner alla fienderna].
 shoot.PAST did she down all enemies.DEF (ibid.:96)

次のテストは等位接続である。次の例文を見てみよう。

- (138) ... den kvinna som björnen slagit ner och dödat ... (Toivonen 2003:97)
 the woman that bear.DEF beat.PERFP down and kill.PERFP
 ' ... the woman that the bear had beaten down and killed... '

上記の例文では *slagit ner* ‘beaten down’ という不変化詞動詞と *dödat* ‘killed’ という動詞が共に *den kvinna* ‘the woman’ を目的語名詞句として取っている (この場合, その名詞句は関係節の先行詞となっている)。Toivonen によれば, 不変化詞と動詞が構成素を成し, それが後続の動詞と等位接続されていると主張している。

しかし, 不変化詞と動詞が構成素を成して, 動詞と等位接続しているかどうかは疑わしい。次の例を比べてみよう。

- (139) a. Björnen hade [_V slagit ner] och [_V dödat] kvinnan
 bear.the had beaten down and killed woman.DEF
 ‘The bear had beaten down and killed the woman.’
- b. Björnen [_I slog] [_{VP} ner] och [_I dödade] den kvinna
 bear.the beat.PAST down and kill.PAST woman.DEF
 ‘The bear beat down and killed the woman.’

(139a) では, 動詞が完了分詞で非定形のため, 動詞は動詞句の主要部 V に位置する。したがって, 動詞と不変化詞が構成素を成している可能性がある。しかし, (139b) を見てみよう。この例文では動詞が過去形であり, 定形であるため, V ではなくそれよりも高い I に位置している。一方, 不変化詞は常に VP 内に留まるというのは先に見たとおりである。したがって, この場合, 動詞と不変化詞は構成素を成していない。したがって, 等位接続のテストで, 不変化詞と動詞が構成素を成しているかどうかを決定することはできない。

以上見てきたように, 話題化も等位接続も動詞と不変化詞が構成素を成しているという証拠にはなりえない。本稿では不変化詞を含む動詞句が階層を成さず, 平らであるとする立場を取ることにしたい。

第7章 まとめ

この博士論文では、現代スウェーデン語の不変化詞動詞 (particle verb) の分析を行った。不変化詞動詞とはゲルマン系の言語に見られ、動詞と（前置詞や副詞としての機能も持つ）不変化詞からなる一種の複雑述語である。また、句動詞 (phrasal verb)・分離動詞 (trennenbares Verb, separable verb) などと呼ばれることもある。以下は、スウェーデン語・英語・ドイツ語の不変化詞動詞を含んだ例文である。

- (140) a. John **ringde upp** tjejen.
 J. rang up girl.the
 ‘John called up the girl.’ (スウェーデン語)
- b. John **called up** the girl. / John **called** the girl **up**. (英語)
- c. John **rief** das Mädchen **an**.
 J. rang the girl on
 ‘John called up the girl.’
- c’. ... dass John das Mädchen **an-rief**.
 that J. the girl on-rang
 ‘that John called up the girl.’ (ドイツ語)

不変化詞動詞は統語的に特殊な振舞いを見せることから、これまで理論言語学の分野において長年、考察の対象となってきた。しかし、ゲルマン系の言語の中でも英語・ドイツ語・オランダ語の不変化詞動詞に関する研究は数多くあるが、北欧語の不変化詞動詞の研究はあまり多くない。本研究の目標はスウェーデン語の不変化詞動詞の研究を通して、複雑述語の一般の問題を再考した。

以下では本論文の内容を各章毎に要約する。

第1章では本論文が扱う問題の設定とその一般言語学的意味を述べ、さらに、援用する理論的枠組みの解説を行った。現代スウェーデン語の不変化詞動詞の研究は「語とは何

か」と言う一般言語学における基本的な問題と関わってくる．というのも，不変化詞は統語的には二語であるが，意味的には一語あり，統語的なレベルと意味的なレベルにおける語の間にミスマッチが起こっている．このような表示のレベルの間のミスマッチを扱うため，本稿では語彙機能文法 (Lexical-Functional Grammar) を援用した．語彙機能文法の特徴は，言語構造の複数の表示のレベルが同時に存在し，それぞれのレベルが派生によって結び付けられるのではないという点にある．不変化詞動詞において動詞と不変化詞がどのレベルで一語を成し，どのレベルで二語なのかという問題を扱う上で，最適の理論であるということができる．

第2章では現代スウェーデン語の不変化詞動詞の基本的特徴を概観した．現代スウェーデン語の不変化詞動詞は主に次のような特徴を持っている．

- (141) a. 不変化詞は動詞句内で動詞の直後，目的語名詞句の直前に位置する．
 b. 不変化詞は指定部も補部も取らない投射のない語 (non-projecting word) である．
 c. 動詞のアクセントが落ち，不変化詞にアクセントが置かれ，動詞と不変化詞でアクセントのユニットを成す．
 d. 動詞が過去分詞形の時に，不変化詞が動詞に前接する．

第3章では先行研究の問題点を概観した．先行研究はスウェーデン語の不変化詞動詞の統一性をどのレベルで捉えるかという点で異なっている．具体的には次のような説がある．

- (142) a. 不変化詞が独立した品詞 (syntactic category) を成すという説
 b. 不変化詞が特定の文法関係 (grammatical relation) を担うとする説
 c. 不変化詞を意味の観点から規定しようとする説
 d. 不変化詞を統語的な観点から規定しようとする説

第3章では以上のそれぞれの先行研究に問題があることを指摘した．

第4章以降がこの博士論文の分析の中心となる部分である．

第4章では、不変変化詞動詞の意味構造を検討し、不変変化詞が動詞に対して、非語彙的抱合 (Non-Lexical Incorporation) を起こし、意味的に一語を成していることを主張した。非語彙的抱合とは、意味抱合 (Semantic Incorporation) あるいは擬似抱合 (Pseudo Incorporation) と呼ばれているものと同じである。アメリカ先住民言語などに見られる通常の抱合においては、統語構造・意味構造の両方において抱合が起こるが、一方、非語彙的抱合とは、統語構造における抱合は起きないが、意味構造において抱合が起こるというものである。複合動詞と不変変化詞動詞の関係を綿密に調査することにより、スウェーデン語の不変変化詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしているということを明らかにした。一般的に、語彙的・非語彙的を問わず、抱合する要素は X^0 レベルの語であることから、(2b) でみた不変変化詞の特徴は、この非語彙的抱合の副産物であると考えられる。

第5章では不変変化詞動詞の項構造を考察した。不変変化詞動詞においては、外項は動詞の項が、内項は不変変化詞の項が、常に不変変化詞動詞全体の項として実現するということを主張した。不変変化詞の項が常に内項として実現しているかどうか大きな問題となるが、スウェーデン語の不変変化詞動詞には、動詞の項が実現せず不変変化詞動詞の項のみが文全体の項として実現する「擬似主語構文」が存在すること。また、不変変化詞動詞を述語とする二重目的語構文では、二つの目的語が共に動詞の選択した項ではなく、不変変化詞の意味的な項であると考えられることなどから、上記の一般化が正しいという結論に達した。

第6章では不変変化詞動詞を含む文の文法関係と統語構造を考察した。まずは文法関係に関して分析した。従来、結果構文に意味的に類似した動詞不変変化詞構文の文法関係のレベルにおいては複文 (bi-clausal) であると分析されているが、本稿では不変変化詞動詞を含んだ文の文法関係は単文 (mono-clausal) であり、文法関係のレベルにおいては一語であるという主張を展開した。次に不変変化詞動詞を含んだ文の統語構造、特に、その動詞句の構造を分析した。これまでの動詞・不変変化詞・目的語名詞句を含む動詞句の統語構造に関してはこれまで、動詞と不変変化詞が構成素を成す (1a) のような階層構造が仮定されてきたが、階層構造を仮定するような言語事実はなく、(1b) のような平らな動詞句であると主張する。

- (143) a. [[動詞 + 不変化詞] 目的語名詞句]
b. [動詞 + 不変化詞 + 目的語名詞句]

References

- Åkermalm, Åke (1957). “Om verbet atombomba och liknande bildningar i nutida sveska dagpress” *Nysvenska studier*, **32**, 8–46.
- Andersson, Erik (1977). *Verbfrasens struktur i svenskan, en studie i aspekt, tempus tidsadverbial och semantisk räckvidd*. Meddelande från Stiftelse för Åbo Akademi forskningsinstitut 18. Åbo: Åbo Akademi.
- Anward, Jan & Linell, Per (1976). “Om lexikaliserade fraser i svenskan.” *Nusvenska studier*, **55–56**, 77–119.
- Asudeh, Ash & Mikkelsen, Line (2000). “Incorporation in Danish: Implications for interfaces.” In Ronnie Cann, Claire Grover & Miller, Philip (Eds.), *Grammatical interfaces in HPSG*, pp. 1–15. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Baker, Mark C. (1988). *Incorporation : A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Baker, Mark C. (1996). *The Polysynthesis Parameter*. Oxford studies in comparative syntax. New York, Oxford: Oxford University Press.
- Börjars, Kärsti & Vincent, Nigel (2004). “Position vs. function in Scandinavian presentational constructions.” In Butt, Miriam & King, Tracy Holloway (Eds.), *The Proceedings of the LFG-05*, pp. 54–72. Stanford:, CSLI Publications.
- Bresnan, Joan (Ed.) (1982a). *The Mental Representation of Grammatical Relations*. MIT Press series on cognitive theory and mental representation. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Bresnan, Joan (1982b). “The passive in lexical theory.” In Bresnan, Joan (Ed.), *The Mental Representation of Grammatical Relations*, pp. 3–86. Cambridge, Mass.: The MIT

- Press.
- Bresnan, Joan (2001). *Lexical Functional Syntax*. Blackwell Textbooks in Linguistics. Oxford: Blackwell Publishers.
- Bresnan, Joan. & Kanerva, Jonni (1989). "Locative inversion in Chicheŵa: a case study of factorization in grammar." *Linguistic Inquiry*, **20** (1), 1–50.
- Bresnan, Joan & Mchombo, Sam A. (1995). "The lexical integrity principle: evidence from Bantu" *Natural Language and Linguistic Theory*, **13** (2), 181–254.
- Bresnan, Joan. & Moshi, Lioba (1990). "Object asymmetries in comparative Bantu syntax." *Linguistic Inquiry*, **21** (2), 147–185.
- Carrier, Jill & Randall, Janet H. (1992). "Argument structure and syntactic structure of resultatives." *Linguistic Inquiry*, **23** (2).
- Dalrymple, Mary (2001). *Lexical Functional Grammar*. Syntax and Semantics 34. New York: Academic Press.
- Dalrymple, Mary, Kaplan, Ronald M., Maxwell, John T., & Zaenen, Annie (Eds.) (1995). *Formal Issues in Lexical-Functional Grammar*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Dayal, Veneeta (2003). "A semantics for pseudo-incorporation." Rutgers University ms.
- Dehé, Nicole (2002). *Particle Verbs in English: Syntax, Information Structure, and Intonation*. Linguistik Aktuell/Linguistics Today 59. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Dehé, Nicole., Silke, Urban, McIntyre, Andrew, & Jackendoff, Ray (Eds.) (2002). *Explorations in Verb-Particle Constructions*. Interface Explorations 1. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Dikken, Marcel den (1995). *Particles: On the Syntax of Verb-particle, Triadic, and Causative Constructions*. Oxford Studies in Comparative Syntax. New York, Oxford: Oxford University Press.
- Ejerhed, Eva (1979). "Verb-partikel konstruktion i svenska: syntaktiska och semantiska problem." *Svenskans beskrivning 11*, pp. 49–64.

- Emonds, Joseph (1972). "Evidence that indirect object movement is a structure-preserving rule." *Foundations of Language*, **8**, 546–561.
- Farkas, Donka F. and Henriëtte De Swart (2003). *The Semantics of Incorporation*. Stanford, CA.: CSLI Publications.
- Goldberg, Adele E (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. & Jackendoff, Ray (2004). "The English resultative as a family of constructions" *Language*, **80**, 532–568.
- Holmberg, Anders & Platzack, Christer (1995). *The Role of Inflection in Scandinavian Syntax*. Oxford studies in comparative syntax. New York, Oxford: Oxford University Press.
- Holms, Philip & Hinchliff, Ian (1993). *Swedish : A Comprehensive Grammar*. London: Routledge.
- Jackendoff, Ray S. (1973). "The base rule for prepositional phrase" In Anderson, Stephen R. & Kiparsky, Paul (Eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, pp. 345–356. New York, Holt: Rinehart and Winston.
- Jackendoff, Ray S. (1983). *Semantics and Cognition*. Current studies in linguistics series 8. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray S. (1990). *Semantic Structures*. Current studies in linguistics series 18. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray S. (2002). "English particle constructions, the lexicon, and the autonomy of syntax" In Dehé, Nicole, Urban, Silke, McIntyre, Andrew, & Jackendoff, Ray (Eds.), *Verb-Particle Explorations*, Interface Explorations 1, pp. 21–41. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Jespersen, Otto (1924). *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Jørgensen, Nils & Svensson, Jan (1986). *Nusvensk grammatik*. Malmö: Liber.
- Josefsson, Gunlög (1998). *Minimal Words in a Minimal Syntax : Word Formation in Swedish*. Linguistik aktuell/Linguistics Today 19. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.

- 影山 太郎 (1996). 『動詞意味論—言語と認知の接点—』. 日英語対照研究シリーズ 5. くろしお出版.
- Kaplan, Ronald M. & Bresnan, Joan (1982). “Lexical-Functional Grammar: A formal system for grammatical representation” In Bresnan, Joan (Ed.), *The Mental Representation of Grammatical Relations*, pp. 173–281. Cambridge, Mass.: The MIT Press. Reprinted in Mary Dalrymple, Ronald M. Kaplan, John Maxwell, and Annie Zaenen, eds., *Formal Issues in Lexical-Functional Grammar*, 29–130. Stanford: CSLI Publications. 1995.
- Kaufmann, Ingrid & Wunderlich, Dieter (1998). *Cross-linguistic patterns of resultatives*. University of Düsseldorf.
- 窪園 晴夫 (1995). 『語形成と音韻構造』. 日英語対照研究シリーズ 3. 東京: くろしお出版.
- Levin, Beth & Rappaport Hovav, Malka (1996). *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Interface*. Linguistic Inquiry Monograph 26. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lindner, Susan Jean (1981). *Lexico-semantic Analysis of English Verb-particle Constructions with Up and Out*. Ph. D. thesis, University of California, San Diego.
- Lødrup, Helge (2000). “Underspecification in Lexical Mapping Theory” In Butt, Miriam & King, Tracy Holloway (Eds.), *Argument Realization*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Lüdeling, Anke (2001). *Particle verbs and similar constructions in German*. Stanford: CSLI Publications.
- Massam, Diane (2001). “Pseudo noun incorporation in Niuean” *Natural Language and Linguistic Theory*, **19** (1), 153–197.
- Matsumoto, Yo (1996). *Complex predicates in Japanese: a syntactic and semantic study of the notion ‘Word’*. Stanford, Tokyo: CSLI Publications and Kurosio Publishers.
- 松本 曜 (1996). 「語とは何か」. 『言語』, **25** (11), 38–45.
- McIntyre, Andrew (2001). “Argument blockages induced by verb particles in English and German: event modification and secondary predication” In Dehé, Nicole & Wanne, Anja (Eds.), *Structural Aspects of Semantically Complex Verbs*, pp. 131–164. Frankfurt, Berlin, New York: Peter Lang.

- McIntyre, Andrew (2003). "Preverbs, argument linking and verb semantics" In Booi, Geert E. & van Marle, Jaap (Eds.), *Yearbook of Morphology 2003*, pp. 119–144. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Mithun, Marianne (1984). "The evolution of noun incorporation" *Language*, **60**, 847–895.
- Mithun, Marianne (1986). "On the nature of noun incorporation" *Language*, **62**, 32–38.
- Norén, Kerstin (1996). *Svenska partikelverbs semantik*. Nordistica Gothoburgensia 17. Göteborg: Acta Universitatis gothoburgensis.
- Norén, Kerstin (2000). "Partikelförbindelser och möjliga förblindelser" In Engdal, Elisabet & Norén, Kerstin (Eds.), *Att använda SAG*, pp. 383–393. Institutionen för svenska språket, Göteborgs universitet.
- Pinker, Steven (1989). *Learnability and Cognition : The acquisition of argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Platzack, Christer (1983). "Existential Sentences in English, Swedish, German and Icelandic" In Karlsson, Fred (Ed.), *Papers from the Seventh Scandinavian Conference of Linguistics*. Helsinki: University of Helsinki, Department of General Linguistics.
- Platzack, Christer (1998). *Svenskans inre grammatik : det minimalistiska programmet : en introduktion till modern generativ grammatik*. Lund: Studentlitteratur.
- Riemsdijk, Henk C. van (1978). *A Case Study in Syntactic Markedness : The Binding Nature of Prepositional Phrases*. Studies in Generative Grammar 4. Dordrecht: Foris Publications.
- Rivero, María-Luisa (1992). "Adverb incorporation and the syntax of adverbs in Modern Greek." *Linguistics and Philosophy*, **15**, 289–331.
- Roeper, Thomas & Siegel, Muffy E. A. (1978). "A lexical transformation for verbal compounds" *Linguistic Inquiry*, **9**, 199–260.
- Sells, Peter (2000). "Negation in Swedish: where it's not at." In Butt, Miriam & King, Tracy (Eds.), *Proceedings of LFG-00*. Stanford, CSLI Publications.
- Sells, Peter (2001). *Structure, Alignment and Optimality in Swedish*. Stanford Monographs

- in Linguistics. Stanford: CSLI Publications.
- Simpson, Jane (1983). "Resultatives" In Levin, Lori S., Rappaport, Malka, & Zaenen, Annie (Eds.), *Papers in Lexical-Functional Grammar*, pp. 143–157. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Spencer, Andrew (1995). "Incorporation in Chukchi." *Language*, **71**, 439–489.
- Stiebels, Barbara (1996). *Lexikalische Argumente und Adjunkte: Zum semantischen Beitrag von verbalen Präfixen und Partikeln*. Studia grammatica 39. Berlin: Akademie Verlag.
- Stiebels, Barbara & Wunderlich, Dieter (1994). "Morphology feeds syntax: the case of particle verbs" *Linguistics*, **32**, 913–968.
- Strzelecka, Elżbieta (2003). *Svenska partikelverb med in, ut, upp, och ner: En semantisk studie ur kognitivt perspektiv*. Skrifter utgivna av institutionen för nordiska språk vid Uppsala universitet. Uppsala: Department of Scandinavian languages, Uppsala University.
- Svenonius, Peter (2003). "Swedish particles and directional prepositions" In Lars-Olof Delsing, Cecilia Falk Gunlög Josefsson & Sigurdsson, Halldór Ármann (Eds.), *Grammar in Focus: Festschrift for Christer Platzack*, pp. 343–351. Lund: Dept. of Scandinavian Languages, Lund University.
- Teleman, Ulf., Hellberg, Staffan., & Andersson, Erik. (Eds.) (1999a). *Svenska Akademiens grammatik 2: Ord*. Stockholm: Norstedts Ordbok.
- Teleman, Ulf., Hellberg, Staffan., & Andersson, Erik. (Eds.) (1999b). *Svenska Akademiens grammatik 3: Fraser*. Stockholm: Norstedts Ordbok.
- Thorell, Olof (1977). *Svensk grammatik* (2nd. edition). Stockholm: Esselte Studium.
- Tohno, Takayuki (2004). "Partikelverb- och resultativkonstruktion i svenskan: fallet **ihjäl** och **till döds**.".
- Toivonen, Ida (2002). "Swedish particles and syntactic projection" In Dehé, Nicole, Urban, Silke, McIntyre, Andrew, & Jackendoff, Ray (Eds.), *Verb-Particle Explorations, Interface Explorations 1*, pp. 191–209. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

- Toivonen, Ida (2003). *Non-Projecting Words: A Case Study of Swedish Particles*. Studies in Natural Language and Linguistic Theory 58. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- van Geenhoven, Veerle (1998). *Semantic Incorporation and Indefinite Descriptions: Semantic and Syntactic Aspects of Noun Incorporation in West Greenlandic*. Stanford, CA.: CSLI Publications.
- Vikner, Sten (1995). *Verb Movement and Expletive Subjects in the Germanic languages*. Oxford studies in comparative syntax. New York, Oxford: Oxford.
- Washio, Ryuichi (1997). "Resultatives, compositionality and language variation." *Journal of East Asian Linguistics*, **6**, 1–49.
- Zeller, Jochen (2001a). "How syntax restricts the lexicon: particle verbs and internal arguments" *Linguistische Berichte*, **188**, 461–494.
- Zeller, Jochen (2001b). *Particle Verbs and Local Domains*. Linguistik aktuell/Linguistics Today 41. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.

論文 6

「現代スウェーデン語不変化詞動詞の項の実現」

現代スウェーデン語不変化詞動詞の項の実現*

當野能之

1. はじめに

本稿では、スウェーデン語の不変化詞動詞 (particle verb)¹ の意味構造と項構造について考察し、その項構造がどのように決定しているか考察する。特にドイツ語の不変化詞動詞に関して、「不変化詞動詞においては、内項は常に不変化詞によって導入され、動詞の内項は統語的に実現しない」という McIntyre (2001, 2003)、Zeller (2001) の仮説を同じゲルマン系言語に属するスウェーデン語で検証する。

2. スウェーデン語の不変化詞動詞

本論に入る前に、スウェーデン語の不変化詞動詞の特徴を簡単にしておきたい。(詳しくは Norén (1996)、Teleman *et al.* (1999)、Strzelecka (2003)、Toivonen (2003) などを参照のこと。)

まずは統語的な特徴である。次の (1) からわかるように、不変化詞は動詞が動詞句内にある場合、動詞の直後に現れる。また、目的語名詞句がある場合、不変化詞はそれよりも左側に現れ (= (1a))、右側に現れることはない (= (1b))。また目的語名詞句がアクセントのない弱い代名詞であったとしても、語順は変わらず、英語の不変化詞移動のような現象は見られない²。

(1) a. Peter har [_{VP} sparkat upp {bollen/den}].

P. has kick.PERFP up {ball.DEF/it}

「ペーテルは {そのボール/それ} を蹴りあげた」

b. *Peter har [_{VP} sparkat {bollen/den} upp].

P. has kick.PERFP {ball.DEF/it} up

動詞が非定形 (non-finite form) で動詞句内にある時は、動詞と不変化詞は常に隣接しているが、動詞が定形 (finite form) の時は動詞は IP あるいは CP の主要部にあり、動詞と不変化詞は隣接しない。したがって動詞と不変化詞が形態的な語を形成していないことが分かる。

(2) Peter sparkade inte [_{VP} upp bollen].

P. kick.PAST not up ball.DEF

「ペーテルはそのボールを蹴り上げなかった」

次に不変化詞動詞の音韻的な特徴を見てみよう。「動詞+前置詞+名詞句」といった連鎖があった場合、通常、動詞と名詞句にはアクセントが置かれるが、前置詞にはアクセントが置かれない。一方、不変化詞動詞においては、通常アクセントを有する動詞のアクセントが消え、不変化詞がアクセントを担い、動詞と不変化詞で一つのアクセントユニットを成すと言われている (Anward and Linell 1976)。例えば、動詞 *hälsa* 'greet' と前置詞・不変化詞 *på* 'on' から成る次の例を見てみよう。アクセントが置かれる音節を大文字で表している。

(3) a. PEter HÅLsade på henne.

P. greet. PAST on her

「ペーテルは彼女にあいさつした」

b. PEter hälsade PÅ henne.

P. greet. PAST on her

「ペーテルは彼女のところを訪れた」

(3a) では動詞がアクセントを持ち *på* 'on' はアクセントを有しないことから、動詞+前置詞の連鎖であることが分かる。全体としての意味も、動詞と前置詞の意味から合成的に得られる。一方、(3b) は動詞にアクセントが置かれず、*på* 'on' がアクセントを担っていることから不変化詞動詞であることがわかる。不変化詞動詞の意味はしばしばイディオム的であることが多いが、(3b) も動詞と *på* 'on' の意味を足して得られるものではなく、不変化詞動詞であると考えられる。

以上、スウェーデン語の不変化詞動詞の統語的・音韻的特徴を見

てきた³。このような特徴をもつスウェーデン語の不変化詞には次のようなものがある。

- (4) a. 前置詞としての用法を持つ不変化詞
av 'off', *efter* 'after', (*i*) *genom* 'through', *i* 'in', *med* 'with', *på* 'on', *till* 'to', *över* 'over', etc.
- b. 副詞としての用法を持つ不変化詞
bort 'away', *dit* 'thither', *fram* 'forward', *hit* 'hither', *in* 'in', *ner* 'down', *ned* 'down', *upp* 'up', *ut* 'out', etc.
- c. 前置詞句に由来する不変化詞
i-hjäl (in-hell) 'to death', *i-hop* (in-heap) 'together', *i-sär* (in-separation) 'apart', *i-tu* (in-two) 'into two', *till-baka* (to-back) 'back', etc.
- d. 形容詞としての用法を持つ不変化詞⁴
fast 'firm, fixed', *färdigt* 'finished', *lös* 'loose, off', *lös* 'loose', *rent* 'clean', *sönder* 'broken', etc.

以上を踏まえたうえで、以下では不変化詞動詞の意味構造と項構造について考えていく。

3. 不変化詞の意味構造

意味構造から項構造へのマッピングを考えるには、意味構造がどのようなになっているかを考える必要がある。以下では、不変化詞の意味を考える上で注意すべき2点に焦点を当てる。

3.1. イベントとしての不変化詞の意味構造

不変化詞の概念構造に対しては二つのタイプの概念構造を設定することが可能である。不変化詞 *upp* 'up' を例に見てみよう。

- (5) a. [_{PATH} TOWARD ([ABOVE])]
- b. [_{EVENT} GO ([y], [_{PATH} TOWARD ([ABOVE])])]

一つは、(5a) のように不変化詞の意味に経路概念のみを認めるというもので、Jackendoff (1983) が英語の不変化詞に関して設

定しているものである。一方、(5b) のように不変化詞をイベントと捉える立場もあり、ドイツ語の不変化詞に関して Zeller (2001) が採用している分析である。本稿では、後者の立場を取る。不変化詞にイベント性が認められるかどうかは本稿の範囲を超える問題であり、ここでは論じる余裕がない。ただ、意味構造と項構造のマッピングという観点から考えると、後者を採用せざるを得ない。というのも、後ほど詳しく見るが、動詞が選択しない項が不変化詞動詞の項として現れる場合があり、それらは意味的に不変化詞の項と考えることができるからである。前者を採用した場合、不変化詞の概念構造の中に変項がなく、不変化詞の意味的な項が不変化詞動詞の項として現れることはない。一方、後者の意味構造だと、変項 *y* が概念構造内にあり、これが不変化詞動詞の項として実現すると捉えることができる⁵。

3.2. 品詞による意味構造の違い

次の問題点は品詞による意味構造の違いである。次の節で詳しく見ていくが、前置詞としての用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞は項の実現に対して、かなり複雑な様相を呈する。一方、副詞あるいは形容詞としての用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞の項構造は単純である。これは、両者の意味構造の違いに起因すると考えられる。前置詞としての用法を持つ不変化詞が意味構造において図 (figure) と地 (ground) に相当する二つの変項を持っているのに対して、副詞や形容詞としての用法を持つ不変化詞は図 (figure) に相当する変項しか持たないと仮定すると無理なく説明することができる。本稿で仮定する前置詞としての用法を持つ不変化詞と副詞としての用法を持つ不変化詞の概念構造は以下の通りである。

- (6) a. 前置詞としての用法を持つ不変化詞の意味構造

av 'off': [GO ([*y*], [FROM ([ON ([*z*])])])])]

- b. 副詞としての用法を持つ不変化詞の意味構造

upp 'up': [GO ([*y*], [TOWARD ([ABOVE])])])]

上記の意味構造に関しては次の点を注意したい。両者の意味構造はGO関数の第1項 *y* (figure) が空であるという点で共通しているが、前置詞としての用法を持つ不変変化詞がもう1つ変項である *z* (ground) を持っているのに対して、副詞や形容詞としての用法を持つ不変変化詞にはないという点で異なる。また、前置詞句に由来する不変変化詞と形容詞の用法を持つ不変変化詞は、1つしか変項を持たないという点で副詞としての用法を持つ不変変化詞と共通すると考えられる。

以上を踏まえた上で、スウェーデン語の不変変化詞動詞の項構造を見ていこう。

4. 不変変化詞動詞の項構造

これまで不変変化詞動詞における項構造は一般的に①不変変化詞動詞が動詞の項を継承する場合と②不変変化詞動詞に動詞が選択しない項が現れる場合の二つがあると考えられてきた (Stiebels and Wunderlich (1994) など参照)。次の例文を見てみよう。

- (7) a. Peter satte *(*ner*) den tunga väskan.
 P. put.PAST down the heavy bag.DEF
 「ペーテルはその重い鞆を下におろした」
- b. Peter kastade (*ner*) bollen från balkongen.
 P. throw.PAST down ball.DEF from balcony.DEF
 「ペーテルはそのボールをバルコニーから下に投げた」

(7) は動詞の項を継承していると考えられる例である。(7a) は3項動詞を含む文で、不変変化詞を省略すると非文になることから、不変変化詞が場所項として機能していると考えられる。一方、(7b) では不変変化詞が省略可能であることから、付加詞であることがわかる。どちらにおいても、動詞の項構造は変更されていない。一方、次の(8) は動詞が選択しない項が目的語として表れている不変変化詞動詞文である。動詞 *trycka* 'press' が選択するはずの「ボタン」が現れず、ボタンを押した結果降りてきた「エレベーター」が目的語として現れている。

(8) Peter tryckte *_(ner) hissen.

P. press.PAST down elevator.DEF

「ペーテルはエレベーターが降りてくるようにボタンを押した」

以上のように、不変化詞動詞では動詞の項を継承する場合としない場合の二つがあると考えられてきたが、McIntyre (2001, 2003)、Zeller (2001) は不変化詞動詞の内項は常に不変化詞によって導入されるとする仮説を出している。

(9) Internal arguments of a particle verb are always introduced by the particle. [...] The base verb no longer links any of its internal arguments to syntax. (Zeller 2001: 459)

以下ではまず 4.1 で、内項が不変化詞によって導入されると考えることができる現象、つまり、動詞が選択しない項が現れる現象を見ることで、上記の仮説の有効性を確認する。またその中で、不変化詞の意味構造をイベントと捉えること、そして、品詞により意味構造が異なるとする仮定の正しさも明らかになる。さらに 4.2 では、上記の仮説に取って問題となる (7) のような例、特に不変化詞が 3 項動詞の場所項であると言われている (7a) のような例に関して、スウェーデン語から上記の仮説を支持する現象を提示する。

4.1. 動詞が選択しない項

以下では、まず動詞が選択しない項が現れる場合を、自動詞文、他動詞文、二重目的語文の順に見ていくことにする。

4.1.1. 「擬似主語」構文

英語の結果構文 (resultative construction) において、動詞が選択しない項が目的語 (いわゆる、擬似目的語 (fake object)) として現れることはよく知られており、これまで様々な分析が行われてきた (Simpson (1983)、Carrier and Randall (1992)、Goldberg (1995)、Levin and Rappaport (1996)、影山 (1996)、Washio (1997) など)。また、擬似目的語を含む結果構文がゲルマン諸語に広く見られ

る現象であることも先行研究から明らかになっている (Kaufmann and Wunderlich (1998)、Lødrup (2000)、當野 (2000) など)。北ゲルマン語に属するスウェーデン語も例外ではなく、結果構文において擬似目的語が現れる。下記の (10) ではそれぞれ再帰代名詞 *sig* と *sin son* ‘her son’ が動詞によって選択されていない項である。

- (10) a. Han skrek sig *(hes).
 he shout.PAST himself hoarse
 「彼は叫びすぎて、のどがかれた」
 b. Hon sjöng sin son *(till sömns).
 she sing.PAST her son to sleep
 「彼女は歌を歌って息子を寝かしつけた」

さらに、スウェーデン語には擬似目的語が現れる構文以外に、動詞が選択しない項が主語として現れる構文が存在する。次の例を見てみよう。

- (11) a. Snön regnade *(bort).
 snow.DEF rain.PAST away
 「雨が降って雪が消えた」
 b. Marken växte *(igen) med buskar.
 ground.DEF grow.PAST covered with bush.PL
 「灌木が大きくなって地面を覆った」
 c. Badkaret rann *(över).
 bathtub.DEF flow.PAST over
 「湯船があふれた」

上記の (11) の主語名詞句である *snön* ‘the snow’、*marken* ‘the ground’、*badkaret* ‘the bathtub’ は、動詞の直後にある *bort* ‘away’、*igen* ‘covered’、*över* ‘over’ がない場合に非文になることから、動詞が選択する項ではないことが分かる。これらの主語名詞句は不変化詞の表す状態や位置の変化の主体であると見なすことができるので、不変化詞のなんらかの意味的な項であると考えられる。本稿では、このような、動詞が選択しない主語を擬似主語、また擬似主語を含む文を擬似主語構文と呼ぶことにする。さらに詳しく見ていく。

4.1.1.1. 天候動詞

疑似主語構文に現れる動詞には、まず例文 (11a) でも見た *regna* 'rain' や *snöa* 'snow'、*blåsa* 'blow' などの天候動詞 (weather verb) が挙げられる。これらの動詞は、通常、英語などの天候動詞と同様に虚辞 *det* 'it' を主語として取る。

- (12) *Det* {*snöade* / *regnade* / *bläste*} *igår*.
it {*snow.PAST* / *rain.PAST* / *blow.PAST*} *yesterday*
「昨日 {雪が降った／雨が降った／風が吹いた}」

上の例からも分かるように天候動詞はもともと項を取らない。したがって、次の (13) に挙げられた文で主語として現れている項は、不変化詞の意味的な項にあたるものと考えられる。

- (13)a. *Vägarna snöade igen under natten*.
road.PL.DEF snow.PAST closed under night.DEF
「夜間雪が降って道がふさがってしまった」
b. *Tävlingen regnade bort*.
competition.DEF rain.PAST away
「その試合は雨で流れた」
c. *Trädet blåste ner*.
tree.DEF blow.PAST down.
「その木は風で倒れた」

主語として現れる項の意味役割には、(13a) や (13b) のように状態変化の主体が現れる場合と、(13c) のように位置変化の主体が現れる場合がある。どちらの場合も文の意味は、動詞によって表された出来事が原因となり、別の出来事が起こったという因果関係を表している。例えば、(13a) を例に取ると、「雪が降った」という出来事が原因となり、「道路が通行不能になった」という出来事が起こったということが一つの節で表現されている。

4.1.1.2. 'Grow' verb

天候動詞のように項を一つも持たない動詞ばかりでなく、(11b) の *växa* 'grow' や *gro* 'grow' のように項を取る動詞 ('grow' verb) も疑似主語構文に現れる。これらの動詞は通常、成長する主体を主

語として取るが、次の(14)のように不変化詞の意味的な項を擬似主語として取ることもできる。

- (14)a. Marken växte igen med buskar.
ground.DEF grow.PAST covered with bush.PL

「灌木が大きくなって地面を覆った」

- b. Allergier kan växa bort med åldern.
allergy.PL can grow.INF away with year.DEF

「アレルギーは年齢と共に成長するにつれ消える」

この場合、(14a)の *marken* 'the ground' のように植物などが育つ場所を主語として取る場合や、(14b)の *allergier* 'allergies' のように主体に付随するものを主語として取ることができる。どちらも主語の状態変化を表す。文の意味はこの場合も、二つの出来事の因果関係が表されている。例えば(14a)では、「灌木が大きくなった」結果、「地面が覆われた」という因果関係を持つ二つの出来事が一つの節にコード化されている。

4.1.1.3. 'Flow' verb

更に、(11c)の *rinna* 'flow' や *flöda* 'flow'、*svämma* 'spill'、*droppa* 'drip' のような液体の移動を表す動詞 ('flow' verb) も不変化詞の意味的な項を擬似主語として取る。これらの動詞は通常、移動する液体を表す名詞句を主語として取る。しかし(15)の例からも分かるように、液体が流れる場所を意味する名詞句を主語として取る。文全体の意味は二つの出来事の因果関係を表し、動詞によって表される「流れる」という出来事が原因となって、液体が容器から溢れるという出来事を描出する。

- (15)a. Hennes ögon svämmas över av tårar.
her eye.PL spill.PRES over of tear.PL

「彼女の目は涙であふれている」

- b. Badkaret rann över.
bathtub.DEF flow.PAST over

「湯船があふれた」

ただし、上記の例文の主語名詞句が本当に不変化詞の意味的な項で

あるかどうかは注意が必要である。一般的に液体とそれが流れる場所の関係は、内容物とその容器の関係であり、隣接性に基づくメトニミーの関係が成り立つ。したがって、メトニミーの効果により容器で内容物を指すことが可能になっているという説明もできるかもしれない。しかし、次の(16a)から分かるように、*över* 'over'を伴う場合には、主語名詞句として容器も液体も取ることができるが、(16b)にあるように *över* がいない場合には、容器である *badkaret* 'the bathtub' を主語として取れない。したがって、*över* が容器を表す主語名詞句を導入していると考えられる。

- (16) a. {Badkaret/ vattnet} rann över.
 {bathtub.DEF/ water.DEF} flow.PAST over
 「〔湯船/水〕が溢れる」
 b. {*Badkaret/ vattnet} rann.

それでは、容器を表す主語名詞句はどういった意味で、*över* の項であると言えるだろうか。一般的に、空間を表す前置詞や不変化詞の意味は図 (figure) と地 (ground) の関係として捉えられる。(15b) の不変化詞 *över* 'over' について考えると、図である「浴槽の水」が地である「浴槽」から溢れるということを表している。したがって、容器を表す主語名詞句は *över* の地ということになる。ただし、単なる地というよりは、浴槽の水が溢れることにより、何らかの影響を受けていると見なすことができる。

以上、ここまで擬似主語構文の特徴を見てきたが、まとめると以下ようになる。①非動作主的な自動詞が主動詞として現れる。②擬似主語として現れる項は不変化詞の意味的な項である。③動詞の表す出来事が原因となり、不変化詞の表す出来事が結果として起こるという「因果関係」を表す。

項がどのように実現するか、(17) を例に見てみよう。

- (17) Marken växte igen med buskar.
 ground.DEF grow.PAST covered with bush.PL
 「灌木が大きくなって地面を覆った」

主動詞である *växa* 'grow' の概念構造は (18a) のように記述することができる。一項動詞であることから変項を一つ持つ構造である。

また、不変化詞 *igen* ‘covered’ は、(18b) のような変項を一つもつ概念構造を設定することができる。

- (18)a. [GO_{IDENT} ([y],[TOWARD_{IDENT} ([BIG])))]
 b. [GO_{IDENT} ([y],[TO_{IDENT} ([COVERED])))]

上記の意味構造では、動詞の変項 *y* と不変化詞の変項 *y* があるが、不変化詞の変項が項として実現することとなる。

以上、擬似主語構文を見てきたが、ここから明らかになるのは、不変化詞の項が不変化詞動詞の項として優先して実現するという点である。

4.1.2. 他動詞文

次に他動詞文に現れる、動詞が選択しない項を見ていく。特に McIntyre (2003) が ‘landmark flexibility’ と呼ぶ現象がスウェーデン語にも見られる事を確認する。(これらの現象に関するスウェーデン語の記述としては Norén (1996) が詳しい。)

次の *tvätta* ‘wash’ という動詞を含む他動詞文を見てみよう。

- (19)a. Peter tvättade händerna.
 P. wash.PAST hands.DEF
 「ペーテルは手を洗った」
 b. *Peter tvättade smutsen.
 P. wash.PAST dirt.DEF
 「ペーテルは汚れを洗い落した」

上記の文では、洗う対象である *händerna* ‘the hands’ を目的語としてとることはできるが、移動物である *smutsen* ‘the dirt’ を目的語として取ることはできない。次に前置詞としての用法を持つ不変化詞 *av* ‘off’ を含む他動詞文を見てみよう。

- (20)a. Peter tvättade av händerna.
 P. wash.PAST off hands.DEF
 「ペーテルは手の汚れを洗い落とした」
 b. Peter tvättade av smutsen.
 P. wash.PAST off dirt.DEF

「ペーテルは汚れを洗い落した」

この場合、(20) から分かるように、洗う対象である *händerna* 'the hands' 以外に、移動物としての *smutsen* 'the dirt' が目的語として現れる。これは、不変化詞によって導入されたものであると考えられる。このように、不変化詞動詞の目的語として、不変化詞の図 (figure) にあたるものと地 (ground) にあたるものが出現する現象は 'landmark flexibility' と呼ばれる (McIntyre (2003))。

一方、副詞としての用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞ではこの 'landmark flexibility' が見られない。次の文を見てみよう。

(21)a. *Peter tvättade bort händerna.

P. wash.PAST away hands.DEF

「ペーテルは手の汚れを洗い落とした」

b. Peter tvättade bort smutsen.

P. wash.PAST away dirt.DEF

「ペーテルは汚れを洗い落した」

副詞としての用法を持つ不変化詞 *bort* 'away' を含む他動詞文でも、移動物としての *smutsen* 'the dirt' が現れる。ところが、動詞が選択するはずの *händerna* 'the hands' は現れることはできない。これは、不変化詞動詞の内項が不変化詞によって導入され、かつ、副詞としての用法をもつ不変化詞が変項として図 (figure) にあたる一項しか持たないと考えると、説明することができる。

以上の現象をまとめよう。前置詞としての用法を持つ不変化詞は、(22a) にあるように意味構造に2つの変項を持つので、図 (figure) あるいは地 (ground) にあたるものが、目的語として実現する。(20a) では (22b) にあるように地にあたる HANDS が、(20b) では (22c) にあるように図にあたる DIRT が実現しているものと説明することができる。(下記の意味構造で [Ø] は項としては実現しないが、コンテキストから明らかな項を意味する。つまり (22b) では図にあたる項が「汚れ」であることが明らかな場合に可能になる。同じく (22c) ではどこから汚れが落ちるのが文脈から明らかである場合に可能である。)

(22)a. av 'off' の意味構造

[GO ([y], [FROM ([ON ([z]))])])]

- b. (20a)の意味構造の不変化詞部分

[GO ([Ø], [FROM ([ON ([HANDS]))])])]

- c. (20b)の意味構造の不変化詞部分

[GO ([DIRT], [FROM ([ON ([Ø]))])])]

一方、副詞としての用法を持つ不変化詞は、(23a)にあるように意味構造に1つしか変項を持たないので、図 (figure) にあたるものだけが目的語として実現する。

- (23)a. bort 'away' の意味構造

[GO ([y], [TOWARD ([FAR AWAY]))])]

- b. (21a)の意味構造の不変化詞部分

[GO ([Ø], [TOWARD ([FAR AWAY]))])]

- c. (21b)の意味構造の不変化詞部分

[GO ([DIRT], [TOWARD ([FAR AWAY]))])]

以上から分かるのは、まず、内項が不変化詞によって導入されているという点。また、'landmark flexibility' という現象が見られるか否かは、不変化詞が品詞により意味構造が異なると考えるとうまく捉えることができるという点である。

4.1.3. 二重目的語構文

不変化詞動詞が自動詞文・他動詞文に現れるケースを見てきたが、不変化詞動詞は (24) のような動詞句の構造を持った二重目的語構文にも現れうる (當野 (2001, 2002))。

(24) [_{CP/IP} NP (_{V_{finite}}) [_{VP} (_{V_{nonfinite}}) PRT NP NP]]

次の例文を見てみよう。

- (25)a. Peter slängde [_{PRT} på] sig en jacka.

P. throw.PAST on himself a jacket

「ペーテルはジャケットを羽織った」

- b. Peter skickade [_{PRT} på] mig en bok.

P. send.PAST on me a book

「ペーテルは私に本を送りつけてきた」

以上の構文に関しては、不変化詞とそれに続く目的語が前置詞句を成すとみなし、(26)にあるように前置詞句が動詞と目的語名詞句の間に移動したとする分析もある (Svenonius (2003))。

(26) [_{VP} V [_{PP} P NP]_i NP _i]

しかし、通常、前置詞句が動詞句内で直接目的語より前に現れることはなく、この場合にのみ、そのような移動を認めることができるかどうかには疑問がある。また、通常の二重目的構文と同様に間接目的語の有生性制約が見られる。次の例文を見てみよう。

- (27) a. Hon hängde den nya medaljen [_{PP} på {ministern / väggen}].
 she hung.PAST the new medal.DEF on {minister.DEF / wall.DEF}
 「彼女は新しいメダルを {その大臣に / 壁に} 掛けた」
 b. Hon hängde [_{PRT} på] {ministern / *väggen} den nya medaljen.
 she hung.PAST on {minister.DEF / wall.DEF} the new medal.DEF
 「彼女は新しいメダルを {その大臣に / 壁に} 掛けた」

(Teleman *et al.* (1999: 423-424) の例文を改変)

(27a) は前置詞句を含む文であるが、前置詞の目的語には有生性の制約は見られない。一方、(27b) は不変化詞動詞が目的語を二つ取っている文である。この文の間接目的語は *ministern* 'the minister' のように有生でなければならず、*väggen* 'the wall' のような無生物では非文になる。以上を考慮すると当該の構文は二重目的語構文の一種とみなすことが妥当であると思われる。

på 'on' 以外にも、前置詞としての用法を持つ様々な不変化詞がこの構文に参加する。次の例文を見てみよう。

- (28) a. Peter slängde [_{PRT} till] henne en livväst.
 P. throw.PAST to her a life.jacket
 「ペーテルは彼女にライフジャケットを投げた」
 b. Peter slängde [_{PRT} i] sig maten.
 P. throw.PAST in himself food.DEF
 「ペーテルは食事をかき込んだ」
 c. Peter slängde [_{PRT} av] sig en jacka.
 P. throw.PAST off himself a jacket

「ペーテルはジャケットをパツと脱いだ」

d. Peter slängde [_{PRT} ur] sig en massa dumheter.

P. throw.PAST from himself a.lot.of stupid.remark.PL

「ペーテルはたくさん出まかせを口にした」

一方、副詞としての用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞は二重目的語構文には現れない。次の例を見てみよう。

(29)a. *Peter slängde [_{PRT} upp] hunden ett ben.

P. throw.PAST up dog.DEF a bone

「ペーテルは犬に向かって骨を放り上げた」

b. *Peter skickade [_{PRT} tillbaka] mig en bok.

P. send.PAST back me a book

「ペーテルは私に本を送り返してきた」

(29)にあるように、副詞としての用法を持つ *upp* 'up' や *tillbaka* 'back' のような不変化詞は二重目的語構文には現れない (Teleman *et al.* (1999: 421-424) など参照)。以上のような振る舞いは、品詞による意味構造の違いと内項が不変化詞によって導入されるという仮定により説明することができる。前置詞としての用法を持つ不変化詞は2つの変項がある為、その両方をそれぞれ直接内項・間接内項として実現することができる。そこで、二重目的語構文が可能であると説明することができる。具体的に見てみよう。不変化詞 *på* 'on' は (30a) のように、図と地を取る二項述語であると分析することができる。(25b) の意味構造の不変化詞部分は (30b) のようになり、BOOK と ME がそれぞれ直接内項・間接内項として実現することになる。

(30)a. [GO_{POSS} ([y],[TO ([ON ([z]))])])]

b. [GO_{POSS} ([BOOK],[TO ([ON ([ME]))])])]

一方、副詞としての用法を持つ不変化詞は図のみを項として取る一項述語であると考えられる。例えば、*tillbaka* 'back' の意味構造は次のように図を項として取る述語として表記することができる。

(31) [GO ([y],[TOWARD ([ORIGINAL PLACE]))])]

内項が不変化詞によってのみ決定されたとすると、副詞としての用法を持つ不変化詞は内項を一つしか実現させることができず、二重目的語構文を形成できないと説明することができる。

上記の分析が正しいとすると、直接目的語と間接目的語の両方が動詞が選択する項ではない二重目的語構文が可能であることが予想される。実際、そのような例がコーパスなどに見られる（當野(2001, 2002)を参照のこと。以下の例は Parole コーパスから⁶⁾）。

- (32) a. Bettina Oberesch red [PRT till] sig guldet ...
 B.O. ride.PAST to herself gold.DEF
 「ベッティーナ・オーバーレッシュは乗馬で金メダルを獲得した」
- b. ...han tjtade [PRT till] sig en gitarr av föräldrarna.
 ...he nag.PAST to himself a guitar from parent.PL.DEF
 「彼はごねて両親からギターをもぎ取った」

以上から、不変化詞動詞を含む二重目的語構文においては、直接内項・間接内項の両方が不変化詞によって導入されていると分析することができる。

以上、ここまでは不変化詞が内項を導入していると考えられる例を、自動詞文・他動詞文・二重目的語文の順に見てきた。

4.2. 動詞の項を継承しているように見える例

不変化詞が常に内項を導入するとする仮説にとって問題なのは、動詞の項を継承しているように見える不変化詞動詞である。まずは、不変化詞が付加詞であるように見える例を見てみよう。

- (33) Peter kastade (ner) bollen från balkongen.
 P. throw.PAST down ball.DEF from balcony.DEF
 「ペーテルはそのボールをバルコニーから下に投げた」

上記の例では、不変化詞 *ner* 'down' がなくても構わないので、目的語名詞句は動詞の項であると言えることができる。しかし、動詞と不変化詞の意味構造を考えると、これらの例も不変化詞が内項を導入していると考えられることもできる。不変化詞 *ner* 'down' は次のような概念構造を設定できる。

(34) *ner* 'down': [GO ([y], [TOWARD ([BELOW])])]

不変化詞 *ner* の変項 *y* が、動詞の内項と同定され、それが不変化詞動詞全体の項として実現されていると考えることも可能である。したがって、これらの例は必ずしも、仮説に対する反例とはならない。

次に、不変化詞が授受動詞や設置動詞など3項動詞の場所項として現れているように見える例について考えてみよう。

- (35) a. Ge hit boken!
Give hither book.DEF
「その本をこっちによこしなさい」
- b. Peter satte *(*ner*) väskan.
P. put.PAST down bag.DEF
「ペーテルはその鞆を下におろした」
- c. Peter lade *(*dit*) boken.
P. lay.PAST thither book.DEF
「ペーテルはその本をそこに置いた」

上記の例では、不変化詞が項としての役割を果たしていると言われることがある。そうだとすると、これも仮説に対する反例となるが、果たして、そうであろうか。詳しく見て行こう。次の例からも分かるように、一般に設置動詞は着点ではなく場所の前置詞を用いる。

- (36) a. Peter satte väskan {på/*till} golvet.
P. put.PAST bag.DEF {on/to} floor.DEF
「ペーテルはそのバッグを床に置いた」
- b. Peter lade boken {på/*till} bordet.
P. lay.PAST book.DEF {on/to} table.DEF
「ペーテルはその本をテーブルに置いた」

ところで、スウェーデン語には次の表にあるように、場所を表す副詞と方向を表す副詞のペアが存在する。

表1 場所と方向の副詞のペア

場所	方向	場所	方向
<i>här</i> 'here'	<i>hit</i> 'hither'	<i>uppe</i> 'up'	<i>upp</i> 'up'
<i>där</i> 'there'	<i>dit</i> 'thither'	<i>nere</i> 'down'	<i>ner / ned</i> 'down'
<i>inne</i> 'in'	<i>in</i> 'into'	<i>borta</i> 'away'	<i>bort</i> 'away'
<i>ute</i> 'out'	<i>ut</i> 'out'	<i>hemma</i> 'at home'	<i>hem</i> 'to home'

上記の表のペアのうち、設置動詞で場所を表す副詞と方向を表す副詞のどちらが用いられるか見てみよう。次の例からもわかるように、前置詞句が現れる位置では、*nere* 'down'、*där* 'there' のように場所の副詞が用いられる。

- (37)a. Peter satte väskan nere.
P. put.PAST bag.DEF down
「ペーテルはその鞆を下（の階）に置いた」
- b. Peter lade boken där.
P. lay.PAST book.DEF there
「ペーテルはその本をそこに置いた」

一方、不変化詞が現れる位置では、場所の副詞ではなく、*ner* 'down' や *dit* 'thither' のような方向の副詞が用いられる。

- (38)a. Peter satte ner väskan.
P. put.PAST down bag.DEF
「ペーテルはその鞆を下におろした」
- b. Peter lade dit boken.
P. lay.PAST to.there book.DEF
「ペーテルはその本をそこに置いた」

以上から、設置動詞に現れる不変化詞は単に場所項として機能し、項構造を充足しているのではないと言うことができる。先ほどの例と同じように、不変化詞の変項が、動詞の内項と同定され、それが不変化詞動詞全体の項として実現されていると考えることもできるのである。

5. おわりに

本稿では、McIntyre (2001, 2003)、Zeller (2001) の「不変化動詞においては、内項は常に不変化詞によって導入され、動詞の内項は統語的に実現しない」という仮説について検証してきた。4.1 で不変化詞が内項を導入していると考えたと説明がつく例を見た。また、4.2 では、一見すると動詞の項が継承されているように見える例でも、不変化詞によって項が導入されていると考えられることを確認した。したがって、スウェーデン語の不変化動詞においても内項は常に不変化詞によって導入されると考えることができる。

残された問題としては2点ある。一つ目は、4.1.1 で見た疑似主語構文における意味構造から項構造へのマッピングの問題である。疑似主語構文では動詞の項が実現しないが、これがどのようなメカニズムで起こっているか今後考えていきたい。二つ目は、完了を表す *upp'up'* や継続を表す *pd'on'* のようなアスペクトの不変化詞の問題である。McIntyre (2001, 2003) や Zeller (2001) はこれらのアスペクトの不変化詞を含む項構造に関しても、同じ説明が可能であるとしているが、スウェーデン語のアスペクトの不変化詞に関しても同じことが言えるかどうかは今後の課題としたい。

* 本稿は日本言語学会第142回大会ワークショップ「項と結合した複雑述語の形成—その制約とメカニズムについて—」における発表、および Morphology & Lexicon Forum 2006 における発表がもとになっている。ワークショップの企画・司会の由本陽子先生、同じワークショップで発表され、また草稿を読んでもくださった岸本秀樹先生、コメントをくださったフロアーの方々に感謝いたします。また、査読者の方、およびスウェーデン語学の観点から草稿を読んでもいただき、多くの貴重な指摘をくださった清水育男先生と、例文のチェックをしてくださった Ulf Larsson 先生にも感謝の意を表します。なお、誤りがあるとすれば筆者の責任である。

- 1 句動詞 (phrasal verb)、分離動詞 (separable prefix verb) と呼ばれることもあるが、本稿では不変化動詞で統一する。
- 2 本稿で用いるグロスは次の通り。DEF = 後置定冠詞、PRES = 現在、PAST = 過去、PERFP = 完了分詞、PL = 複数、INF = 不定詞。
- 3 本稿では不変化動詞と前置動詞あるいは不変化動詞と副詞の間にどのような違いがあるか、などの問題に触れる余裕がない。詳しくは Norén (1996)、Teleman *et al.* (1999)、Strzelecka (2003)、Toivonen (2003) などを参照のこと。
- 4 この中には形容詞および形容詞由来の副詞を含めてある。
- 5 (5b) の意味構造は、「上がる」などの自動詞と同じ意味構造になると考えられるが、不変化動詞 *upp* がそれ単独で項を取る自動詞として機能するわけではない。動詞と複雑述語を形成した場合に、その変項が不変化動詞の項として実現すると考えられる。
- 6 Parole コーパスは、〈<http://spraakbanken.gu.se/korp/>〉から利用可能である。

参考文献

- Anward, Jan and Per Linell (1976) Om lexikaliserade fraser i svenskan. *Nysvenska studier*, 55, 56: pp.77-119. Uppsala: Lundequistska Bokhandeln.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives. *Linguistic Inquiry* 23 (2): pp.173-274.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Jackendoff, Ray S. (1983) *Semantics and Cognition*. Current Studies in Linguistics Series 8. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』日英語対照研究シリーズ5. くろしお出版.
- Kaufmann, Ingrid and Dieter Wunderlich (1998) Cross-Linguistic Patterns of Resultatives. *Working Papers of the SFB 282 'Theorie des Lexikons'* 109. Düsseldorf: University of Düsseldorf.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1996) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Interface*. Linguistic Inquiry Monograph 26. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lødrup, Helge (2000) Underspecification in Lexical Mapping Theory: The Case of Norwegian Existentials and Resultatives. In Butt, Miriam and Tracy H. King. (eds.) *Argument Realization*. pp.171-188. Stanford, CA: CSLI Publications.
- McIntyre, Andrew (2001) Argument Blockages Induced by Verb Particles in English and German: Event Modification and Secondary Predication. In Dehé, Nicole and Anja Wanner (eds.) *Structural Aspects of Semantically Complex Verbs*, pp.131-164. Frankfurt, Berlin, New York: Peter Lang.

- McIntyre, Andrew (2003) Preverbs, Argument Linking and Verb Semantics. In Booij, Geert E. and Jaap van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 2003*, pp.119-144. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Norén, Kerstin (1996) *Svenska partikelverbs semantik*. Nordistica Gothoburgensia 17. Göteborg: Acta Universitatis gothoburgensis.
- Simpson, Jane (1983) Resultatives. In Levin, Lori S., Malka Rappaport, and Annie Zaenen. (eds.) *Papers in Lexical-Functional Grammar*, pp.143-157. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Stiebels, Barbara and Dieter Wunderlich (1994) Morphology Feeds Syntax: The Case of Particle Verbs. *Linguistics* 32: pp.913-968.
- Strzelecka, Elżbieta (2003) *Svenska partikelverb med in, ut, upp, och ner: En semantisk studie ur kognitivt perspektiv*. Skrifter utgivna av institutionen för nordiska språk vid Uppsala universitet. Uppsala: Department of Scandinavian Languages, Uppsala University.
- Svenonius, Peter (2003) Swedish Particles and Directional Prepositions. In Lars-Olof Delsing, Cecilia Falk, Gunlög Josefsson, and Halldór Á. Sigurðsson. (eds.) *Grammar in Focus: Festschrift for Christer Platzack*, pp.343-351. Lund: Department of Scandinavian Languages, Lund University.
- Teleman, Ulf, Staffan Hellberg, and Erik Andersson (eds.) (1999) *Svenska Akademiens grammatik 3: Fraser*. Stockholm: Norstedts Ordbok.
- 當野能之 (2000) 「現代スウェーデン語の擬似再帰代名詞について」 *IDUN* 14: pp.151-168. 大阪外国語大学デンマーク・スウェーデン語研究室.
- 當野能之 (2001) 「スウェーデン語の2重目的語構文の拡張」『日本言語学会第123回大会発表予稿集』 pp.248-253. 日本言語学会.
- 當野能之 (2002) 「現代スウェーデン語における獲得を表す表現に関する一考察」 *IDUN* 15: pp. 51-66. 大阪外国語大学デンマーク・スウェーデン語研究室.
- Toivonen, Ida (2003) *Non-Projecting Words: A Case Study of Swedish Particles*. Studies in Natural Language and Linguistic Theory 58. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6: pp.1-49.
- Zeller, Jochen (2001) How Syntax Restricts the Lexicon: Particle Verbs and Internal Arguments. *Linguistische Berichte* 188: pp.461-494.

論文 7

「スウェーデン語の過去分詞による属性描写」

スウェーデン語の過去分詞による属性描写

當野 能之

1. はじめに

英語やドイツ語には「中間構文 (Middle Construction)」と呼ばれる次のような構文が存在し、この構文をめぐってこれまで様々な議論がなされてきた。

- 1) The book reads easily.
- 2) Das Buch liest sich leicht.
the book read RM easily

〈その本は簡単に読める。〉

この構文は動詞の本来の目的語が主語として現れ、その性質・属性などを述べる文である。動詞の形態を見るかぎり能動態と同じであるが、他動詞の本来の目的語が主語に対応する点で受動文との共通性もあり、「能動受動 (activo-passive)」などと呼ばれることもある。英語とドイツ語の中間構文の統語的な違いは、ドイツ語が再帰代名詞を伴うのに対して、英語は表面上何も現れない点にある。さて、英語・ドイツ語と同じゲルマン語派に属するスウェーデン語には、中間構文に相当するものは存在するだろうか？

- 3) *Boken läser lätt.
book.DEF read easily
- 4) *Boken läser sig lätt.
book.DEF read RM easily

3) から分かるように、スウェーデン語では英語タイプの中間構文を作ることはいできない。¹ また、4) に見るように、ドイツ語のような再帰代名詞を伴う中間構文も形成できない。² しかし、もちろんスウェーデン語にも同様の意味内容を表現する構文は存在する。次の “lätt (easy) +過去分詞” を用いたものがそれに当たる。英語・ドイツ語

¹ ただし *sälja* (sell) に関しては、英語タイプの中間構文が可能である。しかし、この構文を取る動詞は、ほぼこの一語に限られる。(Sundman 1988: 291)

Boken säljer bra.
book.DEF sell well
〈この本は良く売れる。〉

² スウェーデン語には再帰代名詞から発達した受動形態素 *-s* があるが、この接尾辞も中間構文を形成することはできない。

*Boken läse-s lätt.
book.DEF read-PASS easily
〈この本は簡単に読める。〉

の中間構文が「意味は受動, 形は能動」だとすると, スウェーデン語の 5) の構文は「意味も形も受動」ということになる。

- 5) Boken är lättläst.
book.DEF is easy.read.PSTP
〈その本は簡単に読める。〉

läsa (read) 以外の動詞の例を以下に, いくつか挙げておく。

- 6) ... bilen är otroligt bra och lättkörd. (Korp³)
car.DEF is incredibly good and easy.drive.PSTP
〈その車は非常にすばらしく運転しやすい。〉
- 7) Fina möbler är alltid lättsålda på auktion,... (Korp)
fine furniture is always easy.sell.PSTP on auction
〈すばらしい家具はいつもオークションで簡単に売れる。〉
- 8) Omelett är lättlagat ... (Korp)
Omelett is easy.cook.PSTP
〈オムレツは簡単に作れる。〉
- 9) ... folk på stan är så lättpratade och vänliga... (Korp)
people on town.DEF is so easy.talk.PSTP and kind
〈その町の人々はとても話しやすく親切だ。〉
- 10) Lättpromenerade stigar leder genom skogen. (Korp)
easy.promenad.PSTP paths lead through forest.DEF
〈散歩しやすい小道がその森の中を通っている。〉

筆者の知る限り, スウェーデン語文法の中ではこのような構文はこれまで等閑視されてきた。本稿では, この構文に関して主に次の 2 点に絞って考察する。ひとつは, スウェーデン語の当該構文を英語・ドイツ語の中間構文と対照させながら, 記述的な考察を行う。二つ目は, 英語・ドイツ語・スウェーデン語というゲルマン系の 3 言語で, 対象の属性を表わす表現にそれぞれ違う手段が用いられているが, それらには Shibatani (1985) のいう「動作主の背景化 (agent-defocusing)」という共通した語用論的機能があり, それにより統一的に説明することが可能であると主張する。ところで, 本稿では便宜的に 5) - 10) に代表されるような構文を「過去分詞属性描写文」と呼び, またそこに現れる過去分詞を「属性描写過去分詞」と呼ぶことにする。

³ 例文に (Korp) と付されている場合は, コーパス (<http://spraakbanken.gu.se/korp/>) からの用例である。

2. 属性描写過去分詞の基本的特徴

さて、そもそもこれらのスウェーデン語の文が英語・ドイツ語等の中間構文と同等に扱うことができるかどうかという所から議論を始めなければならない。一般に、英語等における中間構文は次のような特徴をもっていると言われている。

- 11) a. 主語は他動詞の意味上の目的語に相当する。
- b. 主語の一般的性質や属性を表す。(特定の出来事を表わさない。)
- c. 時制は基本的に単純現在である。
- d. 他動詞の意味上の主語は表面上には現れない。
- e. 通常, easily, well などの副詞を伴う。

スウェーデン語の当該構文も、本来の目的語が主語に対応し、その属性を述べる文であるので、基本的に 11a) と 11b) の特徴は共有している。以下では、11c) - 11e) に関して順に考察しながら、スウェーデン語の過去分詞属性描写文の特徴を見ていきたい。

《時制等に関する制約》

中間構文は主語の一般的性質や属性を表わす。そこで、特定の出来事を表わしてしまふ 12) のような過去時制の文は非文となる。

- 12) *This book read easily yesterday.

ところがスウェーデン語の当該構文では、13) から分かるように過去時制でも問題はない。ただし、過去の特定の時点を表わす副詞をつけることはできず、やはり特定の出来事を表わせないという点では共通している。

- 13) Boken var lättläst (*? igår).

book.DEF was easy.read.PP yesterday

〈この本は昨日読みやすかった。〉

さて、なぜ英語の中間構文では多くの場合、過去時制で非文となり、一方、スウェーデン語では過去時制の文が問題ないのであろうか？ これには、述語の品詞の違いが関わっているものと思われる。英語・ドイツ語の中間構文では述語が動詞である。一般に、動作動詞は単純現在形で用いられた場合、属性・性質等を表わしうるが、過去時制の場合は基本的に出来事の解釈しかできない。一方、スウェーデン語の属性描写過去分詞は後で見るように、形容詞としての特徴をもっている。形容詞は過去形のコンピュータと用いられた場合でも、もちろん過去における属性・性質を表わしうる。

《潜在的動作主の存在》

中間構文には、people in general (人々一般、誰にでも) という動作主が存在すると考えられている (Fellbaum 1985)。ただし、次の 14) から分かるように、それは意味上含意されるだけで、by-句による動作主の生起は許されない。

- 14) The book reads easily {*by him/*by people}.

一方, スウェーデン語でも「誰にでも」という総称的な含意がある. また, 英語と同じように受動文で動作主を表わす av-句によって動作主を表出することは許されない.

- 15) Den här boken är lättläst {*av honom /*av alla}.

this book.DEF is easy.read.PSTP { by him / by all}

〈この本は{彼/すべての人々}にとって簡単に読める.〉

《義務的な副詞/形容詞》

大半の中間構文では, well, easily 等の副詞要素が伴う. これらの副詞要素を欠く場合には容認されないことが多い.

- 16) *The book reads.

一方, スウェーデン語では形容詞が過去分詞の前につき複合語となる. 過去分詞に前置する形容詞には行為の容易さを意味する lätt (easy) 以外に, svår (difficult), tung (heavy) などの行為の難しさを表わすものがある. lätt, tung にはそれぞれ, 物理的な意味での「軽い」「重い」という意味もあるが, この構文で使われる際には「簡単な」「難しい」という難易の意味に限定される.

- 17) Boken är {svår- /tung-} läst.

book.DEF is {difficult-/heavy-} read.PSTP

〈この本は読みにくい.〉

スウェーデン語においてもこれらの形容詞は必須要素である. 形容詞がない場合は, 主語の属性の解釈はなく, 次に見るように受動の解釈である.

- 18) Boken är läst av tusentals människor.

book.DEF is read.PSTP by thousands.GEN people

〈この本は何千人という人々に読まれている.〉

以上, 見てきたように過去分詞属性描写文は, 基本的な点では英語・ドイツ語の中間構文と類似した振舞いを示す.

しかしながら, 両者には根本的な相違点も存在する. 英語・ドイツ語の中間構文では, 述部の品詞が動詞であるのに対し, スウェーデン語の属性叙述過去分詞は形容詞としての一連の特徴を示す. 19) では通常の形容詞と同じく修飾語として名詞の前に用いられ, 20) では比較変化を起している. さらに, 21) では形容詞のみを修飾する程度副詞 ganska (fairly), relativt (relatively) が属性描写過去分詞を修飾している. また, 22) では形容詞と結びついて名詞を作り出す接尾辞 -het (-ness) が属性描写過去分詞につくことを示している.

- 19) En lättläst bok.
a easy.read.PSTP book.
〈読みやすい本〉
- 20) Boken är mer lättläst än hans tidigare bok.
book.DEF is more easy.read.PSTP than his previous book
〈その本はかれの以前の本より読みやすい。〉
- 21) Boken är {ganska / relativt} lättläst
book.DEF is {fairly / relatively} easy.read.PSTP
〈その本は {かなり / 比較的} 読みやすい。〉
- 22) lättläst-het
easy.read.PSTP -ness
〈読みやすさ〉

スウェーデン語では形容詞は名詞の性・数と一致を起こす。また形容詞が名詞を修飾する場合（つまり限定用法の場合）は、さらにその名詞の定・不定にも一致する。属性描写過去分詞も次の例から分かるように形容詞と同様の一致現象を示す。

- 23) a. en lättlaga-d rätt [共性・単数・不定]
a easy.cook.PSTP meal.NON-N.SG
〈作りやすい料理〉
- b. ett lättlaga-t recept [中性・単数・不定]
a easy.cook.PSTP receipt.N.SG
〈作りやすいレシピ〉
- c. två lättlaga-de rätter [複数・不定]
two easy.cook.PSTP meals NON-N.PL
〈二つの作りやすい料理〉
- d. den lättlaga-de rätten [定]
the easy.cook.PSTP dish.NON-N.SG.DEF
〈その作りやすい料理〉

さて、ここまでで過去分詞属性描写文が英語・ドイツ語の中間構文とは異なり、形容詞述語文であるということが明らかになった。

3. 動詞に関する制約

次に、過去分詞属性描写文に用いられる動詞について考えてみたい。この構文に用いられる動詞はその多くが他動詞である。まずは、その他動詞に関して、語彙的アス

ペクトの点から観察してみよう.⁴

《行為動詞 (activity verb)》

- 24) Bilen är lättkörd.
car.DEF is easy.drive.PSTP
〈その車は運転しやすい.〉
- 25) ... jag tycker den är svåränvänd, ... (Korp)
I think it is difficult.use.PSTP
〈私はそれは使いにくいと思います.〉

《達成動詞 (accomplishment verb)》

- 26) Boken är lätläst.
book.DEF is easy.read.PSTP
〈その本は読みやすい.〉
- 27) Planet är lättbyggt ... (ネットからの実例)
plane.DEF is easy.build.PSTP
〈その(模型の)飛行機は作りやすい.〉

《到達動詞 (achievement verb)》

- 28) ... flygplatsen är lättnådd för fyra nationer. (Korp)
airport.DEF is easy.reach.PSTP for four nations
〈その空港は4か国にとってアクセスしやすい.〉
- 29) Lösningen är inte lättfunnen! (Korp)
solution.DEF is not easy.find PSTP
〈その解決策が簡単に見つからないわけではない.〉

⁴ Fagan (1992) は、動詞のアスペクトによって中間構文の適格性が決まるという制約を提案している。行為動詞 (activity verb) と達成動詞 (accomplishment verb) のみが中間構文を形成し、状態動詞 (stative verb) と到達動詞 (achievement verb) は中間構文では許さないという..

1)	This car drives easily	[行為]	(Fagan 1992: 68)
2)	This book reads easily.	[達成]	(<i>ibid.</i>)
3)	*The top reaches easily.	[到達]	
4)	*The answer knows easily	[状態]	(Keyser and Roeper 1984:383)

《状態動詞 (achievement verb)》

30) Texten är lättförstådd.

text. DEF is easy.understand.PASTP

〈そのテキストは理解しやすい。〉

31) Ronny däremot, han är lättgillad. (ネットからの実例)

Ronny on.the.other.hand he is easy.like.PASTP

〈一方、ロニーは好かれやすい。〉

以上みてきたように、動詞の語彙アスペクトに関する制約はなさそうである。それではどのような他動詞でも、この構文に参加できるかというところでもなく、sakna (lack), föredra (prefer), behöva (need) のようないわゆる無意志動詞はこの構文を形成することができない。

32) *Nycklar är lättsaknade.

keys are easy.miss.PSTP

〈鍵はなくしやすい。〉

33) *Hans verk är lättföredragen.

his work is easy.prefer.PSTP

〈彼の作品は好まれやすい。〉

34) *Denna regle är svårbehövd när de nya reglerna införs.

this rule is difficult.need.PSTP when the new rules.DEF introduce.PASS

〈このルールは新しいルールが導入されたら必要とされにくくなる。〉

ここまで見てきた例からも分かるように、この構文では基本的には他動詞が用いられるが、自動詞であってもいわゆる意志動詞であれば、この構文に参加しうる。その際、動詞の本来の斜格名詞句が主語になる。ただし、35) のような移動の経路か36) のような動作の相手が主語になる場合が多いようである。

35) Mittenälvsborg är relativt platt och lättcyklat. (Korp)

Mittenälvsborg is relatively flat and easy.cycle.PSTP

〈Mittenälvsborg は比較的平らで自転車を乗りやすい。〉

36) Anja var blyg och svårpratad. (Korp)

Anja was shy and difficult.talk.PSTP

〈アーニャは恥ずかしがり屋で話しにくい。〉

また、この際いわゆる前置詞残留 (preposition stranding) は起こらない。これに関しては、次の節で詳しく見る。

4. 過去分詞属性描写構文と難易構文 — 語彙的か統語的か? —

ところで、中間構文と機能的に類似した構文として、以下に挙げるような、いわゆ

る「難易構文 (*tough construction*)」がある.

- 37) The book is easy to read. [英語]
 38) Das Buch ist leicht zu lesen. [ドイツ語]
 the book is easy to read
 〈その本は読みやすい.〉
 39) Boken är lätt att läsa. [スウェーデン語]
 book.DEF is easy to read
 〈その本は読みやすい.〉

難易構文は上記の例からもわかるように, 不定詞の意味上の目的語が, 主文の主語に対応し, 主語の属性・特徴を述べる文であり, その点で中間構文・過去分詞属性描写文と類似している. さらに, 難易構文と過去分詞属性描写文は, どちらも形容詞文であること, またどちらも *lätt* (easy), *svår* (difficult) という難易形容詞を用いるという点でも似ている. 実際, 次の 40) の難易構文と 41) の過去分詞属性叙述文が表わす意味はほぼ同じである.

- 40) Det här problemet är svårt att lösa.
 this problem.DEF is difficult to solve
 〈その問題は解決しにくい.〉
 41) Det här problemet är svårlöst
 this problem.DEF is difficult.solve.PSTP
 〈その問題は解決しにくい.〉

この二つの構文に見られる違いは前置詞残留についてである. 難易構文では前置詞の目的語が主語に対応する場合は, 42), 44) から分かるように必ず前置詞が残留しなければならない. 一方, 過去分詞属性描写文では, 43), 45) から分るように, 前置詞の残留は許されない.

- 42) Hon är lätt att prata *(med).⁵ [難易構文]
 she is easy to talk with
 〈彼女は話しやすい.〉
 43) Hon är lättpratad (*med). [過去分詞属性描写文]
 she is easy.talk.PP with
 〈彼女は話しやすい.〉
 44) Musiken är lätt att lyssna *(på). [難易構文]
 music.DEF is easy to listen on
 〈この道は車を運転しにくい.〉

⁵ 一般的な言語学の表記の慣習に従い, *(med) は med がない場合は非文で, (*med) は med があると非文であることを表している.

- 45) Musiken är lättlyssnad (*på). [過去分詞属性描写文]

music.DEF is easy.listen.PSTP on

〈この道は車を運転しにくい。〉

このことは、難易構文が統語的な構文であるのに対し、属性描写過去分詞は語彙部門で派生されていることを示している。というのは、46) からも分かるように、一般的に統語規則であると考えられる受動文の形成では前置詞の残留するのに対し、語彙規則では47) のように前置詞を削除してしまうと考えられているからである。

- 46) He was laughed at.

- 47) laugh at → *laughatable/ laughable

以上この節では属性描写過去分詞は語彙部門で派生されるものであることを主張した。

5. 英語・ドイツ語・スウェーデン語における違いからみた中間構文の派生

英語の中間構文の派生をめぐっては様々なものが提案されている。代表的なものでは、Keyser and Roeper (1984) による統語的な分析があり、受動文の場合と同じようにNP 移動が関与していると主張している。また、語彙的派生を主張するものとして、Fagan (1992) がある。彼女は動詞の外項に総称的解釈を与え（その結果、外項は統語構造には投射されず）、直接内項が外項化されるという語彙規則を提案している。これらについて、ここでひとつひとつ検討する余裕はない。以下では、英語・ドイツ語の中間構文及びスウェーデン語の過去分詞属性描写文と関連する構文を検討することで、機能主義的観点から中間構文の派生の問題を考えていくことにする。

英語・ドイツ語における中間構文は動詞の形式は能動であるが、文全体の意味は受動に近く、受動文との関連性が指摘されてきた。また、他動詞の目的語に対応する名詞句が主語に対応し、動詞は能動態のままであることから、the vase broke のような「能格文 (ergative construction)」との類似性もある。しかし、これらの構文との間には様々な違いも存在する。受動文・能格文が出来事を叙述するのに対し、中間構文は主語の性質を描写する総称文である。また、受動文は動作主の存在を含意し、それを統語上に斜格として表出することができるが、一方、能格文は動作主を含意しない。中間構文は動作主を含意するという点では受動文に近いが、それを統語上に表出することはできない。

英語・ドイツ語・スウェーデン語の受動文・能格文がどのような手段で表現され、中間構文・過去分詞属性叙述文が受動文・能格文とどのような関係にあるかを見たい。以下では、能動文・受動文・能格文に関しては open/öffnen/öppna を例とし、中間構文・過去分詞属性叙述文については read/lesen/läsa を例とする。まずは英語とドイツ語の場合を見てみよう。

- 48) a. He opened the door. [能動文]
 b. The door was opened. [受動文]
 c. The door opened suddenly. [能格文]
 d. The book reads easily. [中間構文]
- 49) a. Er öffnete die Tür [能動文]
 he opened the door
 〈彼はドアを開けた。〉
 b. Die Tür wurde geöffnet [受動文]
 the door was open.PSTP
 〈ドアが開けられた。〉
 c. Die Tür öffnete sich plötzlich. [能格文]
 the door opened RM suddenly
 〈ドアが突然開いた。〉
 d. Das Buch liest sich leicht. [中間構文]
 the book read RM easily
 〈この本は簡単に読める。〉

48c) と 48d) を比べると分かるように、英語ではゼロ派生で能格文と中間構文を形成する。一方ドイツ語は、49c) と 49d) から分かるように、再帰代名詞を伴って能格文と中間構文を作っていることが分かる。つまりゼロ派生か再帰代名詞かという違いはあれ、英語もドイツ語も能格文と同じ手段で中間構文を形成している点に注意されたい。次に、スウェーデン語の例を見てみよう。

- 50) a. Han öppnade dörren. [能動文]
 he opened door.DEF
 〈彼はドアを開けた。〉
 b. Dörren var öppnad. [受動文]
 door.DEF var open.PSTP
 〈ドアが開けられた。〉
 c. Dörren öppnade sig plötsligt. [能格文]
 door.DEF opened RM suddenly
 〈ドアが突然開いた。〉
 d. Boken är lättläst. [過去分詞属叙述文]
 book.DEF is easy.read.PSTP
 〈この本は簡単に読める。〉

スウェーデン語では、50b) と 50d) を比べると分かるように、過去分詞という受動文と同じ手段で、属性表現を形成する。以上をまとめると次の表1 のようになる。

	英 語	ドイツ語	スウェーデン語
受動文	過去分詞	過去分詞	過去分詞
属性表現	ゼロ	再帰代名詞	
能格文			再帰代名詞

表 1

中間構文を形成する際に、英語・ドイツ語が能格文と同じ手段を用い、一方、スウェーデン語は受動文と同じ手段を用いる。さて、受動文と能格文という2つの異なる構文の間には「動作主の背景化 (agent-defocusing)」という共通性があるものと考えられる。受動文が動作主を背景化するという点に関しては、すでに Shibatani (1985) で説得的に述べられているのでここでは繰り返さない。しかし、能格文において動作主が背景化されているかどうかに関しては議論の余地のあるところである。ドイツ語の能格文は再帰代名詞を取ることから、明らかに他動詞（使役）が基本となり、そこから自動詞（起動）が形成されていると考えられる（ドイツ語の使役交替に関する詳細は大矢（2008）を参照のこと）。一方、英語に関しては、使役交替において形態的な変化がないため、他動詞と自動詞のどちらが基本なのかは形の上からは判断できない。実際、自動詞を基本とし他動詞を派生させる分析（Pinker 1989 など）と他動詞から自動詞を派生させる分析（Levin and Rappaport Hovav 1995 など）が存在する。本稿では後者の立場を支持するわけであるが、それに関しては次のような経験的な証拠がある。

51) a. He broke the window.

b. The window broke.

52) a. He broke the promise.

b. *The promise broke.

Levin and Rappaport Hovav (1995) によると、51a) の break の目的語である window は 51b) の自動詞の break の主語としても可能である。一方、52a) の promise は、52b) の自動詞の break の主語にはなれない。つまり、自動詞用法の主語であれば他動詞の目的語であることも可能であるが、その逆は必ずしも成り立たないことになる。このことを説明するためには、他動詞が基本でありそこから自動詞が派生されるという説明が正しいと主張している。以上のような主張が正しいとすると、英語の能格文は、ドイツ語と同様に他動詞が基本でそこから動作主を背景化することで派生されることができると考えることができる。

以上、ここまで見てきたように、能格文も受動文も、動作主の背景化という語用論的機能を持っていると考えられる。すでに Shibatani (1985) が述べているように、この動作主の背景化という構文機能が「対象物」における「可能性」の存在という意味を可能にしていると考えられる。つまり、中間構文は普通、「動作主」が用いる「対象物」の潜在的な「可能性 (possibility)」を述べる文であるが、それは「誰が用いても動詞が叙述する動作が可能である」ということであり、動作主は事態の生起の主導者 (initiator) ではないということになる。つまり、動作主を主語の位置からはずす（つまり動作主の背景化）という構造によって、類像的 (iconic) に意味を反映しているといえるのである。

6. なぜ過去分詞か？ — まとめに代えて —

さて、以上見てきたように英語・ドイツ語のように能格文と同じ手段を使った場合も、スウェーデン語のように受動文と同じ手段を使った場合も「動作主の背景化」という機能が共通しているために、対象の属性・可能性といった意味が可能になることが分かった。しかし、そもそも何故スウェーデン語では過去分詞を用いるのであろうか。Haspelmath (1994) は受動分詞 (Passive Participle) つまり過去分詞に関する類型論的研究である。彼の研究によると、過去分詞の主要な機能は結果完了と受動であり、やはりスウェーデン語の対象物の属性描写という機能は稀なようである。そこで、スウェーデン語の過去分詞一般の働きについて考えてみたい。英語とドイツ語においては、過去分詞が受動態と完了形の両方に用いられる。

53) The letter was written by him. [受動文]

54) He has written the letter. [完了形]

一方、スウェーデン語では受動態には過去分詞が用いられるが、完了形には過去分詞とは別の supinum という形が用いられる。この supinum はもともと過去分詞の中性単数形から発達したものであり、現在でも両者は多くの場合は同一であるが、以下の 55) と 56) から分かるように異なる形態をとるものもある。また、23) で見たように、過去分詞が名詞の 55) では主語名詞の) 性と数に一致するのに対して、supinum ではそのような一致は起こらない。

55) Brevet är skrivet av honom. [受動文]

letter.N.SG.DEF is write.PSTP.N.SG by him

〈その手紙は彼によって書かれた。〉

56) Han har skrivit brevet. [完了文]

he has write.SUP letter.DEF

〈彼はその手紙を書いた。〉

つまり、完了形の用法を持たないスウェーデン語の過去分詞は、英語・ドイツ語に比べて機能負担量が少ないといえることができる。さらに、最近の研究によると過去分詞

を用いた受動文もその機能を弱めてきている。スウェーデン語には2つのタイプの受動文が存在する、ひとつは迂言的な受動文で、助動詞 bli (become) あるいは vara (be) と過去分詞を組み合わせたもの。もうひとつは、接尾辞-sを動詞に付加するものである。この接尾辞 -s は再帰代名詞 sig と語源的に同じものである。Engdahl (2001) のコーパスを用いた研究によると、現代スウェーデン語においては接尾辞-s を用いた受身文のほうが、過去分詞を用いた受身文よりも頻度が高く、無標であると述べている。以上を考慮すると、スウェーデン語の過去分詞は、英語・ドイツ語のそれと比べて、完了形を作る機能を持たず、また受動文においても頻度が低く、有標な形式であるということになる。

	英 語	ドイツ語	スウェーデン語
受動文	過去分詞	過去分詞	接尾辞-s/過去分詞
完了文			supinum

表 2

表 2 から分かるように、機能を縮小してきたスウェーデン語の過去分詞が、いわゆる形容詞的受身 (adjectival passive) へとその機能を特化させていき、過去分詞属性描写文のようなスウェーデン語に特有な構文を発達させていったという想定を筆者は立てているが、その通時的な検証は今後の課題としたい。

略号一覧

DEF : (後置) 定冠詞, N : 中性, NON-N : 共性, PASS : 受動形態素, PL : 複数,
PSTP : 過去分詞, RM : 再帰代名詞, SG : 単数, SUP : 完了分詞

Om perfektparticip som anger egenskap i svenskan.

Takayuki Tohno

Sammanfattning

I denna artikel diskuterar jag en konstruktion av typen *Boken är lättläst* och *Han är svårpratad*, dvs. meningar som innehåller sammansatta perfektparticip där *lätt* eller *svår* är förled och ett perfektparticip är efterled. Denna konstruktion har följande särdrag:

1. Det sammansatta perfektparticipet [*lätt/svår* + perfektparticip] anger en egenskap hos en referent.
2. Det sammansatta perfektparticipet är inte verbalt utan adjektiviskt.
3. Förleden *lätt/svår* kan inte kombineras med perfektparticip av verb som betecknar aktion som oavsiktligt utförs eller kontrolleras, t.ex. **lättföredragen*, **svårbehövd*, **lättsaknad* etc.
4. Även perfektparticip av intransitiva verb kan vara efterled, t.ex. *svårpratad*, *lätncyklad*, *lättyssnad* etc.
5. En rektion i bundet adverbial kan motsvara subjektet i denna konstruktion och prepositionen till rektionen måste strykas i sådana fall, t.ex. *Han är svårpratad (*med)*. (Jfr *Det är svårt att prata med honom*.)

Denna konstruktion har starka likheter med den s.k. "Middle construction" i engelskan (*The book reads easily*) och tyskan (*Das Buch liest sich leicht*). Dessa konstruktioner i tre språk visar olika syntaktiska mönster, men utnyttjar samma strategi – "agent defocusing" (Shibatani 1985).

参考文献

- Engdahl, Elisabet. 2001. Valet av passivform i modern svenskan. *Svenskans beskrivning* 24, 81-90. Linköping: Linköping university Electronic Press.
- Fagan, Sarah. 1992. *The Syntax and Semantics of Middle Constructions in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fellbaum, Christiane. 1985. Adverbs in agentless actives and passives. *CLS* 21, 21-31. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Haspelmath, Martin. 1994. Passive participles across languages. Babara Fox & Paul Hopper (eds.) *Voice: Form and Function*, 151-77. Amsterdam: John Benjamins.
- Keyser, Samuel and Thomas Roeper. 1984. On the middle and ergative constructions in English. *Linguistic Inquiry* 15, 381-416. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 大矢俊明. 2008. 『ドイツ語再帰構文の対照言語学的研究』. 東京：ひつじ書房.
- Pinker, Steven. 1989. *Learnability and Cognition: The acquisition of argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Shibatani, Masayoshi. 1985. Passive and related constructions. *Language* 64, 821-848. Washington, DC : Linguistic Society of America.
- Sundman, Marketta. 1987. *Subjektval och diates i svenskan*. Åbo: Åbo Academy Press.

コーパス

(Korp) Korp <http://spraakbanken.gu.se/korp/>

論文 8

「現代スウェーデン語における疑似主語構文の分析」

現代スウェーデン語における擬似主語構文の分析

當野 能之

大阪大学

1. はじめに

英語の結果構文 (resultative construction) において、動詞が選択しない項が目的語 (いわゆる、擬似目的語 (fake object)) として現れることはよく知られていて、これまで様々な分析が成されてきた (Simpson (1983), Carrier and Randall (1992), Goldberg (1995), Levin and Rappaport Hovav (1995), 影山 (1996), Washio (1997) など)。また、擬似目的語を含む結果構文がゲルマン諸語に広く見られる現象であることもこれまでの先行研究から明らかになっている (Kaufmann and Wunderlich (1998), Lødrup (2000), Toivonen (2003), Oya (2002) など)。北ゲルマン語に属するスウェーデン語も例外ではなく、次の例からも明らかのように、結果構文において擬似目的語が現れうる¹。

- (1) a. Han skrek sig hes. / *Han skrek sig.
he shout.PST REFL hoarse / he shout.PST REFL
「彼は叫びすぎて声が枯れた。」
b. Hon sjöng sin son till sömns. / *Hon sjöng sin son.
she sing.PST REFL.POSS son to sleep / she sing.PST REFL.POSS son
「彼女は歌をうたって自分の息子を寝かせた。」

上記の (1a,b) では、それぞれ再帰代名詞 *sig* と *sin son* ‘her son’ が動詞によって選択されていない項であることが分かる。一方、動詞が選択しない項が現れる構文で、これまで研究で取り上げられることのなかったものとして次のような文が存在する。

- (2) a. Snön regnade bort. / *Snön regnade.
snow.DEF rain.PST away / snow.DEF rain.PST
「雨が降って雪が消えた。」
b. Marken växte igen med ljung. / #Marken växte.
ground.DEF grow.PST covered with heath / ground.DEF grow.PST
「ヒースが繁って地面が覆われた。」

上記の例文 (2a,b) においては主語名詞句である *snön* ‘the snow’ と *marken* ‘the ground’ がそれぞれ動詞によって選択されていない項であることが分かる。主語として現れる名詞句はむしろ、動詞の直後に現れる *bort* ‘away’ や *igen* ‘closed’ など（以後これを仮にXPと呼ぶことにする）の意味的な項であるとみなすことができる。本稿ではこのような動詞が選択しない項が主語として現れる項を擬似主語 (fake subject)、また擬似主語を含む文を擬似主語構文と呼ぶことにする。筆者の知る限り、動詞の選択しない項が主語として現れる現象は、スウェーデンにおけるスウェーデン語研究においても、また、他言語の研究においても無いように思われる。そこで本稿では、スウェーデン語における擬似主語構文の記述を行い、更に当該の構文がどのように分析することが可能であるか考察したい。

2. 擬似主語構文の特徴

スウェーデン語に擬似主語構文が存在するといっても、それは非常に有標な構文であることは間違いない。擬似主語が現れるのは自動詞構文に限られ、他動詞構文の主語に動詞が選択しない項が現れることはない。したがって、スウェーデン語の擬似主語構文は以下のような統語構造と文法関係を持った構文に限られる²。

- (3) 統語構造： [IP/CP NP (V_{FINITE}) [VP (V_{NONFINITE}) XP]]
 文法関係： SUBJ (PRED) (PRED) OBL

以下ではいくつかの動詞クラス毎に擬似主語構文を見ていく。擬似主語構文に現れる動詞は基本的に自動詞で、外項を取らない非対格自動詞の一部が現れる。まず例文 (2a) でもみたように、*regna* ‘rain’, *snöa* ‘snow’, *blåsa* ‘blow’ などの天候動詞 (Weather verb) が擬似主語構文に現れる。これらの動詞は英語などの天候動詞と同様に虚辞 (*det*) を主語として取る。

- (4) Det {snöade / regnade / blåste} igår.
 it {snow.PST / rain.PST / blow.PST} yesterday
 「昨日、 {雪が降った／雨が降った／風が吹いた}。」

天候動詞が現れる擬似主語構文を考えると、天候動詞は項構造を持たず、主語として現れる項はXPの意味的な項にあたるものと考えられる。主語として現れる項の意味的な役割には、(5a,b) のように状態変化の主体が現れる場合と、(5c) のように位置変化の主体が現れる場合がある。どちらの場合も文の意味は、動詞によって表された出来事が原因となって、ある別の出来事が起こったという因果関係を表している。

- (5) a. Vägarna snöade igen under natten. (SS)
road.PL.DEF snow.PST closed under night.PST
「それらの道路は夜間の間、雪のために通行不能になった。」
- b. Två år i rad har tävlingen regnat bort...(SB)
two years running have.PRES competition.DEF rain.PERF.P away ...
「二年続けてその競技会は雨で流れた。」
- c. Tegelpannor hade blåst ner från taket.
roofing.tile.PL have.PST blew.PERF.P down from roof.DEF
「屋根の瓦が風で屋根から落ちた。」

更に、天候動詞のように項をひとつも持たない動詞ばかりでなく、*växa* ‘grow’, *gro* ‘grow’ (Grow verb) のような動詞も擬似主語構文に現れる。これらの動詞は通常、成長する主体を主語として取るが、XPの意味的な項を擬似主語として取ることもできる。その場合、(6a) にあるように植物などが育つ場所を主語としてとる場合や、(6b) のように育つ主体に付随するものを主語として取ることができる。どちらも主語の状態変化を表す。動詞の項は (6b) のように現れなかったり、(6a) のように斜格として現れたりする。文の意味を考えるとこの場合も、動詞によって表された出来事が原因となって、別の出来事が起こったという原因・結果の関係が表されている。

- (6) a. Marken växte igen med ljung. / #Marken växte.
ground.DEF grow.PST covered with heath / ground.DEF grow.PST
「ヒースが繁って地面が覆われた。」
- b. ...allergier kan växa bort med åldern. (SS)
...allergi.PL can grow.INF away with year.PL.DEF
「アレルギーは成長するにつれ、年とともに無くなる可能性がある。」

また、*flöda* ‘flow’, *rinna* ‘stream’, *svämma* ‘spill’, *droppa* ‘drip’ のような液体の移動を表す動詞 (Flow verb) もXPの意味的な項を擬似主語として取る。これらの動詞は通常、液体や液体の中を移動する物を主語として取る。しかし以下の例からも分かるように、液体が流れる場所を意味する名詞句を主語として取り、そこから液体があふれるという事態を描写する。この場合も、動詞によって表される「流れる」という出来事が原因となって、液体が容器からあふれるという因果関係が表現される。

- (7) a. Hennes ögon svämmas över av tårar.
her eye.PL spill.PRES over of tear.PL
「彼女の目は涙で溢れている。」

- b. Badkaret rann över när hon sänkte sig ner. (SS)
 bathtub.DEF flow.PAST over when she lower.PAST REFL down
 「彼女が浸かると浴槽が溢れた。」

以上をまとめると、①いわゆる非対格自動詞と呼ばれるものの一部が擬似主語構文に現れる。②擬似主語としてあらわれる項はXPの意味的な項である。③文の意味は動詞の表す出来事が原因となり、XPの表す出来事が結果として起こるという「因果関係」であるという点が挙げられる。但し、若干ではあるが他動詞がこの構文に現れることがある。その際には、対応する他動詞文が存在することから、一種の自他交替を起こしている可能性が考えられる。

- (8) a. Dörren slog {upp/igen}.
 door.DEF hit.PST {open/closed}
 「ドアが {開いた／閉じた}。」
 b. Peter slog {upp/igen} dörren.
 P. hit.PST {open/closed} door.DEF
 「ペーテルがドアを {開いた／閉じた}。」
 (9) a. Trafiken korkade igen på grund av en rad trafikolyckor.
 traffic.DEF cork.PST closed because of a series car.accident.PL
 「交通は一連の交通事故により止まった。」
 b. En rad trafikolyckor korkade igen trafiken.
 a series car.accident.PL cork.PST closed traffic.DEF
 「一連の交通事故が交通を止めた。」

先に見た天候動詞の中でも、*blåsa* ‘blow’は他動詞用法を持つため同様に一種の自他交替を起こす。

- (10) a. Segeln blåste sönder.
 sail.DEF blow.PST broken
 「セールが風でボロボロになった。」
 b. Vinden blåste sönder segeln.
 wind.DEF blow.PST broken sail.DEF
 「風が吹いてセールをボロボロにした。」

これらの例が一種の自他交替であるとする、他動詞から自動詞が派生するのか、あるいはその逆か、といった問題を考える必要があるが、この点に関しては今後の課題としたい。

3. XPのステイタス — 結果句か不変化詞か —

これまでの例からも分かるように、擬似主語構文は原因事象と結果事象が一つの節で表されている。例えば、(2a) を例に取ると「雨が降る」という出来事が原因となり、「雪が消える」という結果事象が起こったという因果関係をもつ二つの出来事が一つの節で表現されている。このような事象構造あるいは意味構造を一つの節で表現するものには、結果構文 (resultative construction) と不変化詞動詞構文 (verb-particle construction) が存在する。以下では、当該の構文が不変化詞動詞構文の一種であり、これまでXPと呼んできたものは結果構文に現れる結果句ではなく不変化詞であるということを示す。

スウェーデン語では、結果構文と不変化詞動詞構文に様々な違いがあるが、以下では、ほぼ同義の表現 — 結果構文に現れる *till döds* ‘to death’ という前置詞句と不変化詞動詞構文に現れる *ihjäl* ‘to.death’ という不変化詞 — を例に、結果構文と不変化詞動詞構文の違いを二点に絞って見る。

両構文には、音韻的・統語的・形態的な違いが存在する。まず、音韻的な違いとしては次のような点が挙げられる。結果構文では動詞・結果句が共にアクセントを持つのに対し、動詞不変化詞構文においては動詞のアクセントが失われ、不変化詞がアクセントを持ち、動詞と不変化詞がひとつのアクセントユニットを成すと言われている。擬似主語構文においては、動詞に強勢がおかれず、そのあとに現れる語にアクセントがおかれる。従って、音韻論的な観点からは不変化詞動詞構文であるということができる。

次に統語的な違いを見てみる。両者は目的語と結果句・不変化詞の相対的な位置が異なる。下の例からも分かるように結果構文において結果句は目的語の後に現れ、それより前に位置することは無い。一方、不変化詞動詞構文では不変化詞は常に目的語より前に現れ、目的語より後ろに置かれることはない。

(11) a. Peter sköt (*till döds) Sven (till döds).

P. shoot.PST to death S. to death

b. Peter sköt (ihjäl) Sven (*ihjäl).

P. shoot.PST to.death S. to.death

「ペーテルはスヴェンを撃ち殺した。」

但し、この差異は目的語がある場合つまり他動詞文において見られるものであり、自動詞構文である擬似主語構文においては見るができない。

形態論的な違いとしては、動詞が過去分詞の時に両者に違いがでる。下記の例からも分かるように、不変化詞は動詞が過去分詞の時には動詞に前接するのに対して、結果構文において結果句が動詞に前接することはない。

- (12) a. Sven blev {skjuten till döds / *tilldödsskjuten}.
 S. become.PST {shoot.PAST.P to death / to.death.shoot.PAST.P }
 b. Sven blev {*skjuten ihjäl / ihjälsskjuten}.
 S. became.PST {shoot.PAST.P to.death / to.death.shoot.PAST.P }
 「スヴェンは撃ち殺された。」

この点に関しても、擬似主語構文は不変化詞動詞構文と同じ振る舞いを示し、結果を表す語（下の例では**bort** ‘away’ や**igen** ‘closed’）が動詞に前接しなければならない。

- (13) a. Snön är {*regnad bort / bortregnad}.
 snow.DEF be.PRES { rain.PAST.P away / away.rain.PAST.P }
 「雪は雨が降って消えた。」
 b. Marken är {*växt igen / igenväxt} med ljung.
 ground.DEF be.PRES {closed.grow.PAST.P / closed.grow.PAST.P} with heath
 「地面がヒースで覆われた。」

以上、音韻的・形態的な観点からこれらの擬似主語構文は不変化詞動詞構文であるということが出来る。ところで、スウェーデン語の不変化詞には前置詞としての用法を持つものや副詞としての用法を持つものの他に、前置詞句から発達したものや形容詞としての用法を持つものも存在する。例えば、*sönder* ‘broken’, *torr* ‘dry’ は共に形容詞であるが前者が不変化詞としての用法をも持つのに対し、後者は形容詞としての用法しかない。下の例からも分かるように、擬似主語構文に現れうるのは不変化詞としての用法を持つ *sönder* のみであり、これも当該の構文が不変化詞動詞構文の一種であることを裏付けている。

- (14) Segeln blåste {sönder/*torr}.
 sail.DEF blow.PST {broken/dry}
 「セールが風で{ボロボロになった/乾いた}。」

4. 分析

以下では擬似主語構文の項構造がどのように決定しているか分析する。本稿ではまず、動詞の意味構造と不変化詞の意味構造が合成し、そこから項構造が決定するという分析を試みる。次節ではその他の分析の可能性を考察する。

議論に入る前に本稿で仮定する動詞の意味構造と不変化詞の意味構造を (2a, b) を例に簡単に見てみる。ここでは Jackendoff (1983, 1990) の語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) を採用する。(2a) の *regna* ‘rain’ の意味構造は Jackendoff (1983:185) にならない

(15a) のように記述する。*regna*には変項が無いため、0項の動詞ということになる。また、(2b) の *vāxa* ‘grow’の意味構造は (16b) のように記述でき、変項があることから通常は項をとることが分かる。問題となるのは不変化詞の意味構造である。不変化詞の意味構造としては2つの考え方があると思われる。(2a) の *bort* ‘away’を例に取ると、ひとつは (15b) のようにイベントであり変項を取る意味構造であるとする立場と (15c) のように経路概念のみであるとする立場である。しかし、擬似主語構文を考えると、主語として現れる項は不変化詞の意味的な項であると考えられるので (15b) の意味構造が妥当であると思われる。(主語項が不変化詞の項ではなく、構文文法で言うところの構文の項 (正確には構文の参与者役割) であるとする分析は次節で試みる。)

- (15) a. [GO ([RAIN], [DOWNWARD])]
 b. [GO_{IDENT} ([x], [TO_{IDENT} ([NONEXSISTENT])])]
 c. [TO_{IDENT} ([NONEXSISTENT])]
 (16) a. [GO_{IDENT} ([x], [TOWARD_{IDENT} ([BIG])])]
 b. [GO_{IDENT} ([y], [TO_{IDENT} ([COVERED])])]
 c. [TO_{IDENT} ([COVERED])]

以上のような動詞と不変化詞の意味構造を仮定した上で、それぞれの意味構造がどのように合成されるか考えてみたい。これまでも見てきたように、擬似主語構文は「原因・結果」という事象構造を持つ。このような事象構造を持つものには、大まかに言ってこれまで三つのタイプの意味構造が提案されてきている。原因事象をA、結果事象をBとすると以下のようにまとめることができる。

- (17) a. [CAUSE (A, B)]
 b. [A [RESULT (B)]]
 c. [B [BECAUSE (A)]]

(17a) はCAUSE関数が原因を表す出来事項 (A) と結果を表す出来事項 (B) を取るというものである。この際二つの事象は意味構造においてどちらも主要部に属する。この分析を取る代表的な研究としてはLevin and Rappaport Hovav (1995), 影山 (1996) 等がある。(17b) の分析はPinker (1989), Matsumoto (1996) に見られる分析で、原因を表す事象 (A) が意味的な主要部にあり、それが、結果を表す事象 (B)を意味的な付加詞として取るとするものである。ここではRESULT関数を用いているが、これはMatsumoto (1996) による。Pinker (1989) はEFFECT関数を用いている。最後の (17c) は (17b) とちょうど逆の関係にあるもので、結果事象 (B) が意味的な主要部となり、原因事象 (A) が意味的な付加詞となるものである。ここでは仮に原因を表す関数としてBECAUSEという関数を立てて用いている。この意味構造を

用いた分析は語彙従属 (Lexical Subordination) 分析と呼ばれ、代表的な研究には Levin and Rapoport (1988), Spencer and Zaretskaya (1998) 等がある。

以上、3つの分析は統語的主要部である動詞が、意味構造においても主要部であるか (=17a), (17b))、あるいは意味構造においては付加詞であるか (=17c)) という点で二つに分けることができる。以下ではこの点を項構造へのマッピングとの関連から考察してみたい。まず、(2a) を例に考える。

- (18) Snön regnade bort. (= (2a))
snow.DEF rain.PST away
「雨が降って雪が消えた。」

動詞 (= (15a)) と不変化詞 (= (15b)) の意味構造をそれぞれ、(17a-c) に適用したのが以下である。動詞の意味構造が原因事象 (A) に、不変化詞の意味構造が結果事象 (B) に相当する。少しでも分かりやすくするために動詞の意味構造の部分には点線で下線を施し、不変化詞の意味構造の部分には実線で下線を付してある。

- (19) a. [CAUSE ([GO ([RAIN], [DOWNWARD])]),
[GO_{IDENT} ([x], [TO_{IDENT} ([NONEXSISTENT])]])]]]
b. [[GO ([RAIN], [DOWNWARD])]
[RESULT ([GO_{IDENT} ([x], [TO_{IDENT} ([NONEXSISTENT])]])]]]
c. [[GO_{IDENT} ([x], [TO_{IDENT} ([NONEXSISTENT])]])]
[BECAUSE ([GO ([RAIN], [DOWNWARD])]])]]]

上記の例から分かるのは、合成された意味構造の中に変項はひとつしかなく、それが主語として実現するということである。(19a-c) のどの分析を取ったとしても、意味構造から項構造への写像には問題が無いものと思われる。例えば、(19b) の意味構造では不変化詞の意味構造が意味的付加詞になり、その変項が項構造に写像されることになる。意味的な付加詞から項構造への写像には様々な制約があるものと思われるが、この場合は意味的主要部である動詞の意味構造に変項がないために、意味的主要部から項構造への写像は存在しない。従って、意味的な付加詞からの写像を妨げるものはないものと思われる。

次に動詞が項を持つ場合を考えたい。(2b) を例に考えて見る。

- (20) Marken växte igen med ljung. (= (2b))
ground.DEF grow.PST covered with heath
「ヒースが繁って地面が覆われた。」

動詞 (=16a)) と不変化詞 (=16b)) の意味構造をそれぞれ、(17a-c) に適用したのが以下である。

- (21) a. [CAUSE ([GO_{IDENT} ([x]...[TOWARD_{IDENT} ([BIG])])],
[GO_{IDENT} ([y], [TO_{IDENT} ([COVERED])])])]
b. [[GO_{IDENT} ([x]...[TOWARD_{IDENT} ([BIG])])]
[RESULT ([GO_{IDENT} ([y], [TO_{IDENT} ([COVERED])])])]
c. [[GO_{IDENT} ([y], [TO_{IDENT} ([COVERED])])]
[BECAUSE ([GO_{IDENT} ([x]...[TOWARD_{IDENT} ([BIG])])])]

意味構造から項構造への写像を考えると、不変化詞の意味構造の中の変項である *y* は項構造に写像するが、動詞の意味構造の変項である *x* は項構造には写像しない。この場合、(21b) の場合には意味的主要部からの項構造への写像は行われず、意味的付加詞からの写像が行われることになる。これは明らかに不自然であり、(21b) の意味構造の設定は適切ではないと言わなければならない。次に (21a) に関しても、CAUSE関数の二つの出来事項のうち、不変化詞の意味構造のみから項構造への写像が行われ、動詞の意味構造から写像が行われないのかを示すことができない。(21c) の語彙従属分析が最も自然に写像のパターンを説明できると思われる。(21c) では不変化詞の意味構造が意味的主要部となり、動詞の意味構造が意味的な付加詞となっている。意味的な主要部である不変化詞の意味構造から項構造への写像がなされ、意味的な付加詞である動詞の意味構造からは項構造への写像は起こらないということになり、擬似主語構文における意味構造から項構造への写像のパターンを自然に説明することができる。

(21c) の意味構造を採用することの利点はもう一つある。(8)-(10) に見られる自他交替にも似た現象をうまく説明できる。自動詞文 (=8a), (9a), (10a)) と他動詞文 (=8b), (9b), (10b)) の間で意味構造の組み換えがあると仮定すると、他動詞文は (17a) あるいは (17b) の意味構造を持ち、動詞と不変化詞の意味構造の双方から項構造への写像があるのに対して、自動詞文では動詞の意味構造が意味的付加詞になり、動詞の意味構造からは項構造への写像が行われなくなると説明することができる。

以上、擬似主語構文においては、動詞と不変化詞の意味構造が (17c) に見られるような形で合成されて、項構造への写像が行われるという分析を試みた³。

5. その他の分析の可能性

前節では擬似主語構文に対し、意味構造レベルでの分析を試みた。本節ではそれ以外のレベルでの分析が可能であるか考えてみたい。具体的には、項構造レベル・統語構造レベル・構文レベルでの分析を試みる。

5.1. 「項構造合成」分析

まず、最初の分析は動詞の項構造と不変化詞の項構造が合成し、全体の項構造が出来上がるというものである。ここで一つ問題となるのは不変化詞の項構造である。Jespersen (1924)、Jackendoff (1973) などが述べているように、前置詞が目的語を取るのに対して、不変化詞は目的語を取らない。従って、項構造を考えた場合に、前置詞が一項であるのに対して、不変化詞が0項であるという分析がまず可能である。不変化詞は確かに目的語を取らないが、*He is out.*のように主語を取ることは可能である。従って、ここでは仮に不変化詞が項を持つと仮定して話を進める。

まず、(2a) を例に取り考えてみたい。天候動詞*regna* ‘rain’は項を取らない動詞であるから、不変化詞の項構造と合成し、不変化詞の項が全体の項として受け継がれるという分析も可能であると考えられる。

(22) a. *regna* ‘rain’ < > + *bort* ‘away’ < THEME >

b. *regna bort* <THEME>

しかし、動詞が項を持つ場合を考えると項構造の合成ではうまく行かないというのが分かる。(2b) を例に考えると、動詞*växa* ‘grow’も不変化詞*igen* ‘covered’も項を持つ。しかし、全体の項として受け継がれるのは不変化詞の項のみである。項構造の合成でこれらを分析しようとする、*「内項を持つ動詞の項構造と内項を持つ不変化詞の項構造が合成する場合には不変化詞の項が継承される」*としたルールを立てなければならず、アドホックであると言わざるを得ない。

(23) a. *växa* ‘grow’ <THEME1> + *igen* ‘covered’ <THEME2>

b. *växa igen* <THEME2>

5.2. 「繰上げ」分析

動詞が選択しない項が主語として現れる構文として、「繰上げ構文」(raising construction)が存在する。

(24) a. *He_i seems [t to be sick].*

b. *Han_i verkar [t vara sjuk].*

he seem.PRES be.INF sick

「彼は病気のようだ。」

GB理論では繰り上げ構文に現れる主語が上記の例文の痕跡の位置から主語位置へ移動すると分析されている。従って、主語として現れている名詞句は主動詞によって選択された項

ではない。果たして、動詞によって選択されていない主語を含む擬似主語構文を以下のよう
に、「繰り上げ構文」と同様に、分析することは可能であろうか？

- (25) Snön_r regnade [t bort].
snow.DEF rain.PST away

まず、繰り上げ構文に現れる *seem* をはじめとする繰り上げ述語は意味役割付与の問題を考
えてみたい。繰り上げ述語は補文へは意味役割は付与するが、主語位置へ付与する意味役
割はないと分析される。主語として現れる名詞句は移動前の位置で述部から意味役割を付
与され、その後主文の主語位置へ移動する。繰り上げ述語が主語位置へ意味役割を付与し
ない証拠には、次の文のように主語位置に虚辞が生じるということがしばしば挙げられる。

- (26) a. It seems that he is sick.
b. Det verkar som att han är sjuk.
it seem.pres as that he is sick

擬似主語構文に現れる動詞が以上のような特徴を持っているか考えたい。まず、補文に付
与する意味役割を持つかどうかであるが、擬似主語構文に現れるどの動詞も補文をとるこ
とはなく、補文に付与する意味役割を持たない。次に、主語位置に付与する意味役割を持
たないかという点であるが、天候動詞は主語位置に付与する意味役割は持たない。その証
拠として、これらの動詞は虚辞を主語としてとる。しかし、擬似主語構文に現れるそれ以
外の動詞は主語位置に付与する意味役割を持つ。以上、意味役割という観点から見た場合、
擬似主語構文に現れる動詞には繰り上げ述語との共通性はなく、「繰り上げ」分析には問題
があるものと思われる。

5.3. 「構文」分析

最後に、擬似主語構文が構文文法で言われている意味での「構文」とであるとする分析を
考えてみる。Goldberg (1995) の構文文法では構文の参与者役割 (participant role) と動詞の
項役割 (argument role) が融合 (fusion) を起こすことにより、文の項構造が決定する。この
分析を採用すると、擬似主語構文においては構文の参与者役割のみが項として実現し、動
詞の項役割は実現しないということになる。しかし、この分析には問題がある。もし仮に
構文の参与者役割のみが実現し、動詞の項役割が実現しなくてもよいということが一般的
に許されるとすると、あらゆる動詞が (それぞれの構文の制約に違反しない限りにおいて、)
どのような構文にでも現れることが可能になってしまい、構文文法における説明力を弱め
てしまうことになる。そこで Goldberg (1995:65) は構文の参与者役割と動詞の項役割が最低
一つは共有されなくてはならないという制約を設けている (Matsumoto (1996) の Shared

Participant Condition も参照のこと)。役割が一つも共有されていない擬似主語構文はこの制約に違反していることになり、構文文法での分析は困難であると思われる。

6. まとめ

本稿ではまず、動詞が選択しない項が主語として現れる「擬似主語構文」と呼ばれるスウェーデン語の構文を考察した。1節と2節では当該の構文の基本的な記述を行った。3節では当該の構文が不変化詞動詞構文の一種であることを明らかにした。また、4節では、当該の構文に対して意味構造レベルでの分析を試みた。5節ではそれ以外のレベル（項構造・統語構造・構文）での分析を考察し、どれも問題があることを見た。

註

* 本稿は筆者が神戸大学大学院に在籍していた当時、松本曜先生に指導していただいた内容を含む。また、例文のチェックは大阪大学言語文化研究科研究生のMárton András Tóthさんをお願いした。ここに記して感謝の意を表します。むろん、誤りがあるとすれば全て筆者の責任である。

1 本稿で使用する略号は次の通りである。DEF =definite; INF =infinitive form; PAST.P = past participle; PERF.P = perfect participle; PL = plural; PRES = present; PST = past; REFL = reflexive pronoun; REFL.POSS = reflexive possessive pronoun. また、(SS)と付された例文は辞書 *Svenskt språkbruk* から、(SB) と付されている例文は、Språkbanken のコーパス Korp (https://spraakbanken.gu.se/korp/#?lang=en&stats_reduce=word&cqp=%5B%5D&corpus=) から取ったものである。

2 スウェーデン語の動詞は、主節において非定形 (non finite) である時は動詞句内に位置するが、定形である時にはIPあるいはCPの主要部の位置に現れる。また、従属節においては定形・非定形にかかわらず動詞は動詞句内に現れる。

3 筆者は擬似主語構文を含めたスウェーデン語の不変化詞動詞全般において、不変化詞の意味上の項が不変化詞動詞の内項として実現するという分析を行っている。詳しくは當野 (2014) を参照のこと。

参考文献

- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』 東京：くろしお出版。
- 當野能之. 2014. 「現代スウェーデン語不変化詞動詞の項の実現」岸本秀樹・由本陽子（編）『複雑述語研究の現在』235-255, 東京：ひつじ書房。
- Carrier, Jill and Randall, Janet. 1992. The argument structure and syntactic structure of resultatives. *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions*. Chicago : University of Chicago Press.
- Jackendoff, Ray. 1973. The base rule for prepositional phrase. In Anderson, Stephen R. & Kiparsky, Paul (Eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, 345-356. New York, Holt: Rinehart and Winston.

- Jackendoff, Ray. 1983. *Semantics and Cognitions*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jespersen, Otto. 1924. *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Kaufmann, Ingrid. and Wunderlich, Dieter. 1998. *Cross-Linguistic Patterns of Resultatives*. Working Papers “Theorie des Lexikons” 109. Düsseldorf: University of Düsseldorf.
- Levin, Beth. and Tova R. Rapoport. 1988. Lexical subordination. *CLS* 275-289.
- Levin, Beth. and Rappaport Hovav, Malka. 1995. *Unaccusativity*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Lødrup, Helge. 2000. Underspecification in lexical mapping theory: the case of Norwegian existentials and resultatives. In *Argument Realization*, Miriam Butt and Wilhelm Geuder (eds.), 171–188. Stanford, CA: CSLI.
- Matsumoto, Yo. 1996. *Complex Predicates in Japanese*. Stanford, Tokyo: CSLI Publications and Kurosio Publishers.
- Oya, Toshiaki. 2002. Reflexives and resultatives: some differences between English and German. *Linguistics* 40, 961–986.
- Pinker, Steven. 1989. *Learnability and Cognition*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Simpson, Jane. 1983. Resultatives. In *Papers in Lexical-Functional Grammar*, Lori Levin et al. (eds.), 143-157. Indiana University Linguistic Club.
- Spencer, Andrew and Zaretskaya, Marina. 1998. Verb prefixation in Russian as lexical subordination. *Linguistics* 36, 1-39.
- Toivonen, Ida. 2003. *Non-projecting word*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Washio Ryuichi. 1997. Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

辞書

- Svenskt språkbruk. Ordbok över konstruktioner och fraser*. 2003. Stockholm: NE Nationalencyklopedin.

論文 9

「基体動詞の反義語となるスウェーデン語の不変化詞動詞について」

基体動詞の反義語となるスウェーデン語の不変化詞動詞について

當野 能之

1. はじめに

スウェーデン語の不変化詞動詞 (partikelverb)¹には動詞が表す結果状態と逆の結果状態を表す例が散見される。次の例を見てみよう。

- (1) Jag låste dörren till mitt rum ... (Parole)
I locked the.door to my room
「私は自分の部屋のドアのカギをかけた。」
- (2) Jag låste upp dörren till korridoren ... (Parole)
I locked up the.door to the.corridor
「私は廊下のドアのカギを開けた。」

動詞 låsa は単独で使われた場合、(1)にあるように「カギをかける」という意味になる。一方、不変化詞 upp² ‘up’を伴った場合は(2)に見るように「カギを開ける」となり、元の動詞（以後、基体動詞と呼ぶ）が表す結果状態と逆の結果状態を表す。しかし、このような現象はどのような動詞においても見られるわけではない。

- (3) Hon stängde dörren till salen. (Parole)³
she closed the.door to the.hall
「彼女はホールのドアを閉めた。」
- (4) *Hon stängde upp dörren till salen.
she closed up the.door to the.hall
「彼女はホールのドアを開けた。」

(3)にあるように動詞 stänga は「閉める」という意味を表すが、それに不変化詞 upp を付けたとしても、「開ける」という逆の意味にはならない (= (4))。

¹ 小辞動詞、句動詞、分離動詞などと呼ばれることもあるが、本稿では不変化詞動詞という用語を用いることにする。スウェーデン語の不変化詞動詞全般については、Norén (1996), Strzelecka (2003), 清水他 (2016), Teleman *et al.* (1999)などを参照のこと。

² 不変化詞 upp には ‘öppen’ (開いている) という意味もあり、ここではその意味で使われている。詳しくは Strzelecka (2003: 229-232)などを参照のこと。

³ 本稿ではコーパス検索システム Korp (<http://spraakbanken.gu.se/korp/>)からの例文を載せている。例文の後に括弧で示されているのは、Korp 内のコーパス名である。コーパス名の記載がないものは作例による。

2. 目的

本稿では、(2)の例文にみられるような基体動詞の表す結果状態と逆の結果状態を表す不変化詞動詞に、どのようなものがあるかを調査することを目的とする。管見の限り、このような問題を扱った論文は無いように思われる。例えば、上記の(2)の例文に見られる不変化詞 *upp* を扱った Strzelecka (2003: 229-232)は、当該の現象の存在を述べてはいるが、それ以上の分析は行っていない。そこで本稿では、①どのような不変化詞が、②どのような基体動詞と結びついた時に、その基体動詞と逆の結果状態を表すのかを明らかにすることを目的とする。

3. 方法

データの収集であるが、本稿では 2 つの方法を用いた。まずは、英語・スウェーデン語辞書を用いたデータの収集である。(2)の例を見て想起されるのは、*unlock*「鍵を開ける」のような、英語の *un*-動詞である (Yumoto 1997 などを参照)。英語では、接頭辞 *un*-が動詞についた場合、基体動詞が表すのと逆の結果状態を表す。例えば、*lock*「鍵をかける」に接頭辞 *un*-をつけた *unlock* は「鍵をあける」という意味になり、スウェーデン語の(1)と(2)の例と並行的にとらえることができる。そこで、英語・スウェーデン語辞書 (*Stora engelsk-svenska ordboken*) の中で、接頭辞 *un*-がついた派生動詞の項にあるスウェーデン語訳から、当該の不変化詞動詞を探すことにした。例えば、*unlock* の項には *läsa upp* という不変化詞動詞が掲載されていて、このような例を収集した。しかし、例えば *unarm*「武装解除する」の項に掲載された *avvädna* のように、*vädna*「武装させる」に接頭辞 *av*-がつくような例などもいくつか見られたが、これらの例は不変化詞動詞ではないため、今回は対象外とした。また、*unzip*「ファスナーを引いて開ける」の項にある *dra ner* のように、*dra*「引っ張る」と *ner*「下へ」のように基体動詞の逆の意味をあらわさないような例についても当然対象外とした。

判断に困る例もいくつか存在した。

- (5) *Spänn fast säkerhetsbältet!* (GP 2002)

tighten firm the.seat.belt

「シートベルトを締めなさい！」

- (6) *Han spände av sig säkerhetsbältet ...* (Bonniersromaner I)

he tighten off himself the.seat.belt

「彼はシートベルトを外した。」

動詞 *spänna* には「留め具で留める」という意味があるが、動詞単独では用いられず、不変化詞 *fast*「しっかりと」と共に用いられる。*unbuckle*「留め具を外す」の項には、*spänna av* という不変化詞が掲載されていて、一見すると当該の不変

化詞動詞のように見えるが、動詞 *spänna* だけでは「留め具で留める」という意味で用いられないことから、このような例は今回の対象から外すこととした。

さて、上記の英語・スウェーデン語辞書を用いた方法では、英語の *un-*動詞に対応する不変化詞動詞しか収集することができない。そこで、Holmgren Ording (1998) の不変化詞動詞リストも調べることにした。この本はスウェーデン語の不変化詞動詞の学習書ではあるが、169 個の基体動詞を元にした不変化詞動詞のリストが、例文と共に約 110 頁にわたって掲載されている。

4. 結果

以下では、不変化詞と動詞に分けて、結果を見ていく。

4.1. 不変化詞

当該の現象を示す不変化詞には、*av* ‘off’, *ur* ‘out of’, *upp* ‘up’, *ut* ‘out’ が見られた。一つずつ見ていこう。

不変化詞 *av* ‘off’ は主に「離れる」ことや「切り離される」ことを意味する (Norén 1996 など) を参照)。

- (7) De lastade den gamla bilen full vid varje besök. (SUC-romaner)
 they loaded the old the.car full at every visit
 「彼らは訪れる度にその古い車いっぱいに荷物を載せた。」

- (8) De har lastat av bilen. (Bonniersromaner I)
 they have loaded off the.car
 「彼らは車から荷物を降ろした。」

上記の例では、動詞 *lasta* が「(荷物を) 載せる」という意味であるが、不変化詞 *av* を伴うことで、「(荷物を) 降ろす」という逆の意味になる。

不変化詞 *ur* ‘out of’ には、「内部から外へ」「内部を空に」(清水他 2016: 322) という意味がある。

- (9) Men chauffören ska inte gå ut och börja lasta ur bilen. (GP2010)
 but the.driver will not go out and begin load out.of the.car
 「しかしその運転手は外に出て、荷物を降ろし始めるつもりはない。」

(9) では (7) と同じ *lasta* という動詞が使われているが、不変化詞 *ur* を伴い、「(荷物を車の中から) 降ろす」という意味で使われている。

次に、不変化詞 *upp* ‘up’ の例を見てみよう。 *upp* には「上へ」という基本義に加えて、「開く」という意味がある (Strzelecka 2003 など) を参照のこと)。

- (10) Robert knäppte skjortan och drog till svängremmen. (Parole)
 Robert buttoned the.shirt and tightende the.belt

「Robert はシャツのボタンを留めて、ベルトをきつく締めた。」

- (11) Henrik knäppte upp skjortan i halsen ... (Parole)

Henrik buttoned up the shirt in the neck

「Henrik はシャツの首のボタンを外した。」

(10)からも分かるように、動詞 knäppa は「ボタンを留める」という意味があるが、不変化詞 upp と共に不変化詞動詞を形成すると、「ボタンを外す」という意味になる (= (11))。次の例にあるように、「ボタンを留める」という意味では不変化詞 igen ‘shut, closed’ をつけることもできるが、義務的ではない。

- (12) Han knäpper igen skjortan ... (Äldre svenska romaner)

he buttoned shut the shirt

「彼はシャツのボタンを留める。」

最後に、不変化詞 ut ‘out’を見てみよう。不変化詞 ut には「外へ」という基本義に加えて、「外に広がって」という意味がある (Strzelecka 2003 など参照のこと)。

- (13) Laura dukade bordet och vek servetter. (SUC-romaner)

Laura set the table and folded napkins

「Laura はテーブルセッティングをして、ナプキンを折りたたんだ。」

- (14) Pete viker ut en servett och lägger den i knät. (Parole)

Pete fold out a napkin and lay it in the knee

「Pete はナプキンを広げ、膝の上に置く。」

(13)にあるように、動詞 vika は「折る」という意味であるが、不変化詞 ut がつくと、「広げる」という反対の意味になる (= (14))。また、次の例にあるように、「折る」という意味では、不変化詞 ihop ‘together’をつけることもできるが、義務的ではない。

- (15) Clara viker ihop sin servett och reser sig. (Bonniersromaner II)

Clara fold together her napkin and stand up

「Clara はナプキンを折って、立ち上がる。」

以上、ここまで見てきたように、「載せたものを降ろす (= (8),(9))」、「閉じたものを開く (= (11))」、「閉じたものを広げる (= (14))」のように、av や ur のような「分離」を表す不変化詞⁴や、upp や ut のような「展開」を表す不変化詞が基体動詞と共に不変化詞動詞を形成することで、基体動詞と逆の結果状態を表すようになることが分かった。

⁴ 今回調査した中には現れなかったが、loss ‘loose’, isär ‘apart’などの「分離」を意味する不変化詞も、koppla「つなぐ」などの動詞と結びついた際に、koppla loss, koppla isär「外す、自由にする」などの意味になり、当該の現象を示すことがある。

4.2. 動詞

次に動詞について見ていきたい。当該の現象を示す動詞の多くは、名詞派生動詞であることが分かった。例えば、(1)の動詞 *låsa*「鍵をかける」には対応する名詞 *lås*「錠」があり、名詞派生動詞であることが分かる⁵。一方、(3)の *stänga*「閉じる」にはその元となる名詞はなく、名詞派生動詞ではない。以下では、当該の現象を示す基体動詞に関して、派生元の名詞との関係から分類していく。

4.2.1. 移動物

まず、一種の移動物とみなせる名詞から派生した動詞の例を見ていこう。例えば、*lasta*「(荷物を)載せる」という動詞は *last*「荷物」からの名詞派生動詞である。(7)の例で考えると、「荷物が車へと移動」したと考えられる。そして、その名詞派生動詞に不変化詞 *av* をつけた(8)では、「荷物が車から外へと移動」していて、移動の方向性が逆になっていることが分かる。このような例には以下のようなものが挙げられる。

(16) 移動物

名詞	名詞派生動詞	不変化詞動詞
<i>kläder</i> 「服」	<i>klä(da)</i> 「着せる」	<i>klä(da) av</i> 「脱がせる」
<i>kork</i> 「コルク」	<i>korka</i> 「コルクで閉める」	<i>korka upp</i> 「コルクを開ける」
<i>last</i> 「荷物」	<i>lasta</i> 「(荷物を)載せる」	<i>lasta av</i> 「(荷物を)降ろす」
<i>lass</i> 「荷物」	<i>lassa</i> 「(荷物を)載せる」	<i>lassa av</i> 「(荷物を)降ろす」
<i>rigg</i> 「船の索具」	<i>rigga</i> 「索具をつける」	<i>rigga av</i> 「索具を外す」
<i>sadel</i> 「馬具」	<i>sadla</i> 「馬具をつける」	<i>sadla av</i> 「馬具を外す」
<i>sele</i> 「馬具」	<i>sela</i> 「馬具をつける」	<i>sela av</i> 「馬具を外す」

(17)は動詞 *klä(da)*「着せる」の例であるが、これも「衣服が身体へと移動」するものとして捉えられ、(18)の不変化詞動詞では移動の方向性が逆になっている。

(17) Han klädde sig i varma strumpor och stövlar. (Parole)

he dressed himself in warm stockings and boots

「彼は温かい靴下とブーツを履いた。」

(18) De började klä av sig. (Parole)

they began dress off themselvs

「彼らは服を脱ぎ始めた。」

⁵ *Svensk ordbok*によると名詞 *lås* の初出は1200年代の終わり、動詞 *låsa* の初出は1300年代の前半ということで、動詞 *låsa* は通時的にも名詞派生動詞と考えて良いであろう。しかし、今回取り上げた動詞すべてについて、名詞の初出が対応する動詞の初出に先行するわけではない。名詞派生動詞の詳細については今後の課題としたい。

名詞 *sadel* 「馬具」からの派生動詞である *sadla* は、「(馬に) 馬具をつける」という意味であるが (= (19)), (20)にあるように不変変化詞 *av* を伴うことで、「馬具を外す」という意味になり、移動の方向が逆になる。

- (19) Ben och Aidan sadlade hästarna i gryningen... (Norstedtsromaner)

Ben and Aiden saddled the.horses in the.dawn

「Ben と Aiden は夜明けに馬たちに馬具を付けた。」

- (20) Jag sadlade av hästen själv. (Bonniersromaner II)

I saddled off the.horse self

「私は自分で馬の馬具を外した。」

以下も同様の例であると考えられる。名詞 *kork* 「コルク」からの派生動詞である *korka* は、「コルクで栓をする」という意味だが、不変変化詞 *upp* を伴うことで、「コルクを外す」つまり「瓶を開ける」という意味になる。

- (21) Korka genast och förvara svalt och mörkt. (GP2002)

cork immediately and keep coolly and darkly

「コルクの栓をして涼しく暗いところに保存しなさい。」

- (22) Jag ska korka upp en flaska vin i kväll ... (GP2003)

I will cork up a bottle wine tonight

「今晚ワインを一瓶開けるつもりだ。」

4.2.2. 道具

次は道具と捉えられる例である。例えば(23)の動詞 *regla* は名詞 *regel* 「門 (かんぬき)」からの派生動詞である。「門を使ってドアを閉める」という意味から、門が一種の道具として機能していることが分かる。(24)にあるように、この動詞に不変変化詞 *upp* をつけると、「門を外す」という元の状態に戻すことを意味するようになる。

- (23) Hon reglade dörren. (Äldre svenska romaner)

she bolted the.door

「彼女はドアに門をかけた。」

- (24) Han reglade upp dörren ... (SUC-romaner)

he bolted up the.door

「彼はドアの門を外した。」

このような「道具」の例には以下のようなものが挙げられる。

(25) 道具

名詞	名詞派生動詞	不変化詞動詞
knapp 「ボタン」	knäppa ⁶ 「ボタンを留める」	knäppa upp 「ボタンを外す」
lås 「錠」	låsa 「錠をかける」	låsa upp 「錠を外す」
regel 「門 (かんぬき)」	regla 「門をかける」	regla upp 「門を外す」
skruve 「ねじ」	skruva 「ねじを締める」	skruva av 「ねじを外す」
snöre 「紐」	snöra 「紐を締める」	snöra av 「紐を解く」

次の(26)は、名詞 snöre「紐」の派生動詞である snöra「紐を締める」の例であるが、これも「紐を使って靴を締める」ということで、紐を一種の「道具」と考えてよさそうである。

- (26) På träbryggan där de snörde sina skridskor... (SUC-romaner)
 on the.wooden.pier where they lace their skates
 「彼らがスケート靴の紐を結んでいた木製の栈橋で ...」

- (27) Hon snörde av hans kängor. (SUC-romaner)
 she laced off his boots
 「彼女は彼のブーツの紐を解いていた。」

次の例も同様に一種の道具であると考えられる。

- (28) Joel skruvade hatten av flaskan. (SUC-romaner)
 Joel screwed the.top of the bottle
 「Joel はボトルの栓を回して閉めた」

- (29) Hon skruvade av kapsylen och drack några klunkar. (Norstedtsromaner)
 she screw off the.cap and drank some gulps
 「彼女はキャップを開けゴクゴクと飲んだ。」

4.2.3. 結果物

最後は結果物である。以下の(30), (31)は(26), (27)の例と似ているが、動詞の成り立ちを見るとかなり違っていることが分かる。knut「結び目」は「結んだ結果出来たもの」つまり「結果物」であると言える。そして、動詞 knyta は「結ぶ」という意味になり、(31)にあるように不変化詞 upp がつくと「(結び目を) 解く」という意味になる⁷。

⁶ 不変化詞動詞 knäppa av には、「ボタンを押して(テレビなどを)切る」という意味があるが、これに対応するのは、不変化詞 på 'on'のついた knäppa på「ボタンを押して(テレビなどを)つける」であり、基体動詞単独ではないため、今回の対象からは外れる。

⁷ 名詞 knut と動詞 knyta の間には語源的には関連があるが、knyta が knut からの名詞派生動詞であると分析できるかどうかについては、詳細な議論が必要である。

- (30) Jag knöt skorna igen. (Parole)

I tied the.shoes again

「私は再び靴紐を結んだ。」

- (31) Jag var tvungen att knyta upp skorna igen. (Norstedtsromaner)

I was forced to tie up the.shoes again

「私は再び靴紐を解かざるをえなかった。」

「結果物」の例と考えられるものに、次のようなものがある。

- (32) 結果物

名詞

名詞派生動詞

不変化詞動詞

knut 「結び目」

knyta 「結ぶ」

knyta upp 「結び目を解く」

nystan 「糸球」

nysta 「(糸球を) 巻く」

nysta av 「(糸球を) 解く」

packe 「つつみ, 荷」

packa 「荷を詰める」

packa upp 「荷を解く」

rulle 「巻いたもの」

rulla 「巻く」

rulla ut

「(巻いたものを) 広げる」

例を見ていく。(33)にあるように動詞 nysta は「毛糸を巻いて毛糸球 (nystan) を作る」ことを意味する。(34)では不変化詞 upp と共に不変化詞動詞を形成して、「毛糸球を解く」という基体動詞とは逆の意味になる。

- (33)... jag satt på gården och nystade garn ... (Äldre svenska romaner)

I sat on the.backyard and winded wool

「私は裏庭で毛糸を巻いて糸球にしていた。」

- (34)... hon nystade upp garnet. (Äldre svenska romaner)

she wind up the.wool

「彼女は毛糸の玉を解いた。」

動詞 rulla には「巻く」という意味があるが、これは名詞 rulle「巻いたもの」と関連があり、名詞派生動詞であると考えられる。この動詞も不変化詞動詞 ut を伴うことで、「広げる」という反対の意味になる (= (36)).

- (35) Rulla mattan hårt efter tvätt för att släta ut veck. (GP2010)

role the.carpet firmly after washing to smooth out folds

「しわを伸ばすために洗濯後カーペットをしっかりと巻きなさい。」

- (36) ... hon kan rulla ut mattan och ställa möblerna ... (Norstedtsromaner)

... she can role out the.carpet and put the.furniture

「彼女はカーペットを広げて家具を置くことができる。」

4.2.4. 名詞派生動詞ではない例

名詞派生ではない動詞もいくつか見つかった。例を見てみよう。

(37)... Olof vecklade ut den gamla kartan över Uppland ... (Norstedtsromaner)

Olof folded out the old the.map over Uppland

「Olof は古いウップランドの地図を開いた。」

(38) Pete viker ut en servett och lägger den i knät. (Parole) (=14)

Pete fold out a napkin and lay it in the.knee

「Pete はナプキンを広げ、膝の上に置く。」

上記の例の不変変化動詞には、以下のような対応する基体動詞が存在する。

(39) 名詞派生でない動詞

動詞	不変変化動詞
----	--------

veckla 「巻く、折る」	veckla ut 「(巻いていたものを) 開く」
----------------	---------------------------

vika 「折る」	vika ut 「(折ったものを) 広げる」
-----------	------------------------

*Svensk ordbok*によると、どちらも語源的には名詞 veck「折り目、しわ」と関連があることが指摘されているが、名詞派生動詞であると分析できるかどうかについては、詳細な議論が必要であろう⁸。

5. 考察

以上、主に名詞派生動詞が「分離」や「展開」を表す不変変化詞と共に不変変化動詞を形成した際に、基体動詞の結果状態と逆の結果状態を表すということが明らかになった。以上の結果を踏まえたうえで、なぜ名詞派生動詞なのか、そしてなぜ「分離」や「展開」を表す不変変化詞なのかという問題について考察を行っていく。

まずは、なぜ「分離」や「展開」を表す不変変化詞なのかという問題について考えていきたい。4.2 では「移動物」、「道具」、「結果物」を表す名詞から作られた動詞があることを見たが、どれも双方向の変化が考えられるものであることに注意が必要である。例えば、(17)で見た動詞 klä(da)「服を着る」は、名詞 kläder「衣服」からの派生動詞である。「衣服」はもちろん身に着けることを目的とするが、その逆である「体から取り外す」、つまり服を脱ぐという行為も当然存在する。したがって、この逆の行為を表すために「分離」の意味を表す不変変化詞を用いていると考えられる。興味深いのは、そのような双方向の移動が想定できないような名詞派生動詞である。次の例を見てみよう。

⁸ 今回の調査の範囲では出てこなかったが、名詞派生動詞ではない例として、boka「予約する」と boka av「予約を取り消す」がある。*Svensk ordbok*には、この動詞は英語の book からの借用であるとの記述がある。

- (40) Hon skalade potatis. (Bonniersromaner II)
 she peeled potato
 「彼女はジャガイモの皮をむいた。」
- (41) Mats Lija barkar timmerstockar. (Parole)
 Mats Lija bark timber.logs
 「Mats Lija は丸太の樹皮を剥ぐ。」
- (42) Ta bort huvud, rensa buken och fjälla fisken. (GP2002)
 take away head clean the.belly and scale the.fish
 「頭を取り、腹を洗いそして魚の鱗を取りなさい。」

(40)は名詞 skala「皮」、(41)は名詞 bark「樹皮」そして(42)は名詞 fjäll「鱗」という名詞から作られた動詞を含む文である。これらで想定されるのは「分離」方向の移動、例えば(40)では「ジャガイモから皮を取る」という方向であり、逆方向の移動は通常あり得ない。このような場合には、上記の例文からも分かるように「分離」を表す不変変化詞をつける必要はなく、動詞のみで表現される⁹。以上を考えると、名詞派生動詞の形成に際して、双方向の移動や変化が想定される場合に、「分離」や「展開」への移動や変化において、不変変化詞をつける必要があると考えられる。

次になぜ名詞派生動詞なのかという点について考えたい。1 でも見たように、動詞 stänga「閉じる」は、不変変化詞 upp をつけて、「開ける」という逆の意味にはならない。

- (43) Hon stängde dörren till salen. (Parole) (= (3))
 she closed the.door to the.hall
 「彼女はホールのドアを閉めた。」
- (44)*Hon stängde upp dörren till salen. (= (4))
 she closed up the.door to the.hall
 「彼女はホールのドアを開けた。」

しかし、動詞 stänga が不変変化動詞を形成できないわけではなく、その基体動詞の結果状態と矛盾しない限りにおいては、不変変化詞を付加することができる。例えば以下の例では、不変変化詞 igen 'shut, closed' と共に不変変化動詞を形成している。

⁹ ただし、内部からの分離が想定されるような場合は、不変変化詞 ur を必要とする場合もある。例えば、「(果物などの) 芯」を意味する kärna からの派生動詞である kärna「芯を取る」は以下のように不変変化詞 ur を義務的に取る。
 Kärna ur och hacka dadlarna och valnötterna grovt. (GP2010)
 core out.of and chop the.dates and the.walnuts coarsely
 「ナツメヤシとクルミの芯を取って粗く刻みなさい」

(45) Jag stängde igen dörren. (SUC-romaner)

I closed shut the.door

「私はドアを閉めた。」

つまり、名詞派生動詞であろうが、通常の動詞であろうが不変化詞動詞は形成できるわけであるが、後者においては基体動詞の結果状態と矛盾するような不変化詞をつけることはできないということになる。

以上を考えると、名詞派生動詞の形成と一部の不変化詞動詞の形成が同じレベルで起こっていると考えるのが妥当であろう。つまり、名詞を動詞化の後に不変化詞動詞の形成が起こるのではなく、名詞の動詞化と不変化詞動詞の形成が同時に起こっていて、双方向の変化が想定される名詞においては、「分離」や「展開」の方向の変化を表す場合に、不変化詞動詞を形成するということである。どのような理論において、このような問題が説明可能であるかについては、今後の課題としたい。

6. まとめ

本稿では、名詞派生動詞が「分離」や「展開」を表す不変化詞と共に不変化詞動詞を形成した際に、基体動詞の結果状態と逆の結果状態を表すということを明らかにした。今回は、基体動詞と逆の結果状態を表す不変化詞について扱ってきたが、以下のようないわゆる関係的対立を表す反義性を示す例についても考察可能であるか考える必要がある。

(46) Min bror hade hyrt en möblerad lägenhet. (Bonniersromaner II)

my brother had rented a furnished apartment

「私の弟は家具付きのマンションを借りていた。」

(47) Hans mor hyr ut möblerade rum ... (Bonniersromaner I)

hans mother rent out furnished rooms

「彼の母は家具付きの部屋を貸し出している。」

上記の例では、動詞 hyra は「借りる」という意味であるが、不変化詞 ut をつけると「貸す」という意味になる。同様の例に, lära「教える」と lära in「学ぶ, 身につける」がある。どちらも hyra「賃貸料」, lära「教え, 学」という対応する名詞がある点でも、今回見てきた現象と平行しているが、これらの不変化詞動詞の研究は今後の課題としたい。

Om partikelverb som beskriver motsatsen till simplex i svenskan

Takayuki Tohno

Denna artikel handlar om partikelverb som uttrycker motsatsen till simplexformen som i t.ex. *låsa upp dörren* vs. *låsa dörren*. Huvudsyftet med uppsatsen är att visa vilka simplexverb och vilka partiklar som kan ingå i denna typ av partikelkonstruktion. Exempelen har hämtats från en ordbok och en lärobok som innehåller en lista med partikelverb. Utredningen visar att det är verb avledda av substantiv (typ: *lås* – *låsa*, *last* – *lasta*, *knut* – *knyta*) som hör till kategorin i fråga. När dessa verb följs av partiklar som *om*, *av*, *ur*, *ut* samt *upp* i betydelsen ‘öppen’, beskriver partikel verbet motsatsen till simplex verbet som i t.ex. *låsa upp dörren*, *lasta av bilen*, *knyta upp skorna*.

付記

本研究は JSPS 科研費 18K00830 及び 17K02680 の助成を受けたものである。

参考文献

- Holmgren Ording, Hans. 1998. *Se upp! Svenska partikelverb*. Stockholm: Natur & Kultur.
- Norén, Kerstin. 1996. *Svenska partikelverbs semantik*. Göteborg: Göteborgs universitet.
- 清水育男, ウルフ・ラーション, 當野能之. 2016. 『スウェーデン語』. 大阪: 大阪大学出版会.
- Strzelecka, Elżbieta. 2003. *Svenska partikelverb med in, ut, upp, och ner: En semantisk studie ur kognitivt perspektiv*. Uppsala: Uppsala universitet.
- Svenska Akademien (ed.). 2009. *Svensk ordbok*. Stockholm: Norstedts.
- Teleman, Ulf, Staffan Hellberg, & Erik Andersson (eds.). 1999. *Svenska Akademiens grammatik 3: Fraser*. Stockholm: Norstedts Ordbok.
- Yumoto, Yoko. 1997. "Verb prefixation on the level of semantic structure." In: Kageyama, Taro (ed.). *Verb semantics and syntactic structure*. 177-204. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Walter, Göran (ed.). 1985. *Stora engelsk-svenska ordboken*. Stockholm: Esselte.

論文 10

「現代スウェーデン語基本不変化詞動詞リスト作成に向けて」

現代スウェーデン語基本不変化詞動詞リスト作成に向けて

Towards Compiling a List of Basic Particle Verbs in Swedish

當野 能之、梅谷 綾、南澤 佑樹、芝田 思郎

要約

本稿では、スウェーデン語学習者にとって必要な不変化詞および不変化詞動詞のリストの作成に向けて、見出し語となる不変化詞動詞の選定について考察した。不変化詞動詞は「動詞＋不変化詞」から成り、複数の単語で1つの意味を表す「複単語表現 (Multi-Word Expression)」に相当する。したがって、単一の単語に比べて、その頻度を出すことは容易ではない。そこで本稿では、不変化詞動詞の学習書やリストなどとコーパスデータを併用し、必要な不変化詞動詞の選定を行い、暫定的な不変化詞と不変化詞動詞のリストを掲載した。

キーワード：スウェーデン語、不変化詞、不変化詞動詞、句動詞、分離動詞

1. はじめに

本研究はゲルマン系言語で、‘look up’ や ‘carry out’ のような「動詞＋不変化詞 (particle)」から成る「句動詞・不変詞動詞・分離動詞・小辞動詞」などと呼ばれているもののうち、スウェーデン語の「動詞＋不変化詞 (particle)」(以後本稿では、「不変化詞動詞」という用語を用いる) について、これまでの研究成果を教育へと還元しようとするものである。最終的な目標は、スウェーデン語学習において欠かすことのできない不変化詞動詞に関して、コーパスデータなどを活用し学習者に必要な不変化詞および不変化詞動詞を選ぶこと、また、認知言語学などの成果を活用し、不変化詞の意味を学習者にとって分かりやすく説明する方法を開発し、それを「現代スウェーデン語基本不変化詞動詞リスト」として公開することにある。本稿では、上記の2点のうち、不変化詞および不変化詞動詞の選定について考察する。

不変化詞動詞は複数の単語で1つの意味を表すいわゆる「複単語表現 (Multi-Word Expression、以後MWE)」に相当する。コーパス開発の進展にともない、単一の単語の頻度などには容易にアクセスできるようになっているが、複数の語で1つの語彙項目を成すMWEの頻度を出すことは容易ではない。また、不変化詞単体であっても、副詞・前置詞としての用法を持つものもあることから、機械的に付加情報 (アノテーション) を付される場合には、その精度が問題となる。(MWEの自然言語処理における課題についてはSag

et al. (2002) などを参照のこと。)

本稿では、不変変化詞および不変変化詞動詞の選出に際して使用したコーパス、学習書、語彙集、文法書などについて簡単に解説し、不変変化詞の選定と不変変化詞動詞の選定の過程について見ていく。

2. 不変変化詞動詞について

不変変化詞動詞とは動詞と不変変化詞からなるまとまりであり、音韻的・統語的に特殊なふるまいを示す。まず、音韻的には、動詞の強勢が弱化し不変変化詞が強勢を受け、ユニット強勢 (ordgruppsbetoning) を成す。以下の例文では、₀は動詞 *ät* ‘ate’ に強勢が置かれていないことを、¹は不変変化詞 *upp* ‘up’ に強勢が置かれていることを示している。

(1) Han ₀ät ¹upp pannkakan. 彼はそのパンケーキを全部食べた。

また、不変変化詞は統語的には動詞の直後、目的語名詞句の前に置かれ、目的語名詞句の後ろに来ることはない。¹⁾

(2) * Han ₀ät pannkakan upp.

ただし、上記の統語的な判断基準は基本的に他動詞文にのみ適用されるものであり、自動詞文では音韻的な基準のみで不変変化詞動詞か否かが決定されることになる。

また、不変変化詞動詞は、動詞と不変変化詞の意味から特定できないイディオムの意味を持つものが多い。例えば、動詞 *hälsa* は「挨拶する」、*på* は前置詞としては「～の上に」という意味を持つが、₀*hälsa* ¹*på* という不変変化詞動詞としては「訪問する」という意味になる。本稿ではこのような不変変化詞動詞をイディオムの不変変化詞動詞と呼ぶことにする。イディオムの不変変化詞動詞の習得はスウェーデン語学習にとって重要であり、5 節においてその選定の基準について検討する。

不変変化詞は副詞 (*upp* ‘up’、*ner* ‘down’ など) や前置詞 (*i* ‘in’、*på* ‘on’ など) としての用法を持つものが多い。例えば前置詞として用法を持つものの場合、[動詞 + 前置詞] なのか [動詞 + 不変変化詞] なのかは音声がない限り、文脈から判断しなくてはならない。

(3) Han ₀hälsade ¹på Sven. 彼はスヴェンに挨拶した。

(4) Han ₀hälsade ¹på Sven. 彼はスヴェンのもとを訪れた。

以上のような理由から、コーパスにおける不変変化詞の機械的なアノテーションは困難で

現代スウェーデン語基本不変化詞動詞リスト作成に向けて（當野 能之、梅谷 綾、南澤 佑樹、芝田 思郎）

あると考えられる。

なお、不変化詞動詞に関する詳細については Norén (1990)、Teleman *et al.* (1999)、Strzelecka (2003)、Toivonen (2003) などを参照されたい。

3. 語彙集・コーパス・学習書

不変化詞および不変化詞動詞の選定に際して、本研究で参照した語彙集・コーパス・学習書・文法書の特徴について簡単に見ていく。

3.1 SVALex

SVALex は外国語としてのスウェーデン語 (Svenska som andraspråk) のための受容語彙 (receptive vocabulary) のリストである。²⁾ 外国語としてスウェーデン語の教科書を基にしたコーパスである COCTAILL を用い、CEFR のレベル毎に単語の頻度が報告されている。この語彙集では、不変化詞に関しては PL としてタグ付けされている。また、単一の単語だけでなく、MWE の頻度も挙げられていて、その中には不変化詞動詞も含まれている。

3.2 Parole korpus

Parole korpus は新聞・雑誌・小説などを基にした現代スウェーデン語の書き言葉コーパスで、トークン数は約 1900 万語である。(Parole korpus を含むコーパス検索システムである Korp については Borin *et al.* (2012)、梅谷 (2015) などを参照のこと。) 不変化詞についてのタグ付けはなく、不変化詞自体の頻度を見ることはできない。ただし、MWE を検索することは可能で、不変化詞動詞の頻度情報を参照することが可能である。

3.3 不変化詞動詞の学習書

スウェーデン語の不変化詞動詞の学習書には、Bodegård (1993 [1986])、Holmgren Ording (1998)、Almqvist & Moghadam (2007) などがある。また、Hellström (2003) は文法の練習問題集であるが、巻末に不変化詞動詞のリストが掲載されている。日本語では、清水・レーション・當野 (2016) の教科書に不変化詞動詞のリストが載っている。

Bodegård (1993 [1986]) の巻末には 70 partiklar という不変化詞のリストが掲載されており、かなり網羅的である。また、Holmgren Ording (1998) にはイディオムの不変化詞動詞のリストが 100 頁強、1000 を超える不変化詞動詞が掲載されており、選定の出発点となった。

3.4 記述文法書 SAG

文法書としては Teleman *et al.* (1999) を参照した（以後、SAG と呼ぶ）。スウェーデン語で書かれた最も詳細な記述文法書で、4 巻から成る。不変化詞については第 3 巻第 20 章 § 6-17

に詳細な記述がある。不変化詞については、注の部分も含めると 68 個が掲載されていた。イディオム的不変化詞動詞のリストなどは掲載されていない。

4. 不変化詞の選定

まずは、不変化詞のリストアップから見ていく。参照したのは不変化詞動詞の学習書である Bodegård (1993 [1986])、Holmgren Ordning (1998)、日本語で書かれたスウェーデン語教科書清水・ラーション・當野 (2016) および記述文法書の SAG、そして語彙集 SVALex である。以上のソースから全体として 96 個の不変化詞が選出された。

96 個の不変化詞から基本的には SVALex において高頻度のものから順に選定を行った。ただし、SVALex での頻度が低くても、多数のソースに記載されているものは残した。また、SVALex での頻度が高くても、自動アノテーションで信頼度が低いと考えられるものもあり、少数のソースにしか記載されていないものは除外した。具体的な除外の基準は以下の通りである。

- ① SVALex だけに記載のあるもの。これはラベル付けに問題があると考えられるためである。
- ② SAG だけあるいは Bodegård (1993[1986]) の巻末の 70 partiklar にのみ記載のもの。両者には低頻度な小辞も含まれているためである。
- ③ 以下の二点を同時に満たしているもの
(ア) SVALex で AB(=adverb) 以外の品詞でラベルづけられているもの (例: PP (前置詞句))。
これは頻度情報が不変化詞の用法のものと区別できないためである。
(イ) 2 つのソース (SVALex を含む) にしか記載のないもの。

以上の基準で 50 個の不変化詞の選定を行った。リストについては付録 1 を参照されたい。

5. イディオム的不変化詞動詞の選定

イディオム的不変化詞動詞の選定については、SVALex 及び学習書の中で掲載数の多い Holmgren Ordning (1998) を元にして行った。具体的には、SVALex で高頻度のイディオム的不変化詞動詞と Holmgren Ordning (1998) に掲載されているイディオム的不変化詞動詞 1129 件³⁾から、以下の基準で 247 件に絞り込んだ。

- ① SVALex の不変化詞動詞で頻度が高いものから 150 件
- ② Holmgren Ordning (1998) に掲載されてるものの中で、①に当てはまらず、不変化詞動詞の学習書 4 冊 (Almqvist & Moghadam (2007)、Bodegård (1993 [1986])、Hellström (2003)、清水・ラーション・當野 (2016)) のうち 2 冊以上に掲載されているもの 28 件
- ③ Holmgren Ordning (1998) に掲載されてるものの中で、上記の①－②のいずれにも当てはまらないが、Parole korpus で頻度が粗頻度 100 以上 (100 万語当たり 4.2 語以上) だっ

現代スウェーデン語基本不変化詞動詞リスト作成に向けて（當野 能之、梅谷 綾、南澤 佑樹、芝田 思郎）

たもの69件

以上の基準で247個の不変化詞動詞の選定を行った。リストについては付録2を参照されたい。多義の不変化詞動詞については見出し語を1つにまとめたので、リスト上では224個になった。

6. おわりに

本稿では、スウェーデン語学習に必要な不変化詞および不変化詞動詞の選定について見てきた。また、選定した不変化詞、および不変化詞動詞に関しては、そのリストを付録1と付録2に示した。今後は、これらのリストの精査と意味記述や例文の提示を行っていく。

謝辞

本研究は科研費基盤研究(C)「現代スウェーデン語基本不変化詞動詞リスト作成に関する基礎的研究」(課題番号18K00830、研究代表者當野能之2018-2020)の研究成果の一部である。

注

- 1) 具体的には、動詞句内で動詞の直後目的語名詞句の直前に置かれる。ただし、主節において定動詞 (finite verb) は動詞句の外 (CPやIPの主要部) に位置することから、そのような場合は、統語構造において動詞と不変化詞は隣接しない。
- 2) SweLLexと呼ばれる学習者の作文コーパスを基にした産出語彙 (productive vocabulary) のリストもある。
- 3) 1つの不変化詞動詞に複数の意味が掲載されているものは意味ごとにカウントした。

付録1

不変化詞50のリスト (意味については暫定的な訳を1つのみ与えている。)

av 「離れる」、bakom 「後ろへ」、bort 「向こうへ」、dit 「あちらへ」、efter 「後を追って」、emellan 「間に」、emot 「対峙して」、fast 「固定して」、fram 「前へ」、för 「前を覆って」、förbi 「通り過ぎて」、före 「先に」、hem 「家へ」、hit 「こちらへ」、i 「中へ」、(i) fatt 「追いついて」、i gång 「始動して」、i kapp 「追いついて」、i väg 「出発して」、ifrån 「離れて」、igen 「再び」、igenom 「通して」、ihjäl 「死に至って」、ihop 「合わせて」、in 「中へ」、isär 「離れて」、itu 「二つに」、kvar 「残って」、loss 「はがれて」、med 「一緒に」、ner 「下へ」、om 「回って」 ombord 「乗って」、omkring 「回って」、omkull 「転倒して」、på 「接触して」、runt 「回って」、samman 「一緒に」、sönder 「壊れて」、till 「追加して」、tillbaka 「戻って」、undan 「どかして」、under 「下へ」、upp 「上へ」、ur 「中から外へ」、ut 「外へ」、utanför 「外で」、åt 「～の方へ」、åter 「再び」、över 「超えて」

付録2

イディオムの不変化詞動詞 224 のリスト (意味については暫定的な訳を与えている。)

andas in	息を吸い込む	föda upp	(動物)を育てる、飼育する
backa upp	支援する、支持する	följa upp	(～を)引き続き調べる
bjuda in	(食事などに人を)招く	föra fram	(～を)述べる、申し立てる
blanda ihop	混同する	föra med sig	原因になる、引き起こす
blanda in	巻き込む	föra upp	帳簿を付ける
bli kvar	留まる、残る	ge sig iväg	出発する
bli över	残る、余る	ge sig ut	出かける
bläddra igenom	(本のページを)ぱらぱらめくる	ge upp	降参する
		ge ut	出版する; 支払う、お金を出す
bre(da) ut	広げる	gå an	許容できる、さしつかえない
bryta sig in	押し入る、侵入する	gå av	真っ二つになる
bryta upp	(カギなどを)壊す	gå bort	亡くなる; 訪ねる
bygga om	建て替える	gå emot	反対する
bygga ut	増築する	gå hem	成功する、人気になる
bära sig åt	ふるまう	gå igen	化けて出る
börja om	やり直す	gå igenom	体験する; 目を通す
dela med sig	分け与える	gå in	入る、収容する
dela upp	分ける	gå med på	受け入れる、賛成する
dela ut	配る、配達する	gå ner	沈む; 下がる; 減少する
dra av	差し引く、控除する	gå på	(騙されて)信じる、話にのる
dra på	(車などの)スピードを上げる	gå sönder	壊れる、故障する
dra på sig	(被害などを)被る	gå till	起こる
dra sig undan	逃れる、免れる	gå under	(船が)沈没する、破壊される
dra till sig	引き寄せる	gå upp	起床する; (太陽について)昇る; (重量や値段が)上がる; 開く・ほどける
dra upp	(ねじを)巻く	gå ut	無効になる、期限が切れる
dra ut	出かける、出向く	gå ut på	(～を)目的とする
dra ut på (tiden)	(時間が)長引く	gå åt	消費される、費やされる
driva igenom	押し通す	gå över	消える、止む
dyka upp	現れる、明らかになる	göra av	置く
dö ut	絶滅する	göra om	修正する、やり直す
falla ner	落ちる	göra upp	同意する; 決める
fara ut mot	(～に)食ってかかる	göra åt	対処する
flytta ut	(住居などから)引っ越していく、(国などから)出ていく (引っ越す)		
få för sig	思い込む		

gripa in	介入する	komma ihåg	思い出す
hinna med	～の時間がある	komma in	（学校や教育課程に）入る、合格する
hitta på	思いつく	komma på	思いつく、思い出す
hjälpa till	手伝う	komma till	誕生する、作り出される
hoppa av	離脱する、脱走する、政治亡命をする	komma tillbaka	戻ってくる
hoppa in	代理を務める	komma upp	出てくる、（話題・質問などが）出る、あがる
hoppa över	省く、省略する、飛ばす	komma ut	出版される；公になる
hyra ut	貸し出す、賃貸する	komma över	（悲しみなどを）乗り越える、立ち直る
hålla av	好きである	komma överens	同意する
hålla fast	拘束する	känna igen	覚えがある
hålla kvar	留まらせる	känna till	知っている
hålla med	賛成する、同じ意見である	köra hem	車で家まで送る
hålla om	抱きしめる、ハグする	köra på	（車を運転していて）衝突する、ぶつかる
hålla på	～している最中である；～する寸前である	köra över	（口語的に）人の意見を聞かない；（車で）轢く
hålla på med	～している最中である	låna ut	（～を）貸す
hålla undan	道を譲る、避ける；リードを保つ	låsa in	（～を）入れて錠をする
hålla upp	やめる、止まる	lägga av	（～を）やめる
hålla ut	耐える、我慢する	lägga ner	（店などを）たたむ；（時間、お金などを）費やす
hälsa på	訪ねる	lägga om	変更する；（傷などに）包帯を巻く
hänga upp	吊るす；関連付ける	lägga om	変更に；（傷などに）包帯を巻く
höra av sig	連絡する	lägga till	加える、補う、補足する
klara av	やり遂げる、うまくやる	lägga undan	貯める、取っておく
klara upp	解決する	lägga ut	立て替える
klä på sig	（服を）着る、（装飾品を）身に着ける	lära in	（～を）覚え込む
klä ut (sig)	変装する、仮装する	lära ut	～について教える
kolla upp	確認する	läsa upp	声に出して読む
komma av sig	言葉に詰まる、言葉が聞える	lösa upp	分解する
komma bort	消える	måla upp	魅力的に描写する
komma för	（非人称構文で）（考えなどが人の）心に浮かぶ	passa ihop	～に合う、釣り合う、マッチする
komma fram	（非人称構文で）明らかになる	passa in	適合する、うまく機能する
komma hem	帰宅する	peka ut	特定する、（地図などで）指示す
komma ifrån	持ち場を離れる、距離を置く		
komma igång	始める、とりかかる		
komma igen	持ち直す、立ち直る		

reda ut	解く；解決する	spela upp	音声や映像を再生する、演奏を始める
resa bort	出かける、留守にする	stiga upp	(ベッドから) 起き上がる
reta upp	(人) をいらいらさせる	stoppa ner	(ポケットなどに) 入れる
ropa upp	点呼をとる	stå emot	食い止める、耐える
röra om	かきまぜる	stå till	(非人称構文で) ～である
se efter	(見て) 確認する；見張る、世話をする	stå ut	耐える
se fram emot	(～を) 楽しみにする	ställa in	中止する；設定する
se ner på	(人) を軽蔑する	ställa till (med)	(問題) を引き起こす；(パーティーなど) を計画する
se om	世話をする、手当てをする	ställa upp	手伝う、手伝いを申し出る；(競技に) 参加する、エントリーする
se till	～するように取り計らう	ställa ut	公開する、展示する
se upp	注意する	stänga in	閉じ込める
se upp till	(人) を尊敬する	säga ifrån	抗議する、不満を言う
se ut	～のように見える	säga till	要望を伝える、(故障や改善点を) 申し出る
sitta fast	くっつく、張り付く、動かない、はまり込む	säga upp	解約する；解雇する
sitta inne	刑務所に入っている	sätta fast	(犯罪者を) 捕まえる
sitta upp	(馬などに) 乗る	sätta igång	始まる、始動させる
skicka ut	送る、送り出す	sätta ihop	組み立てる、(文章などを) 推敲する
skjuta in	口をはさむ	sätta in	銀行の口座などに預け入れる；(～に) (仕事などを) 教え込む
skjuta upp	延期する	sätta på	電源をつける
skriva ner	書き留める	sätta på sig	(服を) 着る
skriva på/under	署名する	sätta samman	組み立てる
skriva ut	(プリンターなどで) プリントアウトする	sätta sig in i	(～について) 知る、熟知する
skälla ut	(～を) どなる	sätta ut	(広告／通知を) 出す
slå av	(機器などを) 消す	ta av	脱がせる、取る
slå fast	断言する	ta bort	除去する
slå igen	閉じる	ta efter	(振る舞いを) まねをする
slå igenom	認められる、有名になる	ta emot	迎える、受け取る、受け入れる
slå in	包む、包装する；現実になる	ta fram	取り出す；開発する
slå sig ner	座る、腰を下ろす	ta i	力を入れる
slå ut	咲き出す、開花する	ta igen	(遅れを) 取り戻す
släppa ut	外に出す		
spara ihop	(～を買うために) お金を貯める		
spela in	録画・録音する；(映画等を) 撮影する；演奏してお金を稼ぐ		

ta igen sig	休む、休憩する	tycka om	好きである
ta in	受け入れる、取り入れる；(縫つて) 詰める；(ホテルに) 泊まる	tänka efter	(行動の前に) よく考える
ta itu	2つに分ける；取りかかる	tänka om	意見を変える、考え直す
ta med	持って／連れて来る、持って／連れていく；算入する、入れる	tänka ut	(何らかの結論に) 考え抜いて達する、考え出す
ta ner	(物を) 下ろす；こきおろす	vara med	参加する、(話などに) ついていく
ta om	繰り返す、やり直す	vara till för	(ある目的の) ためにある／いる
ta på sig	(服を) 着る	veta om	耳にしている、話に聞いている
ta sig an	引き受ける、面倒を見る	visa upp	提示する、見せる
ta sig fram	(字義的／比喩的に) 前進する、前に進む	välja ut	選び出す
ta sig ut	(ある印象を伴って) 見える	vända om	引き返す
ta till sig	(知識などを) 咀嚼する、(批判などを) 取り入れる	värma upp	(～を) 温める、ウォーミングアップする
ta ut	取り出す；引き出す；お金を取る；選ぶ	växa upp	大きくなる、(子どもから大人へと) 成長する
ta vid/åt sig	(言葉などを真に受け) 傷つく	åka dit	(口語的に) 捕まる
ta över	(責任などを) 引き継ぐ	åka fast	(口語的に) 捕まる、逮捕される
tala om	(～について) 伝える、語る	äta upp	食べつくす、後悔する
titta in	訪問する、遊びにくる		
tråka ut	飽きさせる		

参考文献

Almqvist, Anna & Mahiyar Moghadam

2007 *Språklära: Partikelverb. Blå pist*. 1. uppl. Stockholm: Natur & kultur.

Bodegård, Anders

1993 [1986] *Tänk efter: verb + partikel = partikelverb*. 5. uppl. Stockholm: Almqvist & Wiksell.

Borin, Lars, Markus Forsberg & Johan Roxendal

2012 'Korp – the corpus infrastructure of Språkbanken'. In: *Proceedings of LREC 2012*. 474–478.

Hellström, Gunnar

2003 *Grammatikövningar med regler och kommentarer för sfi*. 1. uppl. Stockholm: Almqvist & Wiksell.

Holmgren Ording, Hans

1998 *Se upp!: Svenska partikelverb*. 1. uppl. Stockholm: Natur och kultur.

Norén, Kerstin

1990 *Svenska partikelverbs semantik*. Göteborg: Acta Universitatis Gothoburgensis.

Sag, Ivan A., Timothy Baldwin, Francis Bond, Ann Copestake & Dan Flickinger

- 2002 'Multiword Expressions: A Pain in the Neck for NLP.' In: Gelbukh Alexander. (ed) *Computational Linguistics and Intelligent Text Processing. CICLing 2002. Lecture Notes in Computer Science*, vol 2276. 1-15. Berlin, Heidelberg: Springer.

Strzelecka, Elżbieta

2003. *Svenska partikelverb med "in", "ut", "upp" och "ner": En semantisk studie ur kognitivt perspektiv*. Uppsala: Uppsala universitet.

Teleman, Ulf, Staffan Hellberg, Erik Andersson & Lisa Holm

- 1999 *Svenska akademiens grammatik 3 Fraser*. Stockholm: Svenska akademien.

Toivonen, Ida

- 2003 *Non-projecting words: A case study of Swedish particles*. Dordrecht: Kluwer.

François, Thomas, Elena Volodina, Ildikó Pilán, & Anaïs Tack

- 2016 'SVALex: A CEFR-graded lexical resource for Swedish foreign and second language learners.' In: *Proceedings of LREC 2016*. 213–219.

清水育男・ラーション ウルフ・當野能之

- 2016 『世界の言語シリーズ12 スウェーデン語』. 大阪：大阪大学出版会.

梅谷綾

- 2015 「コーパス検索システム Korp の基本使用方法：現代スウェーデン語コーパスを中心に」. 『IDUN – 北欧研究 –』. vol. 21. 161–178, 大阪大学言語文化研究科言語社会専攻デンマーク語・スウェーデン語研究室.

コーパス等

Parole korpus: <https://spraakbanken.gu.se/swe/resurs/parole>

SVALex: <http://cental.uclouvain.be/svalex/>